伊　良　原　Ⅵ

下伊良原西の塚遺跡
下伊良原下地ヶ原遺跡
下伊良原平原遺跡
下伊良原中ノ坪遺跡

福岡県文化財調査報告書　第257集

２０１７

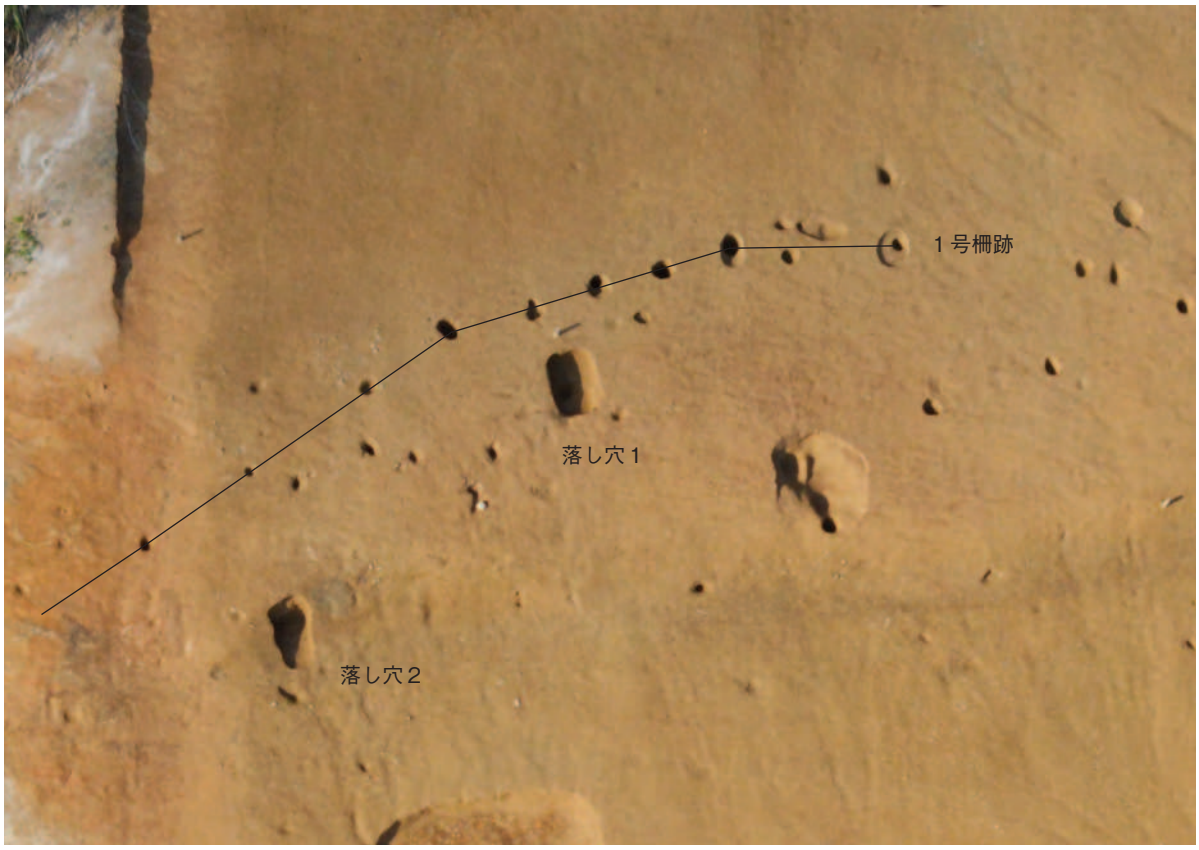
九州歴史資料館

１　下伊良原西ノ塚Ⅲ・Ⅳ区、下伊良原平原遺跡、下伊良原中ノ坪遺跡２次遠景（東上空から）

２　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査地下倉遺構・道路状遺構・カマド遺構（南から）

３　同上　道路状遺構（北から）

巻頭図版２



１　下伊良原平原遺跡落し穴状遺構・１号柵跡（上空から）

２　同上　掘立柱建物跡・柵跡群（上空から）

序

福岡県教育委員会では、伊良原ダム建設事業に伴い、京都郡みやこ町犀川上伊良原・下伊良原に所在する諸遺跡の発掘調査を平成18年度から実施してきましたが、平成28年度をもって終了いたしました。

緑豊かな山あいのこの伊良原の地で、多くの遺跡が新たに発見されました。その大半は縄文時代と中世のもので、自然に囲まれた環境を最大限活用し、また一方では交通の要衝の地として生活を営んでいた様子が徐々に明らかになって参りました。

本書は平成24年度から26年度に行った4遺跡の発掘調査の記録です。今回報告いたします下伊良原西の塚遺跡、下伊良原下地ヶ原遺跡、下伊良原平原遺跡、下伊良原中ノ坪遺跡でも、縄文時代早期に遡るものから近代に至るまでの多様な遺構と遺物が発見されています。

本書が教育、研究とともに、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

発掘調査および報告書作成にあたり、御協力いただいた方々に厚く感謝いたします。

平成29年３月31日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

1. 本書は、県営祓川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）にともなって平成24～26年度に発掘調査を実施した、京都郡みやこ町下伊良原所在の下伊良原西の塚遺跡、下伊良原下地ヶ原遺跡、下伊良原平原遺跡、下伊良原中ノ坪遺跡の調査の記録である。伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告の第６集にあたる。

2. 発掘調査と整理報告は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。

4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は各調査担当者が、また遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。ラジコンヘリによる空中写真の撮影は東亜航空技研に委託した。

5. 本書に掲載した遺構図の作成は各調査担当者が行い、発掘作業員が補助した。

6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において実施した。

7. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「田川」を加筆改変したものである。また、本書に掲載した調査区位置図は、伊良原ダム事務所が作成した1/2,500地形図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9. 本書の執筆は、Ⅲ１Ⅰ区を城門義廣が、Ⅲ１Ⅲ･Ⅳ区、Ⅲ３、Ⅲ４を秦憲二が、Ⅲ２を吉村靖徳が、Ⅳをパリノ・サーヴェイ株式会社が分担し、その他の執筆・編集は小川が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1
1 調査置に至る経緯 …… 1
2 調査の組織 …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 3
1 地理的環境 …… 3
2 歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の内容 …… 7
1 下伊良原西の塚遺跡 …… 7
2 下伊良原下地ヶ原遺跡 …… 66
3 下伊良原平原遺跡 …… 93
4 下伊良原中ノ坪遺跡２次調査 …… 110

Ⅳ　自然科学系の分析 …… 119
下伊良原西の塚遺跡の自然科学的分析 …… 119

Ⅴ　おわりに …… 129

図 版 目 次

巻頭図版1　1　下伊良原西ノ塚Ⅲ・Ⅳ区、下伊良原平原遺跡、下伊良原中ノ坪遺跡2次遠景（東上空から）
2　下伊良原中ノ坪遺跡2次調査地下倉遺構・道路状遺構・カマド遺構（南から）
3　同上　道路状遺構（北から）

巻頭図版２　1　下伊良原平原遺跡落し穴状遺構・1号柵跡（上空から）
2　同上　掘立柱建物跡・柵跡群（上空から）
図版１　1　下伊良原西の塚遺跡Ⅱ－１区全景（西から）
2　Ⅰ－２区全景（北西から）
3　Ⅰ－２区トレンチ（南東から）
図版２　1　Ⅰ－３区トレンチ（北から）
2　Ⅰ－４区全景（南東から）
3　Ⅰ－５区全景（南西から）
図版３　1　Ⅰ－６・７区全景（北東から）
2　Ⅰ－６区全景（北東から）
3　Ⅰ－６区東側壁面（東から）
図版４　1　Ⅰ区南東側土層（北から）
2　Ⅰ－６区1号土坑土層（南西から）
3　Ⅰ－６区1号土坑完掘（南から）
図版５　1　Ⅱ区遠景（北上空から）
2　Ⅱ区全景（上空から）
図版６　1　貯蔵穴群全景（南から）
2　１号貯蔵穴（南から）
3　１号貯蔵穴土層（南から）
図版７　1　２号貯蔵穴（南から）
2　２号貯蔵穴土層（南から）
3　３号貯蔵穴（東から）
図版８　1　４号貯蔵穴（南東から）
2　４号貯蔵穴土層（南から）
3　５号貯蔵穴土層（南東から）
図版９　1　６・７号貯蔵穴（東から）
2　７号貯蔵穴土層（北西から）
3　８・９号貯蔵穴（南から）
図版10　1　10号貯蔵穴（東から）
2　10号貯蔵穴土層（南から）
3　11号貯蔵穴（南東から）

図版11　1　11号貯蔵穴土層（南から）
　　2　12号貯蔵穴（東から）
　　3　12号貯蔵穴土層（北から）
図版12　1　13号貯蔵穴（東から）
　　2　14号貯蔵穴（東から）
　　3　14号貯蔵穴土層（南東から）
図版13　1　15号貯蔵穴（東から）
　　2　15号貯蔵穴土層（南東から）
　　3　17号貯蔵穴（北東から）
図版14　1　17号貯蔵穴土層（南東から）
　　2　18号貯蔵穴（東から）
　　3　18号貯蔵穴土層（北から）
図版15　1　18号貯蔵穴ドングリ出土状況（東から）
　　2　19号貯蔵穴（西から）
　　3　19号貯蔵穴土層（南西から）
図版16　1　１号溝（北から）
　　2　１号溝土層１（南西から）
　　3　１号溝土層２（南から）
図版17　1　２号溝（検出状況 東から）
　　2　２号溝土層１（南東から）
　　3　２号溝土層２（南から）
図版18　2　１号竪穴住居跡（南から）
　　2　１号竪穴住居跡土層（南から）
　　3　１号竪穴住居跡集石遺構（南から）
図版19　1　１号土坑（西から）
　　2　６・７号土坑（西から）
　　3　８号土坑（西から）
図版20　1　８号土坑土層（南東から）
　　2　グリッド掘削状況（北西から）
　　3　Ｃ６－１Ｇｒ土層（南から）
図版21　1　Ｃ６－１Ｇｒ土層（東から）
　　2　Ｄ６－１Ｇｒ土層（南から）
　　3　Ｄ６－１Ｇｒ土層（東から）
図版22　1　Ｄ５－１Ｇｒ土層（南から）
　　2　Ｄ５－１Ｇｒ土層（東から）
　　3　Ｄ４－１Ｇｒ土層（南から）
図版23　1　Ｄ４－１Ｇｒ土層（東から）
　　2　Ｅ４－１Ｇｒ土層（南から）

３　Ｅ４－１Ｇｒ土層（東から）
図版24　１　Ｄ３－１Ｇｒ土層（南から）
２　Ｄ３－１Ｇｒ土層（東から）
３　Ｅ３－１Ｇｒ土層（南から）
図版25　１　Ｅ３－１Ｇｒ土層（東から）
２　Ｄ２－１Ｇｒ土層（南から）
１　Ｄ２－１Ｇｒ土層（東から）
図版26　１　Ｅ２－１Ｇｒ土層（南から）
２　Ｅ２－１Ｇｒ土層（東から）
３　Ｆ２－１Ｇｒ土層（南から）
図版27　１　Ｆ２－１Ｇｒ土層（東から）
２　グリッド掘削状況（南から）
３　１号土壙墓検出状況（東から）
図版28　１　１号土壙墓（東から）
２　１号土壙墓遺物出土状況（南から）
３　１号土壙墓土層（南から）
図版29　１　１・2号柵跡（南から）
２　１号掘立柱建物跡（南から）
３　２号掘立柱建物跡（上空から）
図版30　１　２号掘立柱建物跡（北上空から）
２　２号掘立柱建物跡（西から）
３　19号土坑（東から）
図版31　出土遺物１
図版32　出土遺物２
図版33　出土遺物３
図版34　出土遺物４
図版35　出土遺物５
図版36　出土遺物６
図版37　出土遺物７
図版38　出土遺物８
図版39　出土遺物９
図版40　出土遺物10
図版41　１　Ⅲ区遠景（東上空から）
２　同上　全景（上空から）
３　同上　東側調査区全景（上空から）
図版42　１　１号土坑（西から）
２　同上　土層断面（西から））
３　２号土坑（西から）

4　縄文包含層堆積部分（上空から）
5　１号溝状遺構土層断面（北から）
6　１号埋甕遺構（北から）
7　出土遺物
図版43　1　Ⅳ区遠景（南西上空から）
2　同上　遠景（南から）
3　同上　全景（東上空から）
図版44　1　トレンチ全景（上空から）
2　表採遺物
3　調査地点丘陵斜面土層（南から）
4　同上　火山灰層堆積状況（南から）
図版45　1　下伊良原下地ヶ原遺跡全景（北から）
2　調査区全景（上が北）
3　Ⅰ・Ⅱ区全景（上が北）
図版46　1　Ⅰ区・Ⅱ区北半全景（南から）
2　Ⅲ区北半全景（北西から）
3　Ⅳ区全景（北から）
図版47　1　Ⅴ区全景（左が北）
2　Ⅴ区全景（北から）
3　１号掘立柱建物跡（南西から）
図版48　1　２号掘立柱建物跡全景　南から
2　３号掘立柱建物跡全景（北から）
3　１号土坑（南西から）
図版49　1　２号土坑（南西から）
2　４号土坑（北西から）
3　５号土坑（南から）
図版50　1　６号土坑（北から）
2　谷２全景（南東から）
3　谷２石列（東から）
図版51　1　谷２石列（北東から）
2　谷２五輪塔出土状況（南東から）
3　Ⅰ区グリッド（北東から）
図版52　1　Ⅰ区グリッド土層堆積状況（北東から）
2　Ⅴ区グリッド（北東から）
3　Ⅳ区縄文土器出土状況６トレ　北西から
図版53　1　墓域南半部（東から）
2　墓域北半部（東から）
3　墓域の石積（北東から）

図版54　1　五輪塔火輪出土状況（南東から）
　　2　１号墓（南から）
　　3　２・３号墓（北から）
図版55　1　2号墓の積石（南東から）
　　2　５・６号墓（北東から）
　　3　11～15号墓（北西から）
図版56　1　14号墓人骨・遺物検出状況（北西から）
　　2　16号墓（北から）
　　3　集積坑１（南西から）
図版57　1　１号集石坑大正14年銘墓石（南東から）
　　2　２号集石坑明和５年銘墓石（東から）
　　3　３号集石坑享保８年銘墓石（東から）
図版58　1　Ｖ区中央部土層（南東から）
　　2　Ｖ区土層（南東から）
　　3　左：１号炭窯１全景（東から）
　　4　右：同床面除去後（東から）
図版59　1　炭窯１奥壁と煙出し（南東から）
　　2　２号炭窯全景（東から）
　　3　２号炭窯床面除去後（南から）
図版60　1　２号炭窯煙道（東から）
　　2　暗渠吐水口（東から）
　　3　炭窯２暗渠（東から）
図版61　出土遺物１
図版62　出土遺物２
図版63　出土遺物３
図版64　出土遺物４
図版65　出土遺物５
図版66　出土遺物６
図版67　1　下伊良原平原遺跡遠景（東上空から）
　　2　同上（南上空から）
　　3　調査区全景（上空から）
図版68　1　１～４・８・９・14号掘立柱建物跡（東上空から）
　　2　１号掘立柱建物跡柱２土層断面（西から）
　　3　同左　柱５土層断面（西から）
　　4　同上　柱８土層断面（南から）
　　5　同上　柱13土層断面（東から）
　　6　同上　柱14土層断面（西から）
　　7　同上　柱18土層断面（西から）

図版69　1　１号掘立柱建物跡柱19土層断面（西から）
2　２号掘立柱建物跡柱２土層断面（東から）
3　同右　柱８土層断面（北西から）
4　同上　柱９土層断面（西から）
5　同上　柱９敷石検出状況（西から）
6　同上　柱14土層断面（東から）
7　同上　柱19土層断面（南から）
8　３号掘立柱建物跡柱２土層断面（東から）
9　同右　柱７土層断面（北西から）
10　同上　柱９土層断面（南西から）
図版70　1　３号掘立柱建物跡柱14土層断面（西から）
2　４号掘立柱建物跡柱２土層断面（南から）
3　同右　柱３土層断面（東から）
4　同上　柱３敷石検出状況（東から）
5　同上　柱５土層断面（北から）
6　同上　柱７土層断面（西から）
7　同上　柱９土層断面（南から）
8　同上　柱10土層断面（南から）
9　４号柵跡柱１土層断面（北から）
10　同左　柱２土層断面（北から）
図版71　1　13号柵跡柱２石臼出土状況（西から）
2　同左　柱４土層断面（南西から）
3　１号土坑（西から）
4　同左　土層断面（南東から）
5　１号落し穴（北から）
6　同左　土層断面（南から）
7　２号落し穴（東から）
8　同左　土層断面（北から）
9　３号落し穴（北から）
10　同左　土層断面（北から）
図版72　1　火葬場遺構（西から）
2　同左　火葬骨出土状況（西から）
3　同上　土層断面（南から）
4　ピット６土器出土状況（西から）
5　ピット７敷石検出状況（北から）
6　出土遺物
図版73　1　下伊良原中ノ坪遺跡遠景（東上空から）
2　同上　２次調査区全景（上空から）

3　柱穴密集部（上空から）
図版74　1　１号掘立柱建物跡（上空から）
2　同上　柱１敷石検出状況（北東から）
3　同上　柱８敷石検出状況（南から）
4　同上　柱13敷石検出状況（東から）
図版75　1　２号掘立柱建物跡（上空から）
2　同上　柱１柱根検出状況（北から）
3　同上　柱３柱根検出状況（東から）
図版76　1　道路状遺構・カマド遺構・地下倉遺構検出状況（東から）
9　同上（南から）
図版77　1　道路状遺構（南から）
2　同左（北から）
3　地下倉遺構（北から）
4　同上（東から）
図版78　1　カマド遺構（東から）
2　同左（西から）
3　出土遺物

挿 図 目 次

第１図　みやこ町の位置 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000） …… 5
第３図　調査区位置図（1/5,000） …… 6
第４図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ区割図（1/1,000） …… 7
第５図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ-１～３区遺構配置図（1/200） …… 8
第６図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ-４～７区遺構配置図（1/200） …… 9
第７図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ-７区東側壁面土層実測図（1/40） …… 9
第８図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ-６区１号土坑実測図（1/30） …… 10
第９図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ区出土遺物実測図（10は1/4、13～15は1/2、他は1/3） …… 12
第10図　下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区上層遺構配置図（1/300） …… 13
第11図　下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区下層遺構配置図（1/300） …… 14
第12図　貯蔵穴・溝配置図（１／200） …… 16
第13図　１～４号貯蔵穴実測図（1/60） …… 17
第14図　６～11号貯蔵穴実測図（1/60） …… 19
第15図　12～16号貯蔵穴実測図（1/60） …… 20
第16図　17～19号貯蔵穴実測図（1/60） …… 22
第17図　19号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3） …… 23
第18図　１・２号溝土層実測図（1/60） …… 23
第19図　１号竪穴住居跡実測図（1/60） …… 24
第20図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3） …… 26
第21図　１・６・７号土坑実測図（1/60） …… 27
第22図　１号土坑出土遺物実測図①（1/3） …… 28
第23図　１号土坑出土遺物実測図②（1/3） …… 29
第24図　１号土坑出土遺物実測図③（46・47は1/2、他は1/3） …… 30
第25図　２号土坑出土遺物実測図①（1/3） …… 31
第26図　２号土坑出土遺物実測図②（1/2） …… 32
第27図　３号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 33
第28図　４号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 34
第29図　５～７号土坑出土遺物実測図（23は1/2、他は1/3） …… 35
第30図　８号土坑実測図（1/60） …… 36
第31図　８号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 37
第32図　グリッド土層実測図（1/150） …… 38
第33図　グリッド出土遺物実測図（1/3） …… 39
第34図　その他出土の縄文時代遺物実測図①（1/3） …… 40
第35図　その他出土の縄文時代遺物実測図②（1/3） …… 41

第36図　その他出土の縄文時代遺物実測図③（22は1/3、他は1/2）……41
第37図　１号土壙墓実測図（1/20）……43
第38図　１号土壙墓出土遺物実測図（1/3、1/2）……44
第39図　１・２号柵跡実測図（1/80）……47
第40図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）……48
第41図　１・２号柵跡・１号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）……49
第42図　２号掘立柱建物跡実測図（1/80）……折込
第43図　10～15号土坑実測図（1/40）……52
第44図　９～13号土坑出土遺物実測図（1/3）……53
第45図　21～23号土坑出土遺物実測図（65は1/2、他は1/3）……55
第46図　その他出土の中世遺物実測図（1/3）……56
第47図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区遺構配置図（1/300）……59
第48図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区遺構実測図（１は1/30、他は1/60）……60
第49図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区出土遺物実測図（24～26は1/2、17は1/4、他は1/3）……62
第50図　下伊良原西の塚遺跡Ⅳ区トレンチ位置図・土層実測図（1/600、1/40）……64
第51図　下伊良原西の塚遺跡Ⅳ区出土土器実測図（1/3）……65
第52図　下伊良原下地ヶ原遺跡遺構配置略図（1/600）……66
第53図　調査区土層模式図……67
第54図　１・２号掘立柱建物跡実測図（1/60）……68
第55図　３号掘立柱建物跡実測図（1/60）……69
第56図　1～5号土坑実測図（１・４・５号：1/30、２号：1/40、３号：1/60）……71
第57図　６・７・10・11号土坑実測図（1/30）……72
第58図　谷２検出石列実測図（1/60）……73
第59図　６号土坑・ピット・包含層出土土器実測図（1/3）……74
第60図　谷出土土器実測図（1/3）……75
第61図　縄文土器実測図（1/3）……76
第62図　出土石器・鉄滓・土製品実測図（1/3）……77
第63図　石製品実測図（1/5）……78
第64図　１号炭窯実測図（1/30）……80
第65図　２号炭窯実測図（1/30）……81
第66図　炭窯出土土器・陶磁器実測図（1/3）……81
第67図　１～３・５・６号墓実測図（1/30）……82
第68図　７・８号墓実測図（1/30）……84
第69図　11～14号墓実測図（1/30）……85
第70図　15・16号墓実測図（1/30）……86
第71図　墓域石垣実測図（1/80）……88
第72図　五輪塔の転用状況（1/20）……89
第73図　墓地出土土器実測図１（1/3）……89

第74図　墓地出土土器実測図２（1/3）・・90
第75図　墓地出土鉄製品・銅製品・玉・銅銭実測図（1/2・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第76図　下伊良原平原遺跡遺構配置図（1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第77図　下伊良原平原遺跡基本土層図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
第78図　下伊良原平原遺跡１号掘立柱建物跡実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込
第79図　下伊良原平原遺跡２号掘立柱建物跡実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第80図　下伊良原平原遺跡３号掘立柱建物跡実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第81図　下伊良原平原遺跡４号掘立柱建物跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第82図　下伊良原平原遺跡８・９号掘立柱建物跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第83図　下伊良原平原遺跡14号掘立柱建物跡、12・14号柵跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・折込
第84図　下伊良原平原遺跡１号柵跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第85図　下伊良原平原遺跡２～４・６号柵跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
第86図　下伊良原平原遺跡５・７～９号柵跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第87図　下伊良原平原遺跡10・13号柵跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第88図　下伊良原平原遺跡その他の遺構実測図（６は1/15、５・７・８は1/30、他は1/60）・・・・105
第89図　下伊良原平原遺跡出土遺物実測図（４は1/2、６は1/4、他は1/３）・・・・・・・・・・・・・・・108
第90図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査遺構配置図（1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
第91図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査１号掘立柱建物跡実測図（1/80）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込
第92図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査２号掘立柱建物跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第93図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査その他の遺構実測図（１は1/300と1/60、他は1/60）・・・114
第94図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査出土遺物実測図１（13は1/4、他は1/3）・・・・・・・・・・・・・・116
第95図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査出土遺物実測図２（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

付　図　下伊良原下地ヶ原遺跡遺構配置図（1/200）

表 目 次

第１表　伊良原ダム建設に伴う発掘調査・・・1

Ⅰ　はじめに

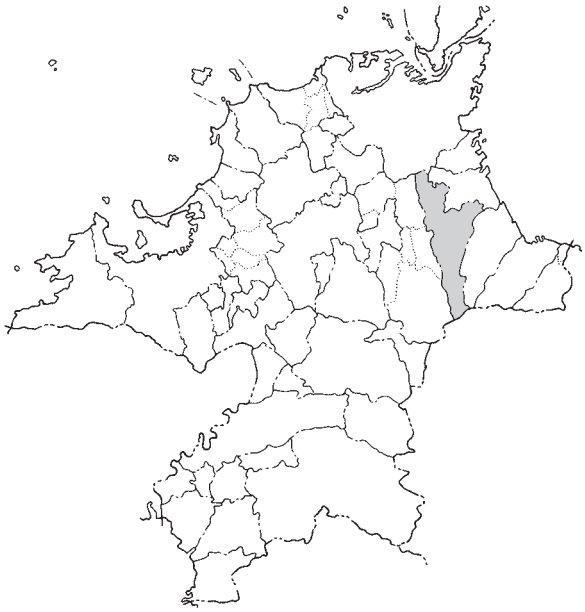
１．調査に至る経緯

祓川は、福岡、大分県境にある鷹ノ巣山を源流として、福岡県京都郡みやこ町から行橋市へと北流して周防灘に注ぐ、流路延長31.5km、流域面積66.4kmの二級河川である。河口付近は行橋市街地、中流域には水田が広がり、上流の約7割は山間部で渓流となっている。

伊良原ダムは、洪水の調節、京築地区各市町と田川地区（田川市、福智町、川崎町、糸田町）への水道用水の供給、農業用水の確保等を目的として計画され、祓川上流部のみやこ町犀川下伊良原および上伊良原に建設中、平成29（2017）年度での完成を目指している。堤高81.3m、堤頂長295.0mの重力式コンクリートダムで、完成すれば、集水面積36.8㎢、湛水面積1.22㎢、総貯水量2,870万㎥となる。工事に際しては、周辺に生息、生育する100種以上の希少な動植物を含む豊かな自然と生態系とも共存していけるよう、環境保全措置も行っている。

文化財に関する協議は、平成6（1994）年度に、福岡県土木部（現県土整備部）河川開発課、福岡県土木事務所伊良原ダム建設出張所（現伊良原ダム事務所）、福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）、福岡県教育庁京築教育事務所等との間で始まり、記録保存の時期と方法について話し合われた。このうち民俗文化財については、住民の移転前の平成7～10年度に調査を実施して、報告書も刊行している（福岡県教育委員会『伊良原　－民俗文化財の調査－』福岡県文化財調査報告書第143集　1999）。

埋蔵文化財の調査については、平成10（1998）年度から試掘調査を開始し、文化



第１図　みやこ町の位置

遺跡名	調査次数	調査年度	調査主体	報告
下伊良原中ノ坪遺跡	1次（Ⅰ区）	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
下伊良原原田ノ谷遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
下伊良原寺ノ谷遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原川上遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原下ノ段遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原榎遺跡	1次	H19（2007）	福岡県教育委員会	県報229集
上高屋台ノ原遺跡	1次	H19（2007）	福岡県教育委員会	県報229集
下伊良原塚本遺跡	1次	H20（2008）	福岡県教育委員会	県報232集
上高屋台ノ原遺跡	2次	H20（2008）	福岡県教育委員会	県報229集
上高屋台ノ原遺跡	3次	H21（2009）	福岡県教育委員会	県報229集
上伊良原マトコロ遺跡	1次	H22（2010）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原フラノ遺跡	1次	H23（2011）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原東向川原遺跡	1次	H23（2011）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原羽後屋敷遺跡	1次	H24（2012）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原中ノ切遺跡	1次	H24（2012）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原竹の内遺跡	1次（Ⅱ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	
下伊良原竹の内遺跡	2次（Ⅳ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	
下伊良原西の塚遺跡	1次（Ⅰ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	本報
下伊良原竹の内遺跡	3次（Ⅰ区）	H24・25（2012・2013）	九州歴史資料館	
下伊良原西の塚遺跡	2次（Ⅱ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原西の塚遺跡	3次（Ⅲ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原西の塚遺跡	4次（Ⅳ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原平原遺跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原中ノ坪遺跡	2次	H25（2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原庄屋屋敷跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原高木神遺跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原下地ヶ原遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	本報
上伊良原高木神遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	県報256集
上伊良原善治遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原宮園遺跡	1次	H26・27（2014・2015）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原宮久保遺跡	1次	H27・28（2015・2016）	九州歴史資料館	
下伊良原竹の内遺跡	4次（Ⅲ区）	H28（2016）	九州歴史資料館	

第１表　伊良原ダム建設に伴う発掘調査

財の存在が確認された。建設事業が本格的に開始された平成18（2006）年度以降、用地の取得、移転等の条件が整った箇所から、試掘・確認調査と、埋蔵文化財が確認された地点についての発掘調査を継続的に実施し、平成28（2016）年度に実施した下伊良原竹の内遺跡3区の調査をもって現地での作業を終了している。

調査報告書は、平成20（2008）年度から順次刊行しており、本書はその6冊目にあたる。平成25（2013）年1月～翌年3月に発掘調査を実施した下伊良原西の塚遺跡1～4区、25年8～11月実施の下伊良原平原遺跡、同10～12月実施の下伊良原中ノ坪遺跡2次、26年2月～翌年2月実施の下伊良原下地ヶ原遺跡の報告である。

２．調査の組織

発掘調査（平成 24 ～ 26 年度）および整理･報告書作成（平成 28 年度）の関係者は次のとおりである。

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成28年度
九州歴史資料館				
総括				
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊崎俊秋	飛野博文
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲
文化財調査室長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	吉村靖徳(整理・報告)
文化財調査室長補佐	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳(調査)	伊崎俊秋
文化財調査班長	小川泰樹	小川泰樹(調査)	秦　憲二	秦　憲二(整理・報告)
庶務				
総務班長	長野良博	長野良博	山崎　彰	中村満喜子
事務主査		青木三保	南里成子	
主任主事				原野貴生
調査・整理・報告				
参事補佐				小川泰樹(整理・報告)
技術主査		秦　憲二(調査)		
主任技師	城門義廣(調査)			
文化財保護課				
整理・報告				
主任技師				城門義廣(整理・報告)

Ⅱ　位置と環境

１．地理的環境

みやこ町は、福岡県東部に位置し、面積151.34㎢、人口約2万人、平成18（2006）年3月に京都郡の勝山町、犀川町、豊津町の3町が合併して誕生した。カルスト台地平尾台を水源とする長峡（ながお）川と英彦山に源を発する今川、祓川が町内を貫流し、行橋市を経て周防灘に注いでいる。気候は瀬戸内海型気候区に区分されるが、北西の季節風の影響で冬季の降水量がやや多く、日本海型気候区の特徴もみられる。

伊良原は、みやこ町の南部、英彦山の北側斜面にあたり、祓川の上流域の、下伊良原、上伊良原、扇谷、帆柱の4地区からなる旧伊良原村の範囲を指す。90％以上が山林で、祓川によって形成された河岸段丘および小規模な沖積面上に集落と耕作地が形成されている。地質的には、中生代に貫入した花崗岩類が主体であり、今回の調査地点付近は優白質花崗岩層と黒雲母花崗岩層の境界付近に、新生代第四紀に属する主に花崗岩よりなる角礫および粘性土の崖錐堆積がみられる。また、山間部である伊良原では、町内でも低地より気温が4～5℃低く、降水量もかなり多く、冬季には積雪しやすい。

２．歴史的環境

伊良原ダム関係のこれまでの調査成果では、この地区の埋蔵文化財は縄文時代と中世が主体となる。

縄文時代では、上伊良原榎遺跡で早期初頭の、上高屋台ノ原遺跡では早期から前期の、上伊良原川上遺跡、下伊良原原田ノ谷遺跡、横瀬東部遺跡でも前期の土器がまとまって出土している。中期では、下伊良原竹の内遺跡で春日式のほぼ完形の土器が出土している。後期になると、上伊良原川端遺跡で2軒の竪穴住居跡を検出しており、祓川を下った節丸西遺跡では約30軒からなる集落を確認している。晩期では、上伊良原川上遺跡で竪穴住居跡を確認したほか、下伊良原中ノ坪遺跡で突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代から奈良時代にかけての時期は、伊良原地区では遺物を散見する程度で、現在のところ明確な生活の痕跡を見出すには至っていない。

平安時代の後期には、宇佐宮および神宮寺である弥勒寺の影響を強く受けた地域で、近辺では荘園として城井浦、横瀬浦などが記録に残るが、伊良原については宇佐宮とも結びついた彦山社領であったとされる。また、平安末期には大宰府官人の板井氏が進出して城井に本拠を置いて勢力を拡大したとされる。鎌倉時代になって下野の御家人、宇都宮氏が入部して京築地域一帯を支配下に置いたが、南北朝期以前の拠点を板井氏の後を受けて城井において城下集落を形成している。それらは市屋敷遺跡、寺の下遺跡、下木井遺跡などの調査で実態が徐々に明らかになりつつある。宇都宮氏は後に本拠を城井谷に移しており、戦国末期に黒田氏の豊前入国に際して攻め滅ぼされている。

また、この時期のものとして、九州最大の山岳修験道場である彦山（近世以降英彦山）と、その強い影響下で発展した蔵持山の存在が大きい。特に蔵持山は伊良原の北方に接して至近の距離にある。承平・天慶年間（930年代）の開山伝承を持ち、これと大きく外れない時期の遺物が出土

していることから、既にこの頃には信仰の山として成立していたようである。以降、本末の関係にあった彦山の七里四方とされた神領の北限として重要な位置を占め、彦山六峯の一つに数えられた。中世には宇都宮氏の庇護もあって発展し、最盛期には96坊があったとされており、地域の信仰を集めた。一方で彦山は、古くから伊良原を領有していたと考えられ、今回の調査地点である下伊良原からでも祓川沿いに遡って10数kmの距離であり、文字通り膝下といえる。当時その規模は圧倒的であり、蔵持山の本山でもある。民俗調査によっても、伊良原地区は蔵持山よりもむしろ英彦山との結びつきが大きかったという。彦山は天正9年（1581）の大友氏による攻撃で壊滅的な打撃を受けて、末山である蔵持山も含めて一時期衰亡する。

さて、伊良原地区は、宇都宮氏の本拠のあった城井地区、蔵持山と彦山を結ぶ要路に位置する。今回のダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の各地点で中世の遺構・遺物を確認しているが、これら三者の関係を抜きにして語れるものではないであろう。

参考文献

福岡県教育委員会 1999『伊良原－民俗文化財の調査－』福岡県文化財調査報告書第 143 集

福岡県教育委員会 2003『木井馬場井口遺跡　味噌ヶ谷古道跡』福岡県文化財調査報告書第 183 集

福岡県教育委員会 2009『伊良原Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第 222 集

福岡県教育委員会 2011『伊良原Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第 229 集

福岡県教育委員会 2012『伊良原Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第 232 集

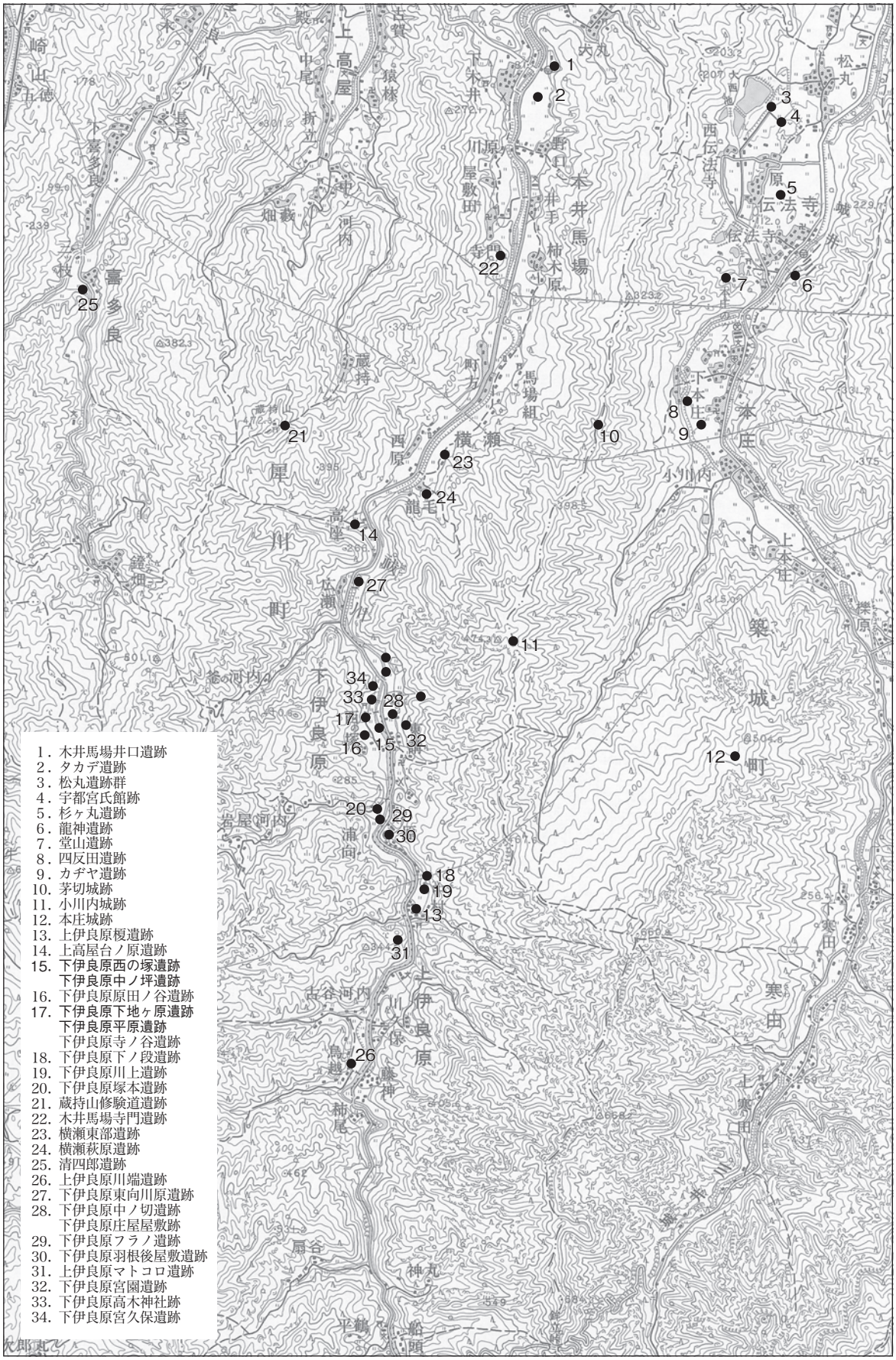
犀川町誌編纂委員会 1994『犀川町誌』

犀川町教育委員会 1992『城井遺跡群』犀川町文化財調査報告書第３集

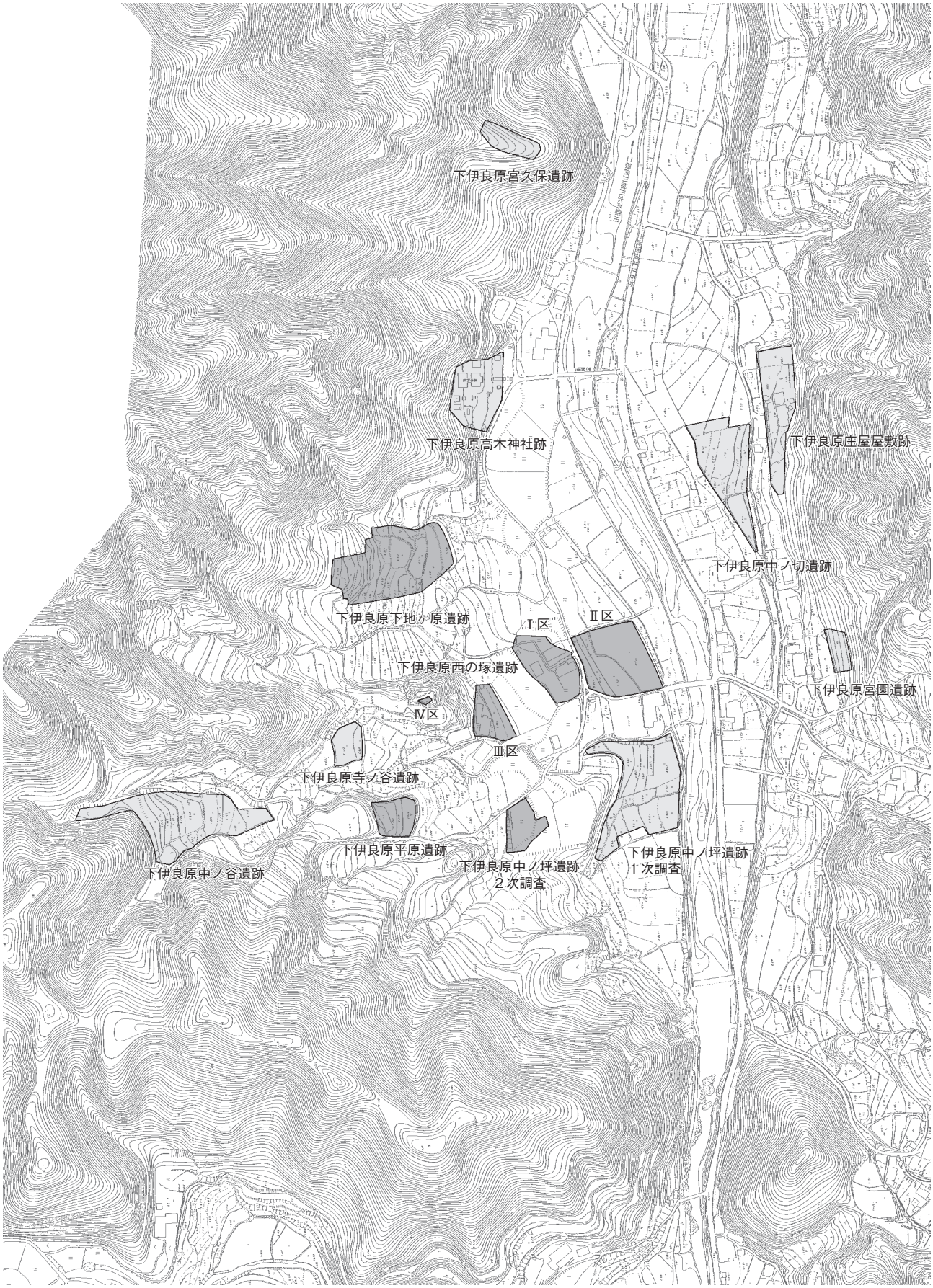
犀川町教育委員会 1994『城井遺跡群Ⅱ』犀川町文化財調査報告書第４集

みやこ町教育委員会 2013『蔵持山遺跡群』みやこ町文化財調査報告書第９集

調査風景



第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）



第３図　調査区位置図（1/5,000）

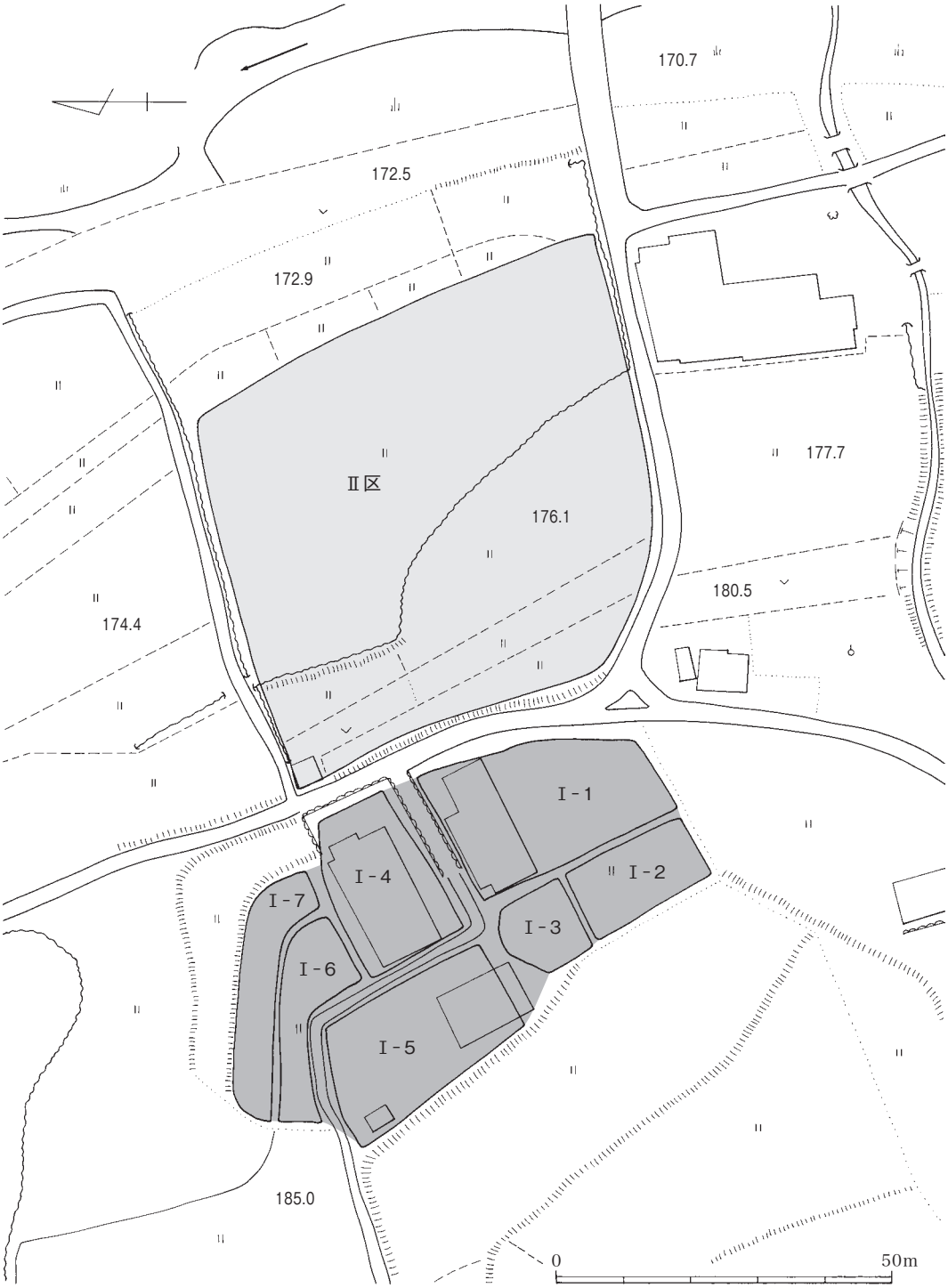
Ⅲ　調査の内容

1．下伊良原西の塚遺跡

Ⅰ区

1）調査の経過

下伊良原西の塚遺跡は京都郡みやこ町下伊良原に位置している。Ⅰ区は西の塚地区のⅡ区の西側に位置しており、平成24年度に調査を行った。平成25年1月9日よりバックホーによる表土掘削を開始したが、ほとんどの範囲で風倒木痕以外の遺構が認められず、風倒木痕からも遺物

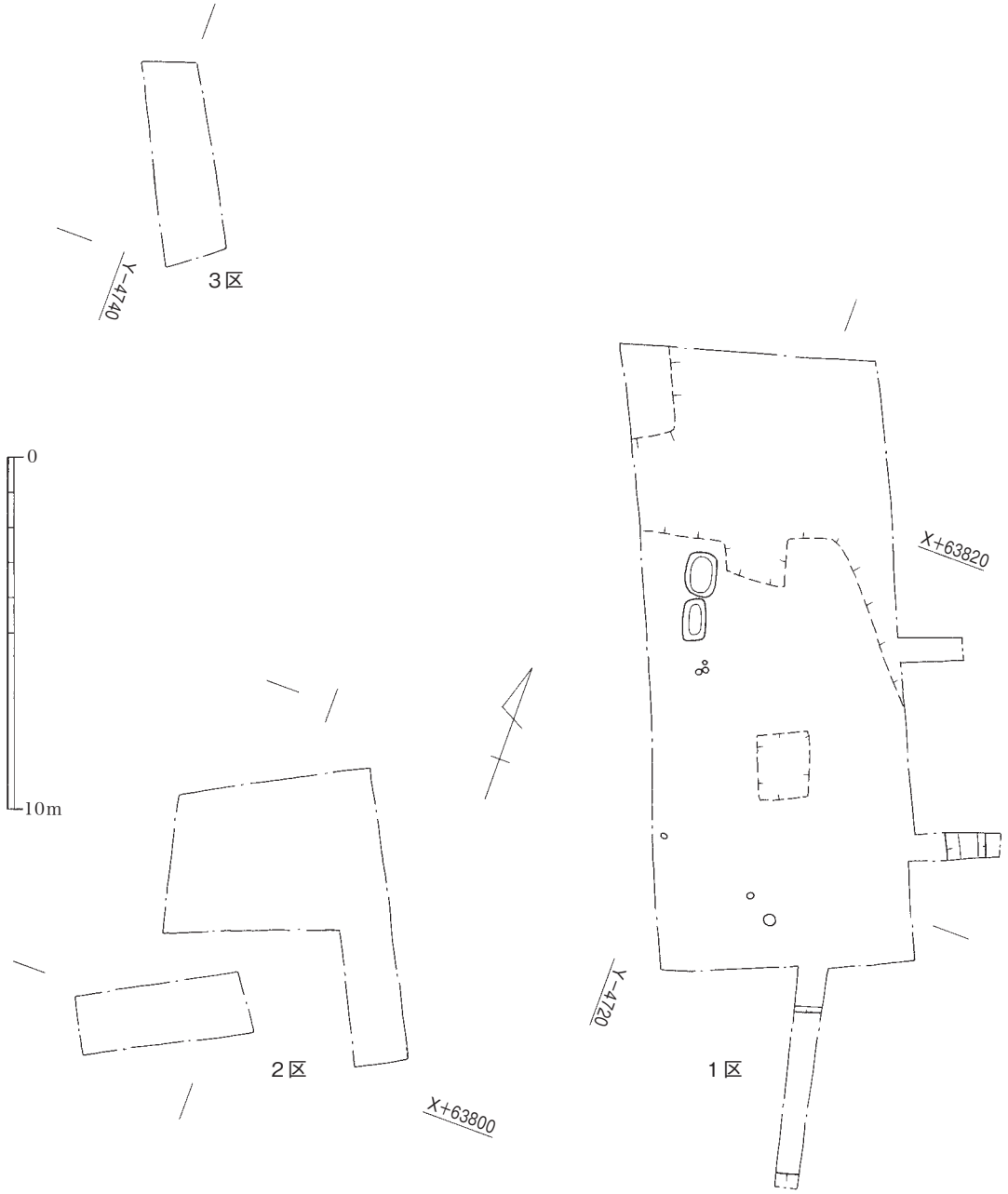


第4図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ区区割図（1/1,000）

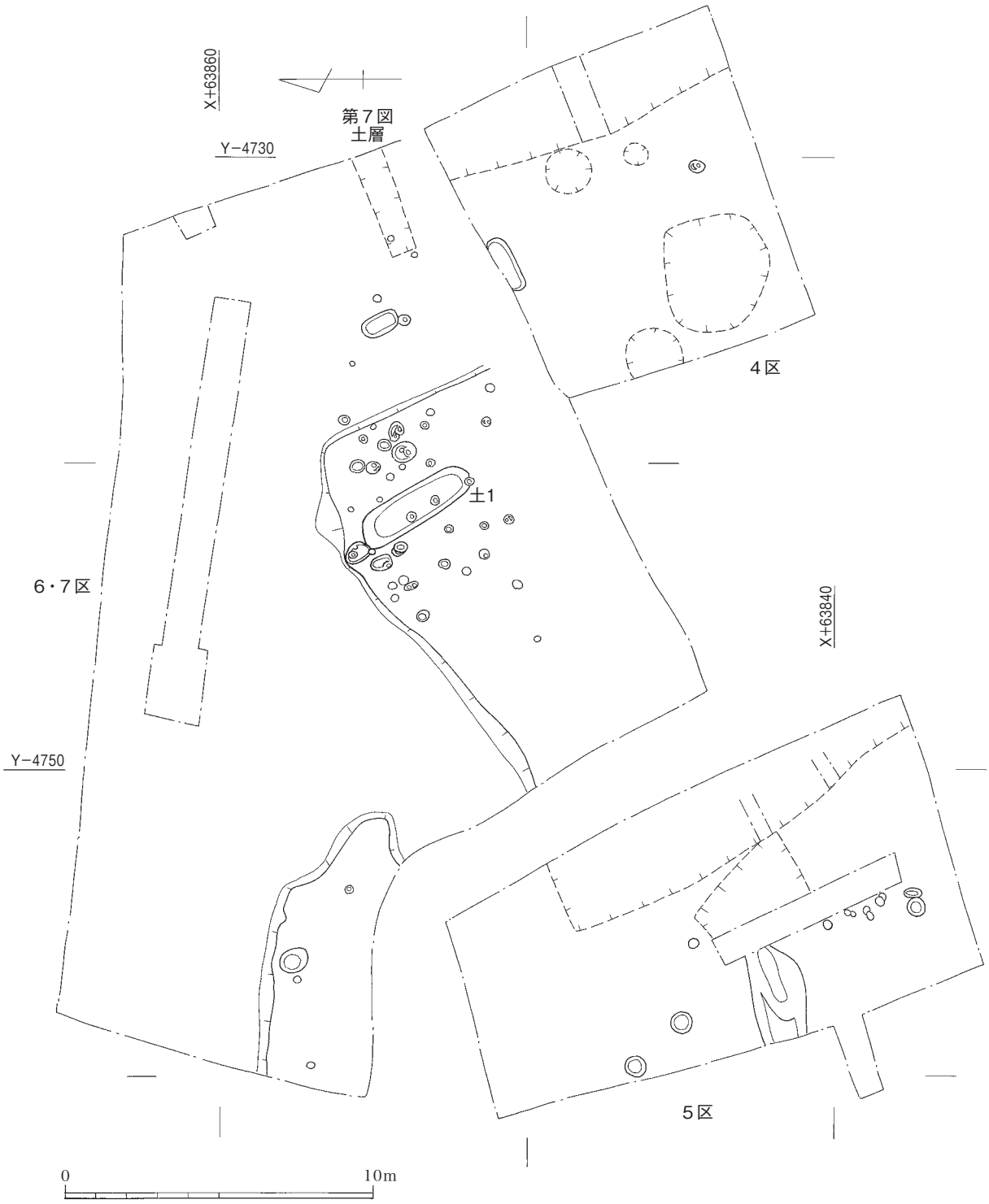
の出土はなかった。そのため、対象地の地形により任意に１～７区まで分割し、それぞれにトレンチを掘削した。その結果、標高の高い２・３では全く遺構が確認されなかった。１月 22 日より、人力による掘削を開始し、１区から検出を行った。ほとんど遺構が認められなかったため、２月 12 日には掘削が終了し、全景写真の撮影を行い終了した。２月６日には、プレハブのガラスおよび倉庫の南京錠が破壊され、カメラ・レベル等の盗難にあった。同日朝は付近の工事用プレハブ、竹の内遺跡プレハブでも同様の手口により盗難事件が発生しており、警察に通報した後、現場検証が行われた。

２）調査の概要

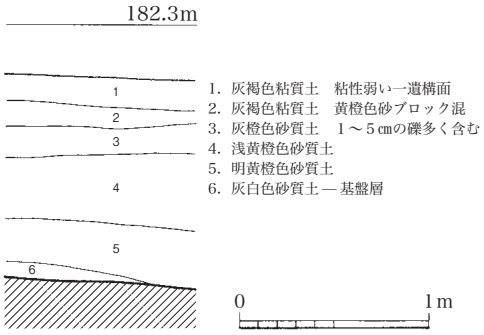
下伊良原西の塚遺跡は祓川の左岸、標高約190mに位置する。遺跡西側には標高410.6mの急峻な山が位置し、そこから伸びる尾根上に位置している。周辺では川筋を中心として縄文時代ならびに



第５図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ－１～３区遺構配置図（1/200）



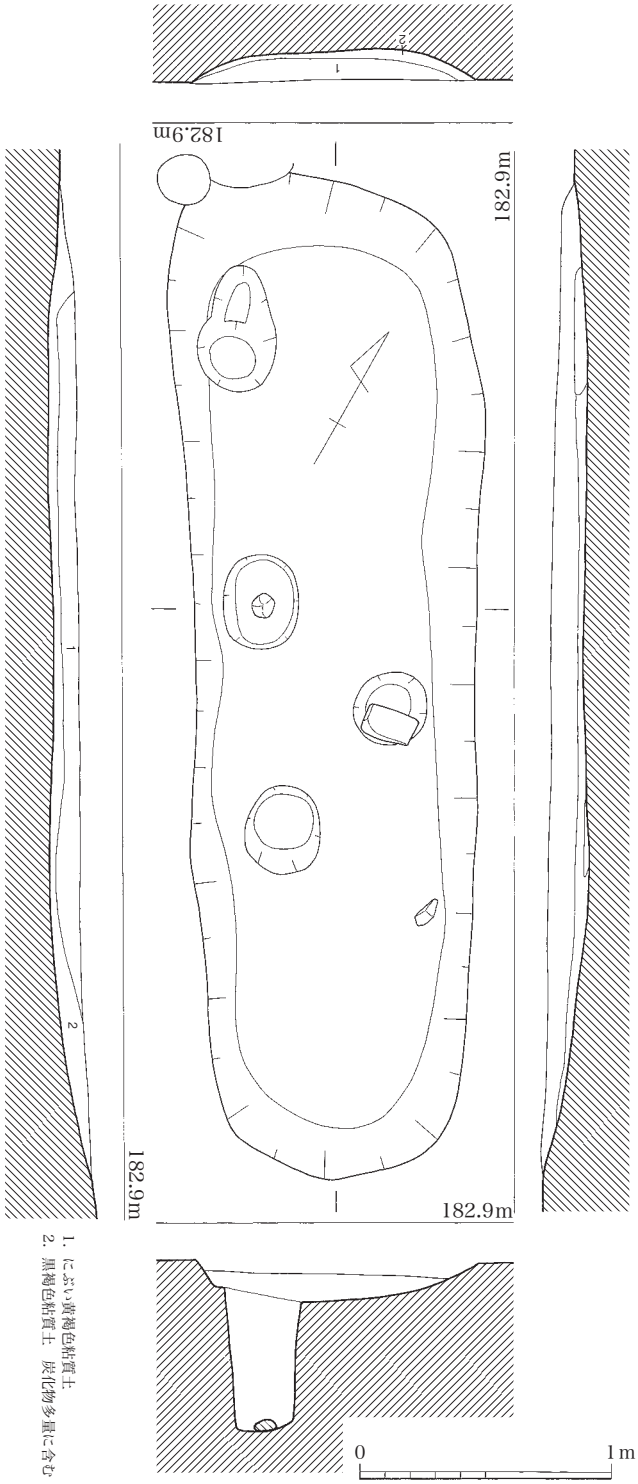
第６図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ－４～７区遺構配置図（1/200）



第７図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ－７区東側壁面土層実測図（1/40）

中近世の遺跡が展開している。本遺跡の祓川を挟んだ東側にも下伊良原切遺跡が存在する。

遺跡は当初全面に展開しているものと考えられたが、一部を除きほとんど遺構がないことが確認されたため、トレンチを入れて遺構を確認しながら掘削範囲を広げていった。その結果、遺跡の北側斜面に近い部分で土坑、段落ち、ピットが確認された。遺構は出土土器が僅少なため不明確ながら、中世・近世に属するものと考えられる。また、段落ちは近世以降に埋められており、その性格は不明である。



第８図　下伊良原西の塚遺跡
Ⅰ－６区１号土坑実測図（1/30）

３）遺構と遺物

本調査区では調査対象地内に遺構のない部分が認められたため、地形により１～７区まで細分している（第４図）。以下に区ごとに出土遺構を記述する。なお、２・３区は遺構・遺物共に検出されなかったため割愛する。丘陵の基本土層は第７図の通りである。下層では砂質土が存在し、その上面の灰褐色粘質土が遺構面となる。

１区（図版１、第５図）

調査区の南東端に位置する。トレンチ内の３分の１で撹乱が検出され、ピットが数基検出された。東側ならびに南側に伸ばしたトレンチで一部溝状の遺構や落ちが確認されたものの、掘削すると撹乱であることが確認された。遺物の出土はなかった。

４区（図版２、第６図）

調査区の北東側に位置する。住宅跡のためか、撹乱が多く、わずかに１基のピットと落ちが検出された。遺物の出土はなかった。

５区（図版２、第６図）

調査区の北西端に位置する。ここも３分の１で撹乱が検出され、数基のピットおよび溝状の落ち込みが確認された。溝は遺物の出土がなかったものの、位置的に住宅造成前の近代の水路と考えられる。

出土遺物（第９図）

１は肥前青磁碗である。高台部端部に釉剥ぎのケズリを施す。２は土師器小皿である。底部糸切りを施す。ともに中央撹乱出土。

６・７区（図版３、第６図）

調査区の北端に位置する。丘陵の端部に位置するため、最も遺構の残存状態が良かった。調査区は旧畑地で段差が形成されており、特に上段で土坑１基、ピット数基が検出された。段差は近世以降に作られたものと考えられる。

土坑

１号土坑（図版４、第８図）

6・7区の中央に位置する。規模は0.4 × 0.12m、深さ0.1mの長方形土坑である。床全面に被熱痕跡が見られ、直上から多量の炭が出土した。当初火葬墓の可能性も考えたが、骨片等は認められなかった。

出土遺物（第９図）

3は土師器小皿である。底部に糸切りを施す。

その他の遺構・出土遺物（第９図）

ピット等出土遺物

4は白磁碗である。外面口縁下を片切彫で削る。P-1出土。5は縄文土器である。押型文を施す。内面にわずかに山型文が見られる。P-11出土。13は土錘である。内径4㎜を計る。P-11出土。

段落ち出土遺物

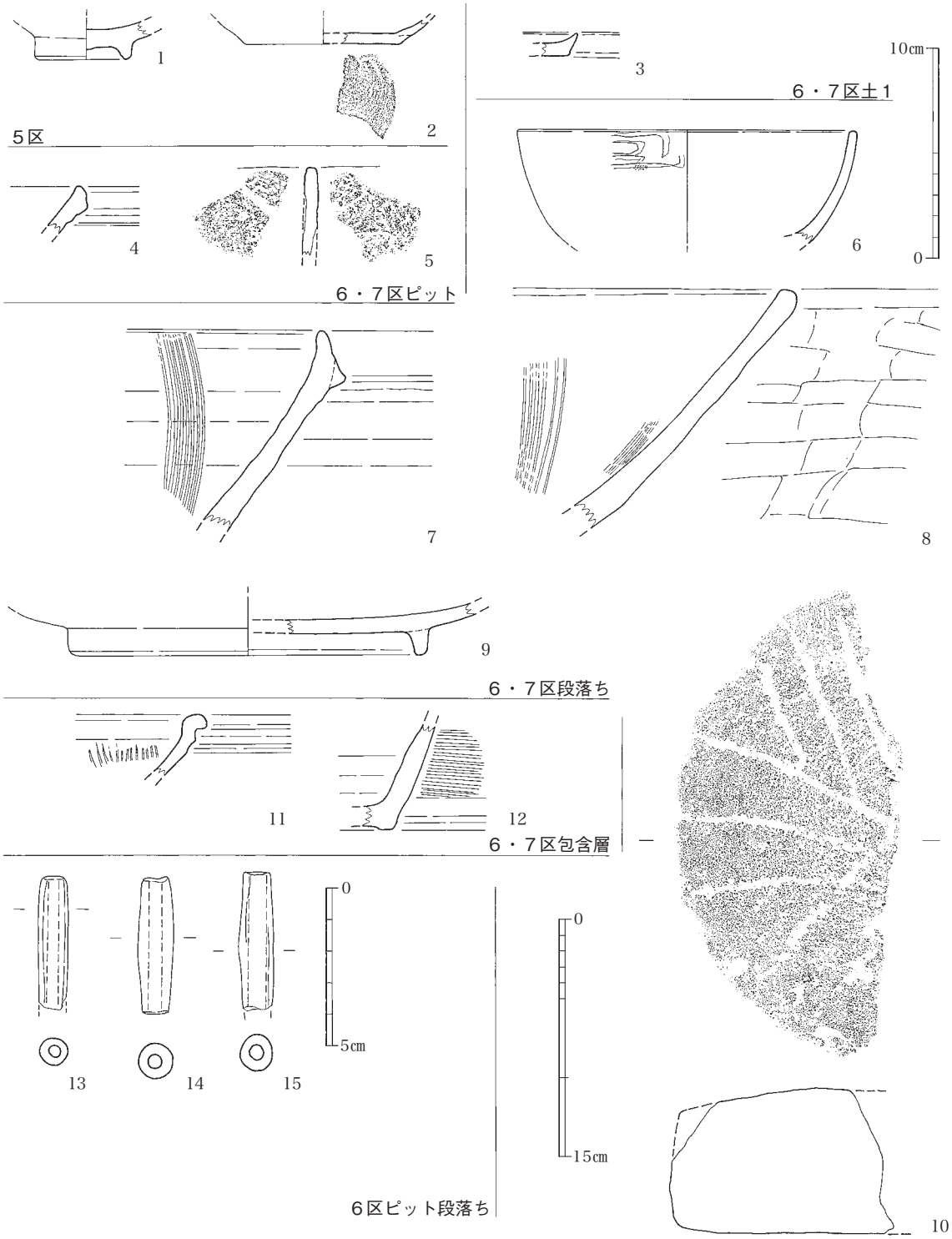
6は龍泉窯系青磁碗である。口縁部に雷文を施す。7は備前焼の摺鉢である。9本1単位の摺り目を持つ。8は瓦質土器の摺鉢である。摩滅するが、外面ケズリ後ナデ、内面6本1単位の摺り目を施す。9は土師質土器の鉢である。内外面ナデを施す。高台部外面に煤が付着する。捏ね鉢か。10は石臼である。復元径15.3㎝で、投入孔と考えられる孔が残る。凝灰岩製。14･15は土錘である。内径4～4.5㎜を計る。

包含層出土遺物

11は上野高取系の陶器摺鉢である。口縁は丸く折り曲げ、内面に摺り目が残るが単位は不明である。内外面暗赤紫褐色の鉄釉がかかる。12は上野高取系陶器の小型甕ないしは鉢である。底部削り出し高台で、外面カキメ後下端ケズリを施す。内面は暗褐灰色の灰釉が厚くかかる。

４）小結

以上のように、検出遺構・出土遺物共に僅少で、丘陵落ち際でのみ遺構が確認された。調査区中央部では下層の砂層が確認されたことから、周辺の宅地・畑地開発によって丘陵の中央を削平しており、その結果遺跡が壊され、無くなったものと考えられる。



第９図　下伊良原西の塚遺跡Ⅰ区出土遺物実測図（10 は 1/4、13 ～ 15 は 1/2、他は 1/3）

第10図　下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区上層遺構配置図（1/300）

第11図　下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区下層遺構配置図（1/300）

Ⅱ区

１）調査の概要

下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区は、京都郡みやこ町大字下伊良原1763－1～3、1768、1771に所在する。祓川左岸の丘陵裾との間に形成された小規模な段丘上に立地し、現地は現在に至るまで水田として利用されてきた。平成19年に調査を実施した、南側に近接する下伊良原中ノ坪遺跡の調査成果から、今回の調査地点についても文化財の存在が予想されていた。標高約175m、調査面積は約4,000㎡、調査期間は平成25（2013）年4月22日～翌3月25日である。

4月22日に現地に重機を搬入して、調査区周囲の排水溝の確保、法面の補強等の環境整備を行い、23日に調査区東半部の3箇所に試掘溝を設定して掘削し、現河川から15m程度は表土の下部は礫層となっており遺構が存在しないことを確認、この部分を調査範囲から外して排土置き場とした。25日から調査区内の表土掘削作業を開始し、暗褐色土の下層に黄灰色土層を検出、この上面で埋土が暗褐色から黒褐色の小穴や土坑状の遺構と中世の遺物が出土したため、これを遺構面と定めて拡張した。調査区西側は、地形的には丘陵が迫る地形変換点であり、斜面からの湧水のために土質が還元して青灰色粘質土化している。この部分からは多数の湿地を利用した貯蔵穴と溝状遺構を検出した。5月15日から作業員による手作業での遺構掘削作業を開始し、掘削作業がほぼ終了した11月7日にラジコンヘリによる全体写真撮影を行った。

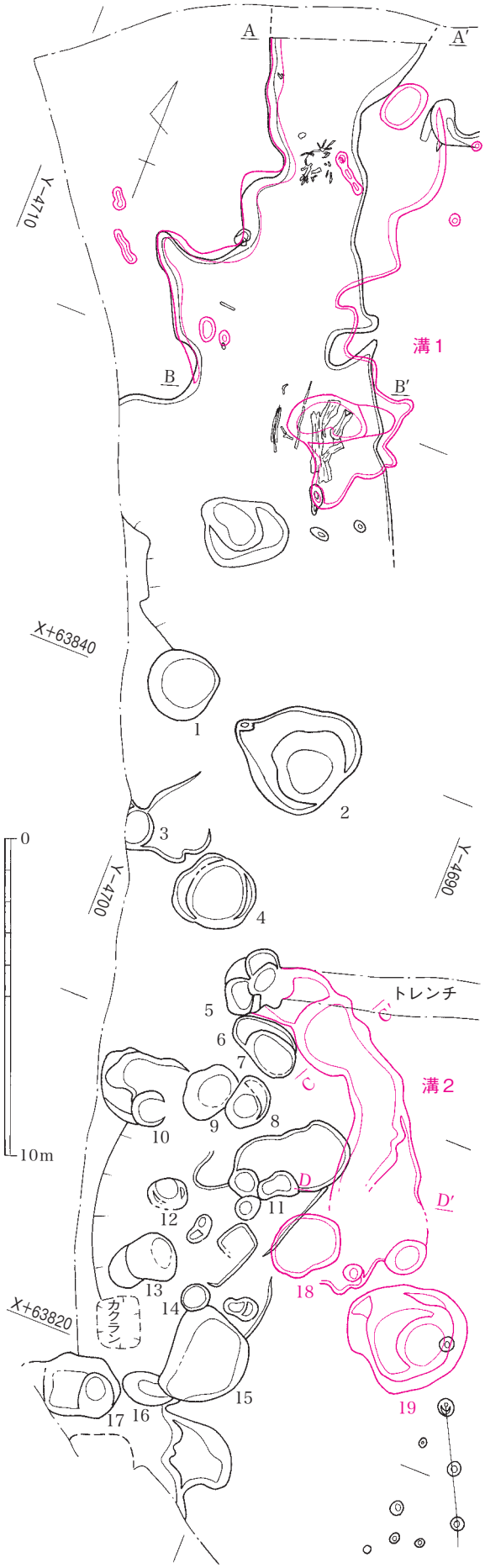
13日から再び重機を投入して掘削作業、下層の灰褐色土を主体とする遺構面を検出していった。14日、重機による掘削作業途中で平安時代末頃と考えられる土壙墓を発見し、一部では複雑に堆積していることを痛感した。下層の遺構面から出土する遺物はほぼ縄文時代のものに限られ、東の川側に行くにしたがって土中の礫が多くなり、調査区東側1/3程は礫層化しており遺構面もはっきりしなくなる。その周辺部で大小の土坑状の掘り込みを多数検出し、埋土から土器等が出土するものもあるが、大半は不整形で礫層の周縁部に集中していることからも、人為的なものではなく河川活動等の自然現象に由来するものがほとんどである可能性が高いものと考えられた。

翌年2月21日に足場を組んでの全体写真撮影を行った。25日からは、調査区内に4×4m9箇所、4×3m1箇所の計10箇所にグリッドを設定して手作業での掘削を開始、さらに下層の遺物包含状況を確認していった。3月18日までには実測等を含めた作業員を必要とする作業を終了し、機材も撤収した。20日から重機による危険箇所の埋め戻し作業、25日に現地でのすべての作業を終了した。

２）縄文時代の遺構と遺物

貯蔵穴

今回の調査地点の西側には段丘崖が迫っており、調査区西端部は急傾斜の斜面から平坦面へと移る地形の変換点にあたる。この部分は、斜面からの湧水に長期間晒されてきたことによる還元のために遺構面が青灰色化している。ここから堅果類（ドングリ）を貯蔵したと考えられる貯蔵穴17基以上と、北側では流路状の溝1条を検出した。さらに、上層の遺構の調査を終了した後に、中世の遺構面を掘り下げたところ、新たに2基の貯蔵穴と溝状の遺構を検出した。結果的に、調査区西端部の30m×10～15m程の範囲に密集した状態で合計19基以上の貯蔵穴を確



第12図　貯蔵穴・溝配置図（１／200）

認した。遺構内からは土器等の時期を示す遺物はほとんど出土していないが、下層の縄文時代後期の遺構面を検出する過程で一部の貯蔵穴が発見されたことと、19号貯蔵穴等からわずかではあるが縄文土器が出土し、逆に新しい遺物が混入していないことから、これらの貯蔵穴は縄文時代に属するものと判断した。このことは、放射性炭素による年代測定結果からもほぼ同様の結果が出ている。

１号貯蔵穴（図版６、第13図）

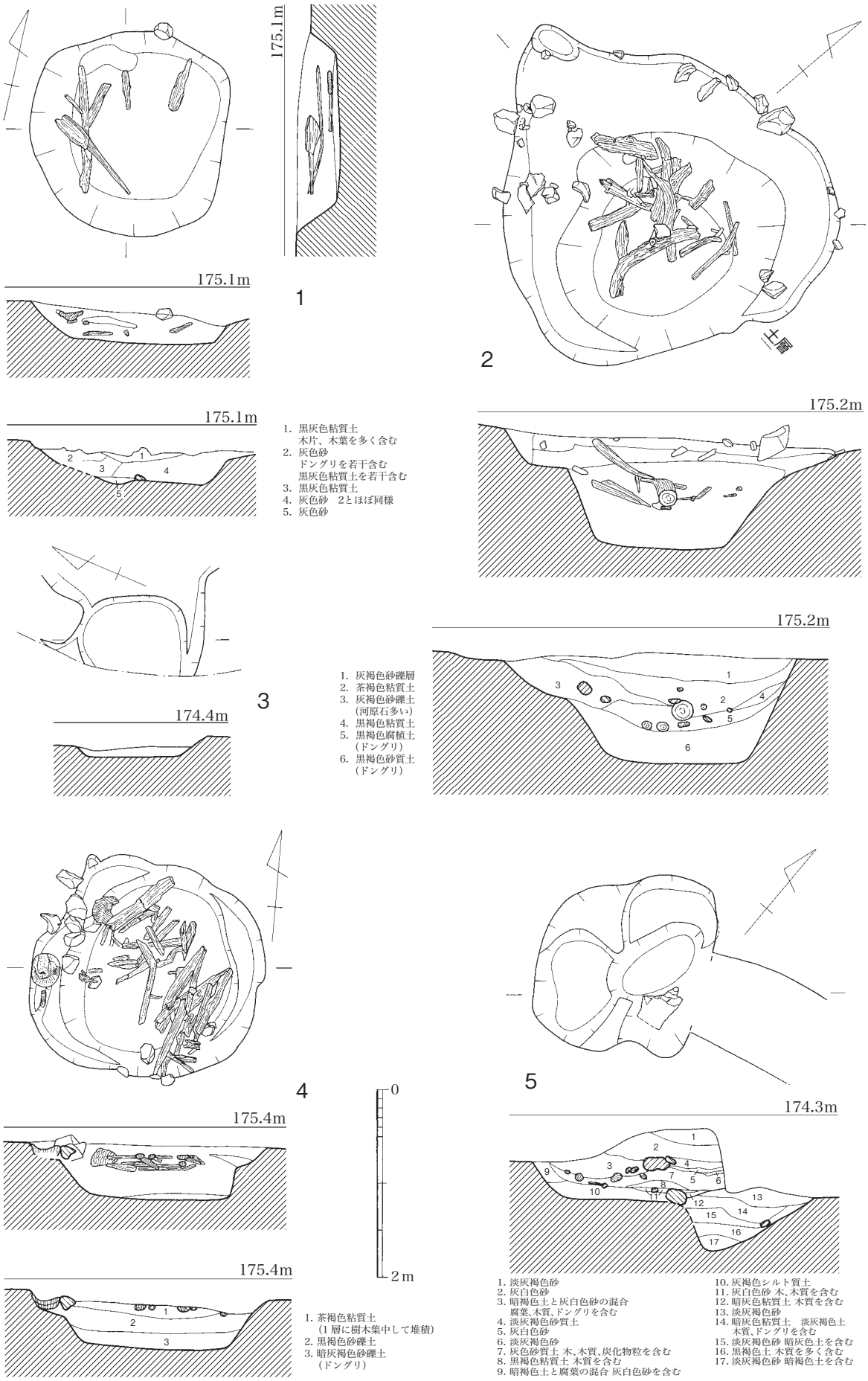
貯蔵穴群のなかで最も北側に位置する。平面形は概ね円形で南北径2.2m、東西2.1m。断面形は逆台形で底部は水平となり、深さ0.3～0.4mが残存する。埋土は黒灰色粘質土と灰色砂の互層になっており、内部からはドングリと自然木が出土した。また、遺構の北隅中位で、ドングリが密集して出土した箇所がある。

２号貯蔵穴（図版７、第13図）

１号貯蔵穴の東側に0.5mの間隔を開けて位置する。平面形状は不整円形で、南北長3.4m、東西4.0mであるが、上面から0.3～0.4mのあたりで二段掘り状になっていることから、本来は径2.5m程の円形であったものかと思われる。深さ1.2mで底部は水平となる。内部からはドングリと自然木が出土し、木は中位に集中する。

３号貯蔵穴（図版７、第13図）

西側調査区境にあり、遺構の一部は調査区外となる。平面楕円形で、南北朝1.2m、東西0.85m以上、深さは0.1m程度しか残存していない。底部は水平となる。埋土は黒灰色土と灰色砂で、全体からドングリが出土した。



第13図　1～4号貯蔵穴実測図（1/60）

４号貯蔵穴（図版８、第13図）

平面円形で、径2.3～2.5m。断面は現状では二段掘り状で底部は水平となり、深さ0.5m。ドングリと自然木、自然石が出土したが、木と石は上位に集中する。

５号貯蔵穴（図版８、第13図）

５号貯蔵穴から調査区南西隅の16号貯蔵穴までは密集して作られている。5号貯蔵穴は調査時に埋土の状況が複雑な様相を呈していたため、当初は２基以上の貯蔵穴が切り合っているものと考えたが、結果的には下部は後に検出する２号溝の一部であった。一部切り合い関係の誤認もあって複雑な形状に掘り上げたが、本来は径1.7～1.8mの円形に近い平面形で、深さ0.75m、底部は水平になるものと考えられる。内部からはドングリと自然木が出土した。

６号貯蔵穴（図版９、第14図）

６・７号貯蔵穴は切り合った状態で検出され、７号貯蔵穴に切られる。６号貯蔵穴は平面楕円形で、長軸長2.1m、短軸長は残存する部分で1.05m、深さ0.5m。遺構の南東側約半分を７号貯蔵穴に切られて失われている。

７号貯蔵穴（図版９、第14図）

６号貯蔵穴との切り合い関係が認められ、６号貯蔵穴を切る。平面楕円形で、長軸長1.75m、短軸長1.2m深さ0.6m。ドングリと自然木、自然石が出土しており、遺構の南東側上位に集中している。

８号貯蔵穴（図版９、第14図）

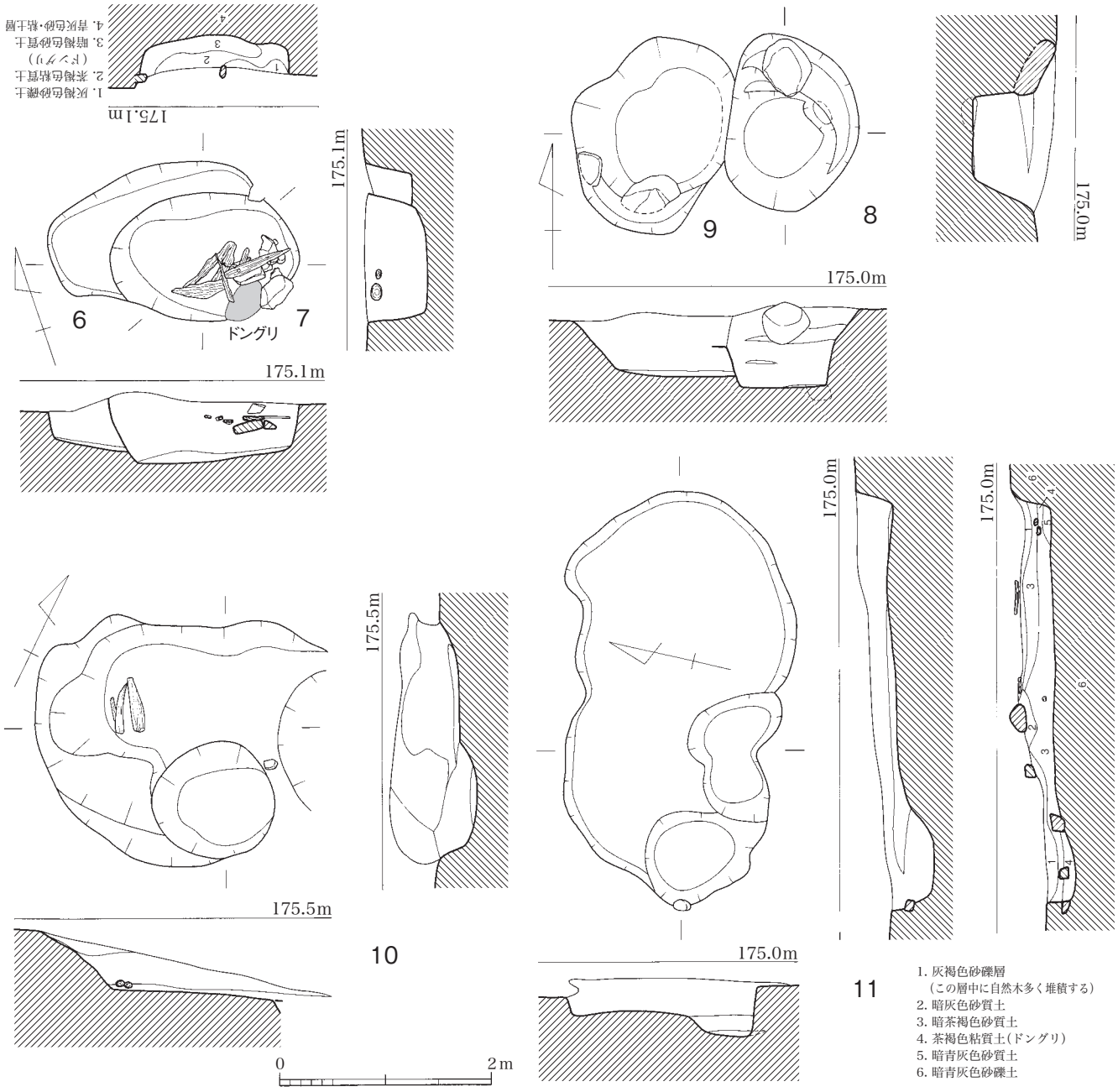
９号貯蔵穴と切り合い関係にあり、８号貯蔵穴が切る。平面形は卵形に近い楕円形で長軸長1.7m、短軸長1.25m、深さ0.75mで底面は水平となる。遺構の北東側が一段高くテラス状になっており、この部分は崩れによるもので本来円形に近い形状であった可能性がある。埋土の上位から自然木が出土した。

９号貯蔵穴（図版９、第14図）

8号貯蔵穴に遺構の東側の一部を切られる。楕円形に近い形状で、長軸長1.85m、短軸長1.5m程度、深さ0.55m。遺構の南側が一段高いテラス状になっており、崩れによるものか。埋土上位の灰色～灰褐色砂質土から多くのドングリが出土し、底部付近からも自然木が出土した。

10号貯蔵穴（図版10、第14図）

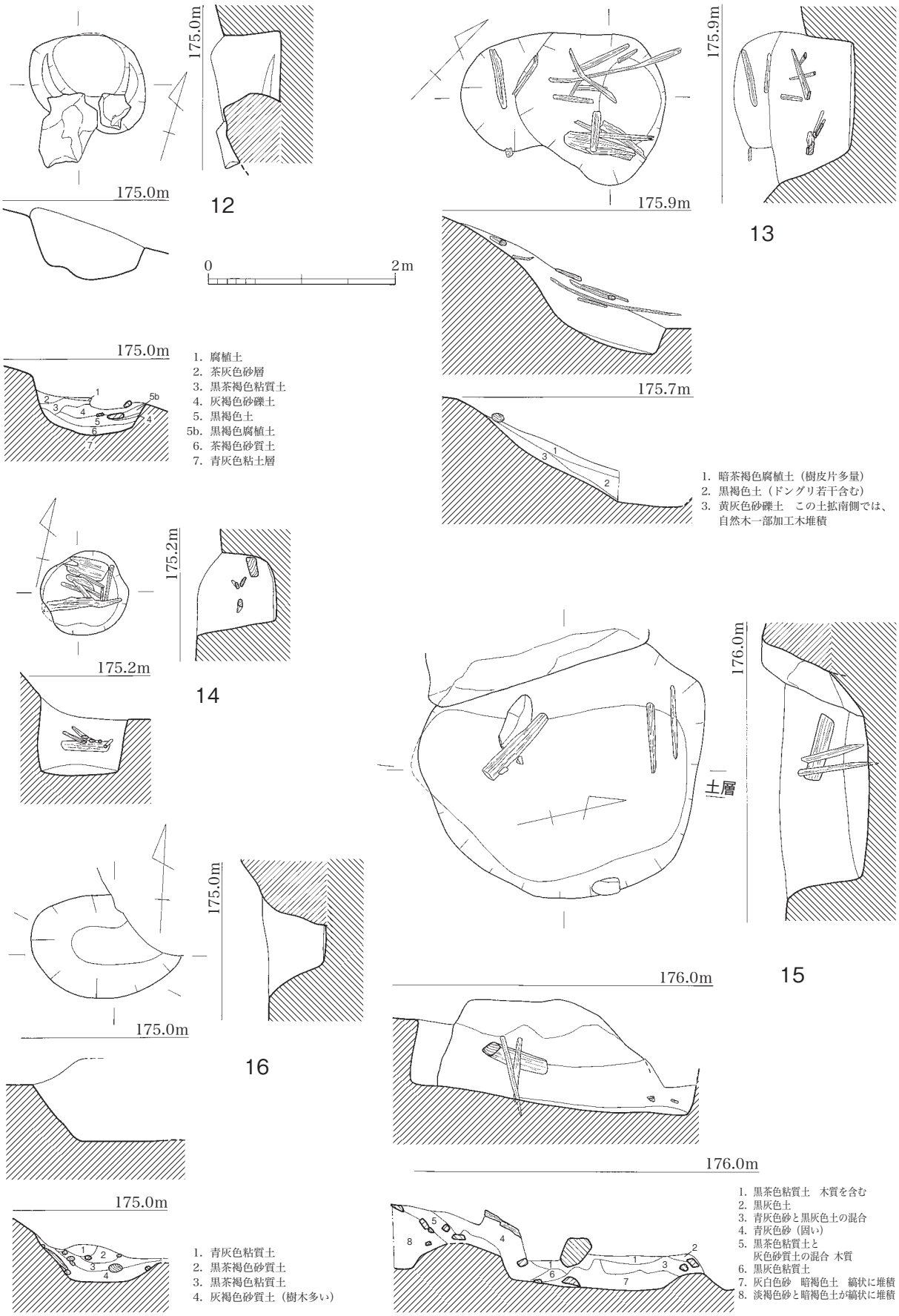
上部を削平されているために遺構の残存状態は良くなかったが、東側の一部は９号貯蔵穴に切られるものと思われる。平面形状は楕円形に近く、残存長2.8m、幅2.25m、深さ0.6mで、底面は水平。遺構の南東側に径1.1mの円形でさらに0.15m掘り込んだ部分があり、別遺構の可能性がある。埋土は最大で深さ0.2m程度しか確認できなかったが、ほぼ黒褐色腐植土で遺構底部に接してドングリと自然木が出土した。



第14図　6～11号貯蔵穴実測図（1/60）

11号貯蔵穴（図版10・11、第14図）

平面形は不整楕円形の、やや異色の浅く長い形状で、長軸長3.9m、短軸長2.0m、深さ0.3mで、底部はほぼ水平となる。遺構の南西隅部に接して深さ0.2m程の掘り込み部があるが、あるいは別遺構の可能性もあるものか。ドングリと自然木が出土した。



第15図　12～16号貯蔵穴実測図（1/60）

12号貯蔵穴（図版11、第15図）

地山中の石を除去することなく掘削しているため、遺構南側の一部に石が突き出す形状となっている。平面形は卵形に近い楕円形で、長軸長1.35m、短軸長0.9m、深さ0.65m。

13号貯蔵穴（図版12、第15図）

傾斜面に作られ、平面形は不整楕円形で、長軸長2.2m、短軸長1.6m。深さは最大で1.4mであるが、傾斜地であることを考えれば実質はそれより浅い。若干量のドングリと、埋土上位から一部加工痕のあるものを含む多量の木が出土している。底部が地形に合わせて若干傾斜していることと、上部から出土した木の状況も同様であることから、遺構の上縁部も当初から傾斜していたものと考えられる。

14号貯蔵穴（図版12、第15図）

15号貯蔵穴と接しているが、切り合い関係は不明である。平面円形で径0.9m、深さ0.85m。埋土の中位から自然木片がまとまって出土しており、下層の黒灰色土中からドングリが多く出土した。

15号貯蔵穴（図版13、第15図）

地山中の大石を遺構の西壁として利用しつつ掘削されている。平面形は円形に近く、径3.0m程度。深さ0.9mで、底部は地形の傾斜に合わせるように若干北東側が低くなっている。遺構の南西よりの部分で、径15㎝、長さ90㎝程度の加工木材を、径５㎝、長さ90㎝と70㎝程の２本の角材の杭で固定しているが、用途は不明。また、遺構西側の大石を覆うように青灰色粘土が確認されているが、人為的なものかは不明である。

16号貯蔵穴（第15図）

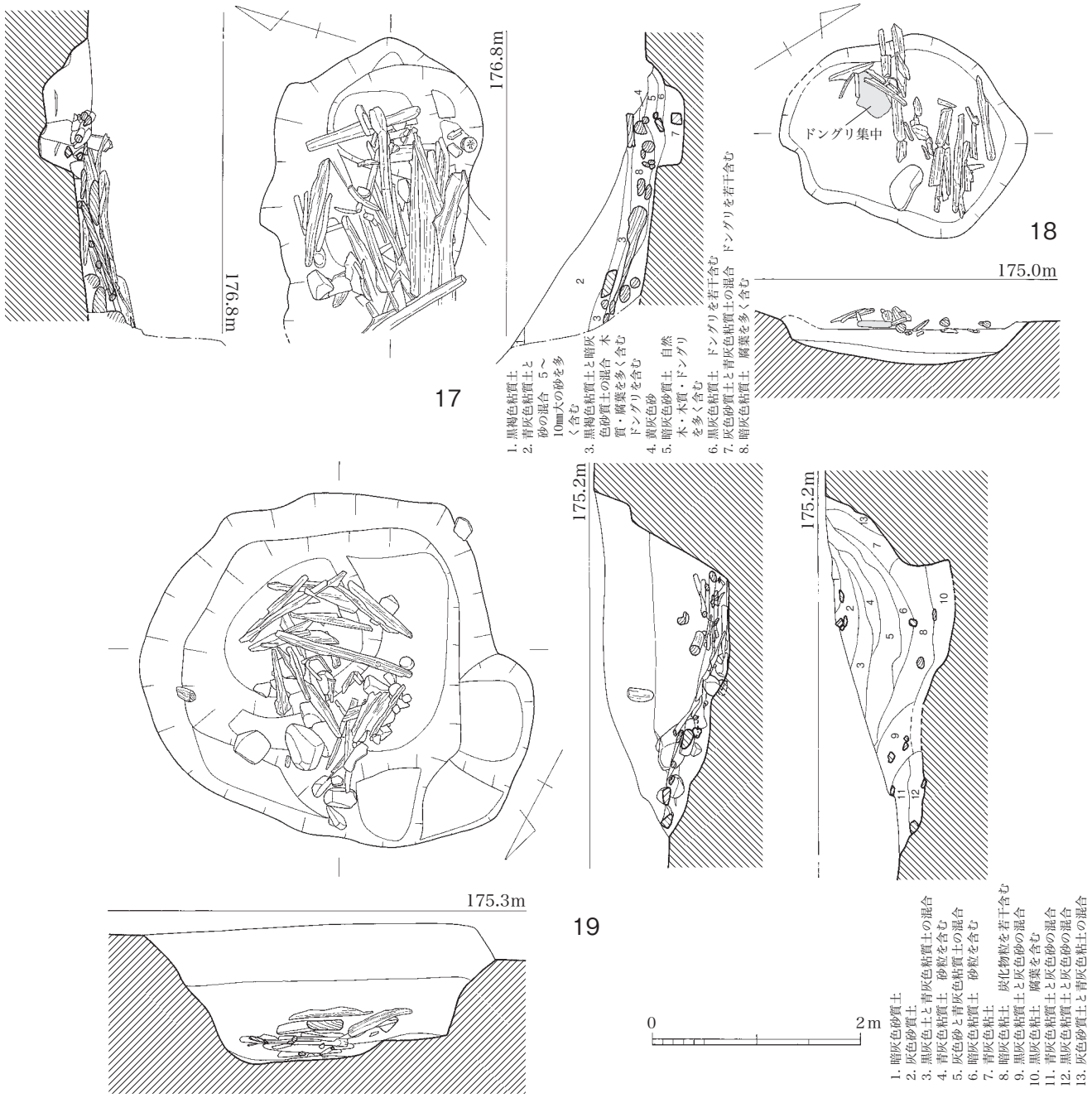
15号貯蔵穴に切られて、遺構の北東部を失っており、大石を利用して北側壁とする。平面楕円形で、残存長1.65m、幅1.1m、断面は逆台形を呈して深さ0.6m。

17号貯蔵穴（図版13・14、第16図）

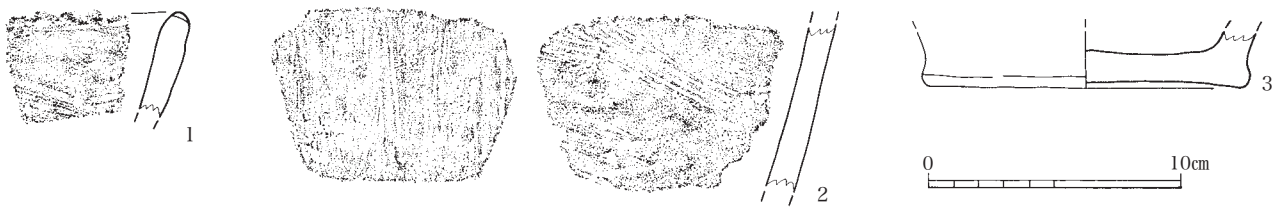
一群の貯蔵穴の中で最も南西側で検出し、遺構の一部が調査区外に延びていたため、範囲を拡張して調査した。西側の崖面に接して掘り込まれており、検出時には斜面からの土砂が大きく被っていた。平面楕円形で、長軸長2.7m、短軸長1.95m。底部はわずかに東側に低く傾斜し、東半分弱はさらに0.3m程掘り下げていて、深さは最深部で0.5mが残存している。ドングリは上層、下層からともに出土しており、また多量の自然木が出土したが、主に東西方向に並べて置いた状況が確認された。

18号貯蔵穴（図版14、第16図）

下層の遺構面で検出した。２号溝を切って作られている。平面形は円形に近い不整楕円形で、長軸長2.4m、短軸長1.95m、深さ0.4mで、底部はなだらかに中央部が低い。埋土の上位からドン



第16図　17～19号貯蔵穴実測図（1/60）



第17図　19号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3）

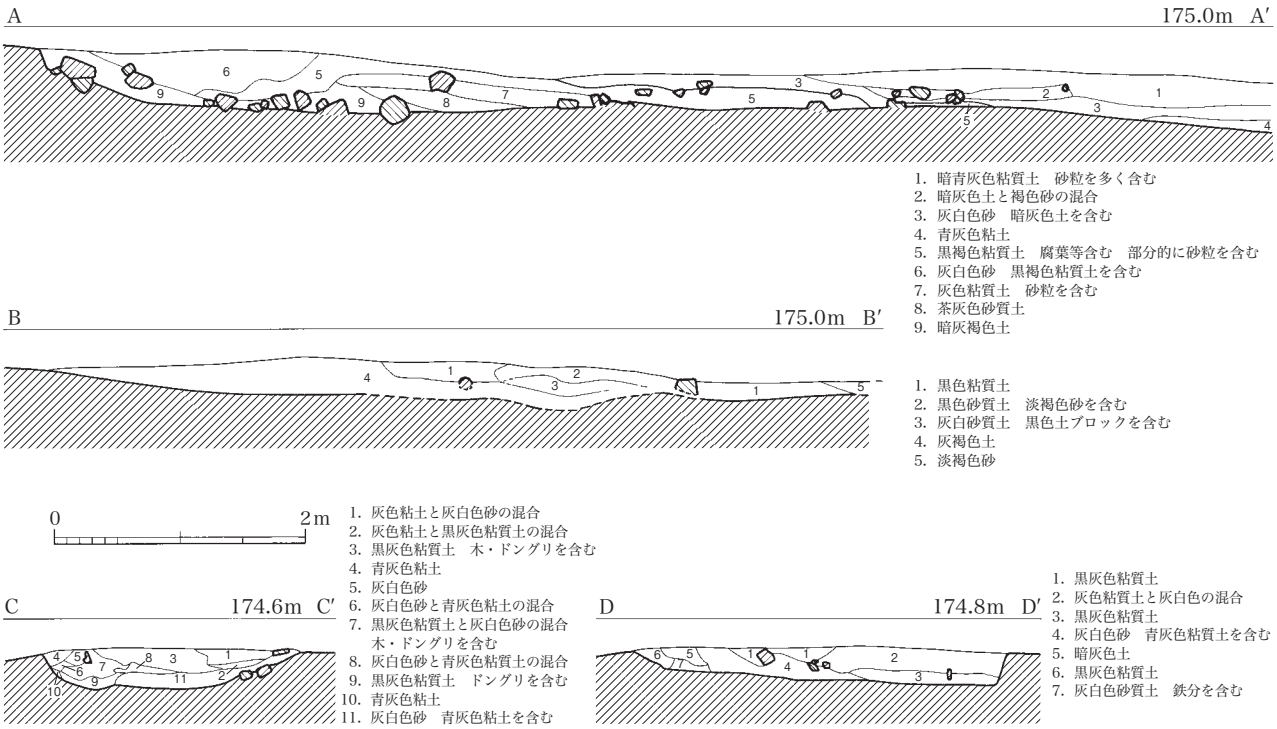
グリと自然木がまとまって出土しているが、西側にドングリが集中する箇所があり、また木は並べた形跡がある。

19号貯蔵穴（図版19、第16図）

下層の遺構面で検出した。平面形は不整円形で、径3.3～3.8m、断面形は逆台形に近く、深さ1.3m。下位の底部付近から自然木、自然石がまとまって出土している。

出土遺物（図版31、第17図）

３点とも縄文土器である。１は口縁部で、口唇部に等間隔の刻目を入れる。２は胴部で、外面は縦方向の二枚貝条痕が、内面はナデ調整のち斜め方向の二枚貝条痕が残る。３は底部で、ほぼ平底となり、外面はミガキ調整。また、内面に炭化物が付着する。



第18図　１・２号溝土層実測図（1/60）

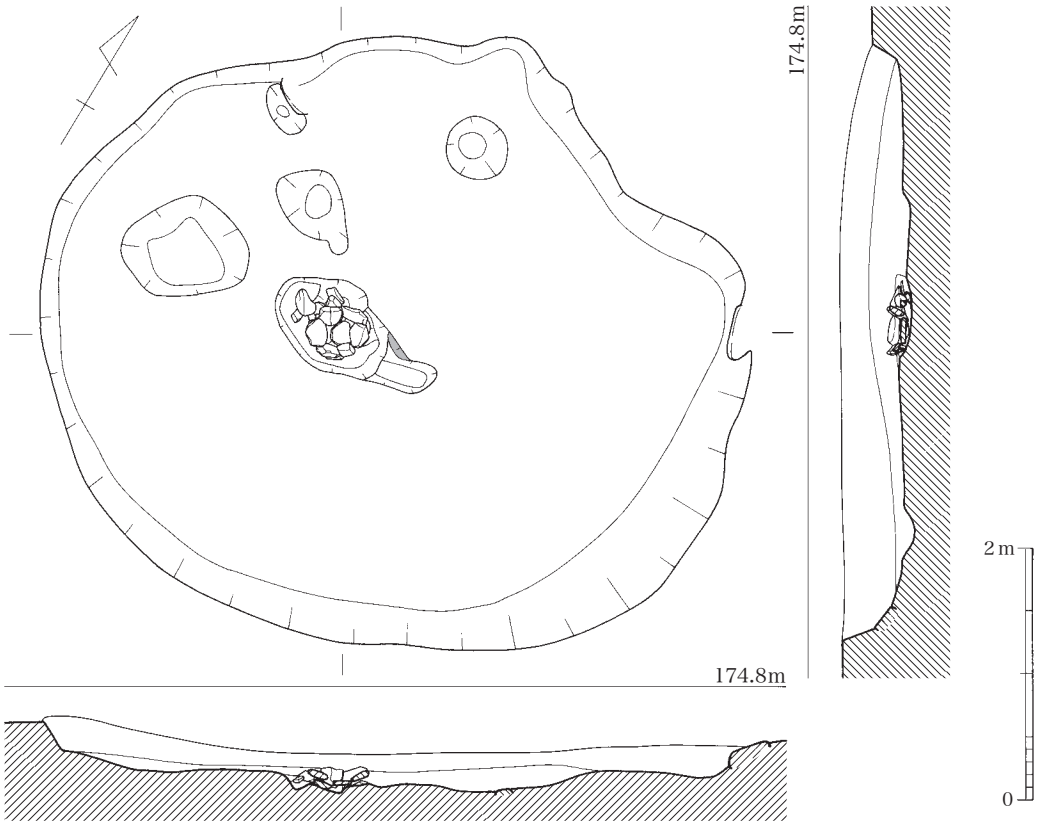
溝

１号溝（図版16、第12・18図）

調査区北西部で南北方向に延びる溝状の遺構約20m分を検出した。幅は２～８ｍ、深さは最大で0.6m、形状は不整形となる。溝の東側の立ち上がりが不明瞭であったため、下層の遺構面を確認する際に重機で20～30㎝程掘り下げたところ、最大で３ｍ程東に広がった部分で埋土の端部を確認した。土層的には、遺構の東側が削平された上に、中世の遺構面となる黄灰色～淡褐色土が被った状況が確認できた。この溝は形状的には人為的なものとは思えず、自然の流路程度のものと思われたが、内部から多量の木が出土し、一部は並べた状況が見られることから、明らかに人の手が加わっている。また埋土が黒褐色～黒色土、灰白色砂、腐植土などからなる状況も南側の貯蔵穴とほぼ同様であり、さらに貯蔵穴群の北側に位置し、これらと同様に遺構面が青灰色化した部分に沿った位置にあることからも、貯蔵穴群と関連のある遺構である可能性がある。

２号溝（図版17、第12・18図）

下層の遺構面で検出した。位置的には、５号貯蔵穴から18号貯蔵穴まで、弧を描いて延びる溝である。長さ約10m、幅1.3～3.0mでやや不整形となり、深さ0.25～0.35m。切り合い関係からは、５・11・18号貯蔵穴に切られており、これらの貯蔵穴よりも古い。埋土は主に、黒灰色粘質土、灰白色砂、青灰色粘質土からなって、木やドングリも出土しており、近接する貯蔵穴とほぼ同様である。密集して作られた５～18号貯蔵穴の東側に位置して、これらを囲むような形状であることや、埋土の状況から判断して、貯蔵穴群と関連する施設と考えられる。



第19図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版18、第19図）

上層遺構面の調査区南東部にある。平面形はやや不整な円形で、5.7×5.1m、深さは最大部分で0.4m程度が残存している。埋土はほぼ暗灰褐色土で、中央部の上位10～15cmの部分に地山と同様な黄灰色粘質土が入る。床面は土中に川原石が多く混入する地山を掘削しているためか、やや凹凸がある。床面の中央部付近に炉跡状の集積遺構がある。1.0×0.7mの楕円形に浅く掘り窪め、10～20cm大の扁平な川原石を花弁状に並べる。ただし、炉跡とするには石が全く焼けておらず、また焼土や炭化物の出土もほとんどない。また、床面には数箇所窪み状に掘り下げた痕跡があるが、柱穴とし得る穴は確認できなかった。形状から住居跡として報告するが、必ずしも確証はない。

出土遺物（図版31、第20図）

1～12は口縁部。1は小池原下層式で、ここではやや古い。1・2は口唇部に刻目を入れる。3・4は口縁部が短く外反し、3は太い沈線文と刺突文、4は沈線文を施す。3の胴部内面はケズリのち工具によるナデ調整。5は口縁部が比較的長く、内面はケズリのちナデ調整、口唇部外面に１条の沈線が入る。6・7は波頂部で、6は口唇部に刺突文、両脇に焼成前の穿孔がある。8・9・11・12は無紋の口縁部で、横方向の二枚貝条痕で仕上げる。10は復元口径18.0cmで、粗いナデ調整で仕上げる。13～20は頸部から胴部。13は太く深い沈線で同心円弧文を描く。15～19は肩部に沈線で区画された磨消縄文を施す。20は巻貝条痕のち太い沈線文を入れる。21～23は底部で、３点とも平底である。23は体部との接合部の剝離面に指頭痕が明瞭に残る。24は蛇紋岩製の磨製石斧。基部を欠き、断面はやや扁平な楕円形である。残存長8.7cm、幅5.7cm、厚さ2.1cm。

土坑

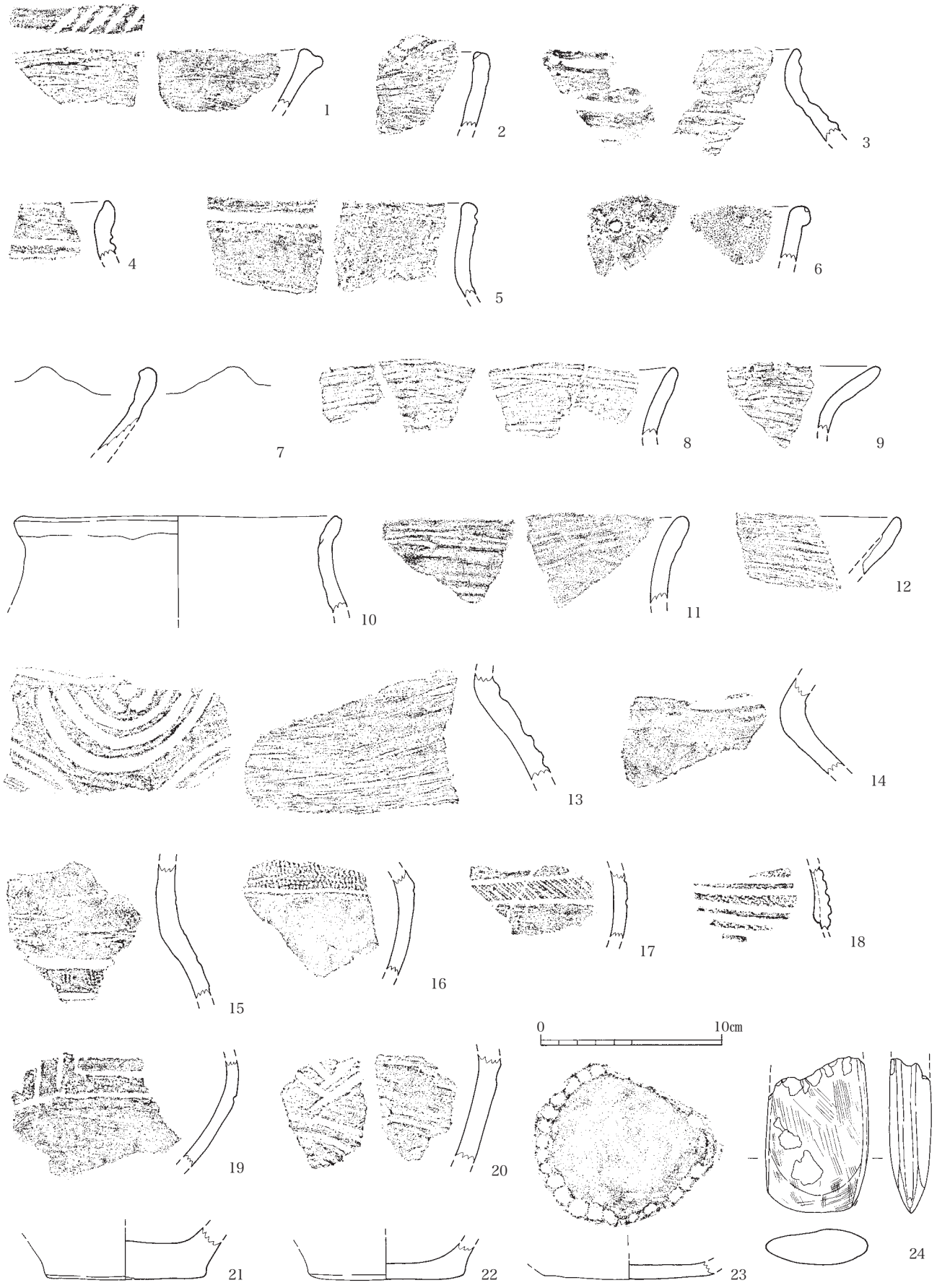
今回の調査区では、東の川側に行くにしたがって土中の礫が多くなり、上層調査区でも東側1/3～1/4程は礫層の隙間に土が混入している状況であった。その周辺部で大小の土坑状の掘り込みを多数検出した。そのほとんどは形状も不整形であり、礫層とその周縁部に集中していることからも、人為的なものではなく河川活動等の自然現象に由来するものである可能性が高いものと考えられた。しかしながら、縄文土器等が比較的まとまって出土しているようなものもあり、混入したものが多いとは思われるが、ここでは形状から人工的なものである可能性があるものおよび遺物の出土量が多いものを報告する。

１号土坑（図版19、第21図）

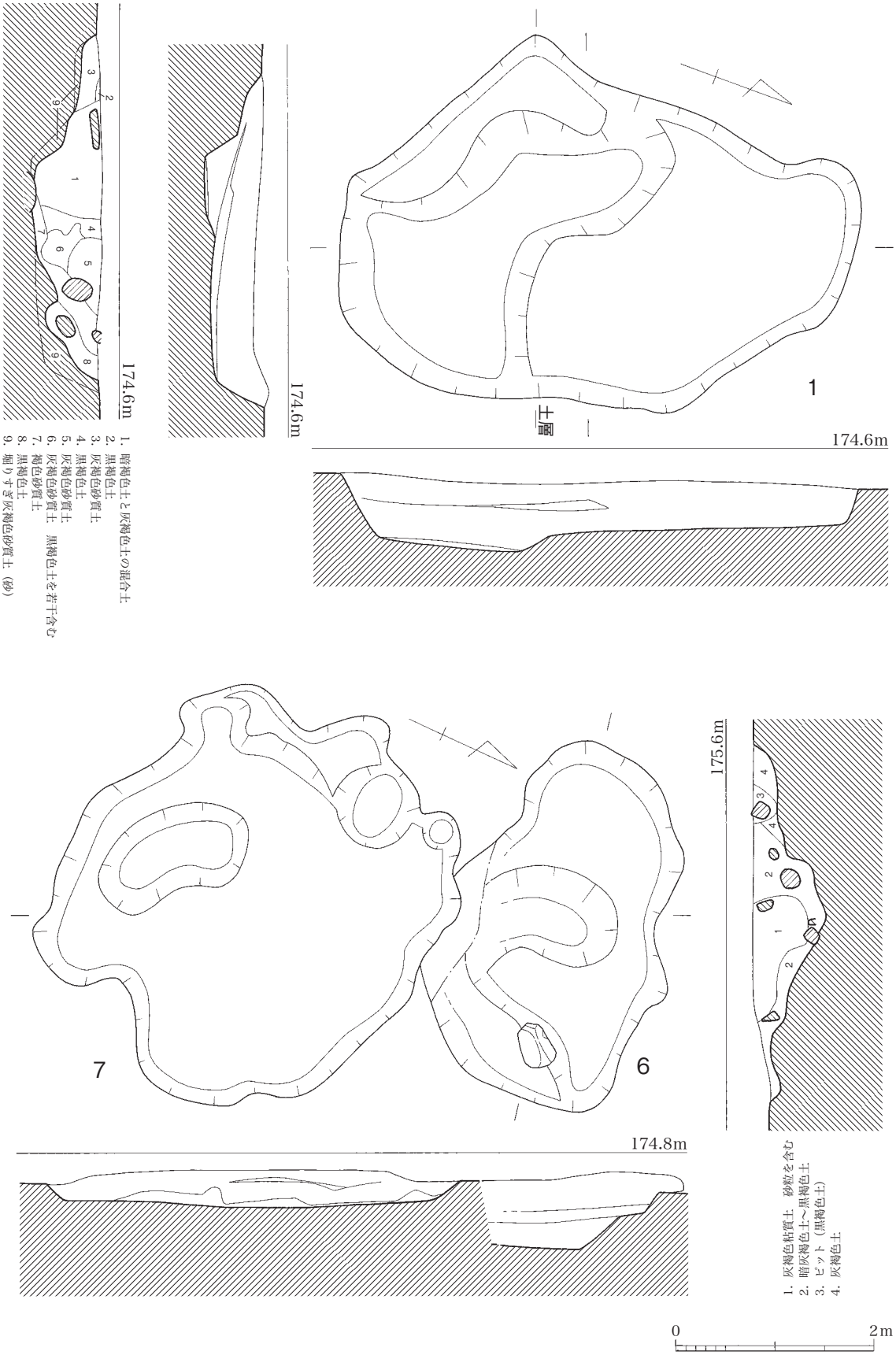
上層調査区中央東寄りの位置で検出した。不整楕円形とでもいうべき平面形で、長軸長5.2m、短軸長3.6m、深さは最深部で0.7m。底面は大きく３段に分かれており、南西側が高く、逆に南東側が低い。縄文土器類が多く出土した。

出土遺物（図版31・32、第22～24図）

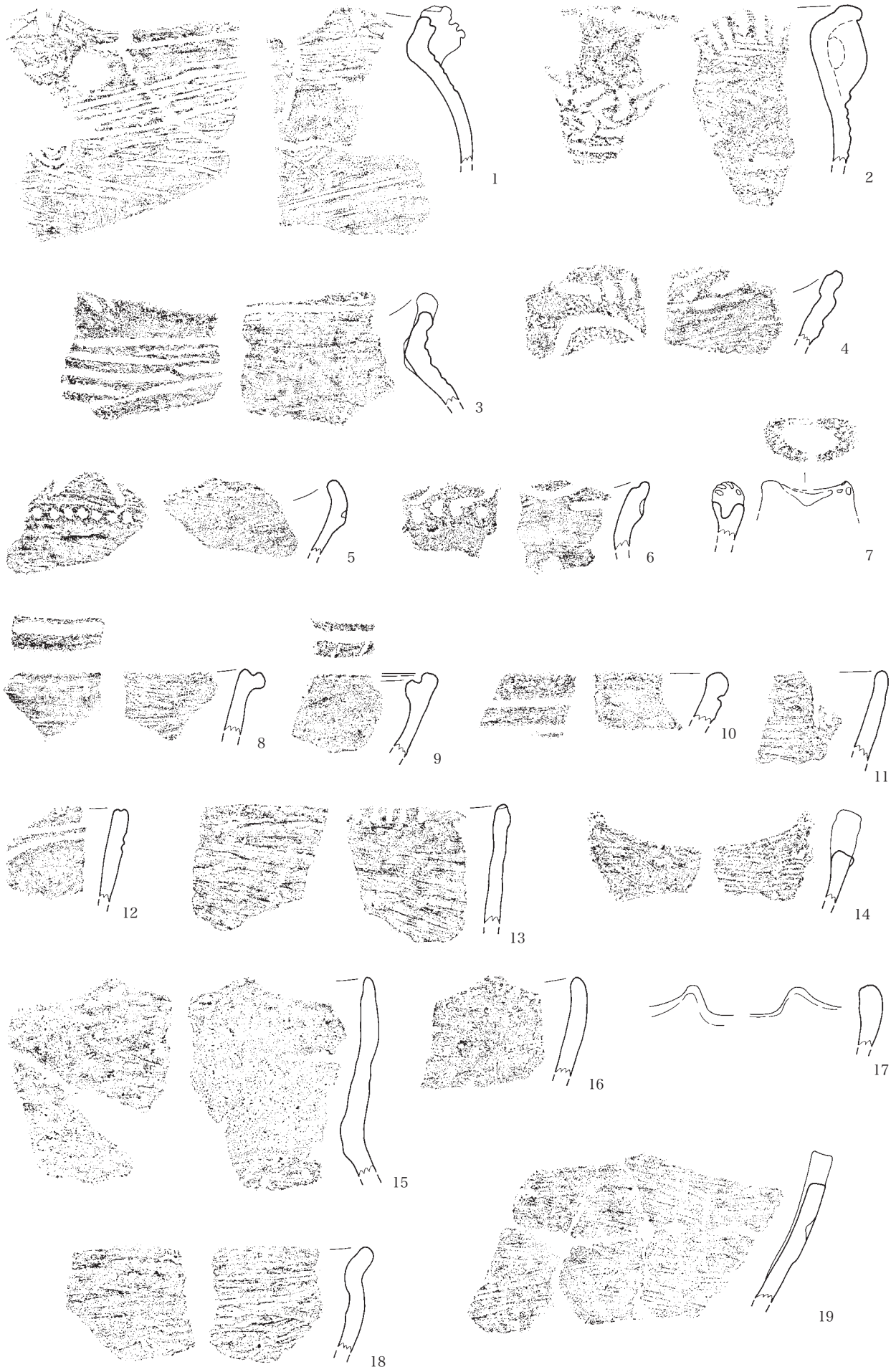
1～27は口縁部。1～3は口縁部が短く外反し、1・2には橋状把手が付き、沈線文で飾る。4～6は、4・6は口縁部を若干肥厚させ、5は屈曲部に刺突文、口唇部に沈線文を施す。7は波頂部の装飾で、上面に細かな刺突文がある。8・9は口縁部を肥厚させて口唇部に沈線を入れ、10・12は口



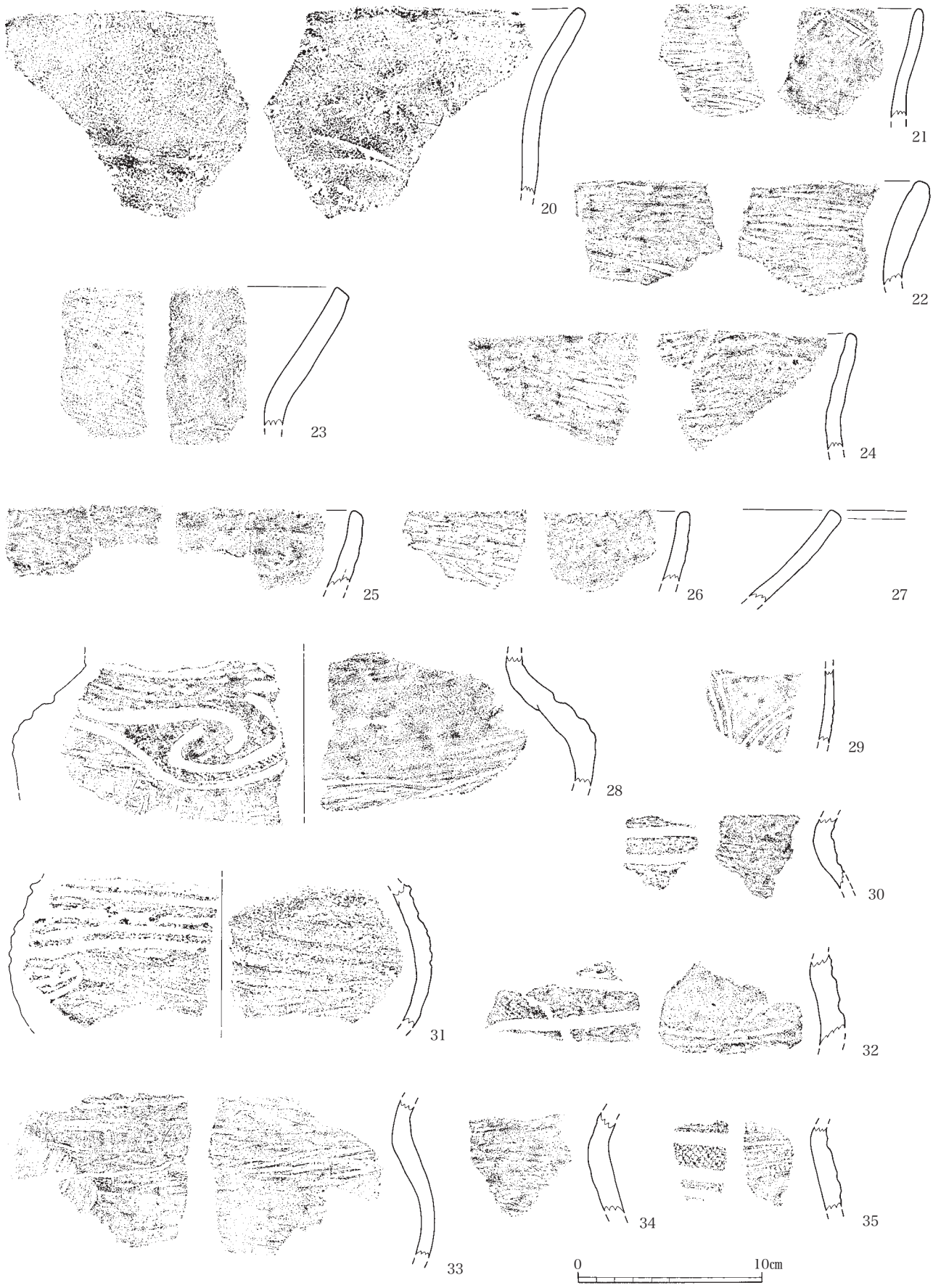
第20図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



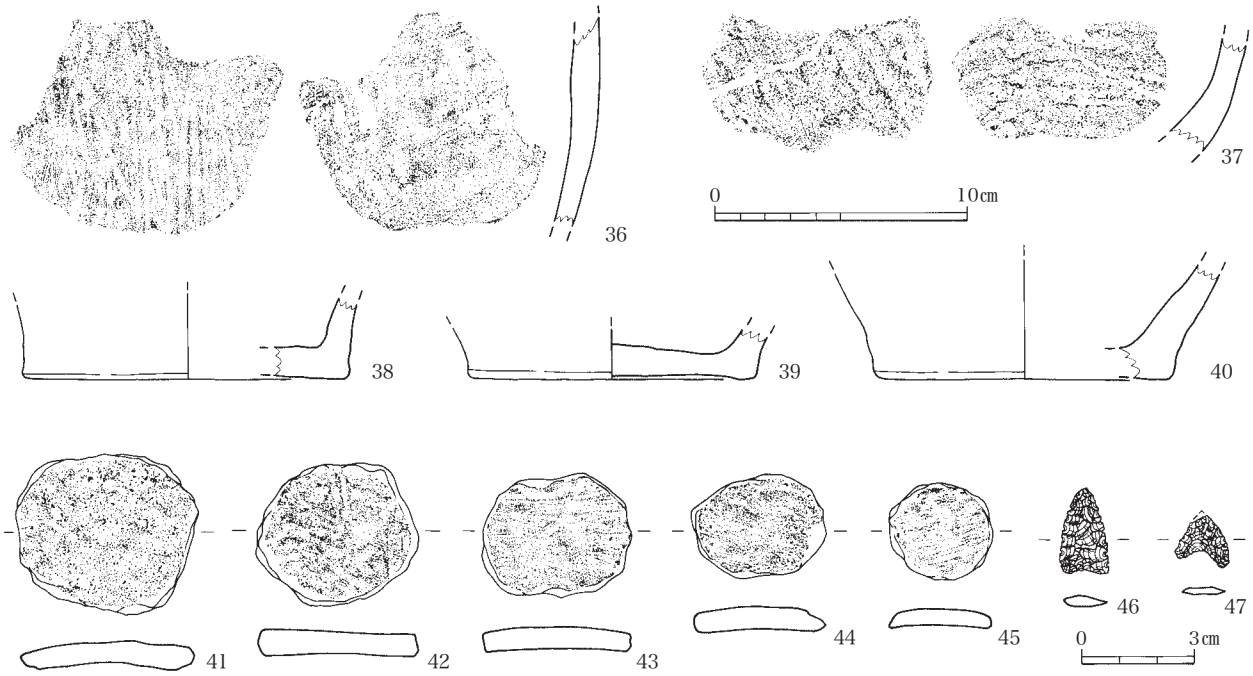
第21図　1・6・7号土坑実測図（1/60）



第22図　1号土坑出土遺物実測図①（1/3）



第23図　１号土坑出土遺物実測図②（1/3）



第24図　１号土坑出土遺物実測図③（46・47は1/2、他は1/3）

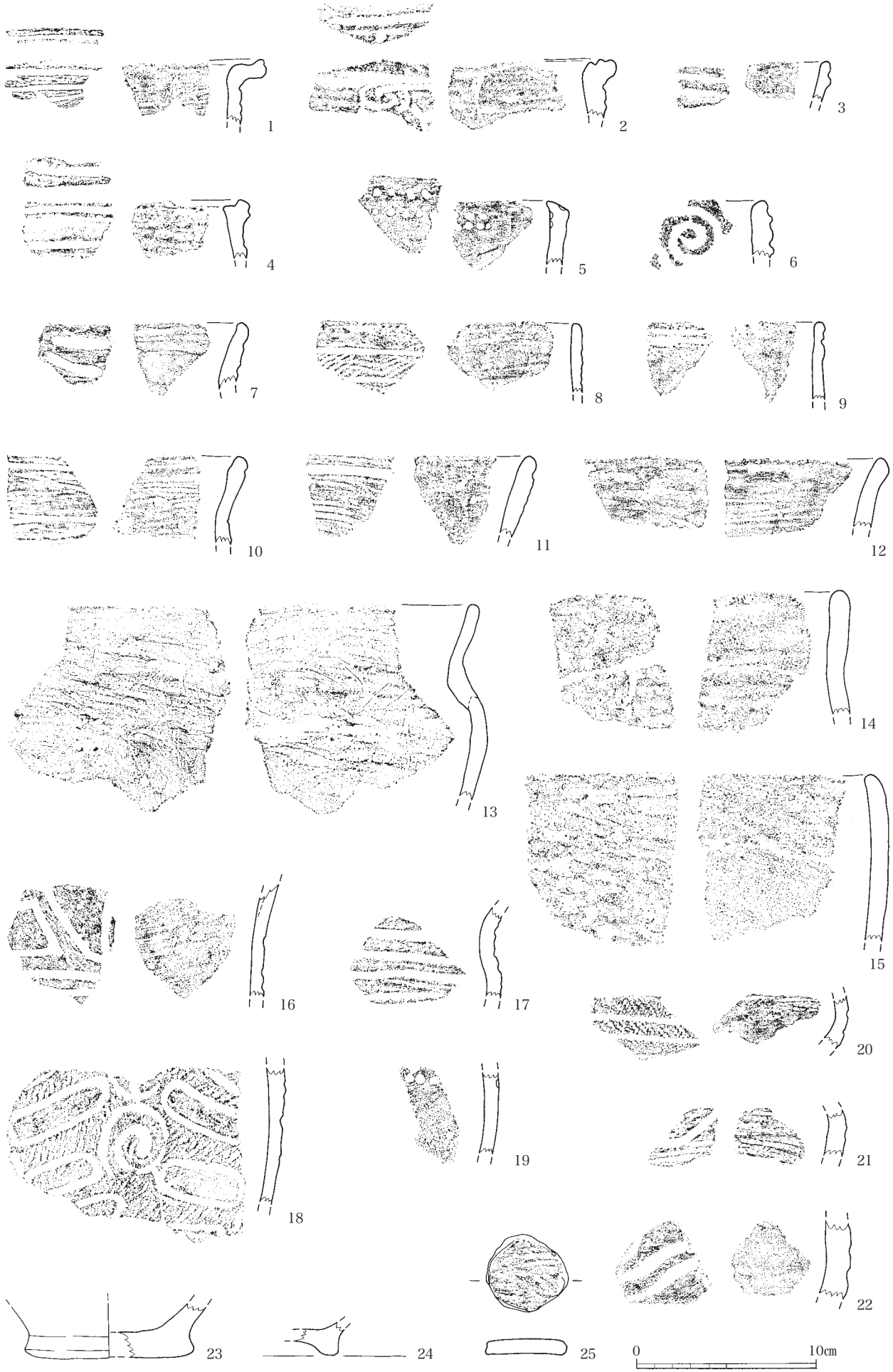
縁部外面に横方向の、11は縦方向の沈線文を施す。また、12は口唇部に斜め方向の、13は縦方向の刻目を入れる。14～27は無紋土器。14～17・19は波頂部で、19は内外面巻貝条痕、それ以外はナデ調整で仕上げるが、14内面には巻貝条痕の、17内面には二枚貝条痕の痕跡が残る。18は口縁部が短く開き、20～24は長く延びる。20は内外面ケズリのちナデ調整、その他は巻貝条痕で部分的にナデ調整で仕上げるものもある。25～27は口縁部がやや内径して立ち上がる。27は鉢形となろう。25・27は条痕のちナデ調整、26は内外面ナデ調整であるが、外面には工具の痕跡が明瞭に残る。28～37は胴部。29は福田KⅡ式で器壁が薄く胎土も精良、ミガキ調整で仕上げる。28～32・35は頸部から肩部に沈線で区画する文様を付し、28・35は磨消縄文となる。33・34・36・37は無文で、37の外面には指頭による粗いナデの痕跡が残る。38～40は底部で、3点とも平底である。39は外底部にも巻貝条痕が残る。41～45は土製円板で、無文の土器を使用する。周縁部の調整は明瞭ではなく、破片の可能性があるものもある。46・47は石鏃で、2点とも姫島産黒曜石製。ともに凹基式であるが、46はわたぐりがごく浅く、側縁部を鋸歯状にする。46は長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.8ｇ、47は長さ1.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4ｇ。

２号土坑（第10図）

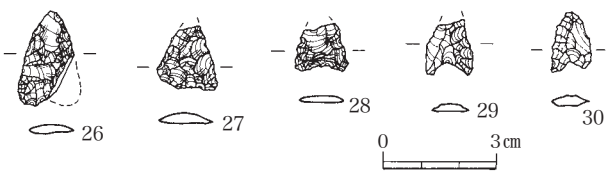
１号土坑の西側に近接する。6.5×5.5m、深さは北西の広い部分で0.4m程度の不整形の遺構である。形状から人為的なものとは思われないが、縄文土器が比較的多く出土した。

出土遺物（図版33、第25・26図）

1～11は有文の口縁部。1は短く屈曲して開き、口唇部と頸部に横方向の沈線文がみられる。2・4は口縁部外面を肥厚させ、上面にも沈線文を入れる。5は端部がシャープで、口縁部の内・外・上面の3方向から連続する刺突文を施す。3・6～11は口縁部外面に沈線文をもち、6は渦巻文、7は太めの沈線である。3・8・９は器壁が薄く、8に施文された縄文は無節。12～15は無文の口縁部か



第25図　２号土坑出土遺物実測図①（1/3）



第26図　２号土坑出土遺物実測図②（1/2）

ら胴部で、15は直立して口縁部が若干内湾する。13は内外面に工具によるナデの痕跡が残り、また14・15は外面に煤が付着し、器面の風化が激しい。16～21は頸部から胴部で、有文もの。太めの沈線文をもつもののうち、16・17・22は沈線間をナデ調整、21には二枚貝条痕が残る。18・21は沈線で区画した間に縄文を施すが、18は無節のもの。19には刺突文がみられる。23・24は底部で、23は平底、24は上底である。25は土製円板で、円形に近く、内外面巻貝条痕の土器を使用する。26～30は石鏃。26～29は姫島産黒曜石、30はサヌカイトで、27は平基式、その他は凹基式だが、26・28はわたぐりが浅い。30は剥片鏃で、片方の側縁部のみ鋸歯状に作る。５点とも一部を欠失するが、残存率の高い30で長さ1.6㎝、幅1.0㎝、厚さ0.2㎝、重さ0.3ｇ。

３号土坑（第10図）

１号土坑の南1.5mの位置にある。平面楕円形に近い不整形で、長軸長1.45m、短軸長0.7m、深さ0.6m。遺構の下半部は土中の礫が多く露出する状況であった。

出土遺物（図版33、第27図）

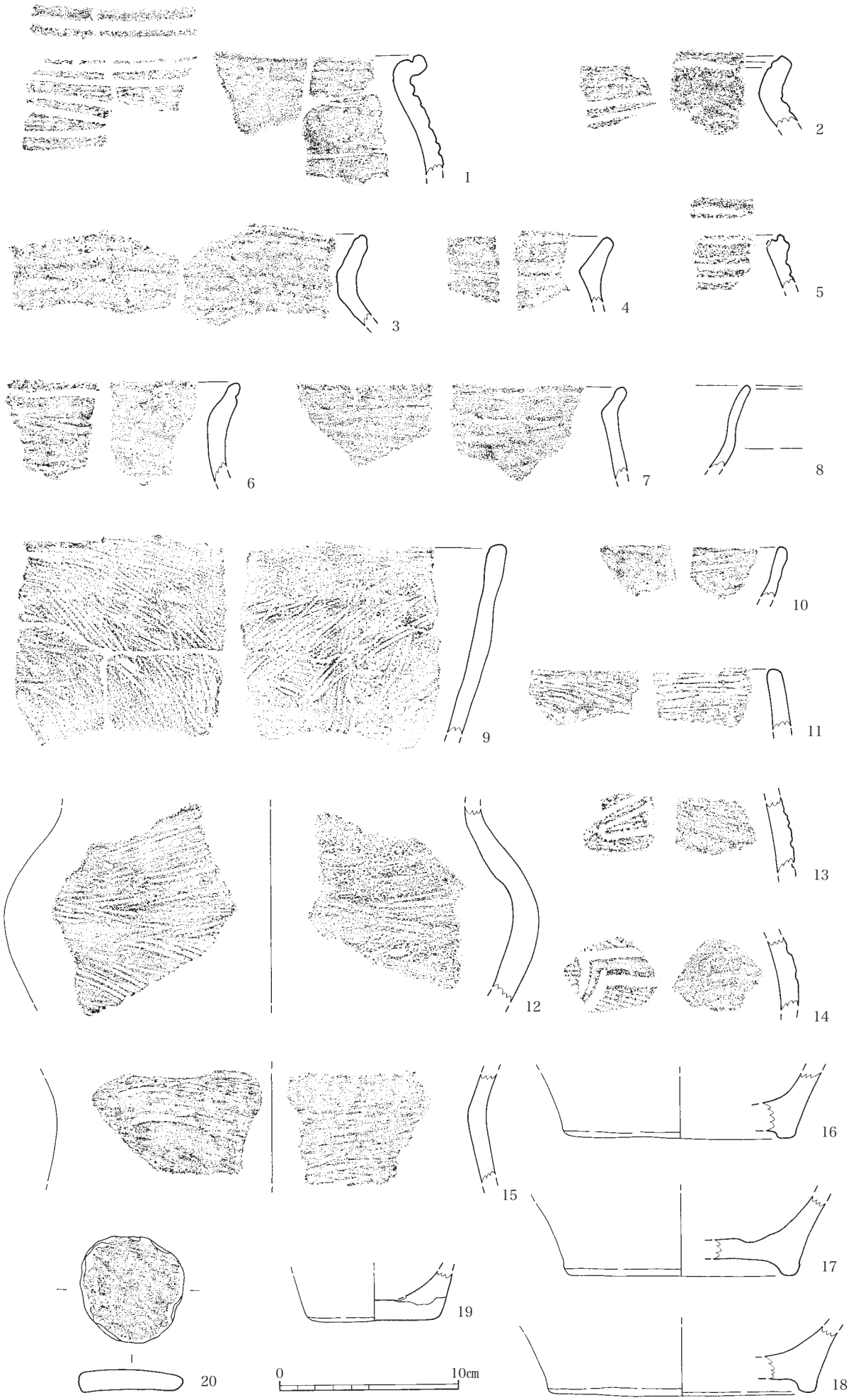
1・2・5・6は口縁部に沈線文をもつもので、1・2は短く屈曲して開き、5は端部を肥厚させて口縁部上面にも沈線がめぐる。8は器壁が薄く鉢形となろう。1～8・10は内外面ナデ調整だが、6は内面ケズリのちナデ調整である。9・11は直線的に立ち上がる器形で、内外面とも巻貝条痕で仕上げ、9の内面には煤が付着する。12～15は頸部から胴部で、12・15は無文、13・14は有文となり、無文のものは二枚貝条痕、有文のものはナデ調整である。16～19は底部で、16～18は高台状の上底、19は平底である。19は底部と体部の境の接合面が剝離しており、連続する指頭痕が明瞭に残っている。20は土製円板で、円形に近い。

４号土坑（第10図）

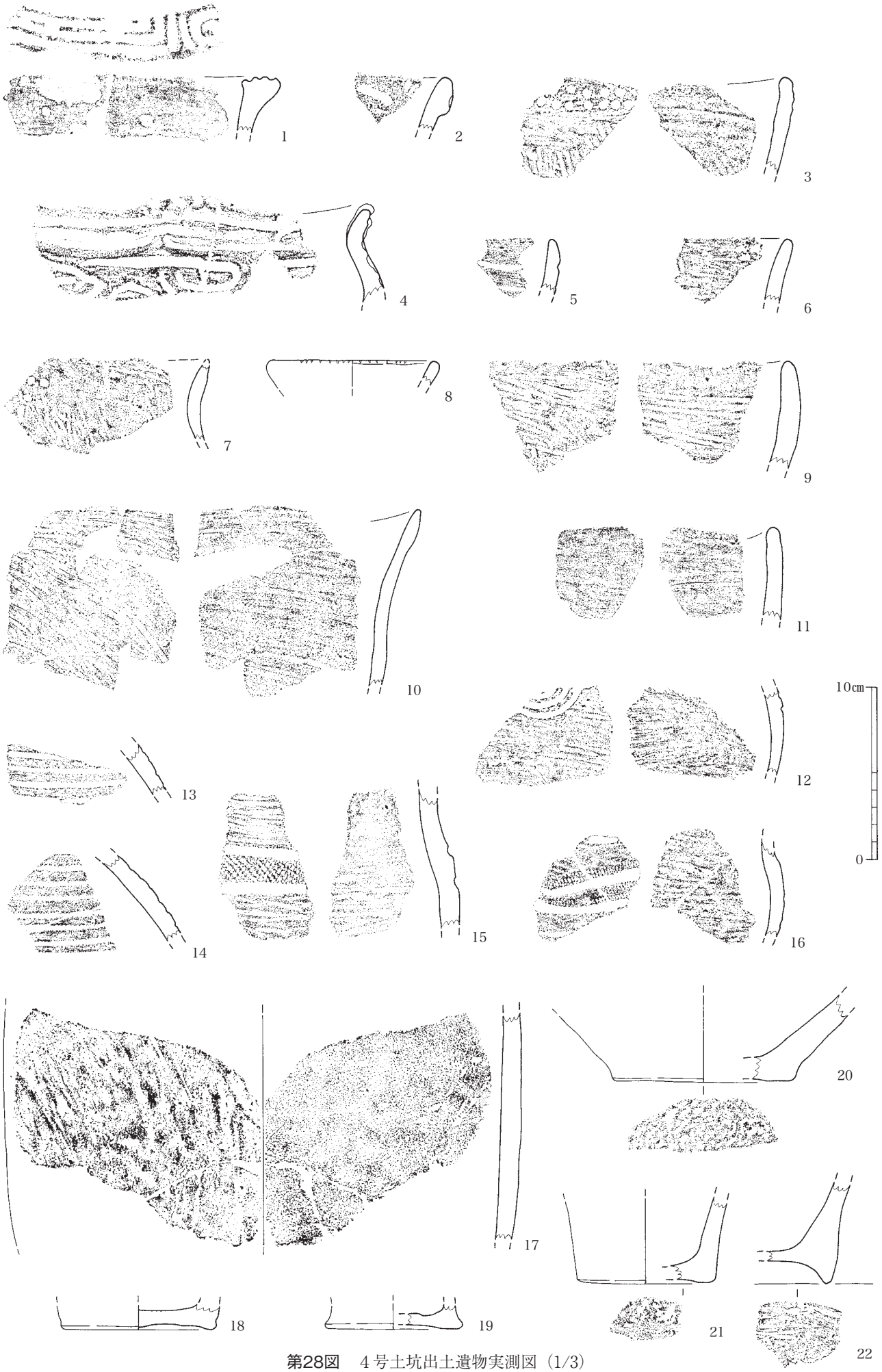
調査区中央部付近で検出した。13×6m程の範囲に広がる不整形で、深さは0.1～0.2mのごく浅い部分が多いが、0.5～0.7mの箇所もある。土坑というより、あるいは不整溝と呼ぶべき複雑な形状で、人工的な遺構とは思えない。

出土遺物（図版33・34、第28図）

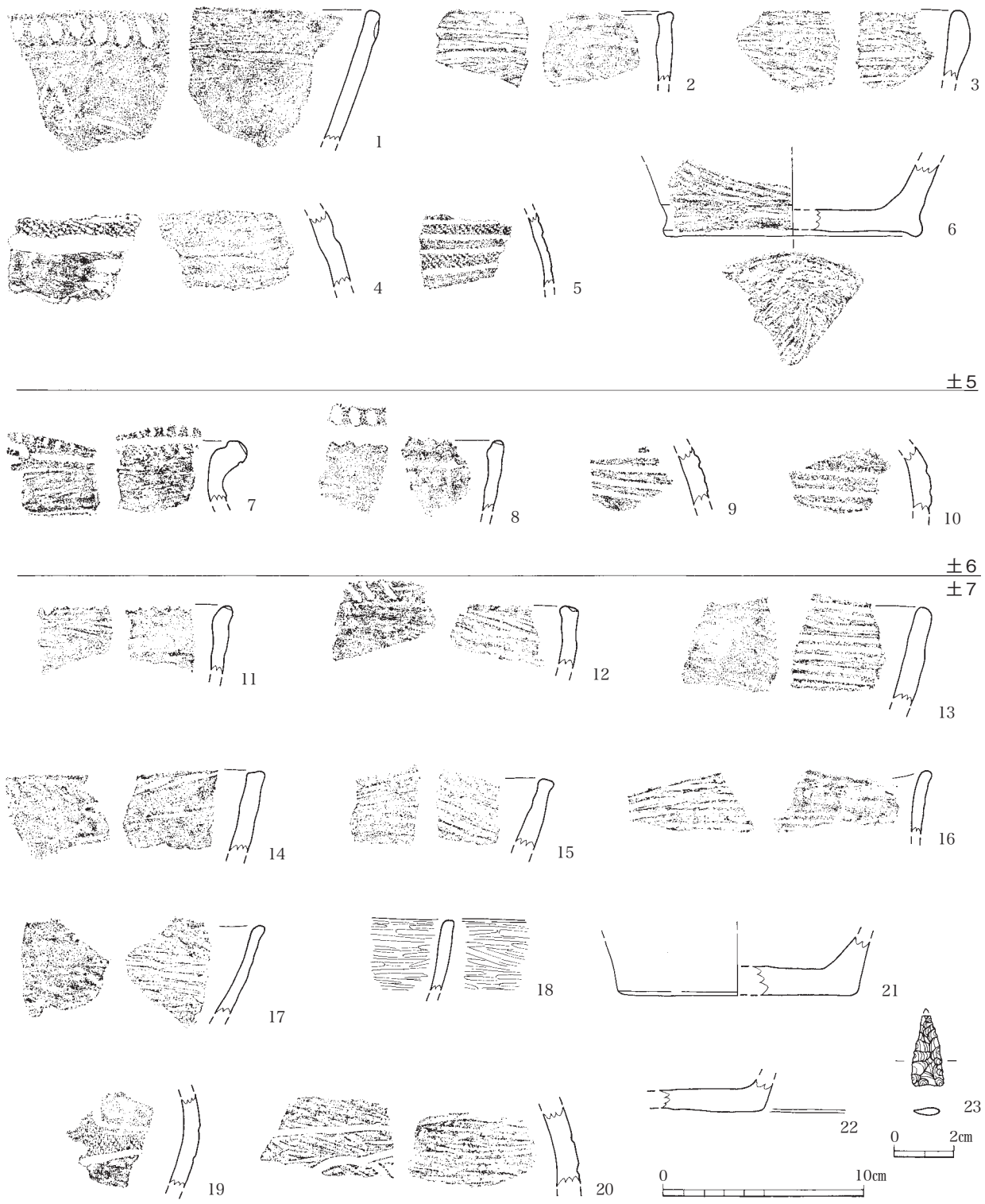
1～8は有文の口縁部。1は小池原下層式で他よりやや古く、肥厚させた口縁部上面に沈線文を施す。3は内面ナデ調整、外面は工具によるナデ調整で、口縁部には円形工具による刺突文が並ぶ。4は口縁部が短く開き、外面は太い沈線文と刺突文、波頂部には刻目、内面はミガキ調整である。2・5は沈線文、6は細い工具による刻みと刺突文、7は刺突文と縦方向の沈線が確認できる。7は外面条痕のちナデ調整、内面ケズリのちナデ調整。8は小型の器形で、口唇部に鋭利な工具による刻目がある。9～11は無文の口縁部で、9・10は巻貝条痕、11はナデ調整で仕上げ、3点とも外面に煤が付着する。12～16は沈線文のある胴部で、15・16は区画内に縄文が認められる。12・15は巻貝条痕が残り、それ以外はナデ調整。17は無文の胴部で、外面は条痕のちナデ調整であるが、器面の凹凸が目立つ。18～22



第27図　３号土坑出土遺物実測図（1/3）



第28図　４号土坑出土遺物実測図（1/3）



第29図　５～７号土坑出土遺物実測図（23は1/2、他は1/3）

は底部で、ほぼ平底のものから大きく上底のものまである。20は外底部に網代圧痕が認められ、21も同様であろうか。22は高台状の上底で、高台部の内側はケズリ調整で仕上げる。

５号土坑（第10図）

南西側の一部を攪乱によって切られるが、6×4mの範囲に広がり、深さ0.15～0.4mの不整形の遺構で、複雑な形状から人工的なものではないと思われる。

出土遺物（図版34、第29図）

1は口縁部をやや肥厚させ、巴形・円形の列点が並ぶ。外面ナデ調整、内面上位は巻貝条痕が残る。2・3は無文のもので、2は外面巻貝条痕、内面ナデ調整、3は内外面巻貝条痕。4・5は磨消縄文で、4は沈線が太く縄文は無節となる。6はやや上底の底部で、外面は底まで巻貝条痕で調整する。

６号土坑（図版19、第21図）

調査区の南東部、礫層との境付近で検出した。遺構の南側の一部を7号土坑に切られ、平面形は不整楕円形で、長軸長1.8m、短軸長は残存部で1.2m程度。深さは最深部で0.7m程で、底部は大きく３段に分かれており、東側が高く中央部が低い。

出土遺物（図版34、第29図）

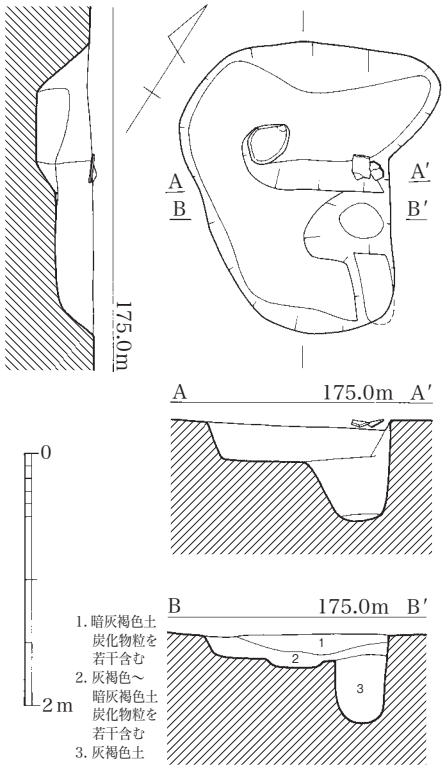
7・8は口縁部。7は波頂部付近で沈線と刻目で、8は口唇部に等間隔の刻目を入れて装飾する。9・10は胴部で、横方向の沈線文が確認できる。4点ともナデ調整で仕上げる。

７号土坑（図版19、第21図）

6号土坑の南に接し、6号土坑を切る。平面形は円形に近い不整形で、径3.6～4.2m、底部は大きな部分は水平に近く、深さ0.3m程度。埋土は黒褐色土のほぼ一層であった。

出土遺物（図版34、第29図）

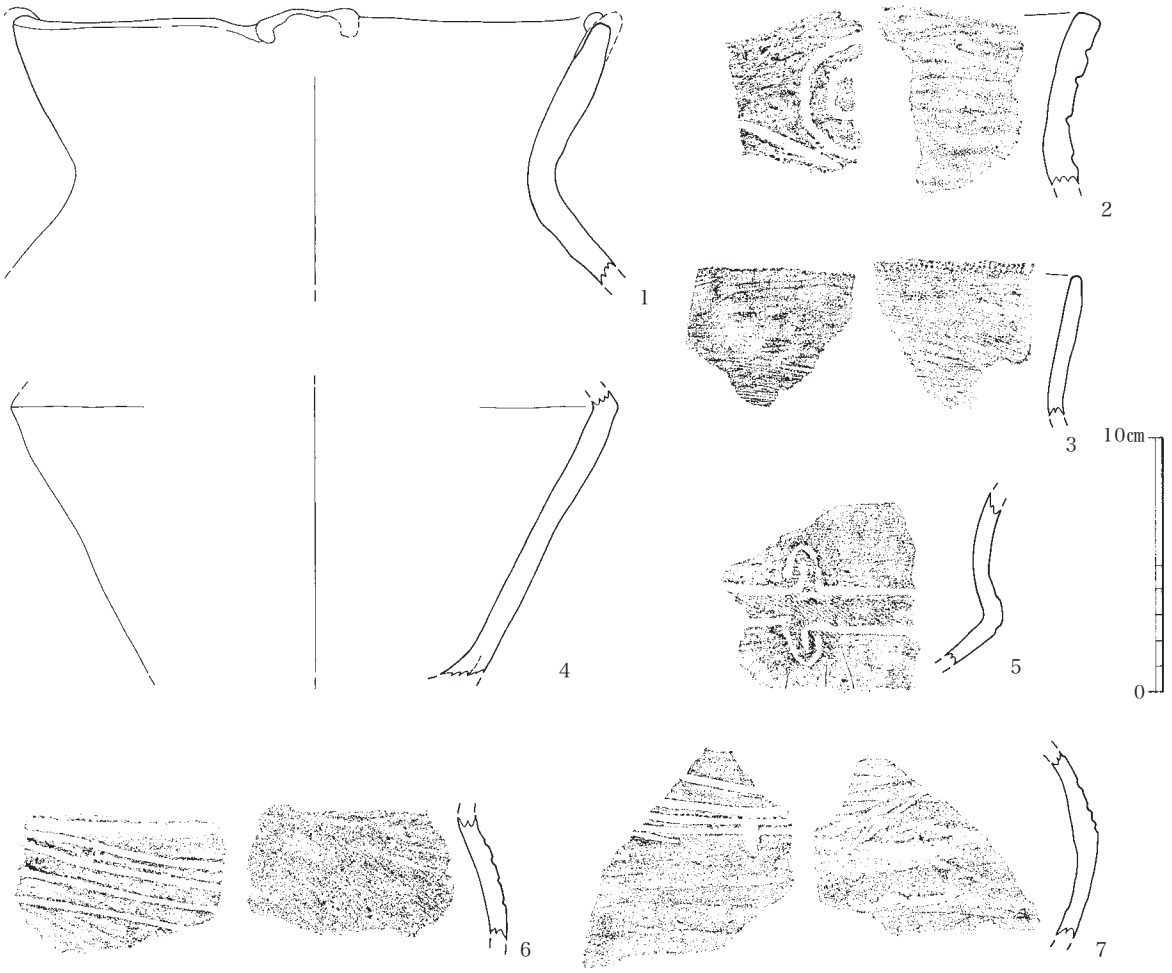
11～18は口縁部。11は口唇部に等間隔の、12は斜め方向の刻目を入れる。12・15～17は巻貝条痕・ナデ調整、13の内面は二枚貝条痕で調整する。16～18は器壁が薄く、18は内外面ミガキ調整で仕上げる。19・20は胴部で、19は磨消縄文、20は巻貝条痕の器壁に沈線文を入れる。21・22は底部で平底である。23は石鏃で、姫島産黒曜石。先端部を欠き、細長い形状で、基部はわずかに凹む。残存長2.3cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.7ｇ。



第30図　８号土坑実測図（1/60）

８号土坑（図版19・20、第31図）

下層調査区の南側にある。平面形は逆台形に近い不整形で、長さ2.3m、幅2.1m。底面は緩やかな段を持って北西側が低く、深さ0.3～0.4m。南東部は深く掘り込ま



第31図　８号土坑出土遺物実測図（1/3）

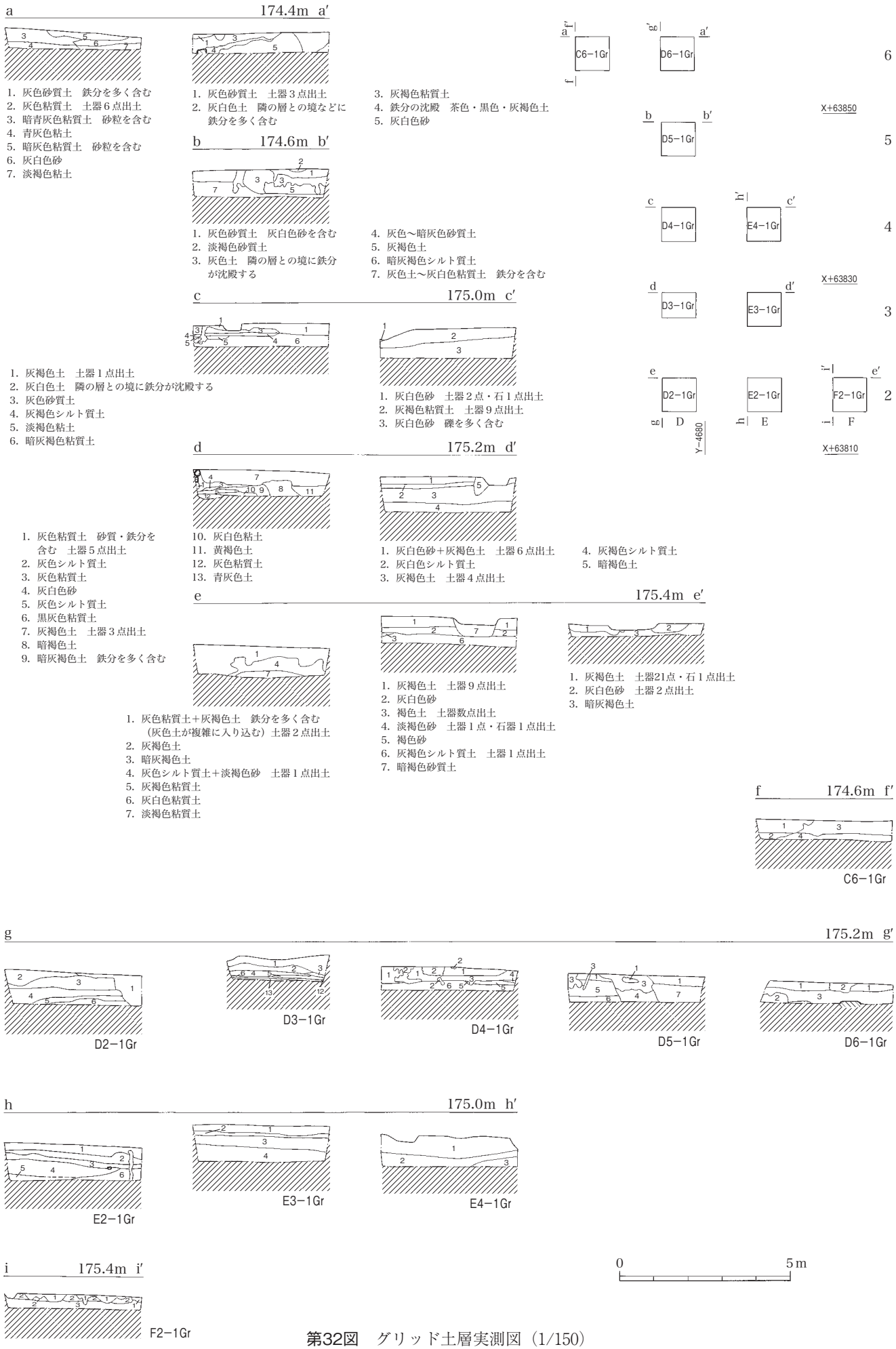
れる。

出土遺物（図版34、第31図）

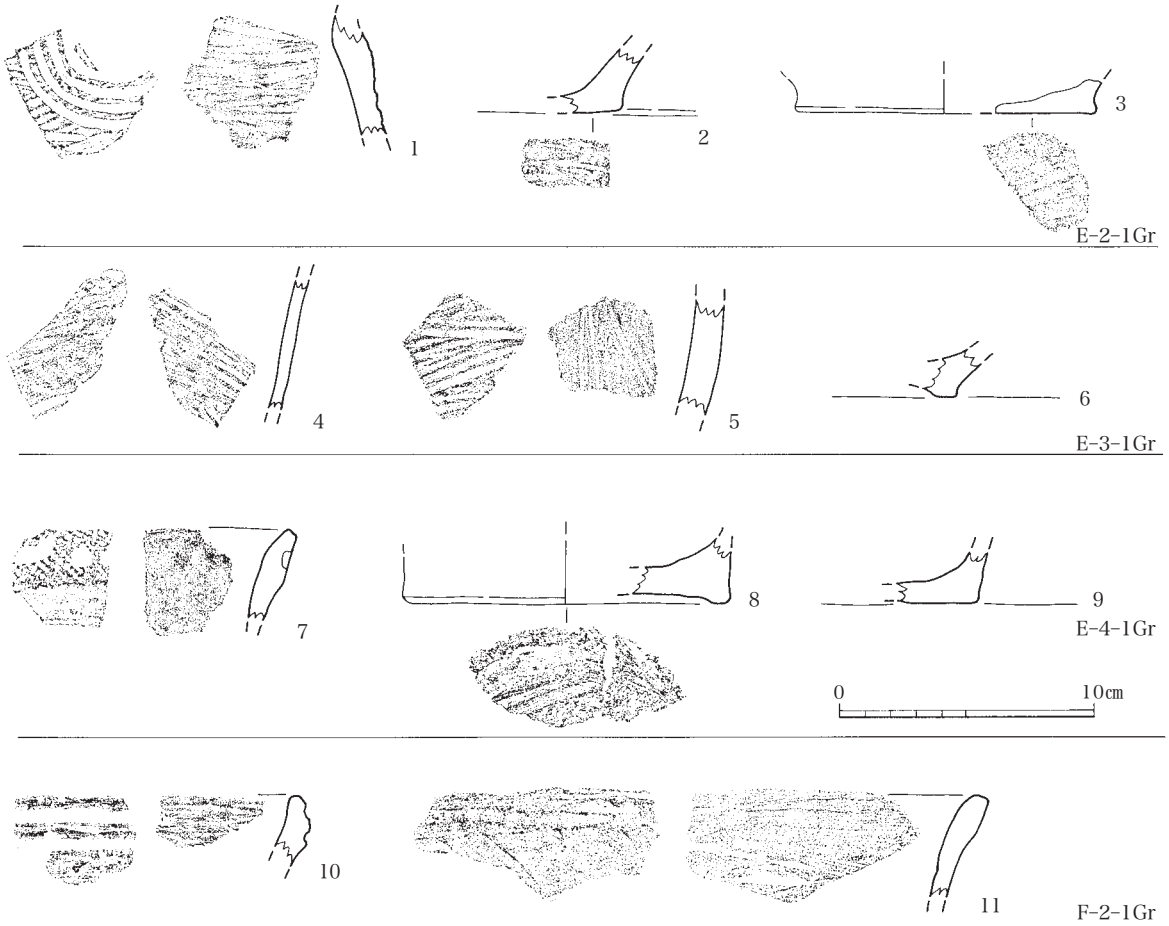
1は波頂部に粘土紐を貼付して装飾し、外面には剝離した部分が多く、胴部外面と口縁部内面には煤が付着する。復元口径24.0㎝。2・3は口縁部で、2は深い沈線で文様を描き、3は薄手で口唇部に縄文を施す。4は肩部で稜を持って屈曲し、肩部上面にはわずかに縄文が認められる。外面はミガキに近いナデ調整、内面二枚貝条痕のちナデ調整。5は肩の屈曲部を沈線で区画し、内側を縄文で飾り、内外面は丁寧なナデ調整。6・7は肩部上位に4～5条の沈線を巡らし、6の内面にはケズリ調整が認められる。

包含層調査（図版20～27、第11・32図）

下層遺構面の調査終了後に、４×４ｍ９箇所、４×３ｍ１箇所の、計10箇所にグリッドを設定して、さらに下層の遺物包含状況を確認した。各グリッドは状況に応じて0.4～1.2m掘り下げたが、調査地点が祓川の氾濫原であることから、各土層の堆積状況は一様ではなく、グリッドごとに若干異なる様相を呈している。下層の遺構面で観察できるのは灰褐色土と灰白色砂が主体であったが、グリッド掘削時にも比較的上層の両層からの遺物の出土がほとんどであった。合計80数点の縄文土器破片と黒曜石剥片が出土した。



第32図　グリッド土層実測図（1/150）



第33図　グリッド出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版34・35、第33図）

Ｅ２－１Ｇｒ

３点とも最上層の灰褐色土層から出土した。1は頸部下に同心円弧文を描き、内外面巻貝条痕。2・3は底部で平底となり、3の底面には条痕が残る。

Ｅ３－１Ｇｒ

４・６は最上層から、５は灰褐色土層から出土した。4は器壁が薄く、外面条痕のちナデ調整、内面二枚貝条痕調整。5は厚手で、内外面巻貝条痕調整。6は底部で、やや上底となるものか。

Ｅ４－１Ｇｒ

７・８は灰褐色粘質土層から、９は最上層から出土した。7は口縁部外面のわずかに肥厚させた部分に縄文を施し、さらに刺突文と沈線文を入れる。8・9は底部で、8は上底、9は平底となり、8の底面には条痕がある。

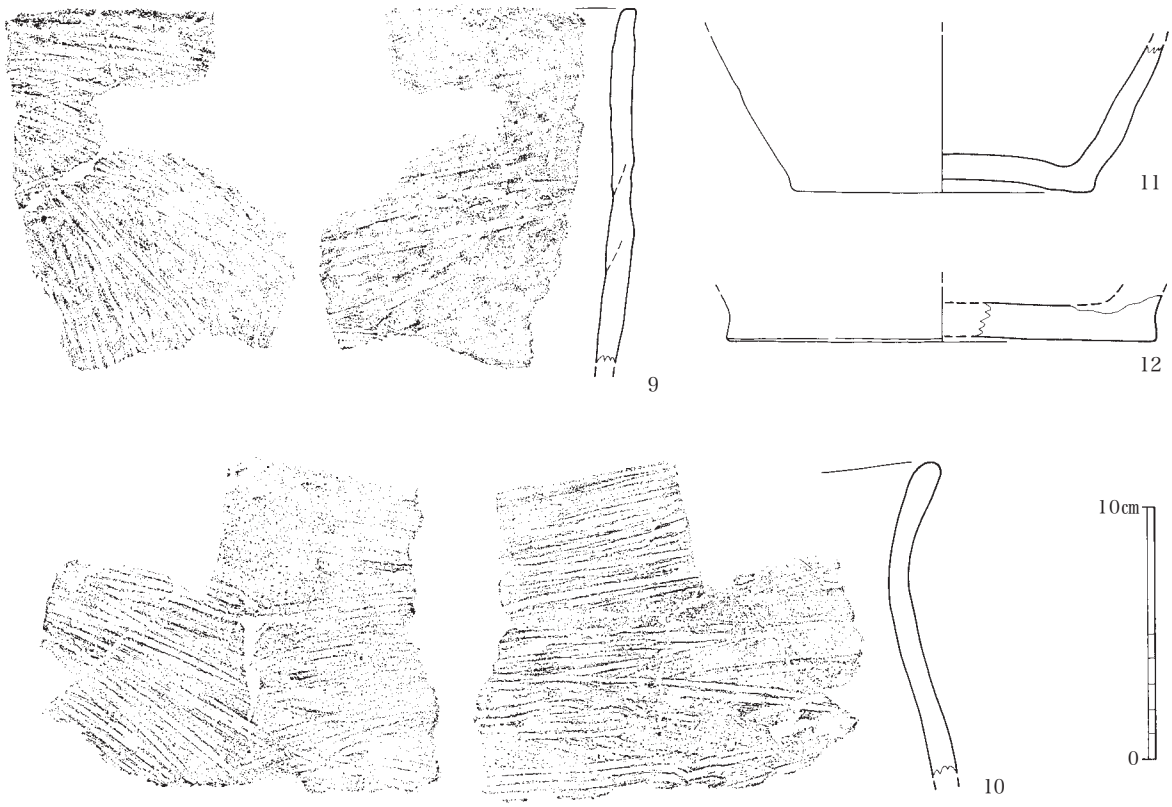
Ｆ２－１Ｇｒ

10は灰褐色土層から、11は灰白色砂層から出土した。10は口縁部外面に2条の沈線が巡る。11は内外面ケズリ調整。12は外面巻貝条痕、内面は粗いナデ調整。

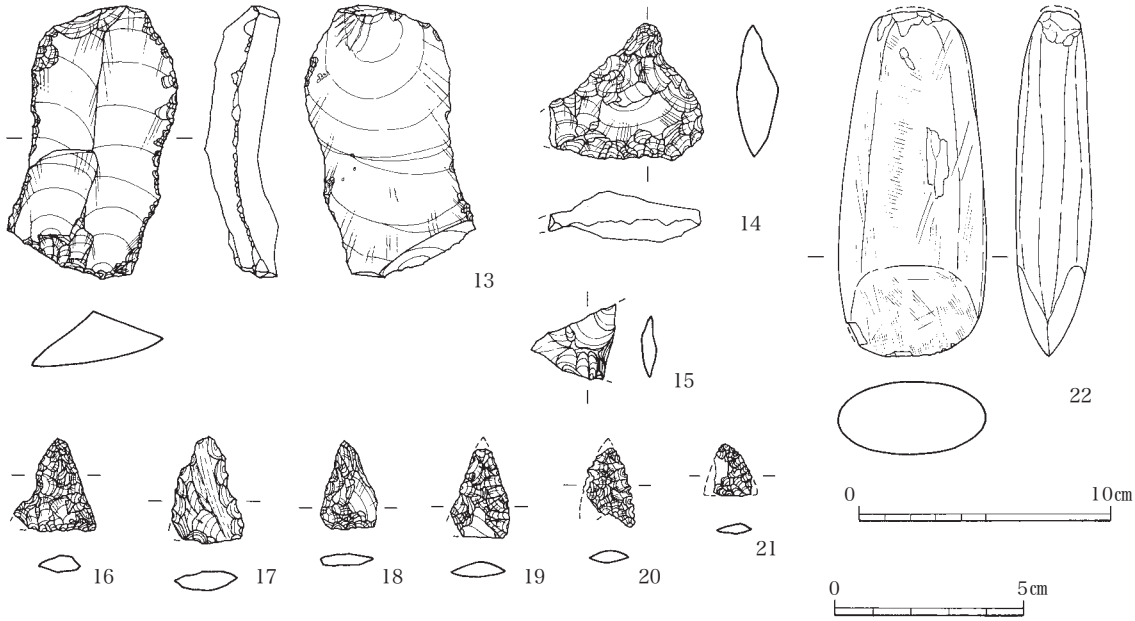
その他出土の旧石器・縄文時代遺物（図版35、第34～36図）

１～12は縄文土器である。１は口縁部が内湾する鉢形であろう。外面は磨消し縄文、内面は横

第34図　その他出土の縄文時代遺物①（1/3）



第35図　その他出土の縄文時代遺物②（1/3）



第36図　その他出土の縄文時代遺物③（22は1/3、他は1/2）

方向のケズリ調整のち丁寧なナデ調整で仕上げる。２・３は頸部から肩部にかけて平行する沈線が横走し、２は口縁部内側、３は口唇部にも１条の沈線がめぐる。４は器壁が薄く、口縁部外面に３条の横方向の沈線が確認できる。内外面は丁寧なナデ調整あるいはミガキ調整であろうか。５は５号土坑出土の１と同一個体の可能性が高く、口縁部外面に巴形の列点を配置するのは同様であるが、途中で巴文の向きが逆になる。また、口縁部下には穿孔が認められる。６は口縁部上面に凹線をめぐらせ、波頂部に沈線文を入れる。７は波頂部の内外面のみに沈線文がみられる。８は内面二枚貝条痕、外面丁寧なナデ調整で、頸部から胴部にかけて沈線文で装飾する。９は直線的に立ち上がり口縁部でわずかに外反する。内外面は粗い巻貝条痕で調整する。10も内外面巻貝条痕で仕上げるが、方向を揃えて丁寧に施す。11・12は底部で、11はやや上底、12は平底になる。11は底径12.0㎝、12は復元底径17.0㎝。

13～22は石器である。13は調査区北西隅の１号溝から出土した。旧石器時代のスクレーパーで、珪質岩製。縦長剥片を素材として先端部と側縁部に刃部加工をしている。長さ7.2㎝、幅4.5㎝、厚さ2.0㎝、重さ37.4ｇ。14は石匙で、姫島産黒曜石製。厚みがあり、先端部を欠く。15は姫島産黒曜石の先端部破片であるが、形状から石匙である可能性が高い。16～21は石鏃で、20が凹基式である以外は平基式である。20は側縁部を鋸歯状に作る。16～20は姫島産黒曜石、21の黒曜石は黒色で部分的に半透明となっている。完形の18で長さ2.3㎝、幅1.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.0ｇ。22は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部と刃部の一部を欠失する。刃部には使用による刃こぼれの痕跡が残る。残存長13.7㎝、幅5.8㎝、厚さ2.9㎝、重さ415ｇ。

３）中世の遺構と遺物

上層遺構面では、中央部分が黄灰色土で、東側は徐々に礫層化していき、逆に西側は青灰色化している状況であった。中世の遺構は、ほぼこの黄灰色土部分を切り込んで作られていることが確認できた。

土壙墓

上層の遺構面を重機で掘り下げて下層の遺構面を検出する作業途中で１号土壙墓を発見した。上層の遺構面から約20㎝低く、下層の遺構面からは約30㎝高い位置にあたる。上層の遺構面を切り込んで11号土坑を掘削しており、位置的に一部重複しているが、そこでは１号土壙墓は検出し得ていない。河川の氾濫原である当調査地点では複雑な土層の堆積状況が確認できており、少なくともこの位置については、上層と下層の遺構面の中間にさらに１層の遺構面が存在したものと考えられる。

１号土壙墓（図版27・28、第37図）

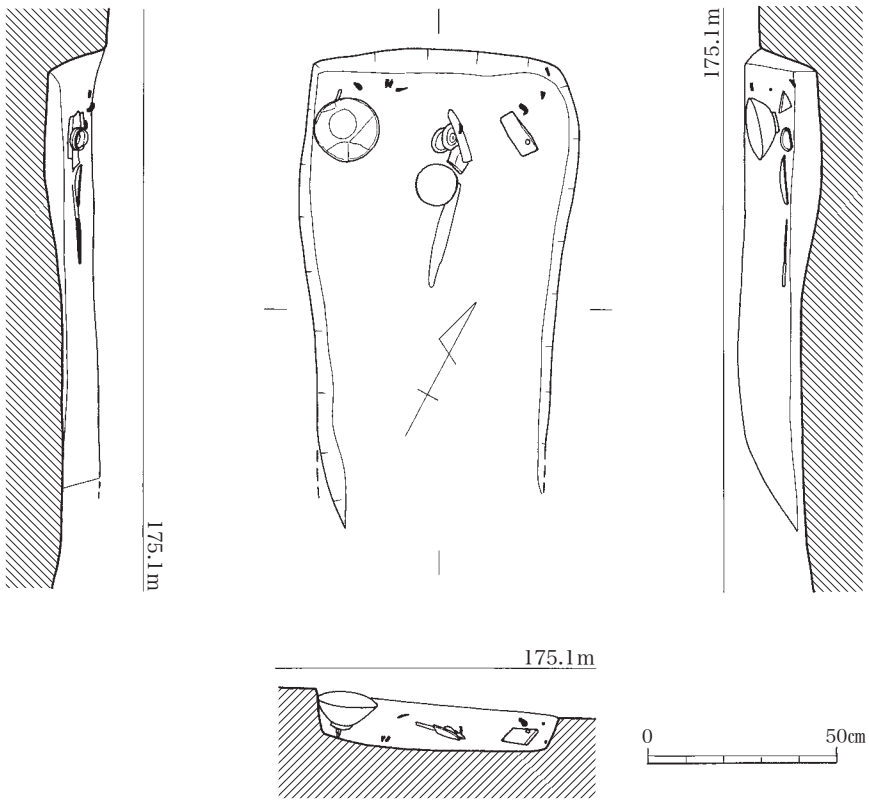
調査区南側にあり、重機での掘削作業途中で発見したため、遺構の南側の一部を失っている。残存部分から判断して、北西側の幅が広い長台形の平面形で、遺構の北西側から豊富な遺物が出土していることからも、こちらが頭位であろう。長軸長125㎝＋α、幅は北西側72㎝、南東側60㎝で、主軸はＮ－28°－Ｗ。底面は水平に近いが、頭部側が5㎝程低くなり、深さ15～20㎝。遺構の北西側60㎝程の範囲から銅鏡、銅製品、鉄刀、鉄鋌、輸入陶磁器、滑石製品などが出土してい

る。北西隅部付近にある青磁椀は、さらに上方に白磁椀、青磁皿が重なった状態で発見されたという（図版27－3）。また、遺構の北、北西の隅部付近から数点の鉄釘が出土していることから、木棺または木箱が存在した可能性があるが、土層観察の結果では埋土は暗灰褐色土１層であり、木棺等の痕跡は確認できなかった（図版28－3）。

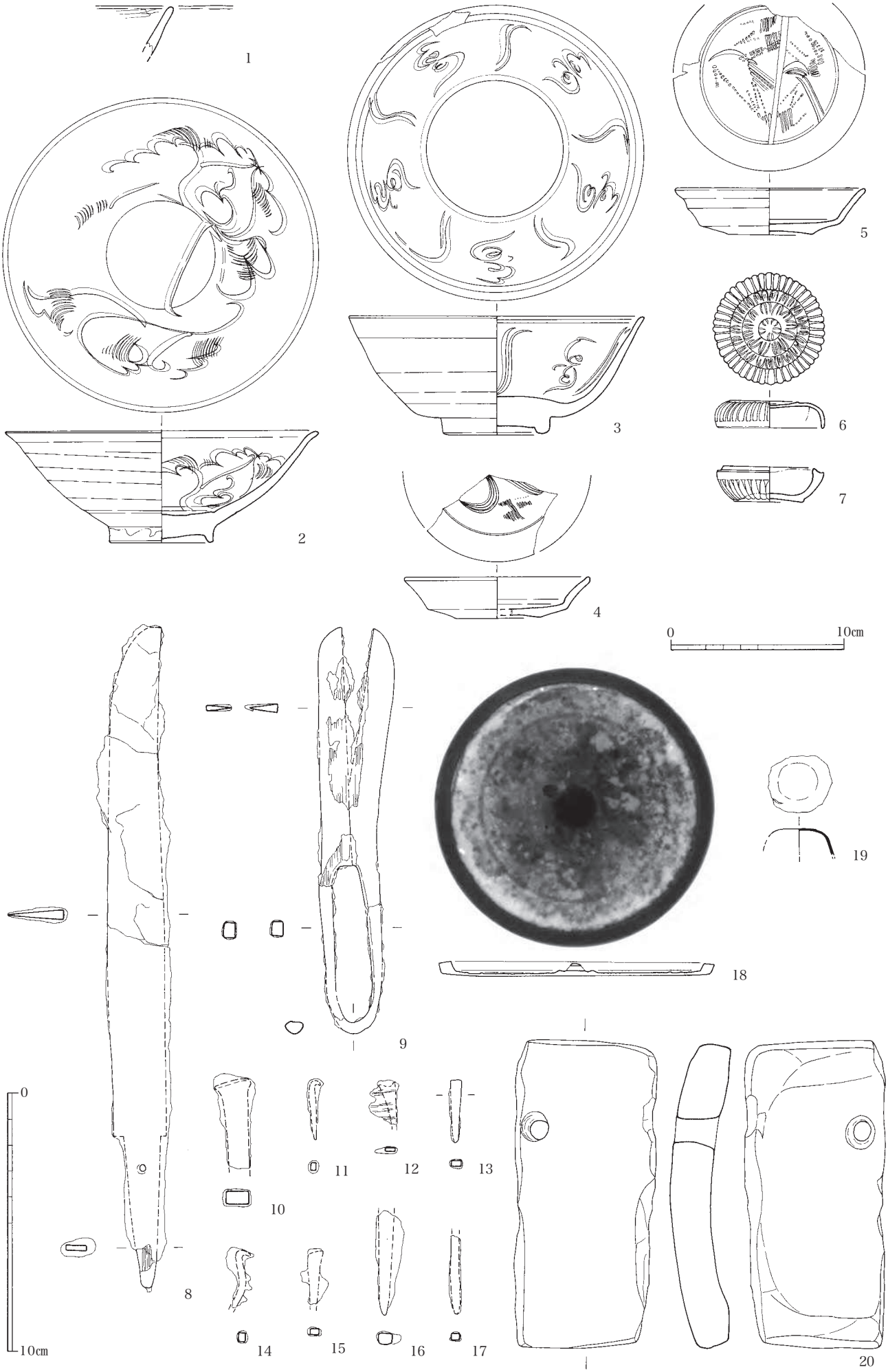
出土遺物（図版36・37、第38図）

１は瓦器椀の口縁部で、ほぼ直線的に広がる。胎土は精良だが砂粒を若干含み、全体は灰白色を呈し、口縁部内外面のみ重ね焼きのために灰色～暗灰色化している。口唇部内面にミガキ調整が認められる以外は不明瞭。

２～７は輸入陶磁器である。２は白磁椀で、口唇部の数箇所を小さく欠く以外は完形であったのが重機での検出時に割れたもの。体部はわずかに内湾して開き、口縁部は薄く外反する。外面は口縁部付近まで回転ヘラケズリを行う。内面には片切彫と櫛描きで草花文を描く。胎土には黒色粒を若干含み、灰色で露胎部分は淡灰褐色を呈する。釉は灰色に発色し、体部と高台の境あたりまでかかり、高台に垂れたものを畳付部以内は削り出す。口縁部内外面には釉垂れした箇所があり、またピンホール状の気泡が処々に認められる。口径18.0cm、高台径6.1cm、器高6.5cm。３は龍泉窯系の青磁椀で、２と同様に完形であったものが重機での掘削作業時に割れ、一部はその際に失われた。体部は下位で湾曲して上半部は直線的に開き、口縁部はシャープに仕上げ、体部外面の回転ヘラケズリは口縁部下まで行う。高台は幅が広く、内部の削り出しが浅いため底部が厚くなる。内面に片切彫で劃花文を描く。胎土は灰色で精良である。釉は灰緑色の半透明で高台外面までかかる。口径16.9cm、高台径6.2cm、器高6.9cm。４は龍泉窯系の青磁皿で、体部の下位で屈曲して上位は外反して開き、内面体部と見込部の境に段を有する。体部外面は口縁部まで回転ヘ



第37図　１号土壙墓実測図（1/20）



第38図　１号土壙墓出土遺物実測図（1/3、1/2）

ラケズリ、内面はヨコナデ調整。胎土は灰色で微細な気泡が入る。釉は灰緑色の半透明で全体にかけた後、底部外面はカキ取っており、内外面にはピンホール状の気泡が認められる。内面の見込部に櫛状工具による草花文を描く。復元口径10.8cm、復元底径4.9cm、器高2.4cm。５は同安窯系の青磁皿で、４とほぼ同形であるが、胎土が淡黄灰色のやや陶器質で、釉が若干黄色味がかり、全面に貫入が入る。見込部にはヘラ状工具による草文と櫛状工具による点描文を有する。口径11.0cm、底径4.8cm、器高2.7cm。６・７は青白磁の合子の完形品で、菊花形に型作りするものである。６は蓋で、天井部中央がやや凹む。胎土は白色精良だが、黒色粒を若干含む。釉は青白色半透明で、全面に施釉のあと内面は天井部を残してカキ取っている。口径6.3cm、器高1.6cm。７は身で、胎土、釉は６と同様。外底部付近を残して全面施釉し、受部・立上がり部の蓋に接する部分はカキ取る。口径5.3cm、受部径6.2cm、器高2.2cm。２点合わせた器高は3.4cmである。

８は短刀で平造りである。鉄錆のため不明瞭な部分も多いが、全長25.5cm、刃長19.6cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmで、わずかに0.2cm程の反りがある。茎の区寄りの部分に目釘孔が１箇所確認でき、また茎尻付近には木質が残存している。

９は鉄鋏。握り鋏で、刃は平造りで長い形状である。全長15.7cm、刃長9.2cm、刃幅はアゴ部で最大1.5cm、厚さ0.3cm。握り部は断面長方形で、腰部分のみ断面蒲鉾形となる。刃の一部に木質が付着している。

10～17は鉄釘で、10～13は遺構の北隅部から、14～17は北西隅部から比較的まとまって出土した。角錐状の釘の末端をＬ字形に曲げて頭部としている。10は大型のもので先端部を欠失し、残存長3.7cm、断面は長方形で中央部付近で0.9×0.5cm。16も比較的大型で、頭部を欠き、また一部木質が遺存する。残存長4.0cm、太さ0.5×0.5cm程度。11～15、17は小型のもので、12・14・15は先端部を欠き、17は頭部を欠く。13は現状は頭部を折り曲げない角錐形を呈するが、錆のため本来の形状であるかは明瞭でない。完存すると考えられる11が長さ2.5cm、幅0.3×0.2cm、13は長さ2.5cm、幅0.4×0.3cm。

18は銅鏡で、いわゆる和鏡である。灰緑色。紐は半球形で貧弱、紐座は花蕊座であろうか。周縁は外傾する厚縁で、鏡胎は１㎜以下で薄い。錆のため文様は判然としないが、レントゲン写真では内区・外区ともに円形に配置された花文をかろうじて確認できる。また、外区と周縁の境に径１㎜程の穿孔２箇所がある。径10.7cm、面径10.5cm、界圏径7.2cm、縁高0.5cm、縁幅0.5cm、78ｇ。

19は不明銅製品である。周縁部を欠くが、半球形で頂部はやや平坦となる。残存径2.4cm、残存高1.0cmで、厚さ0.6～0.9㎜。

20は滑石製石鍋を転用した短冊状の石製品である。長方形で、偏した位置に穿孔がある。上下の小口部は丁寧に磨き、側縁部は一辺はわずかに加工するが、穿孔側は未加工、内面も三方は周縁部を磨くが、穿孔側は未加工である。加工品を穿孔部付近で更に割ったものと思われる。側縁部と穿孔内面にまで煤が付着しており、温石として利用したものか。長さ11.5cm、幅5.3cm、厚さ1.7cm、247ｇ。

柵跡

調査区の南側で２列に並ぶ柱穴を検出した。２列の間隔は7.1～7.4ｍでほぼ平行しており、１

箇所を除いて左右の柱穴が対応していることから、当初は２棟程の掘立柱建物跡である可能性があるものと考え、遺構検出作業を重ねたが、梁行あるいは桁行の対応する側柱柱穴を検出し得なかった。建物跡である可能性は依然あるものの、ここでは柵跡として報告する。

１号柵跡（図版29、第39図）

２列の柵跡のうち東側のものである。柱穴を８箇所、７間、15.6m分検出したが、南側調査区外にさらに延びる可能性もある。柱列は南南東から北北西へと延び、Ｐ４の箇所で約８°西側に折れる。柱間は1.9～2.7mで、一定していない。柱穴は径0.4～0.5m程の円形または楕円形の平面形で、深さ0.5～0.6mが残存しており、また北西端にあたるＰ１の底部には礎板状の扁平な石が入る。

出土遺物（第41図）

Ｐ2とＰ4から瓦器椀が出土している。器壁は薄く、口縁部がわずかに外反し、内外面ミガキ調整で仕上げる。2の外面のミガキは粗く、下半部は指頭痕による凹凸がみられる。

２号柵跡（図版29、第39図）

２列の柵跡のうち西側のものである。柱穴を７箇所、６間、14.1m分検出し、１号柵跡と同様に南側調査区外にさらに延びる可能性もある。柱列は南南東から北北西へと延び、Ｐ12からＰ11のあたりで緩やかに西側に折れる。１・２号柵跡の柱穴はほぼ対応するが、Ｐ４に対応する柱穴が２号柵跡では確認できず、このため柱間は1.7～3.0mと差が大きい。柱穴は径0.4～0.6mの平面円形または楕円形で、深さ0.3～0.8m、北北西端のＰ９がやや浅い。

出土遺物（図版37、第41図）

6箇所の柱穴から出土した遺物を図示したが、いずれも小片である。3・4・6・7・9は土師器坏の口縁部で、3・7は器壁がやや厚く口縁部下にわずかな稜をもち、4・6・9は薄い。5は糸切痕の残る底部。10は土師器皿で、口縁部下にわずかな稜をもつ。8は輸入陶磁器の染付椀で、胎土が陶質に近く、東南アジア産の可能性もある。11は備前系の甕であろう。内外面ナデ調整。

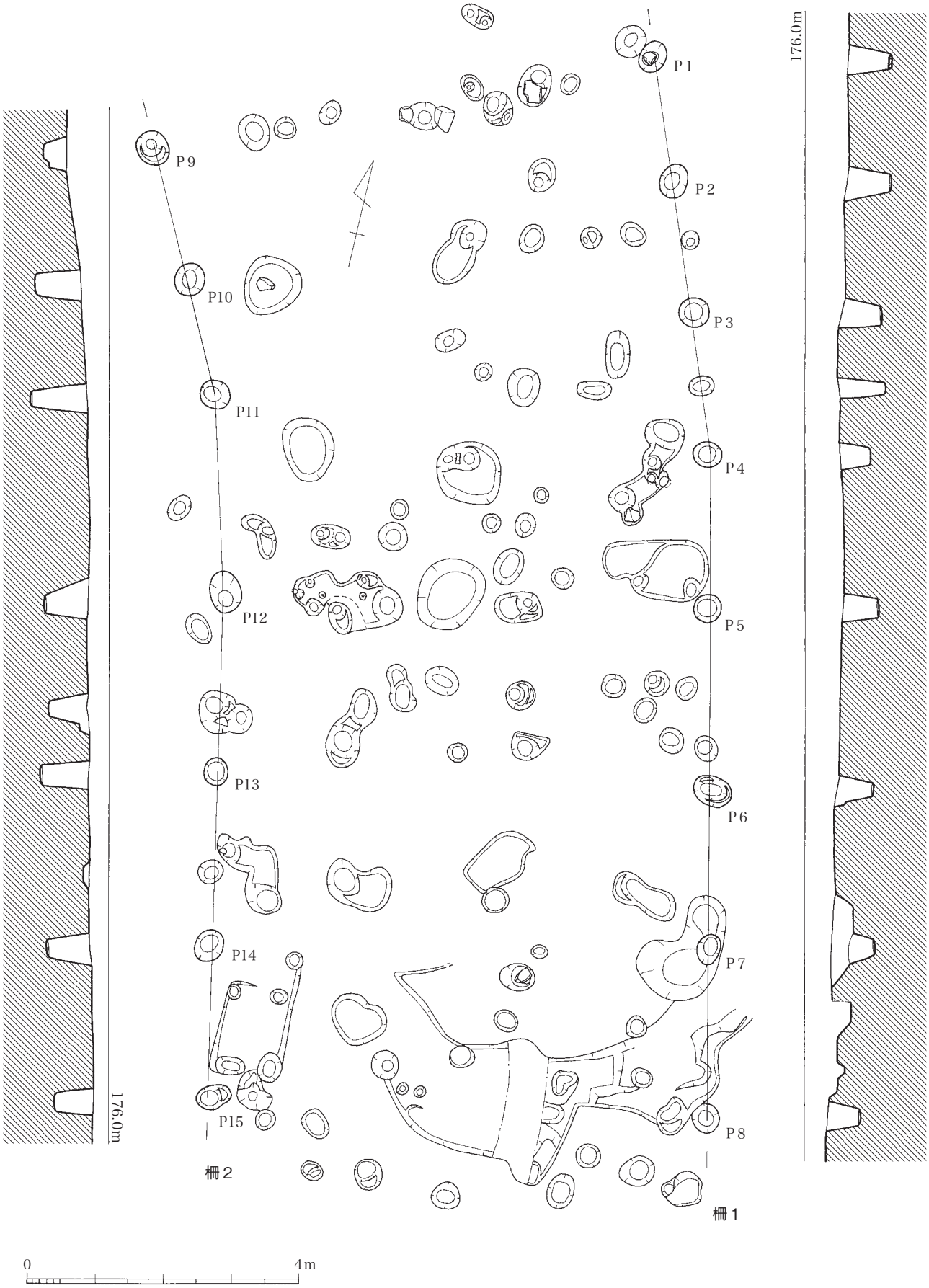
掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版29、第40図）

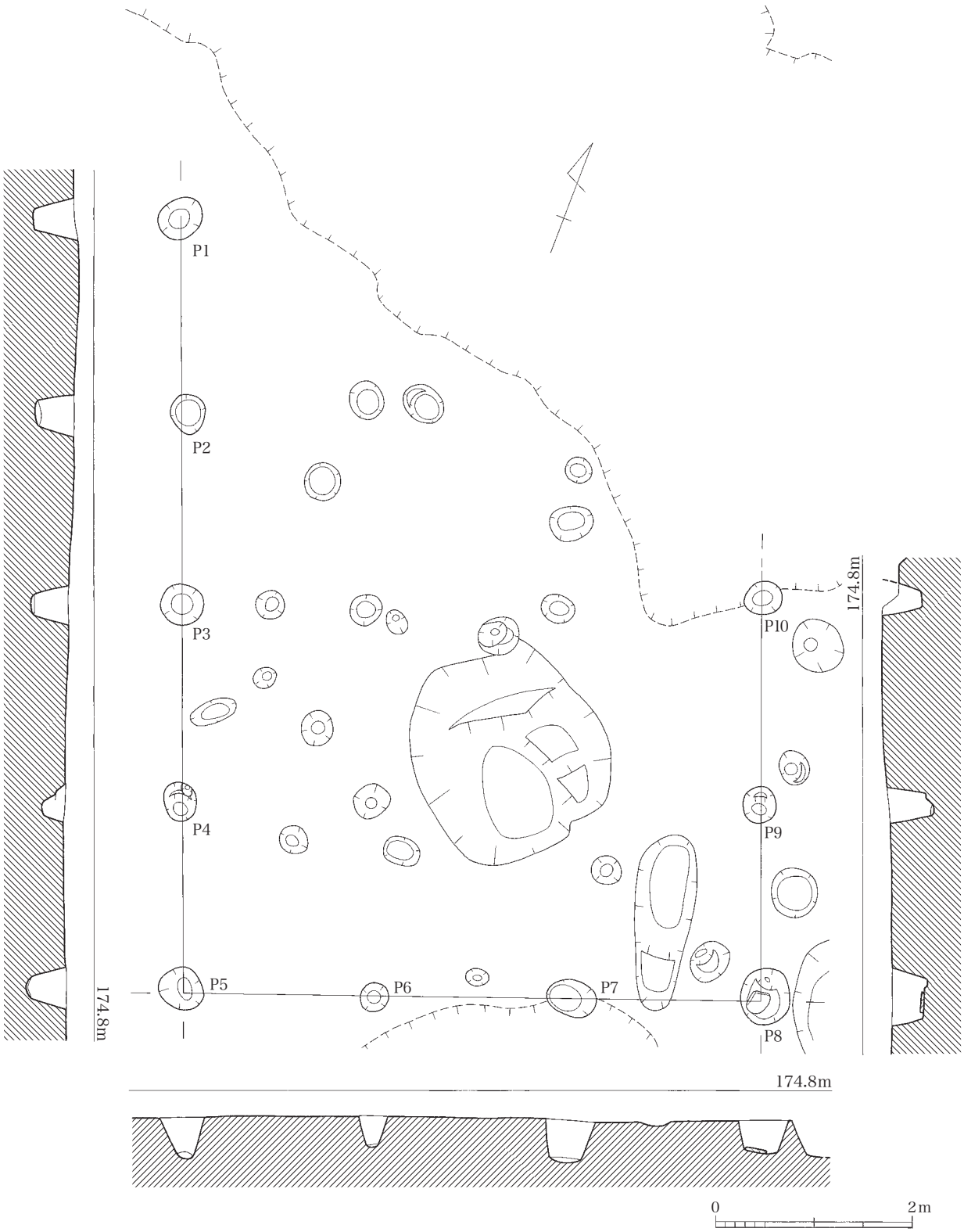
調査区中央北寄りの位置にある。遺構の北東部に大きく攪乱が入り、このため柱穴の一部を失っている。10箇所で柱穴を確認し、桁行４間以上、梁行３間で、7.8m以上×5.8mの規模の北西―南東棟の建物である。柱間は、桁行が1.9～2.1mと若干のばらつきがあるが、梁行は1.9m等間で、整然と配置されている。柱穴は径0.3～0.55mの円形あるいは楕円形で、深さは0.25～0.45m、南東隅の柱穴底部には扁平な自然石が入り、礎板かと思われる。

出土遺物（第41図）

5箇所の柱穴から出土した遺物を図示した。12・16・17・19は土師器坏の口縁部で、12は口縁部下で緩く屈曲し、16・17は口縁部下をわずかに肥厚させて微妙な稜をもつ。13・15は底部で糸切り。18・20・21は土師器皿で、3点とも器高1.2㎝。14は無釉陶器の甕であろう。外面は灰を被り、内面には当具痕が残る。



第39図　1・2号柵跡実測図（1/80）

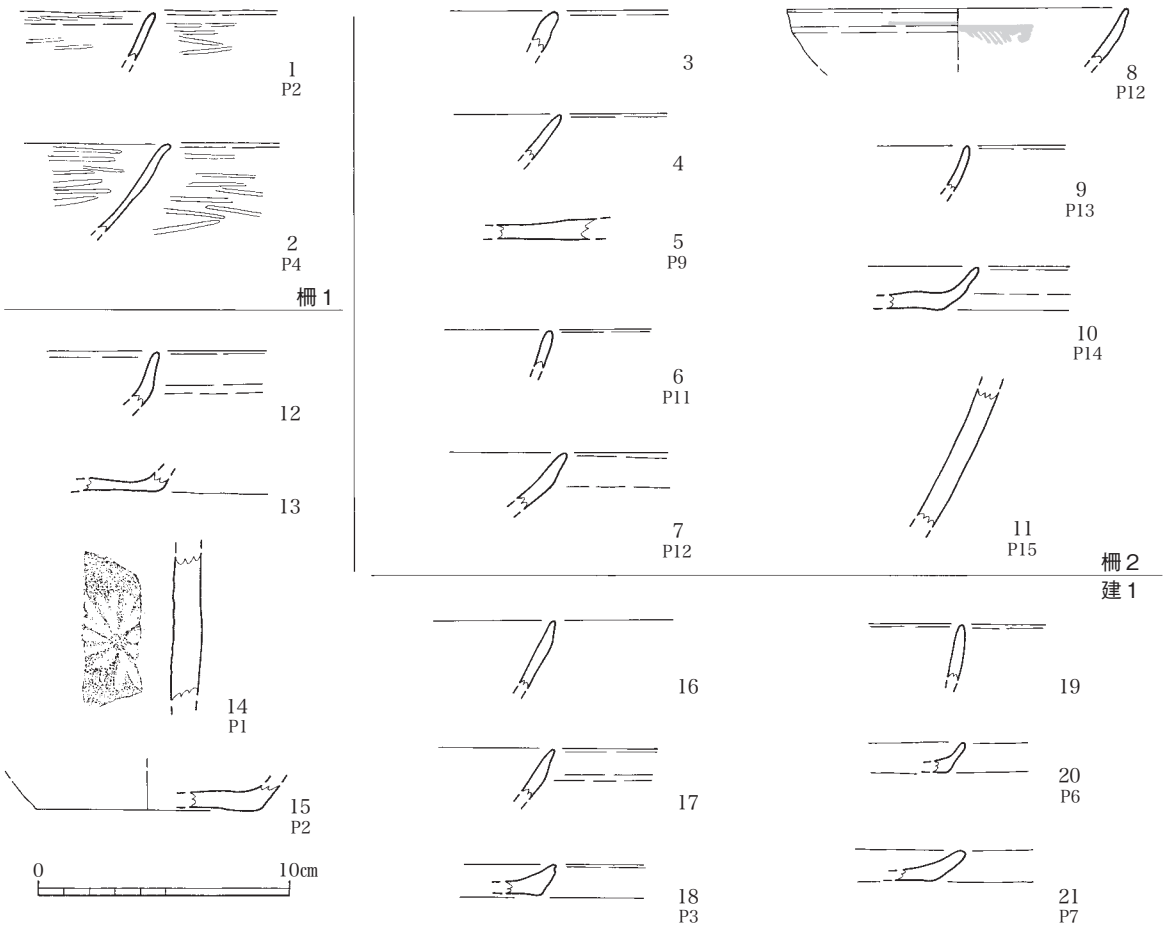


第40図　1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

２号掘立柱建物跡（図版29・30、第42図）

上層遺構面の北端部付近にある東西棟建物である。調査段階では、南側柱列を充分に認識しておらず、北側柱列の掘方のＰ１～Ｐ７について、ほぼ等間隔で一直線に並んで配置された土坑群と考えた。しかしその後、整理作業の段階で、大型の掘立柱建物跡である可能性が高いとの指摘を受けた。検討の結果、現地で確認していないために不詳な部分も多いが、ここでは掘立柱建物跡として報告する。

南側柱列のP14－P15間を攪乱によって大きく失っており、また東側柱列のＰ９－P10間で柱掘方を検出し得ていないものの、桁行7間、梁行３間の東西棟建物が想定される。柱掘方は、比較的残りの良いＰ１～Ｐ７・Ｐ９・P16では、長軸長1.3～1.7m、短軸長0.5～0.7m程度の長楕円形あるいは隅丸長方形の細長い平面形で、底部は一端または両端部が一段深くなるものとほぼ平らなものがあり、深さ0.3～0.7mが残存している。P14・P15は攪乱によって過半部を失っており、その間にあるはずの２箇所の柱掘方についても失われている。P17が0.5×0.4m程の円形に近い平面形を呈しているほか、P12・P13では小振りとなる。この建物跡の柱掘方が特徴的なのは、平面楕円形が基本で、しかも長軸の方向が柱列の主軸に対して58°～83°の角度で斜めになることである。その理由については不詳であるが、１；位置をややずらして同規模で建て替えた結果、見掛け上楕円形になったもの、２；立柱の作業に関わるもの、３；柱抜取痕によるもの、等が考えられる。



第41図　１・２号柵跡・１号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）

このうち３の抜取りは、平面形状や、Ｐ４～Ｐ７等の底部がほぼ平らになる点などから、可能性は低いように思われる。同様の理由で１の建て替えについても消極的に感じるが、いずれにしても掘方の長軸方向の断面土層観察等による検討が必要であった。現地での作業が充分でない以上、１～３のいずれの可能性も否定しきれないが、ここでは２の立柱の工法によるものとして、柱が掘方の概ね内側にあるものと仮定して、建物の規模を記す。

先述の通り、桁行７間、梁行３間の東西棟建物であり、柱間は桁行・梁行ともに2.2～2.3mの等間で、全体で15.5×6.5mの規模となる。また、Ｐ４～Ｐ７の北側1.6～1.8mの位置に、長さ7.5m、最大幅1.1m、深さ0.2m程度の、建物の柱列と平行する不整形の溝があるが、あるいは建物と関係したものであるかも知れない。

出土遺物（図版37・38、第44図）

１・２はＰ５から出土した。１は土師器坏の口縁部で、胎土が精良で器壁が極めて薄い。２は底部で糸切り痕が残る。

３～６はＰ６から出土した。３～５は土師器坏。３は口縁部が内湾する。復元口径15.0㎝、器高3.6㎝。４・５は胎土が精良で、器壁が薄く、回転横ナデの痕跡が明瞭に残る。４は復元口径13.6㎝、５は復元口径12.2㎝、器高3.5㎝。６は土錘で、長さ5.1㎝、幅1.1㎝、端部の一部を欠く。

７～９はＰ７から出土した土師器坏である。７・８は胎土が精良で、７は器壁が極めて薄く瓦質に焼成する。２点とも外底部に板状圧痕が残る。７は復元口径11.0㎝、器高2.0㎝。９は体部が湾曲し、底部の糸切り痕が明瞭である。

土坑

９号土坑（図版29・30）

２号掘立柱建物跡のＰ４と切り合い関係にあるが、先後関係は不明。遺構の東側の一部を失うが、平面円形と考えられ、0.25×0.2m以上、深さ0.15mである。

出土遺物（図版38、第45図）

10は土師器坏あるいは皿の底部で、外底部に糸切り痕が残る。11は小型の皿で、復元口径6.4㎝、器高2.2㎝。胎土も調整も粗さが目立つ。12は灰白色に発色しているが、青磁の坏かと思われる。口縁部が屈曲して開いて上部に平坦面をつくり、端部が再び立ち上がる。

10号土坑（第43図）

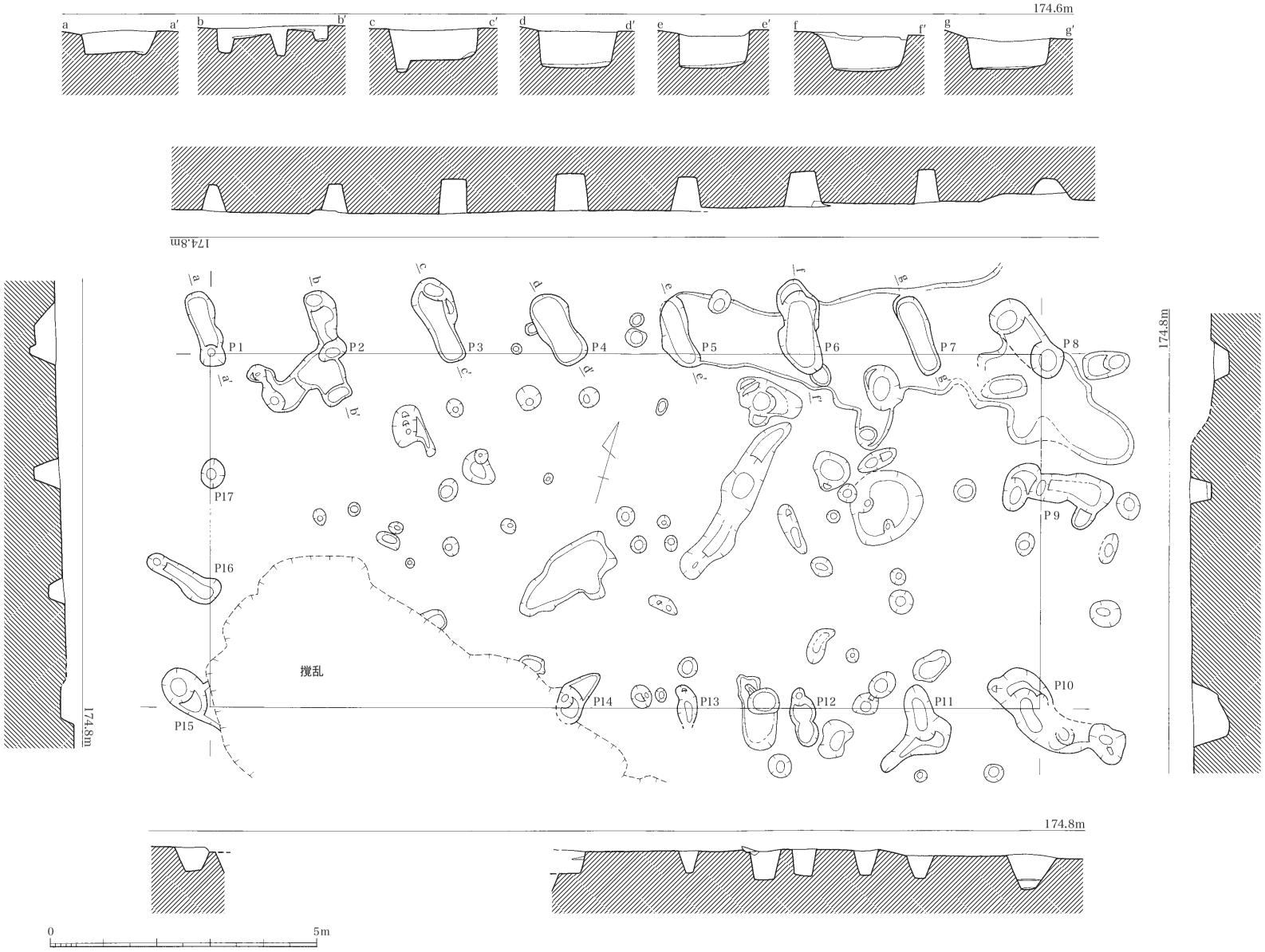
調査区中央やや南側に位置する。楕円形に近い細長い不整形で、長軸長1.6m、短軸長0.5m。底部は二段掘り状になっており、北東側の低い方で深さ0.7m、南西側で0.4mとなる。

出土遺物（図版38、第44図）

13は土師器坏で、体部は内湾し、歪みが目立つ。底部外面には板状圧痕が、内面には工具によるナデの痕跡が残る。口径13.7㎝、器高3.5㎝。14は瓦器椀で、体部下半に丸味をもち、外面はナデ調整で下位には一部ケズリの痕跡が残り、内面は粗いミガキ調整。口径15.4㎝、器高6.4㎝。

11号土坑（第43図）

調査区南側にあり、遺構の南東側の一部を攪乱によって破壊されている。位置的には1号土壙墓



第42図　２号掘立柱建物跡実測図（1/80）

と一部重複するが、検出時の高さには約0.2mの差があり上層の調査では1号土壙墓は発見できていないため、切り込む層位が違うものと考えられた。平面楕円形で、長軸長1.0m、短軸長0.7m以上。西側の一部が高い二段掘り状で、低い部分で深さ0.3m。

出土遺物（図版38、第44図）

15～18は土師器坏。15～17は胎土が精良で器壁が極めて薄く、16・17の外底部には板状圧痕を有する。15は復元口径13.4㎝、器高2.7㎝。18は体部が内湾し、復元口径12.0㎝。19は瓦質土器鉢で、内外面ナデ調整、底部外面にはハケメが残る。20は陶器摺鉢で、内外面ナデ調整のち９本以上単位の条線を入れる。21は陶器甕の肩部で、２条の沈線が２段に巡る。外面には灰を被った痕跡がある。22は褐釉の陶器壺で、器壁は薄く、復元口径10.4㎝。23は白磁椀の小破片で、胎土・釉ともに灰白色を呈する。

12号土坑（図版30、第43図）

丸味のある隅丸長方形の西側の一部が突出した形状の平面形で、長軸長3.0m、短軸長2.3m。周壁はややなだらかに立ち上がり、深さ0.4m。突出部の埋土に炭化物を多く含む。

出土遺物（図版38、第44図）

24～28は土師器坏の底部で、24は比較的厚手、25は薄く、26～27は極めて薄く胎土も精良であり、復元底径4.8㎝で規格的である。また、25・27・28の外底部には板状圧痕がある。29は瓦器椀で、内外面ナデ調整、高台径6.2㎝。30・31は瓦質土器火鉢。30は口縁部下の２条の突帯の間にスタンプ施文する。31は底部近くに断面三角形の突帯を１条めぐらし、その下部に装飾的な脚を貼付する。脚には棒状の工具による穿孔がみられる。32・33は土師質土器。32は摺鉢で、４本一単位の条線が配置される。33は鍋で、外面には粗いハケメがあり、内外面に煤が付着して外面の一部は剝離している。34は青磁椀で、胎土は灰白色、釉は緑灰色に発色する。

13号土坑（第43図）

１号柵跡のＰ５の北西に隣接する。やや崩れた楕円形の平面形で、長軸長1.6m、短軸長0.9m。東側が0.1m程低い二段掘り状で、下段の南側２箇所には小穴が確認できた。深さは下段部分で0.15mと浅い。

出土遺物（図版39、第45図）

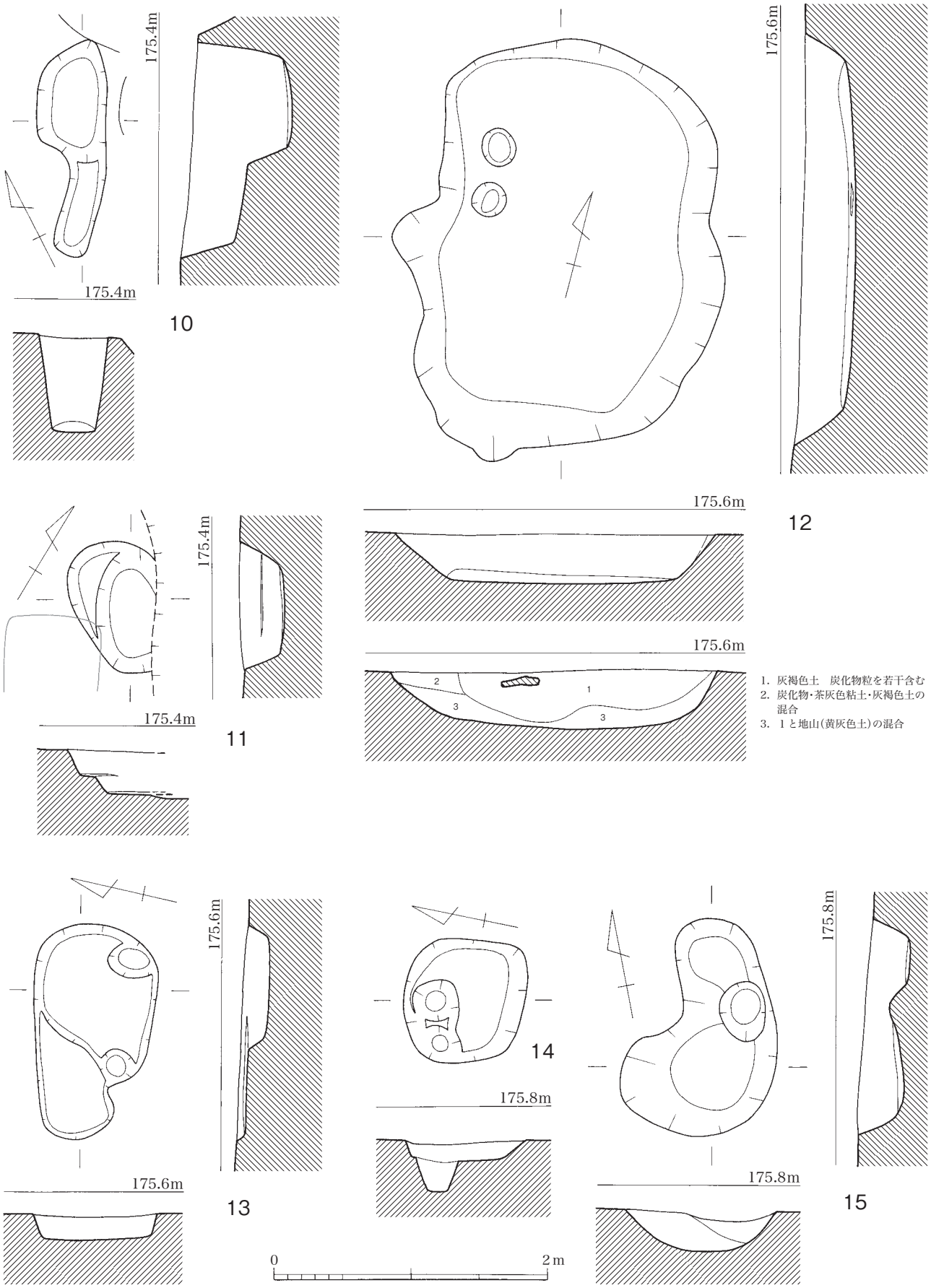
35は土師器皿で、復元口径7.8㎝、器高1.2㎝。36・37は瓦器椀。36は体部に丸味をもち、口縁部がわずかに外反する。内外面ミガキ調整で、外面のミガキは轆轤を使用している。37は器面の風化が激しい。38は瓦器皿で、外面は糸切りのち粗いミガキ調整、内面見込部は丁寧なミガキ調整で仕上げる。

14号土坑（第43図）

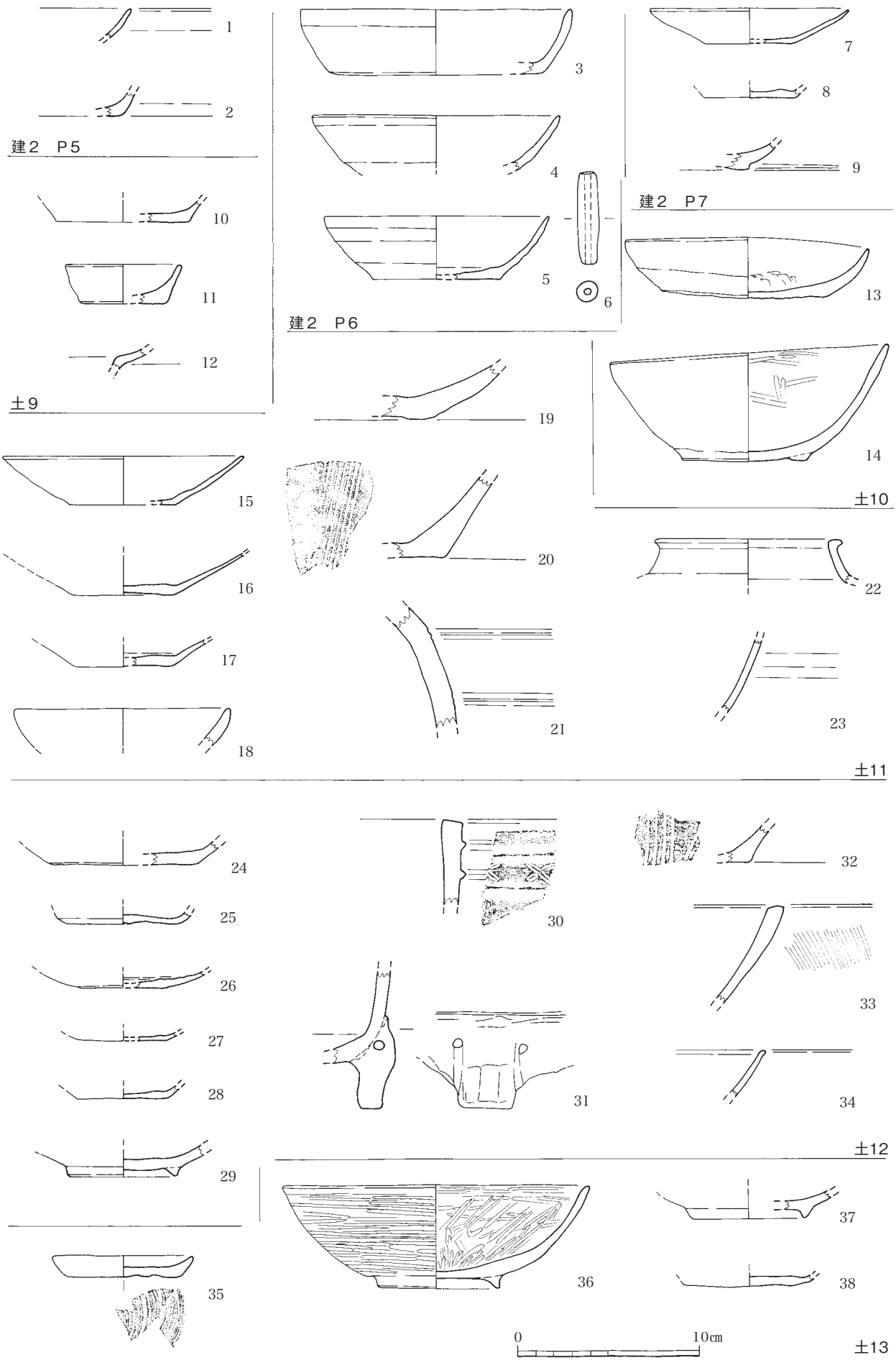
位置的には１・２号柵跡に挟まれた部分にあたる。平面形は円形に近く、径0.9～1.0m、深さ0.1mと浅いが、底部の北西側2箇所で深さ0.2m程の小穴を確認した。

出土遺物（図版39、第46図）

39・40は土師器坏で、口縁部下をわずかに肥厚させて端部をシャープに仕上げる。39が復元



第43図　10～15号土坑実測図（1/40）



第44図　２号掘立柱建物跡・９～13号土坑出土遺物実測図（1/3）

口径11.2㎝、器高3.0㎝、40は復元口径13.0㎝、器高3.3㎝。41は土師器皿で、口縁部を短く立ち上げ、端部はシャープ。42～44は瓦器椀で、器壁は薄く、口縁部をわずかに外反させ、内外面ミガキ調整。42が復元口径17.0㎝。45は瓦器皿で、復元口径9.2㎝。46は粘板岩製の砥石。長方形で一端を欠き、残存長7.6㎝、幅3.5㎝。両面をよく使用している。

15号土坑（第43図）

１号柵跡のＰ７と重複し、土坑の底部を検出した段階でＰ７を検出したため、Ｐ７が古いと思われる。また、23号土坑とも切り合い関係にあり、23号土坑を切る。瓢型の平面形で、長軸長1.6ｍ、短軸長1.1ｍ、深さ0.3ｍ。

出土遺物（図版39、第45図）

47は瓦器椀で、内外面ミガキ調整で仕上げるが、内面は丁寧に、外面にはごく粗いミガキ痕跡が残る。48は瓦質土器鉢で、焼成が堅緻である。49は土師質土器鍋で、内外面ヨコナデ調整、焼成は堅緻。外面には煤が付着する。50は土鈴で、宝珠形で手捏ね、肩部に1条の沈線がめぐる。沈線の上下の相対する位置に長方形の透かしを入れ、頂部にはこれと方向を揃えて紐孔を穿つ。残存高3.4㎝、幅3.0㎝、胎土は精良で瓦質に焼成する。

16号土坑（第10図）

調査区南端部付近で検出した。切り合い関係では、１号柵跡を切り、22号土坑に切られる。7.5×4.5ｍの範囲に広がる不整形の遺構で、深さは中央付近の最大部分で0.4ｍ程度。形状からは人為的なものとは思われないが、遺物が出土する。

出土遺物（図版39、第45図）

51～56は土師器坏で、復元口径12.0～13.4㎝、器高3.0～3.4㎝。57～60は土師器皿で、57～59は口縁部が直線的に立ち上がり、60は内湾する。（復元）口径7.0～8.0、器高1.0～1.5㎝。61は瓦器椀で、内外面ミガキ調整で仕上げる。

62は白磁椀で、器壁は薄く、口縁部を外方に折り曲げ端部はシャープである。胎土、釉ともに灰白色を呈し、貫入が入る。復元口径15.6㎝。

63は土師質焼成の甕で、内外面ナデ調整で、焼成は堅緻。復元口径40.0㎝。

64は土錘で、長さ4.6㎝、径1.0㎝、重さ５ｇ。

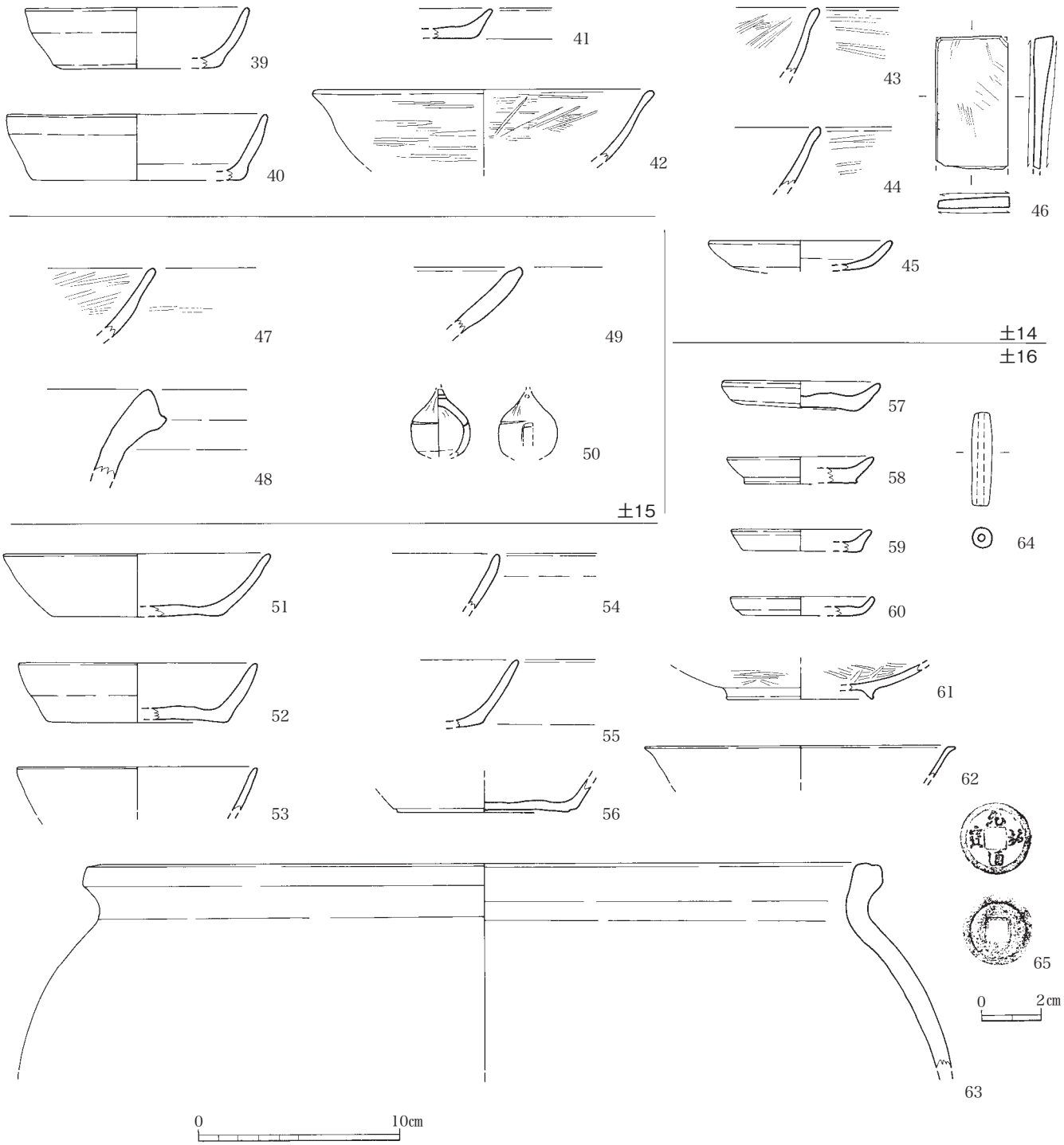
65は銅銭。元祐通宝で、1086年初鋳である。

その他出土の中世遺物（図版39・40、第46図）

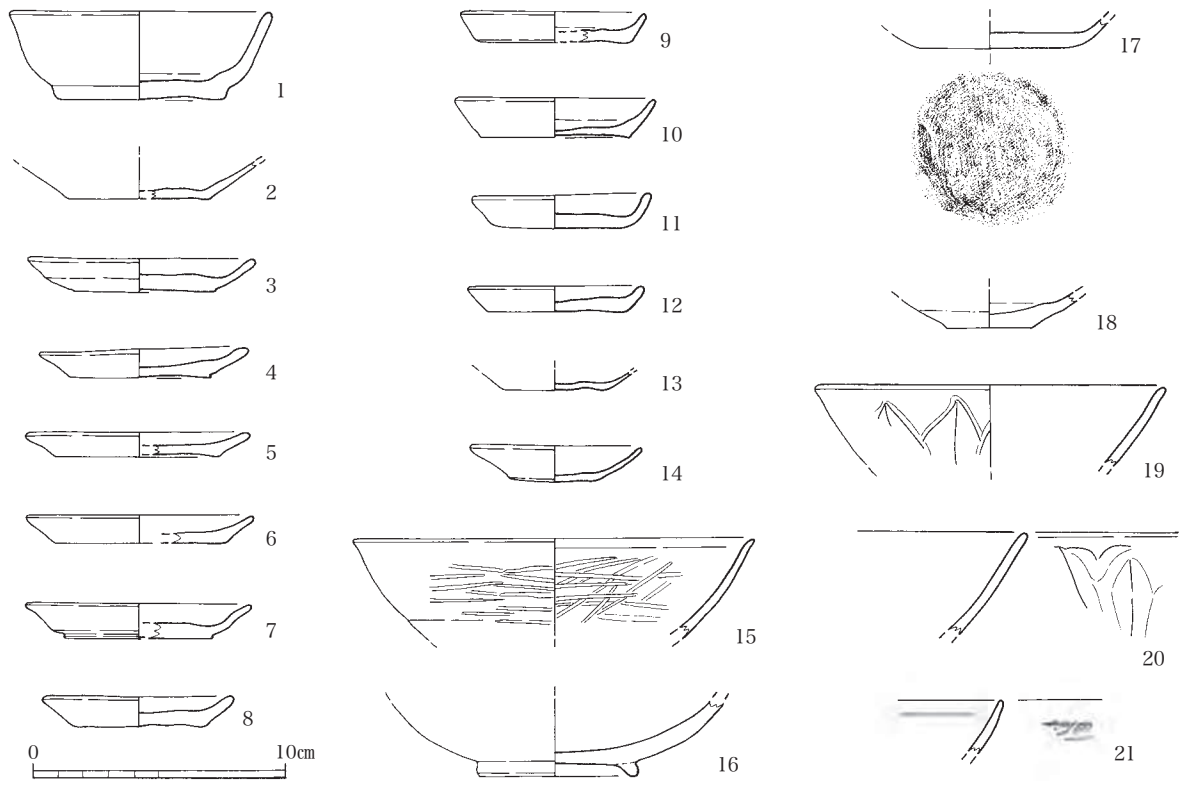
１・２は土師器坏。１は体部の下位で湾曲して立ち上がる。器壁は厚く、胎土に砂粒が多く、調整も粗く歪みがある。復元口径10.4㎝、底径7.0㎝、器高3.5㎝。２は器壁が極めて薄く、体部が直線的に開く。胎土は精良だが砂粒を若干含む。復元底径5.6㎝。３～14は土師器皿である。３～12は在来系のもので、口径7.0～9.1㎝、器高1.0～1.6㎝。４は焼成が堅緻で暗灰色～黒灰色を呈する。11は胎土に砂粒が多く、調整が粗く歪む。13・14は大内系で、器壁が極めて薄く、体部が直線的に開くが、14は中位で若干屈曲する。13は胎土が精良で、内外面に赤色塗彩を行う。14の胎土は比較するとやや粗く、金雲母を多く含む。13は糸切りのまま、14は糸切り後の板状圧痕がみ

られる。14は外面と体部内面に煤が付着しており、灯明皿に使用したものと思われる。13は復元底径4.0cm、14は復元口径6.9cm、底径3.5cm、器高1.4cm。

15・16は瓦器椀である。15は器壁が薄く、口縁部が外反する。黒灰色を呈し、内外面ミガキ調整で、外面のミガキには轆轤を使用している。復元口径16.0cm。16は高台が比較的高く、やや裾広がりとなる。復元高台径6.4cm。17は瓦器皿である。体部の器壁は薄く、底部は糸切りの後内外



第45図　14～16号土坑出土遺物実測図（65は1/2、他は1/3）



第46図　その他出土の中世遺物実測図（1/3）

面を丁寧に磨く。

18は白磁皿。底部は小さく平底で、内面は体部との境に段を持つ。胎土は白色で砂粒を若干含み、釉は黄白色で内面と外面中位まで施釉する。復元底径3.4cm。19・20は龍泉窯系の青磁椀で鎬蓮弁文を描くもの。胎土は灰色で、釉は灰緑色だが、19は風化して白色化が進行しており、20は釉が厚いためか文様が不鮮明である。19は復元口径14.0cm。21は染付椀の口縁部で、２号柵跡の８と同一個体の可能性がある。

調査風景

４）小結

以上、下伊良原西の塚遺跡Ⅱ区の調査で検出した主な遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡１軒、それとほぼ同時期と考えられる貯蔵穴19基以上、土坑多数、遺物包含層、中世の土壙墓１基、柵跡２条、掘立柱建物跡２棟、土坑多数、などである。

出土した縄文土器はほとんどが小池原上層式から鐘崎式のもので、後期前葉から中葉の時期にほぼ限定される。それは上層遺構面、下層遺構面、さらに下層のグリッド調査のいずれでも大差なく、このことはこの地が比較的短期間に度々川の氾濫にさらされてきたことを意味するものと考えられる。

調査区南東部にある１号竪穴住居跡は、柱穴を検出できず、また中央の石組部に炉としての使用痕跡がない等、やや消極的な面もあるが、住居跡とすれば伊良原地区では貴重な検出例となる。絶えず氾濫の危険があるにもかかわらず、文字通り川のほとりに作られていることから、これと密接に関連した遺構であることが伺える。

ドングリを貯蔵したと考えられる貯蔵穴は、祓川によって形成された段丘崖の下面に沿って掘られており、この場所は斜面からの湧水に絶えず晒されて湿地化している。こうした湿地にドングリを貯蔵した遺構は、西日本を中心に報告されており、近隣の下伊良原東向川原遺跡でも８基が調査されているが、福岡県内でも近年類例が増えつつある（註）。それによると必ずしも縄文時代に限定されるわけでもないが、ここでは数少ない出土土器と放射性炭素による年代測定の結果から、調査区内の他の縄文時代遺構と同様に後期前葉から中葉の時期のものであると判断した。遺構のはっきりした切り合いは少なく、一定数の貯蔵穴が同時共存した可能性もあると思われるが、下層の遺構面からも発見されていることから、それなりの存続期間が考えられる。また種実同定では、包含されるドングリについてイチイガシよりもアカガシ－ツクバネガシが主体である点はこれまでの調査事例と様相を異にし、貯蔵穴によってドングリの種類を区別していた可能性がある点なども興味深い。

中世の遺構では、１号土壙墓は、遺物の組み合わせから12世紀後半から末頃の時期のものと考えられ、同様に、１・２号柵跡と１号掘立柱建物跡は13世紀代、２号掘立柱建物跡は15世紀代の年代が考えられる。１・２号柵跡と１号掘立柱建物跡との関係は、配置からは必ずしも関連性は見出せず、共存したかも含めて不明である。２号掘立柱建物跡については、これまで伊良原地区で検出した中で最も大型の建物跡といえる。柱掘方が楕円形であることが立柱の工法によるものであるとするならば、通常の建物よりも柱が大きく高さもあったとも考え得る。この時期の伊良原地区の中心的な建物であった可能性もあるであろう。

註　九州歴史資料館 2014 『上片島遺跡群６地区』一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第２集

Ⅲ区

1）調査の概要

1次調査の70ｍ西側の丘陵上位に位置する。調査対象地は丘陵の緩斜面で、５段の平坦面が存在することから調査前は段々畑であったようだが、木の根が非常に多いので、疎林地だったのかもしれない。

平成25年7月16日にバックホーを入れ､調査に着手した。黄色土の整地層の下に遺構面があり、段状の最上段は最近まで居住地として使われていたらしく、撹乱が多く入っていた。段状の緩斜面の下位は、表面に石垣が積まれた落差２ｍほどの段落ちになっており、その下は大きく削平されて旧地形が失われていた。遺構が残っていたのは、東端の一部分だけで、その周囲は削平されていた。結果、調査面積は1,770㎡となった。

8月1日から作業員を入れて、遺構の検出に着手したが、緩斜面も北半分は大きく削平されていて遺構がほとんどなく、遺構は南半に集中していた。

調査区南西端部には白色粒子を多く含む黒色土の縄文包含層が残っており、１段目の斜面部分には70㎝程の厚さで堆積していたため、1号溝状遺構の東壁はこの包含層からなる。包含層を掘り下げてみたがほとんど遺物は含まれていなかった。2段目には2～5㎝程度しか残っていなかったが、縄文土器が出土するピットがあった。最上段南端部には黄褐色土の基盤層の面に花崗岩粒子を含む黒色土の広がりがあり、遺構面の下に潜り込んでいくことが判明し、縄文包含層と考えて掘り下げたが遺物は発見されなかった。しかし、最下段の南端部では縄文土器が散見されたことから、緩斜面には遺物を含む層が堆積し、急斜面には遺物を含まない上位層が堆積したと考えられる。

8月28日に空中写真を撮影し、9月1日に実測を完了。併行して着手していた下伊良原平原遺跡に作業員を移し、調査を終了した。

遺構は土坑２基、埋甕１基、溝状遺構１条で、このほか風倒木痕が14基あったものの、縄文包含層から土器や剥片が混入した程度なので、風倒木は遺構としては報告しない。

東側に飛び地のように設定した調査区もピットが見られるのみで、遺物もほとんどなく、縄文包含層も見られなかった。基盤層は斜面地と異なり礫を含む黄褐色砂質土であり、河川の堆積層由来の土壌となっている。

2）遺構と遺物

土坑

1号土坑（図版42、第49図）

調査区緩斜面南側中央に位置する。平面略円形プランで、壁の立ち上がりも緩やかで、埋土が粘性のない基盤層の下位層が主体なので風倒木痕の可能性が高い。東辺は段の開削で失われている。長軸338㎝以上、短軸272㎝。深さは58㎝ある。遺物から縄文早期だろうか。

出土遺物（図版42、第50図）

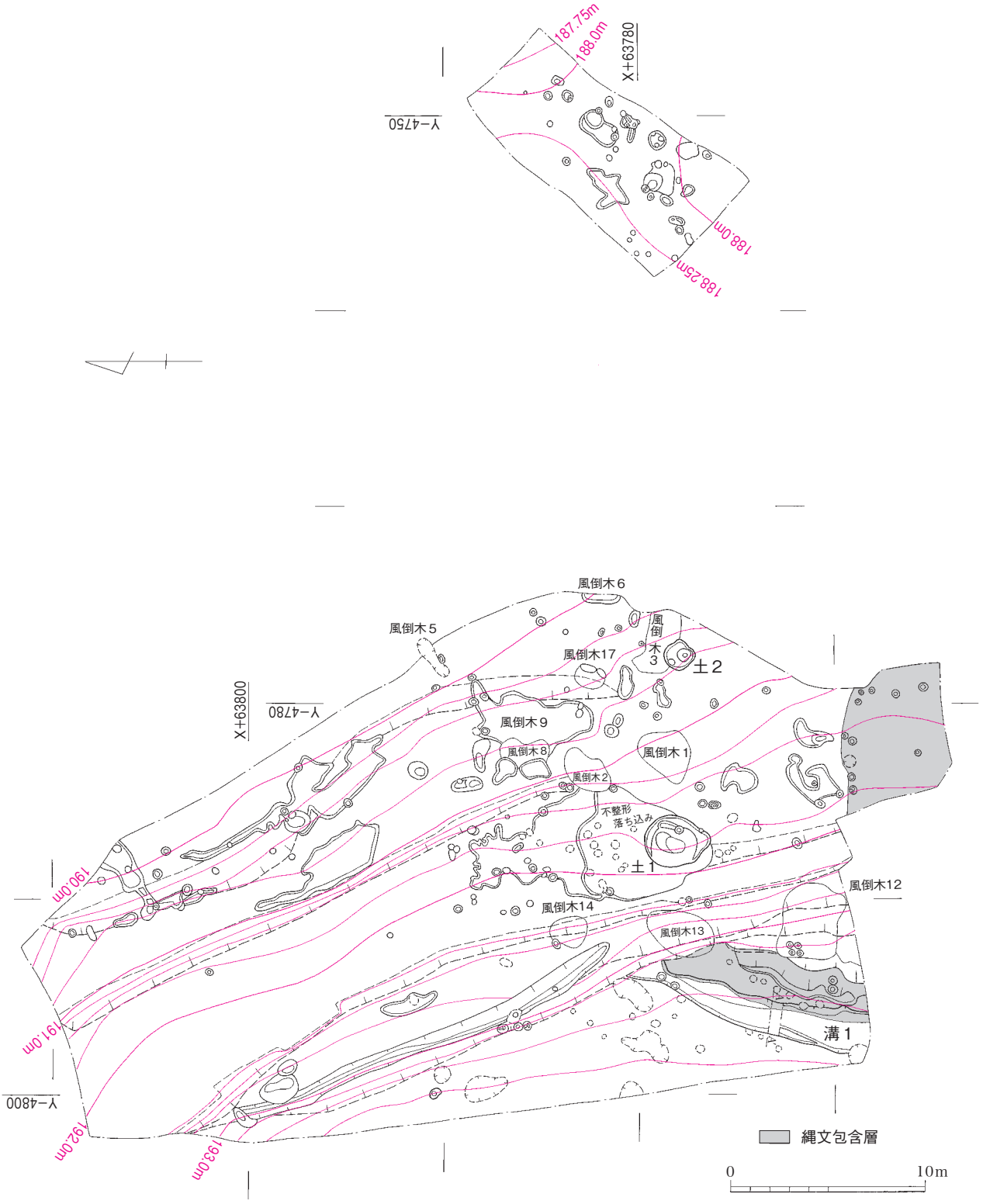
１は無文の縄文土器深鉢片で、口縁部が外傾する。整形時の器面の凹凸が目立つ。金雲母を大量に含む特徴的な胎土で、器壁が厚いことから縄文早期の無文土器だろう。24は打製石鏃の未成品で、白色頁岩を使用している。同じ材質の石材と赤茶褐色のチャートの石材（図版42－7）も出土しており、ここで製作されたものだろう。

２号土坑（図版42、第48図）

調査区緩斜面南側中央に位置する。平面不整円形プランで、壁の立ち上がりも緩やかなので風倒木痕の可能性が高い。基盤層内に入る花崗岩礫が含まれていた。長軸 157cm以上、短軸 136cm。深さは 26cmある。遺物から 16 世紀から 17 世紀代だろう。

出土遺物（第49図）

19 は土師質土器の火鉢の口縁部片で、口縁部片と底部片の非接合同一個体である。外面口縁下



第47図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区遺構配置図（1/300）

に断面三角形の突帯が貼り付けられ、口唇部はナデで窪んでいる。口縁部内面がナデられ、その下に段を有するのが特徴的である。口縁下には菊花文のスタンプがある。胴下位にも突帯が貼り付けられており、内面にオサエ列が残る。外面はナデだが、内面は器面が剥落している。外面はにぶい淡灰褐色だが、内面は胎の黄白色が露出している。胎土にカクセン石を含む。16 世紀代。

溝状遺構

１号溝状遺構（図版41・42、第47・48図）

調査区上段中央の南西端に位置し、N － 15° － E 方向に走る。壁の立ち上がりが急で、床面が平坦なので近世以降の可能性が高い。北端は段落ちのため失われているが、この溝より西側に撹乱が集中していることから、近代の家屋に伴う排水目的の溝かもしれない。幅は 14 ～ 48cmと幅広で、深さ 10 ～ 20cmである。壁と床面に焼けた部分があったが、部分的な物なので溝の機能に直接関わるものではないだろう。後世に上位で火を使用した影響ではないだろうか。

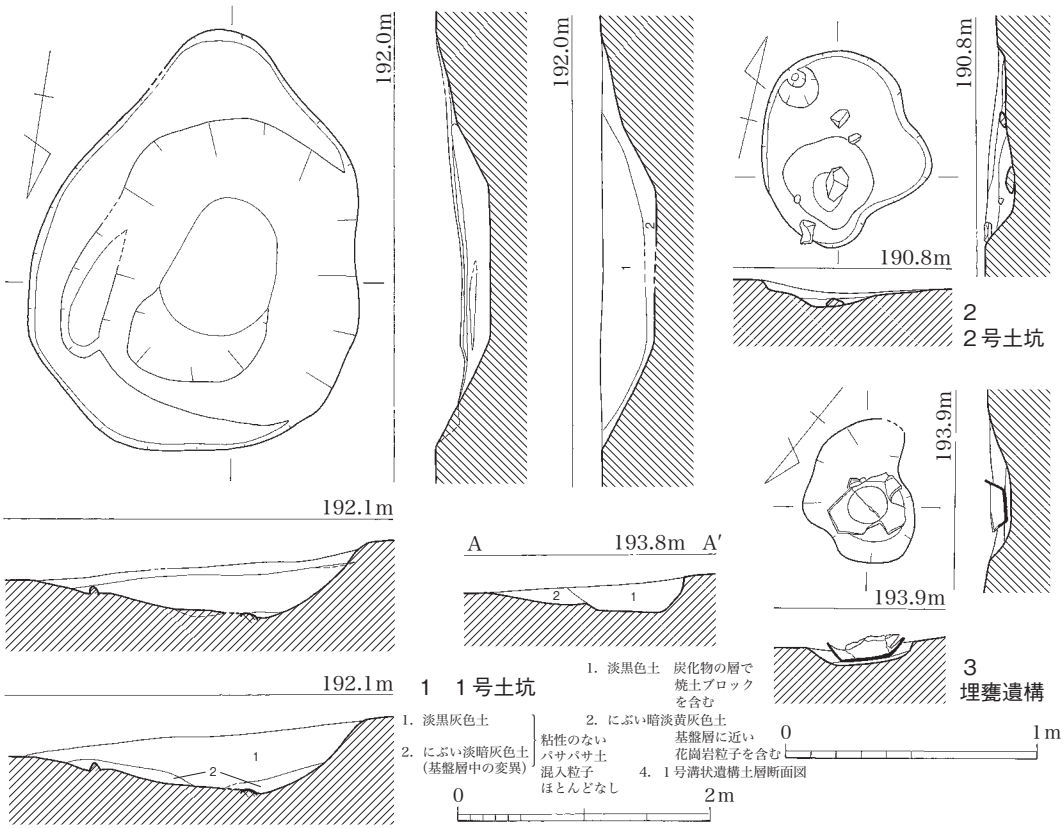
出土遺物（第49図）

21 は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面口縁部が肥厚し丸みをもつ。内面は型押しと思われる 2 条の凹線があり、花文がスタンプされていたと見られる。釉薬は暗緑灰色を呈し、14 世紀代。ピット 22 出土片に酷似し、同一個体の可能性が高い。

埋甕遺構

１号埋甕遺構（図版42、第48図）

調査区上段中央の西端に位置する。土師質の甕の底部だけが残っており、掘り込みプランも不整



第48図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区遺構実測図（１は1/30、他は1/60）

形に検出された。裏込土も締りが弱く新しいものだろう。壁の立ち上がりが緩やかなので、埋甕でなく廃棄した可能性もある。長軸 58cm、短軸 45cm、深さ 13cmを測る。近世から近代のものだろう。

出土遺物（図版42、第49図）

17 は土師質土器の甕底部で、外面は埋め込まれていたことから器面剥落が著しく、底部の切り離し方法は不明。胴下位は粗いナデと思われる。内面は目の間隔の広いハケ調整が入る。見込みは回転ハケの中央にタテハケが入る。精良な胎土で、黄白灰色を呈する。使用による変色がなく、便槽ではない。

その他の出土遺物（図版42、第49図）

２はピット９出土の押型文土器片である。施文後ナデているため楕円押型文が消えている部分があり、不鮮明だが横走と見られる。内面はナデで、内外茶褐色を呈し、変色はない。カクセン石を含む。３はピット３出土の縄文土器片で、内面は巻貝の貝殻条痕が入るが、外面は摩滅しているため判然としない。本来は橙褐色を呈するが、外面は煤が付着し、内面は使用による変色が見られる。４は 12 号風倒木出土の縄文土器片で、内外とも２枚貝殻条痕が入る。外面は黄灰色で変色なく、内面はにぶく変色しているものの、炭化物や煤の付着はない。胎土は比較的精良で堅緻。

５～９はピット６出土の土師器小皿で、いずれも復元径 6.0cm前後、器高も 1.5cm前後しかない極小品で、セットで廃棄されたものだろう。外底は糸切りで、板状圧痕がある。器壁が均一で薄いことから、型成型と見られ、内外面２段ナデで、内底は螺旋状ナデで、中央部が窪む。にぶい黄橙色からにぶい黄灰色を呈し、黒色斑が残るものもある。10･11 はピット８出土の土師器小皿で、10 は復元底径 4.0cm、11 は復元径 7.0、器高 2.0cmの極小品である。10 は外底に糸切り痕あり。底面に黒斑があるので、接地して焼成したものだろう。内外にぶい暗橙褐色を呈する。11 は底部のみで、外底糸切りで、見込みは螺旋状ナデ。内外黄橙色を呈する。軟質精良の胎土。12 はピット 16 出土の土師器小皿で、口縁部から胴部は内外面は幅の狭いナデ窪みがあり、見込みは１回転ナデた後、中央部を押さえている。外底は糸切り痕の上に板状圧痕がある。本来の色調はにぶい黄橙灰色だが、変色してにぶい淡暗黄灰色を呈する。胎土は精良、軟質で、金雲母を含む。13 は不定形落ち込み出土の土師器小皿で、外底は糸切りと板状圧痕。14 は石垣下の撹乱溝から出土した土師器皿で、外底には糸切り痕があり、内外器面摩滅しているため、そのほかの調整は不明。内外にぶい黄橙灰色を呈する。胎土は精良で、近世の可能性もある。15 はピット 13 出土の土師器皿の口縁部で、内外ヨコナデ。器壁が厚く、胎土が粗いことから、中世の土師器ではないかもしれない。黄橙色を呈し、褐色パミスを含む。

16 はピット 11 出土の白磁皿の口縁部片で、胎土・釉調から見ると中国製だが、外面に型押し成形によると見られる平坦面があるため器形が判然としない。

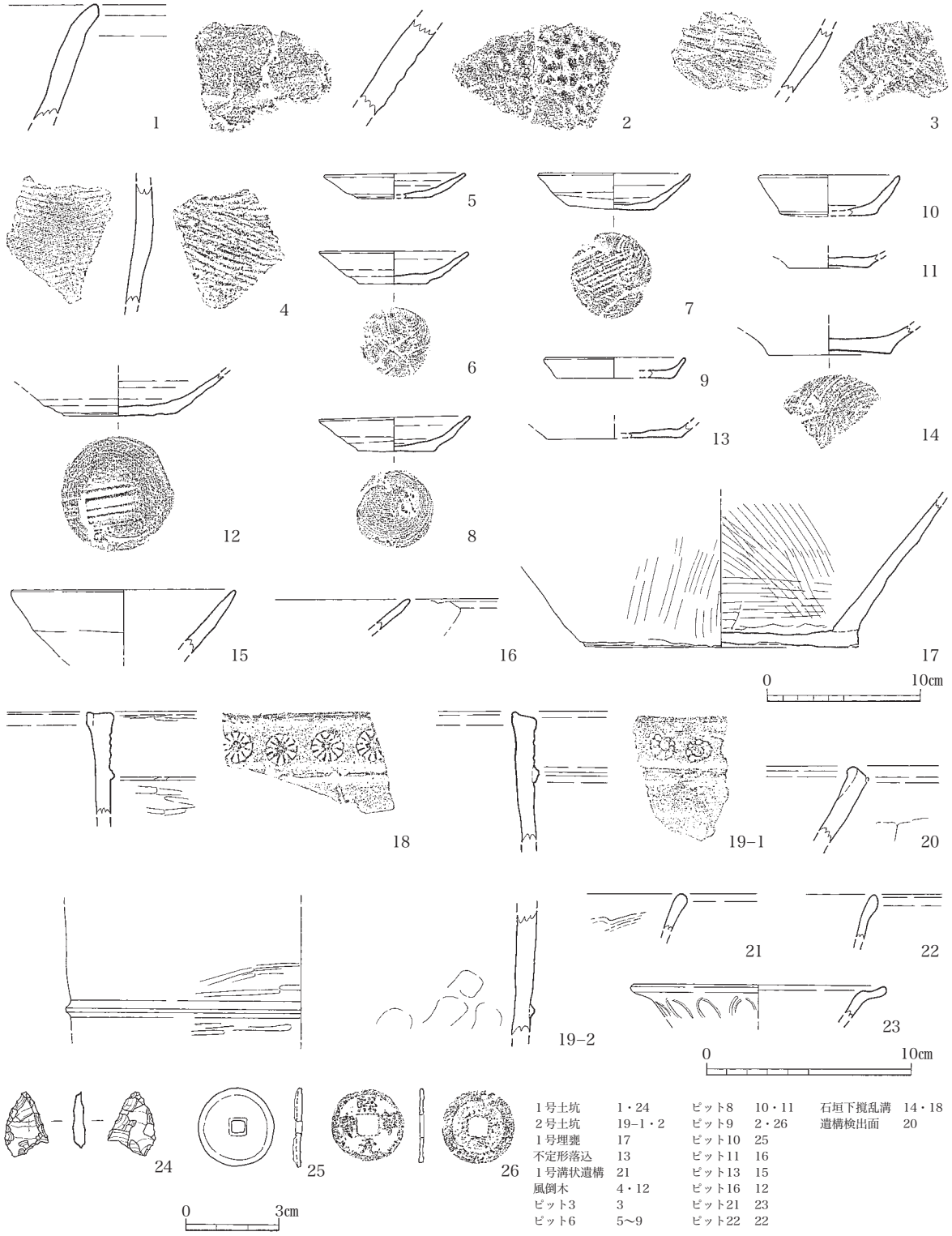
18 は石垣下の撹乱溝から出土した土師質土器の火鉢の口縁部片で、２号土坑出土の火鉢に酷似する。口縁下に突帯を貼り付け、口縁と突帯の間に菊花文のスタンプが入る。口唇部はナデ窪まず、内面側もナデによる段ではなく断面方形状の突帯がつく。内外面はヨコナデで、器面の残りはよい。内外面はにぶい淡灰色からにぶい黄灰色を呈し、胎土は比較的精良で堅緻。16 世紀代。

20 は遺構検出面出土の土師質土器の鉢か摺鉢で、内面口縁部に肥厚が見られる。

22 はピット 22 出土の龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面は肥厚して玉縁状を呈する。１号溝状遺

構出土片に酷似し、同一個体の可能性が高い。23はピット21出土の龍泉窯系青磁小皿で、口縁は鰐縁で淡緑灰色を呈する。貫入が多く、片切彫りによる鎬蓮弁文も精緻さを欠く。

25はピット10出土の銅銭で、錆びの融着が著しくX線CTスキャンを使用しても銭名は判然としなかった。26はピット9出土の熙寧元宝（初鋳1068年）。



第49図　下伊良原西の塚遺跡Ⅲ区出土遺物実測図（24〜26は1/2、17は1/4、他は1/3）

3）小結

遺跡の時期は大きく縄文早期と中世後期である。縄文時代については、1号土坑やピット5、1号風倒木痕から頁岩・チャート剥片が出土しており、押型文期の小規模なキャンプサイトが存在していた可能性がある。巻貝の貝殻条痕の入る土器片は、下位に位置する西の塚遺跡Ⅱ区の縄文遺跡の展開する時期のものと見られ、遺跡の範囲の西限を示すものだろう。

中世後期については、青磁などから14世紀代の遺構がわずかながらあり、調査区の斜面下位に位置するⅠ区でも中世の遺物が出土しており、Ⅱ区では土壙墓が発見されているので、中世集落が丘陵側緩斜面に広がっていたものと見られる。その集落が試掘調査で発見されなかったのは、居住空間として利用できる平坦地が少なく、現在の集落と同じ位置に存在していたため、攪乱されて残っていないのだろう。

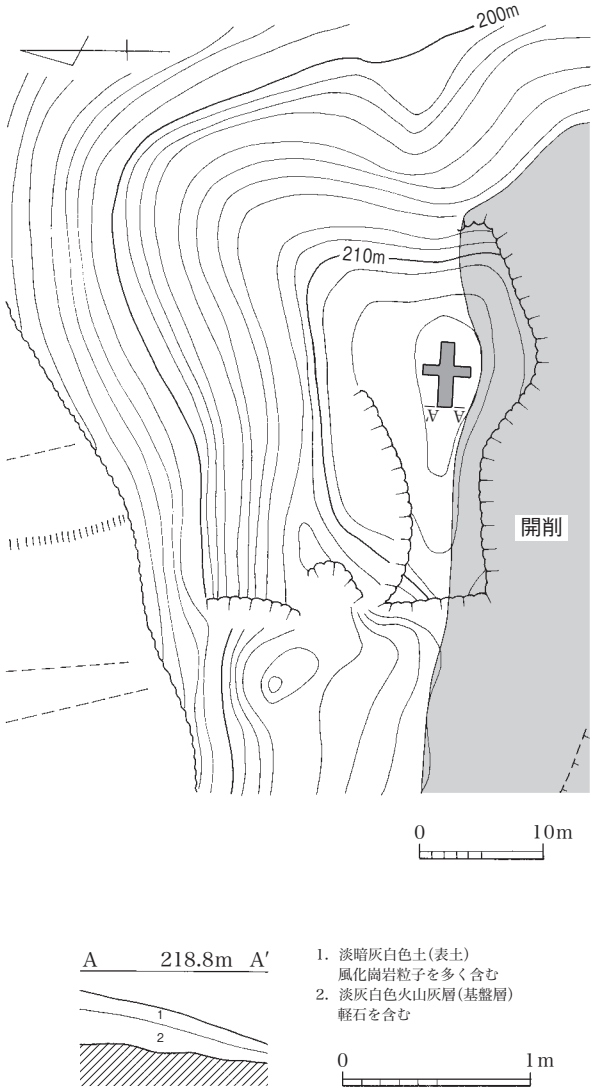
熱中症予防のため寒冷紗を用いた調査風景

Ⅳ区

1）調査の概要

調査対象地は「城山」と呼ばれる標高213ｍの丘陵の頂部である。頂部に供養塔があり、土師器皿が表採されたことと、天正17年に黒田家に滅ぼされた宇都宮家の家臣大蔵日向守らが逃げ込んだという伝承（註１）があることから､山城と墓地の可能性があったのでトレンチ調査を実施した。

平成25年9月18日に、隣接する下伊良原平原遺跡を一時中断して着手した。頂部には大きな抜根穴があり平坦面は10㎡ほどしかなかったため、東西に長い楕円形の平坦面に十字に５×４ｍの幅100㎝のトレンチを設定し、遺構の有無を確認したが、表土直下10㎝で基盤層となっており、遺構は認められなかった。墓石の残欠らしい礫片が表土内に残っていたので、近世墓も存在せず供養塔として石塔だけが樹立されたものだろう。基盤層が火山灰層であったことから、丘陵南側の大きく削られた斜面を精査したところ、この丘陵は阿蘇火砕流堆積物による火山灰層であることが判明した。（図版44－3･4）この丘陵が細長く延びるのは火砕流堆積物が谷に流れ込んだ部分であったためで、軟質な火山灰層であるため道路を敷設のため丘陵を開削したことから、独立丘陵状を呈したものと見られる。



第50図　下伊良原西の塚遺跡Ⅳ区トレンチ位置図・土層実測図（1/600、1/40）

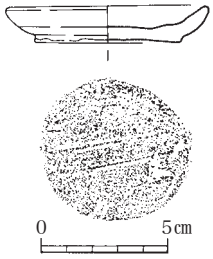
２）遺構と遺物

出土遺物（図版44、第52図）

試掘時に表採されたほぼ完形の土師器小皿で、外底は糸切りの後に板状圧痕が見られる。口縁部は丸みをもち、見込みは螺旋状ナデで、口縁部にはないナデ窪みが目立つ。にぶい黄灰色で、精良、軟質。近世以降の可能性が高いが、供養塔は近代のものなので、それには伴わないだろう。

註

1　松原孝俊1999「民俗　第７章口頭伝承－伊良原の言い伝え（２）伝説－」『伊良原－民俗文化財の調査－』福岡県文化財調査報告書第143集福岡県教育委員会

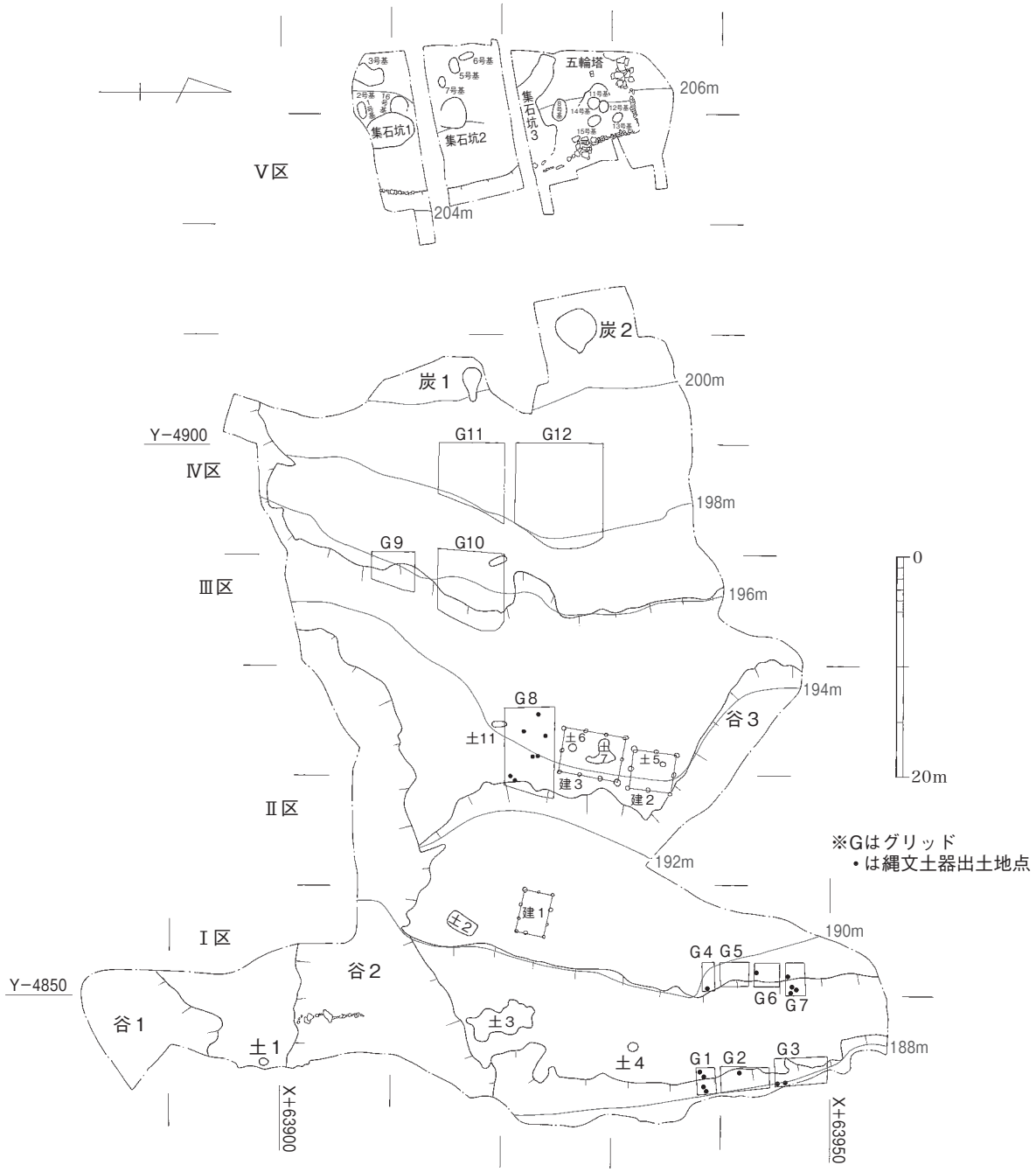


第51図　下伊良原西の塚遺跡
Ⅳ区出土土器実測図（1/3）

２．下伊良原下地ヶ原遺跡

１）調査に至る経緯と調査の経過

事業地における発掘調査に関しては、福岡県伊良原ダム建設事務所との定期的な協議の場で工事の進捗に合わせた優先順位を決めつつ対応していた。そうした中、平成25年度後半の協議において、26年度内に当該調査地をダム工事で生じた土砂の置き場とする予定が示された。そこで試掘結果に基づき26年１月６日から重機による表土剥ぎを開始した。そして年度が明けた26年４月６日にダム建設事務所と協議を持ち、調査対象地の一部について同年８月から土砂で埋めること、調査対象地に存在する溜池については近隣のダム用地内に移設する予定となっていたこともあり、蛙など



第52図　下伊良原下地ヶ原遺跡遺構配置略図（1/600）

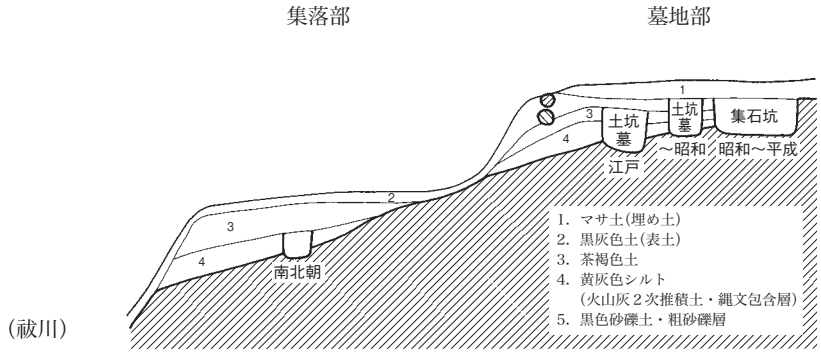
稀少生物の産卵が終わる９月末まで調査に着手しないことを確認し、調査対象地のうち土砂置き場となる斜面の川寄りの部分から調査を進めることとなった。なお当該調査地はダムの水没地区にあたる。

平成26年度の調査は前年度に表土剥ぎを行った場所から着手し、同時並行で重機による表土剥ぎを行いつつ、祓川寄りから斜面上方に向けて現状の段造成面を単位として進めていくこととした。なお最下段のⅠ区と最上段のⅤ区には20ｍほどの比高差がある。以下に調査経過を記す。４月15日に国土座標の移動を行い、また建機を搬入した。翌日からはⅠ区・Ⅱ区の遺構検出に着手し、６月10日にはこの部分の遺構検出を終え、空中写真撮影を行った。その後、Ⅱ区北半部に遺存していた縄文土器を含む包含層にグリッドを設定して掘り下げ、７月16日にはⅢ区の調査に着手した。これと併行してⅣ区の表土剥ぎを行ったが、この調査区では地山上で砂層に覆われた流路のほかには炭窯２基を確認するに留まったため、最上段の石塔群との間には遺構が存在しないと判断し、石塔下部にあたるⅤ区の調査に着手した。Ⅴ区には五輪塔の火輪二個体が転用された状態で確認されたが、そのほかの石塔類は平成21年の図化の際にすべて移動し更地になっていたため、人力によって表土除去を行った（Ⅴ区の石塔群については29年度に報告予定）。この墓地部分は改葬の際に大きな土坑が掘削されて江戸期以降の石塔類が埋め戻されている状況で、遺構の遺存状況はきわめて悪く、遺構面も一部に旧状を残すのみであった。12月10日には墓所の遺構検出作業を終えて空撮とローリングタワーによる写真撮影を行った。その後、Ⅳ区で確認した二基の炭窯の精査、Ⅳ区南端部の谷部の包含層掘削を行い、２月26日までにすべての作業を終了して発掘機材を撤収した。

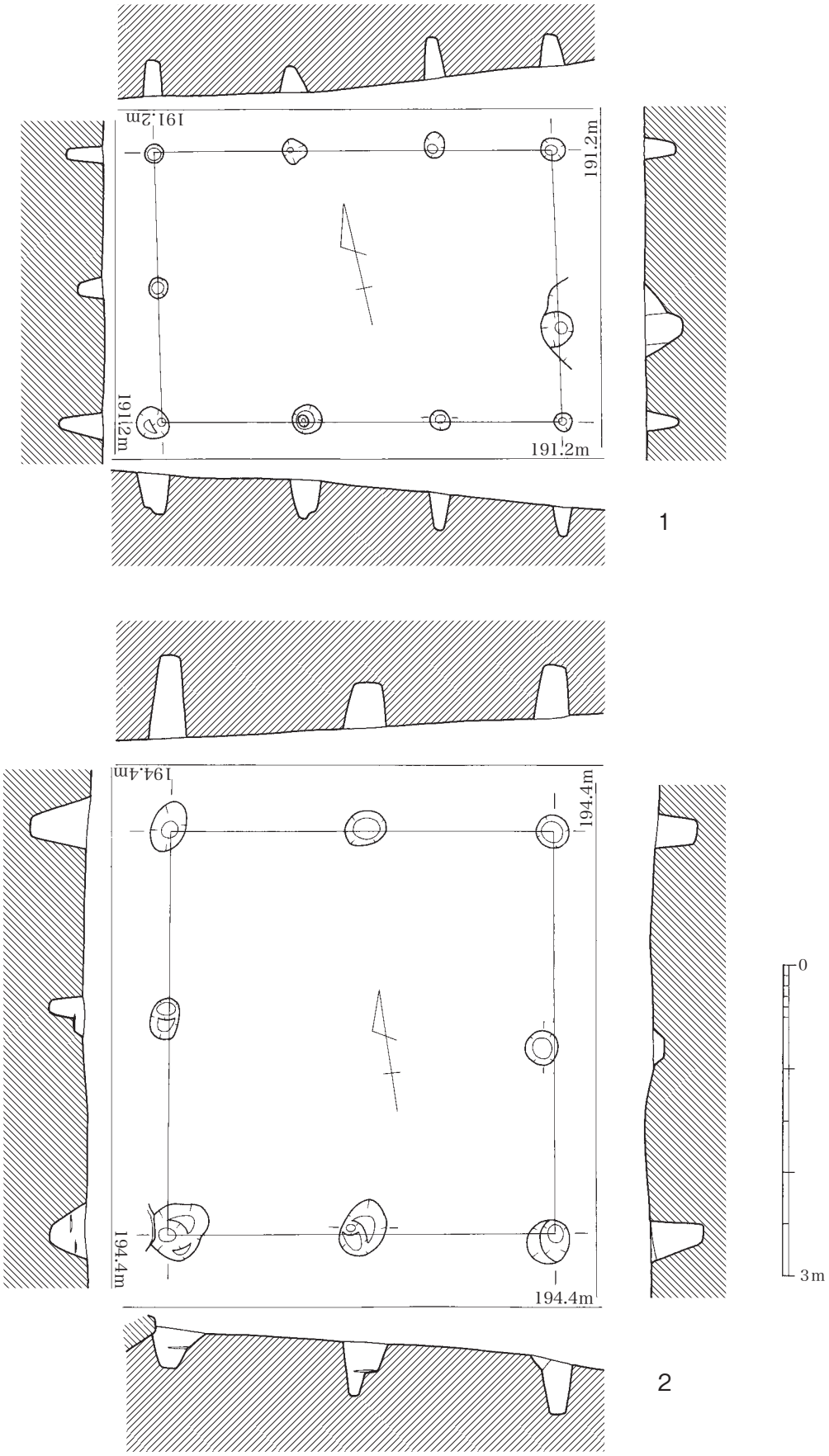
なお、２月17日には伊良原小学校の生徒と下伊良原区の区長の現地見学があった。

２）調査の概要

下伊良原下地ヶ原遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物跡３棟、土坑11基、谷３条、炭窯２基、土坑墓16基と墓地に伴う基壇石列、縄文時代の包含層などである。遺構は、Ⅰ～Ⅳ区では祓川に平行する段造成面の表土下の茶褐色土（遺物包含層）を除去した地山の黒色砂礫土ないしは粗砂礫層面で確認し、段造成の落ち際近くでは地山の上部に部分的に堆積する黄灰色シルト層（縄文時代の包含層）の面で検出した。以下、Ⅰ～Ⅳ区の集落部分とⅤ区の墓地部分の順に報告する。



第53図　調査区土層模式図

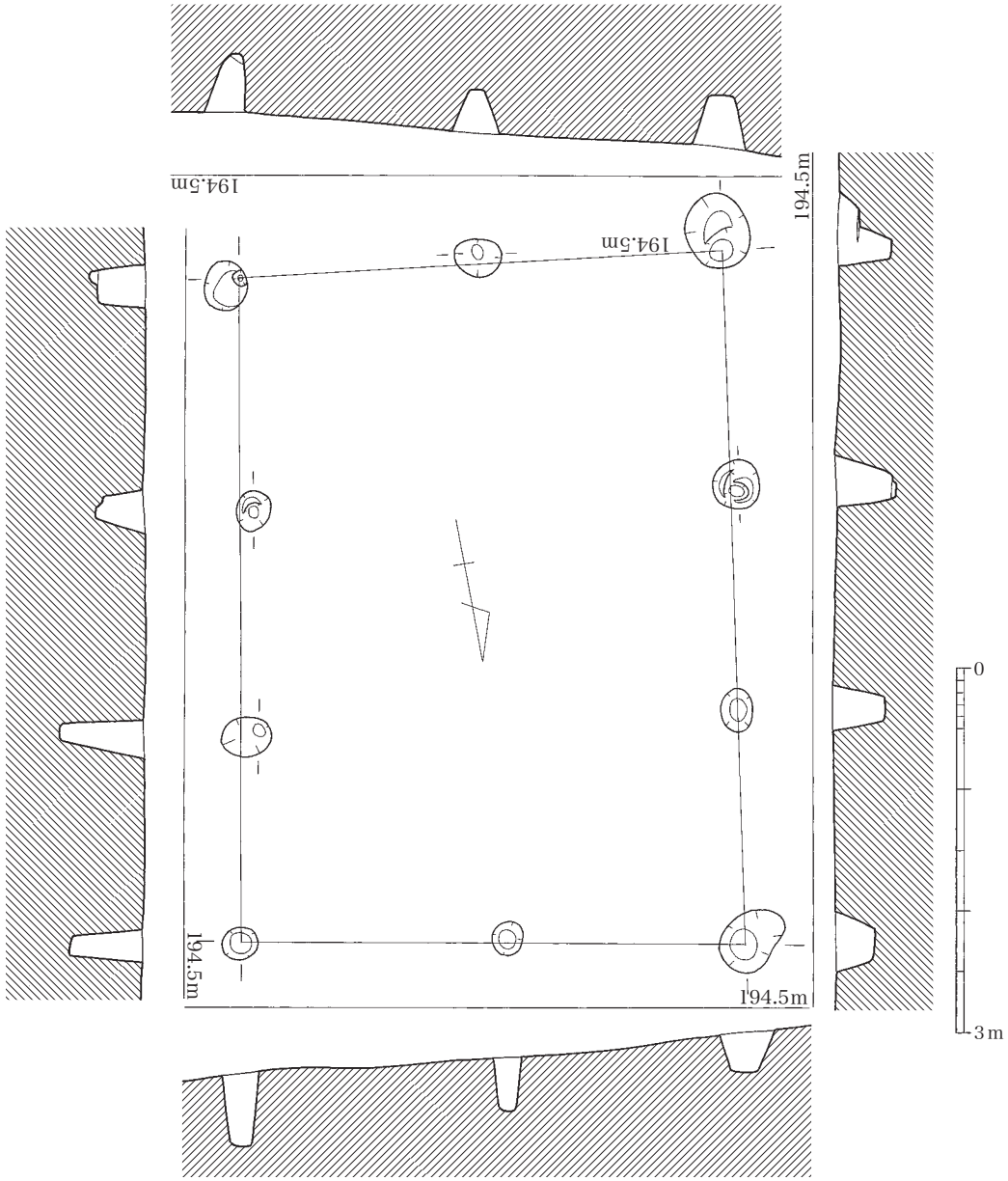


第54図　１・２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版47、第54図）

Ⅱ区南寄りで検出した２間×３間の東西棟の建物跡である。建物規模は梁行 2.6 ～ 2.8 m、桁行 3.8 ～ 3.95 mを測る。東側の中央の柱は新期に掘削されたピットによって破壊されている。柱掘方は円形で径 16cm～ 26cmを測る。掘方の深さは地形の傾斜に沿うように東側が深くなる傾向にある。柱痕跡は遺存していなかったが掘方の底面の柱位置と思われる凹みの位置から見て柱筋は通っているようである。柱間は 1.15 ～ 1.3 mほどで、梁間・桁間とも等間であると考えられる。



第55図　３号掘立柱建物跡実測図（1/60）

２号掘立柱建物跡（図版48、第54図）

Ⅲ区の北端部で検出した２間×２間の建物跡である。５号土坑と重複する。建物規模は東西 3.7 ～ 3.8 m、南北 3.85 ～ 3.9 mを測る。柱掘方は 30 ～ 50cmの円形ないしは楕円形である。掘方は１号掘立柱建物跡と同じように地形の傾斜に沿うように東側が深くなっている。柱痕跡が遺存していないため正確な柱間はわからないが、東･西筋の側柱が 1.85 ～ 2.1 m、南･北筋の側柱が 1.75 ～ 1.95 mを測り、東・西筋の柱間がやや広いようである。

出土遺物（第59図）

９は須恵質の摺鉢の口縁部。焼成はやや甘く､軟質である。調整は外面がナデで指頭圧痕が残る。内面は横方向の細かいハケで８本一単位の筋目が残る。

３号掘立柱建物跡（図版48、第55図）

Ⅲ区の北半部、２号掘立柱建物跡の南側で検出した２間×３間の南北棟建物跡である。建物規模は梁行 5.5 ～ 5.7 m、桁行 4.0 ～ 4.1 mを測る。掘方の深さはやはり東側に向かって深くなっている。柱痕跡は残っていなかったが、柱間は梁間が 1.95 ～ 2.15 m、桁間は 1.7 ～ 1.95 mを測り、梁間がやや広いようである。

土坑

１号土坑（図版48、第56図）

Ⅰ区の南端部、谷１と谷２の間の平坦部で検出した。平面形状は楕円形を呈し、規模は 0.9 m× 0.7 mを測る。北側から東側にかけてテラスがあり、南西側の底面はフラットになる。深さは 18cmを測る。埋土は黒灰色砂質土で、底面から浮いた状態で径５cmほどの円礫が出土した。

２号土坑（図版49、第56図）

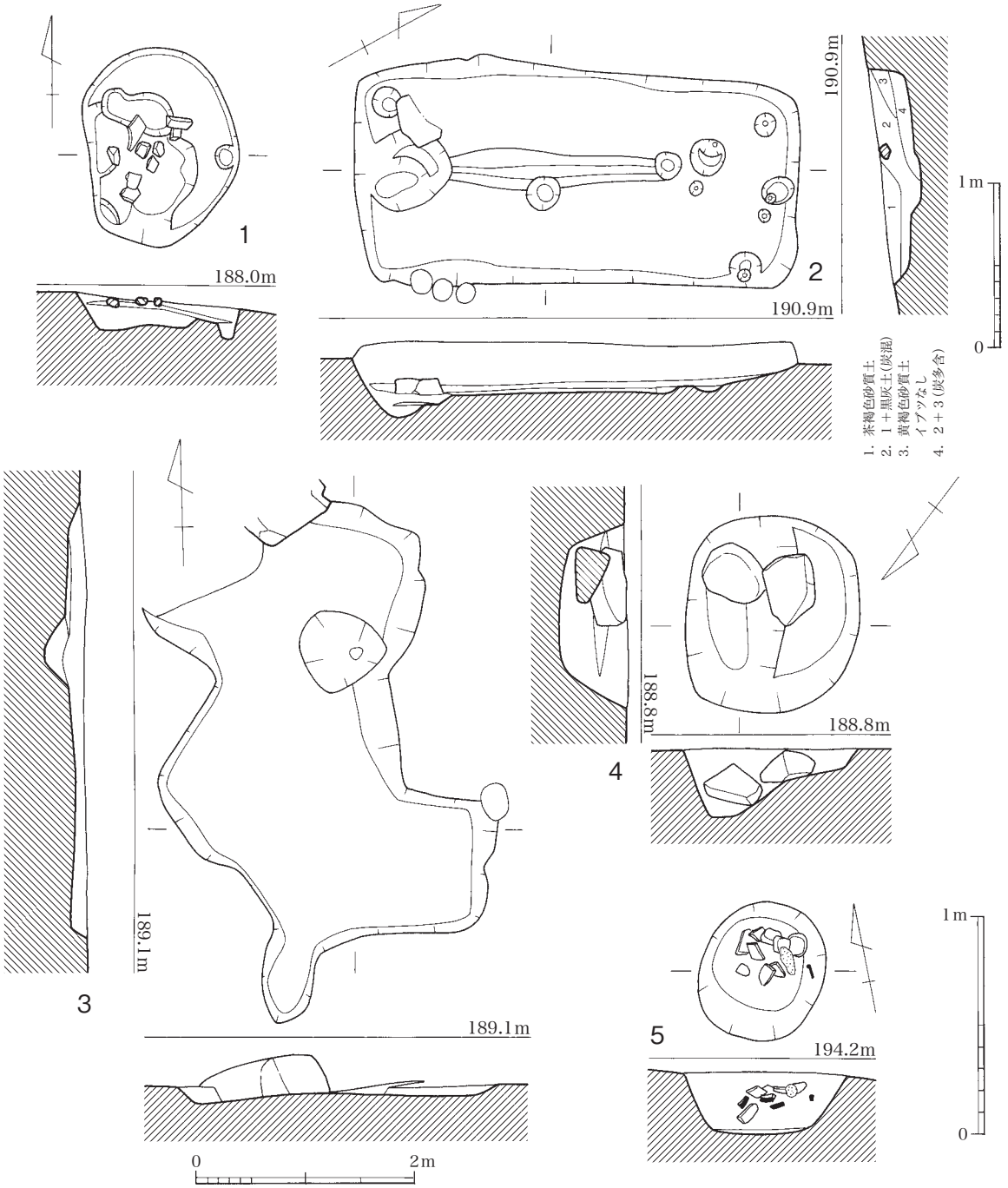
Ⅱ区南端部、１号掘立柱建物跡の南側で検出した。平面形状はやや四隅が丸味をもった長方形である。底面はフラットで､中央部に長軸に沿って幅 10cm､現存長 60cmの溝が伴う。規模は 2.7 m× 1.3 m、深さ 30cmを測る。なお、壁面が四面ともわずかに焼けて赤化している。層位は大きく４層に分かれ、２層目と４層目には径数mmほどの炭化物が含まれていた。

３号土坑（第56図）

Ⅰ区の中央部、谷１の北側の肩近くで検出した。平面形は不整形で、底面はフラットである。深さは 20cmを測る。埋土は茶灰色土。

４号土坑（図版49、第56図）

Ⅰ区の北半部で検出した。平面形は円形で、南西側にテラスをもつ。底面は中央部が最も深く、そこから壁が丸味をもって立ち上がっている。埋土は黄茶色砂質土に黄褐色土が混じる。規模は径 80cm、深さ 33cmを測る。土坑内からは径 30cmほどの円礫が２個出土したが底面から浮いており、また面も揃っていないことから投棄されたような状態といえる。



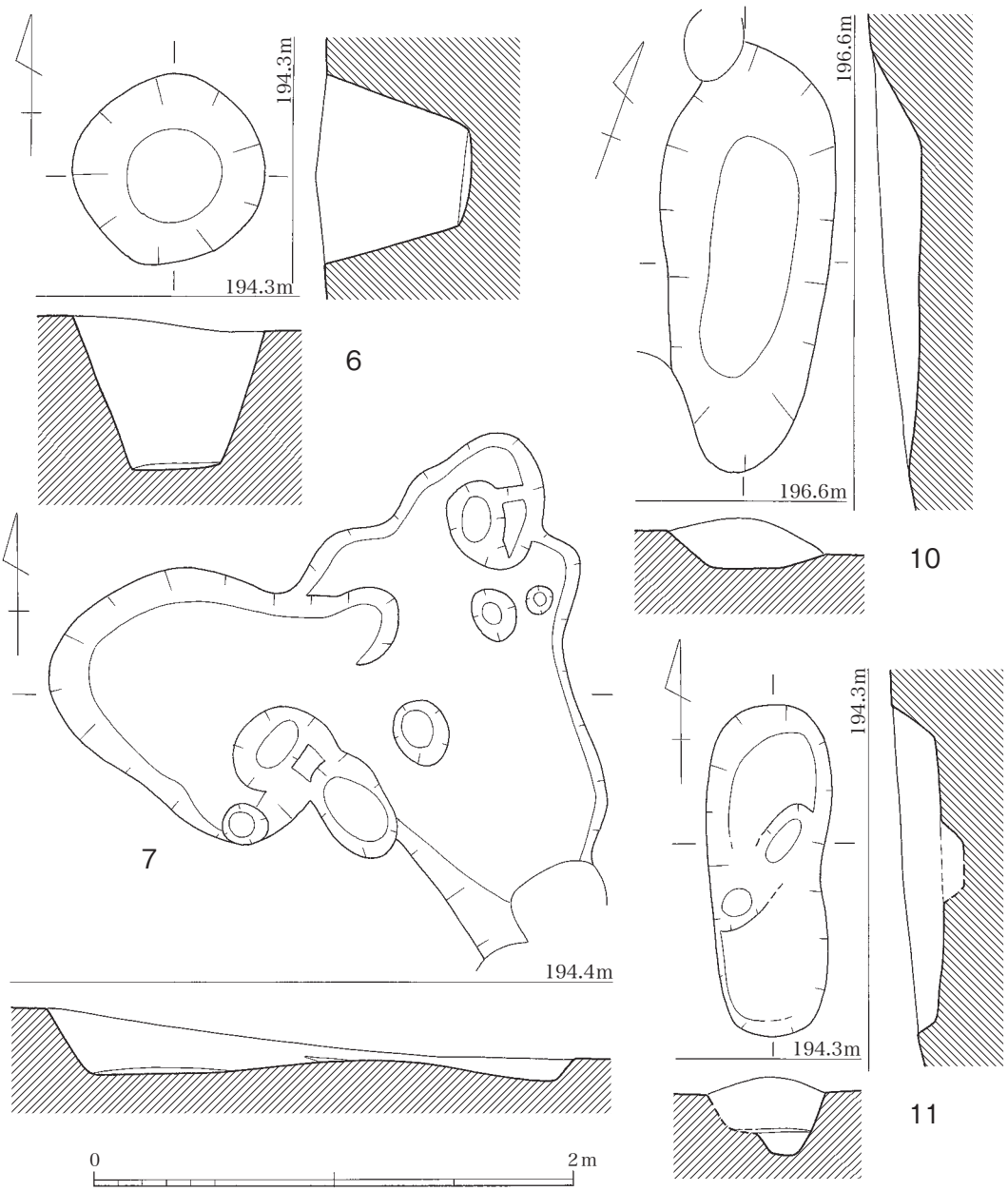
第56図　１～５号土坑実測図（１・４・５号：1/30、２号：1/40、３号：1/60）

５号土坑（図版49、第56図）

Ⅲ区の北端部で検出し、２号掘立柱建物跡と重複している。平面形状は円形で、底面はフラットに近く、壁は丸みをもって立ち上がっている。規模は径0.6 m、深さ0.3 mを測る。底面から浮いた状態で径５～10cmほどの大きさの礫がまとまって出土した。また同じく底面から浮いた状態で鉄釘が出土した。規模が小さく疑問が残るものの、あるいは墓になる可能性も考えておきたい。

６号土坑（図版50、第57図）

Ⅲ区の北半部、３号掘立柱建物跡と重複して検出した。平面形状は円形で、壁はフラットな底面



第57図　6・7・10・11号土坑実測図（1/30）

から開きながら直線的に立ち上がる。規模は径0.8 m、深さ0.6 mを測る。

出土遺物（図版61、第59図）

１は土師器の小皿。糸切り。

２は白磁皿。いわゆる枢府磁。白色の胎にやや灰味がかった釉を施す。底部及び高台畳付は露胎となる。見込みには花唐草文が押捺される。

７号土坑（第57図）

Ⅲ区の北半部、６号土坑の北側に位置し、３号掘立柱建物跡と重複して検出した。平面形状は不整形で、底面はフラットであるが東側に向かってわずかに傾斜している。深さ30㎝を測る。検出の際に確認することができなかったが、二基の土坑が重複していた可能性もある。

10号土坑（第57図）

Ⅳ区の中央部で検出した。平面形状は長い円形である。規模は長さ 1.8 m、幅 0.5 m、深さ 20㎝を測る。底面はフラットで、壁の立ち上がりは緩い。

11号土坑（第57図）

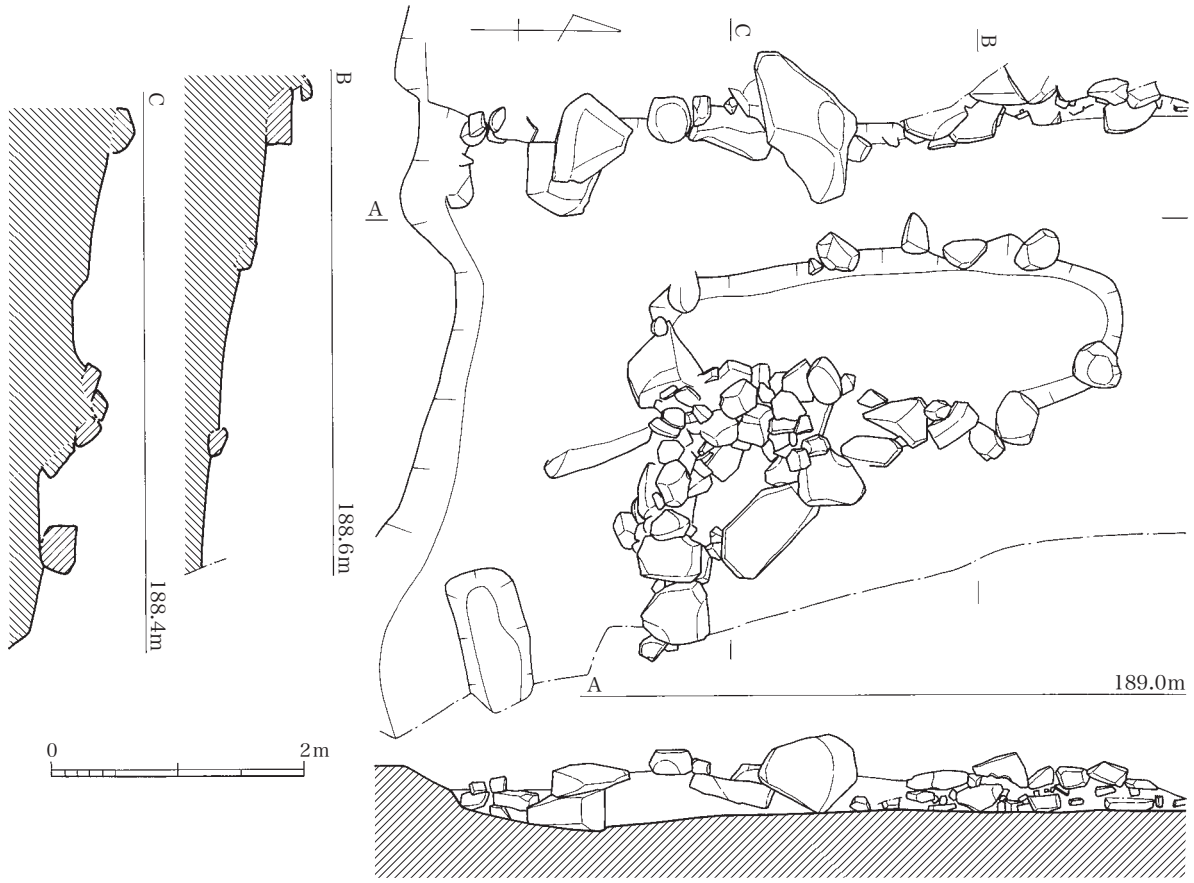
Ⅲ区の中央部、３号掘立柱建物跡の南側で検出した。平面形状は長円形で、規模は 1.4 m、幅 0.5 m、深さ 21㎝を測る。検出時には確認できなかったが、二つのピットと重複していたようである。埋土は黄灰色シルト。

ピット

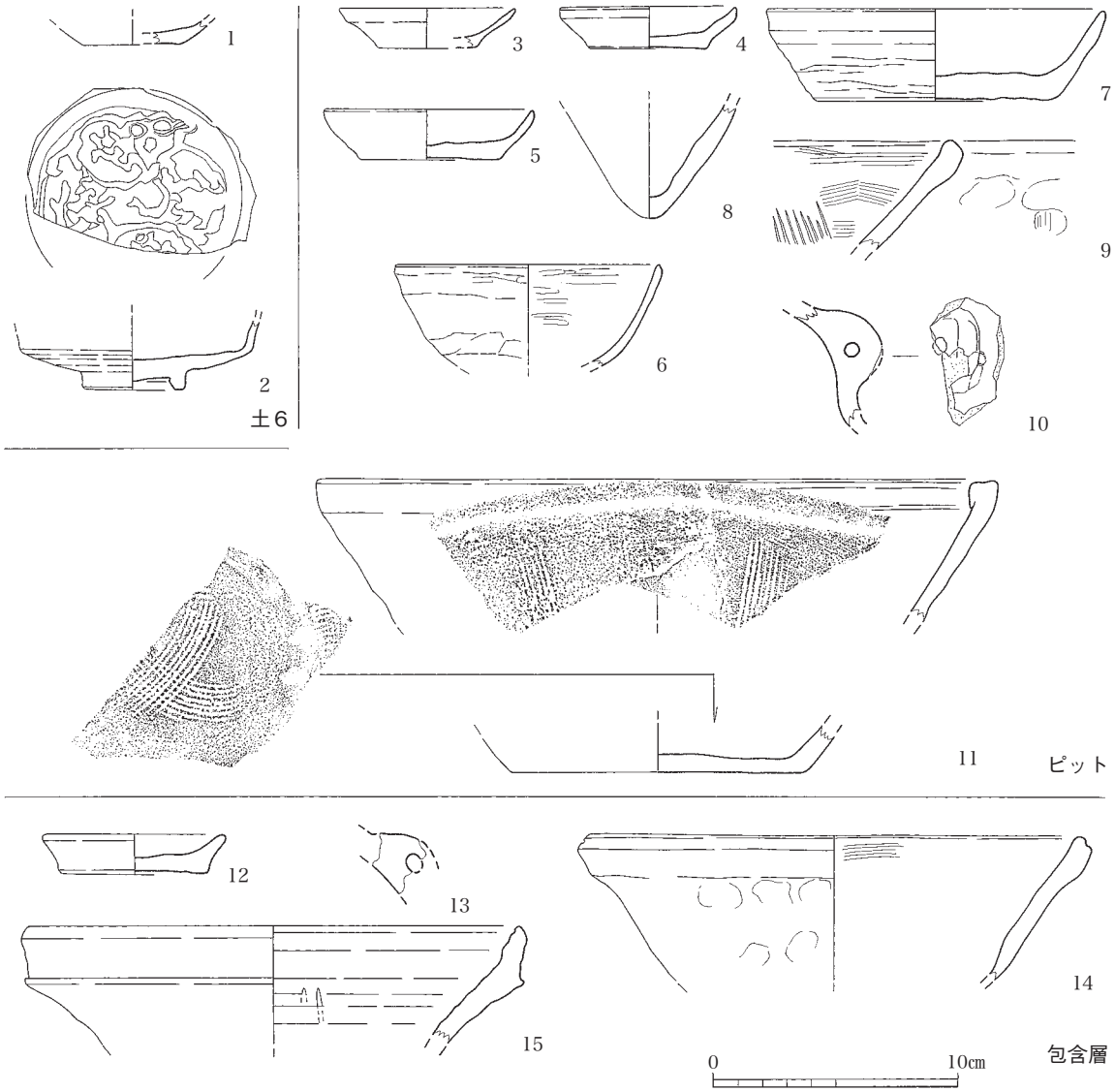
Ⅰ～Ⅲ区ではピットを確認したが、多くは建物跡等として認識できない。

出土遺物（図版61、第59図）

３～５は土師器の小皿。いずれも底径が小さく、体部が開くタイプである。３は復元口径 7.2㎝、復元底径 4.2㎝、器高 1.6㎝、５は復元口径 8.6㎝、復元底径 5.8㎝、器高 2.1㎝を測る。いずれも糸切り。６は土師器の碗。調整は内面が横方向の細かいミガキ、外面は口縁部下以下が手持ちヘラケズリ。復元口径は 11.0㎝を測る。７は土師器の坏。糸切り。底部内面はナデ調整を行う。口径 14.0㎝、底径 10.2㎝、器高 3.8㎝を測る。８は底部が尖るものでロート状の器形になろうか。色調は内面が褐色、



第58図　谷２検出石列実測図（1/60）



第59図　6号土坑・ピット・包含層出土土器実測図（1/3）

外面が茶褐色を呈する。胎土は精良で砂粒をほとんど含んでいない。調整は摩滅が著しいがナデと思われる。

10は瓦質土器の釜の耳部。調整は内外面ともナデ。11は瓦質土器の摺鉢。口縁端部を内側に折り曲げ肥厚させる。体部内面と見込み部分に８本一単位の筋目を施す。口径28.0cmを測る。

谷

谷１（付図）

発掘区の南端部で検出した。西側の山側から祓川に向かって走る。幅13ｍ分を確認したが、南側の肩は調査区外となる。埋土は灰色の粗砂である。

出土遺物（第60図）

１は土師器の坏。

２は青磁碗の口縁部。淡黄灰色の胎に緑色の釉を施す。釉には貫入がみられる。

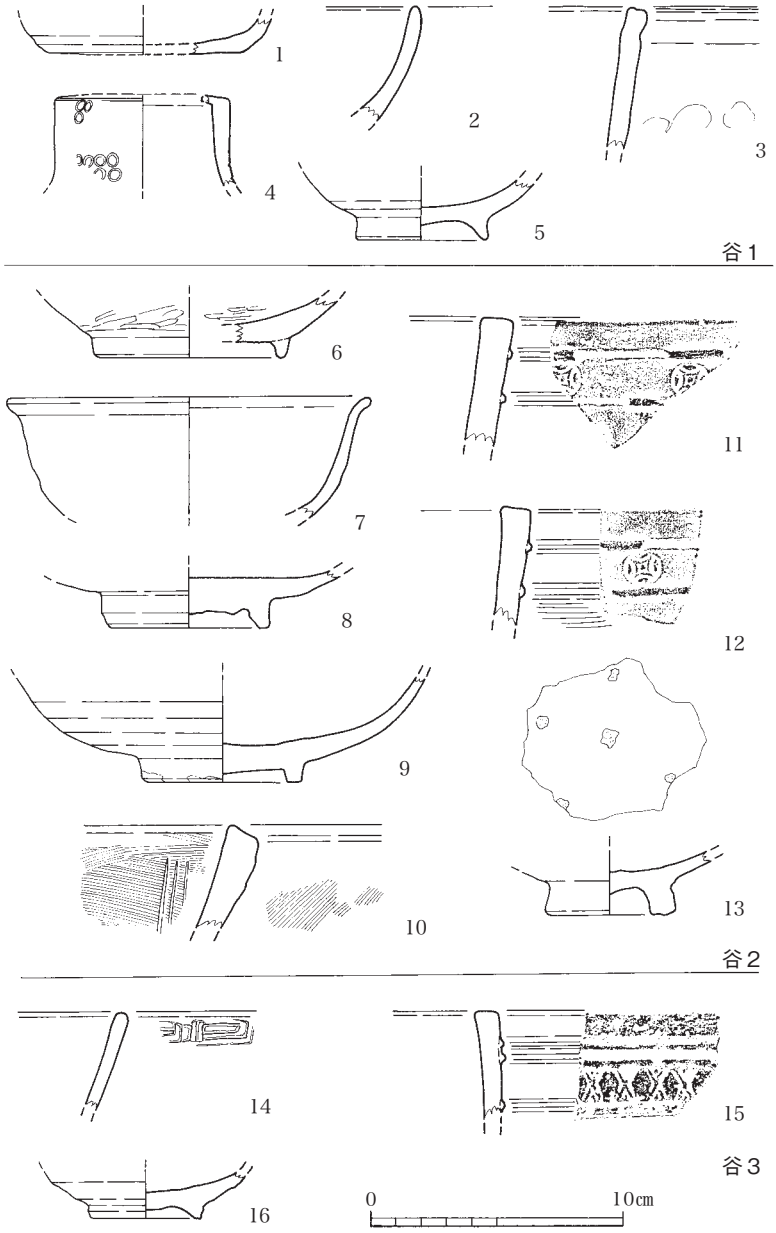
３は土師質土器の鍋。口縁端部外面は沈線状に凹む。調整はナデだが、外面には指頭圧痕が明瞭

に残る。４も土師質土器。胎土は精良。外面は一部黒化している。小型の釜形の器形の口縁部とも思われるが、全形を知ることができない。復元口径は７㎝ほどである。外面には上端と下端に円文のスタンプが帯状に施されている。

５は陶器碗。丸みを帯びた体部に踏ん張った高台が付く。胎は黄褐色で底部から高台畳付は露胎となる。

谷２（図版50・51、第58・付図）

発掘区の東南端から南側にかけて検出した。多少の出入りはあるが幅は最大で19ｍを測る。埋土は灰色の粗砂、細砂である。量的にさほど多くはないが遺物を含んでいる。地形から見て祓川へ向かう自然流路であることは明らかであるが、調査区の東端部には人為的に並べられた石列が存在する。石列は谷に直交して長さ６ｍにわたって並べられる。その北半部の長さ２ｍほどの範囲には、５～40㎝ほどの大きさの自然石を２段に積んでいる箇所も見受けられる。この石列の前面には幅約１ｍの平坦面が存在することから谷を渡る通路とみられ、石列はこの通路に伴う造作と考えることができる。またこの石列の前面（東側）には、これと平行して長さ３ｍにわたり礫が密集する箇所があり、南端部で東に折れている。礫は西側の石列のように整然と並べられたり積まれたような状況ではないが、西側の石列とセットとなって通路を形成するものであるとみられる。この谷からは青磁片のほか、五輪塔の空風輪や土錘などの遺物が出土している。



第60図　谷出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版61、第60図）

６は土師器の碗。丸みを持った体部に直立する高台を貼付する。調整は内外面とも細かいミガキを施す。

７～８は青磁碗。いずれも龍泉窯系。７は体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。肥厚した口縁端部は丸く収める。灰色の胎

に緑灰色の釉を施す。８も碗。灰色の胎に緑色の釉を施す。９は碗。体部は丸みを持って立ち上がり、直立する高台を削り出す。器壁は全体的に薄い。胎は灰色で淡緑灰色の釉を施す。見込みに花文のスタンプが押捺される。

10は土師質の摺鉢の口縁部。口縁端部は肥厚し、面をなしている。調整は内外面とも斜位の細かいハケ。内面には筋目が入るが単位は不明である。

11・12は瓦質土器の鉢の口縁部で同一個体である。外面の口縁部下に断面蒲鉾形の二条の突帯を巡らせ、突帯間にスタンプを押捺する。

13は施釉陶器の碗。高台部はやや内傾する。胎は橙褐色で灰褐色の釉を施す。外面は露胎である。

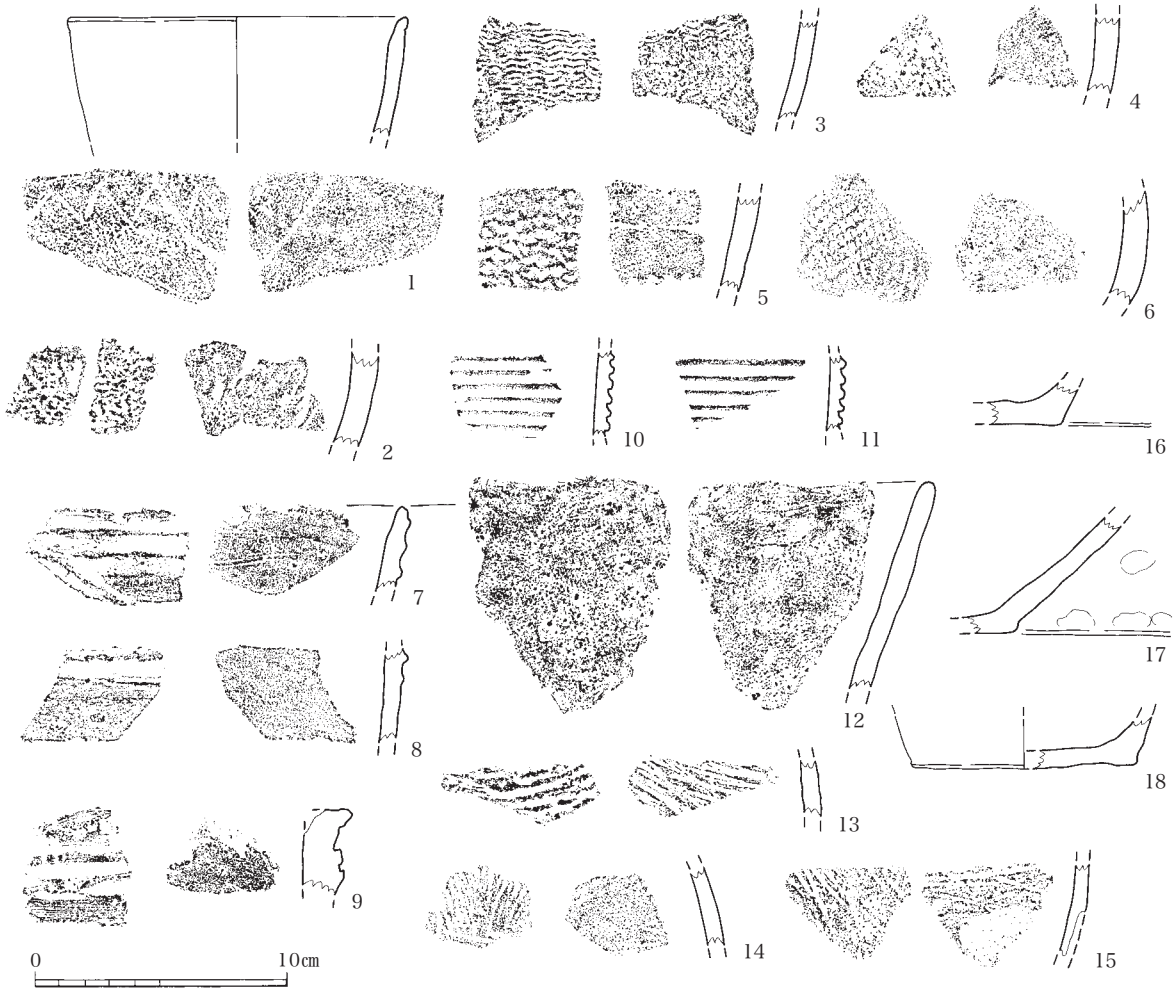
谷３（付図）

北側に大きく落ち込み祓川と直交する谷で、Ⅲ区の北端部で南側の肩を検出した。埋土は灰色砂質土である。

出土遺物（図版61・62、第60図）

14は青磁碗。口縁端部は厚みがあり丸く収める。胎は灰色で、緑灰色の釉を施す。釉は厚い。外面の口縁下には連続する雷文のスタンプを押捺する。

15は瓦質土器の鉢。直立する口縁下に二条一対のｍ字形の突帯を巡らせ、突帯間に連続する菱形文を押捺する。



第61図　縄文土器実測図（1/3）

16 は陶器碗。灰色の胎に薄い灰色の釉を施す。見込みには目跡が残る。

層位

茶褐色土層

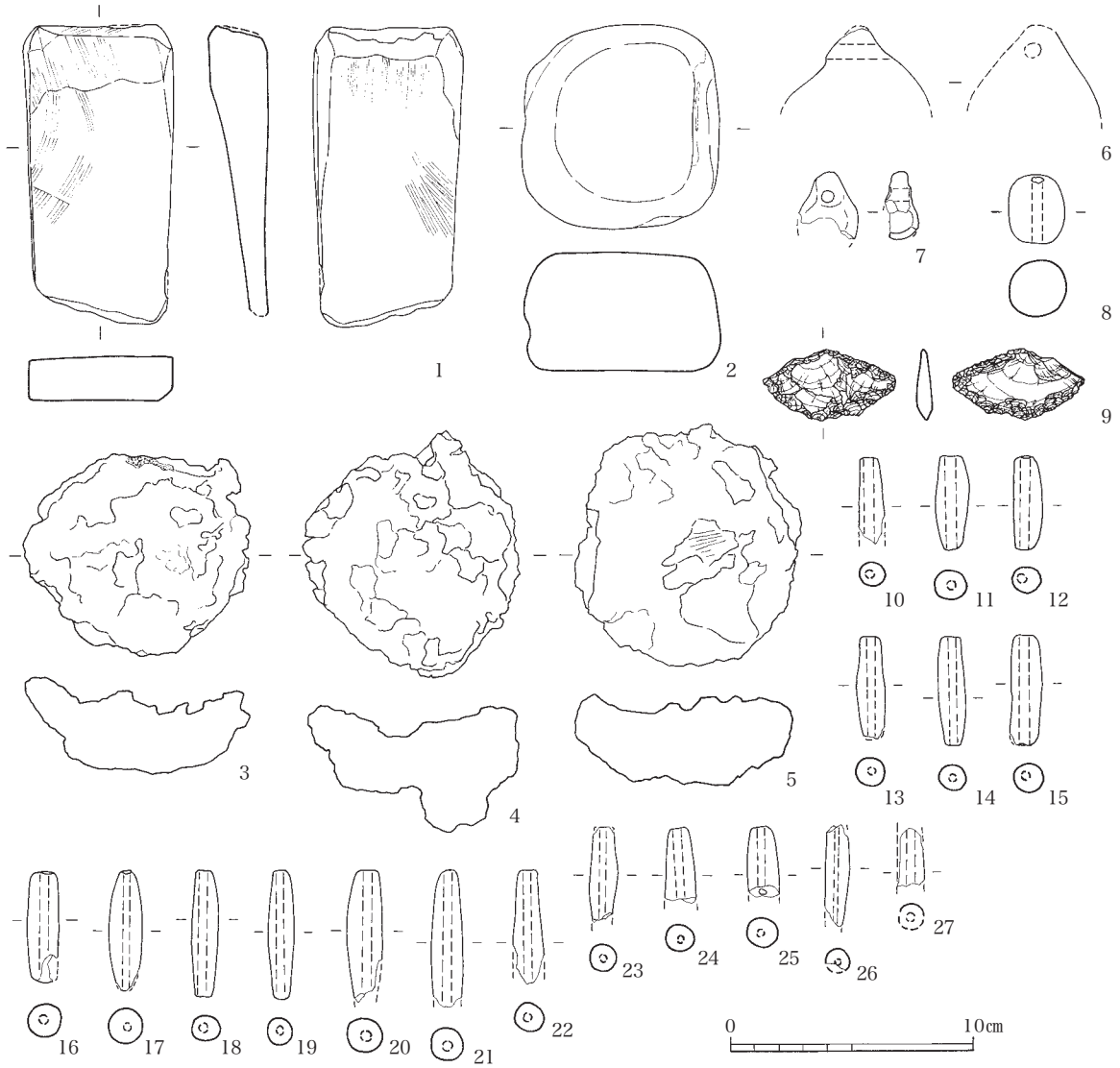
出土遺物（図版61、第59図）

Ⅰ区～Ⅲ区の遺構面を覆っている茶褐色土層からわずかではあるが遺物が出土している。

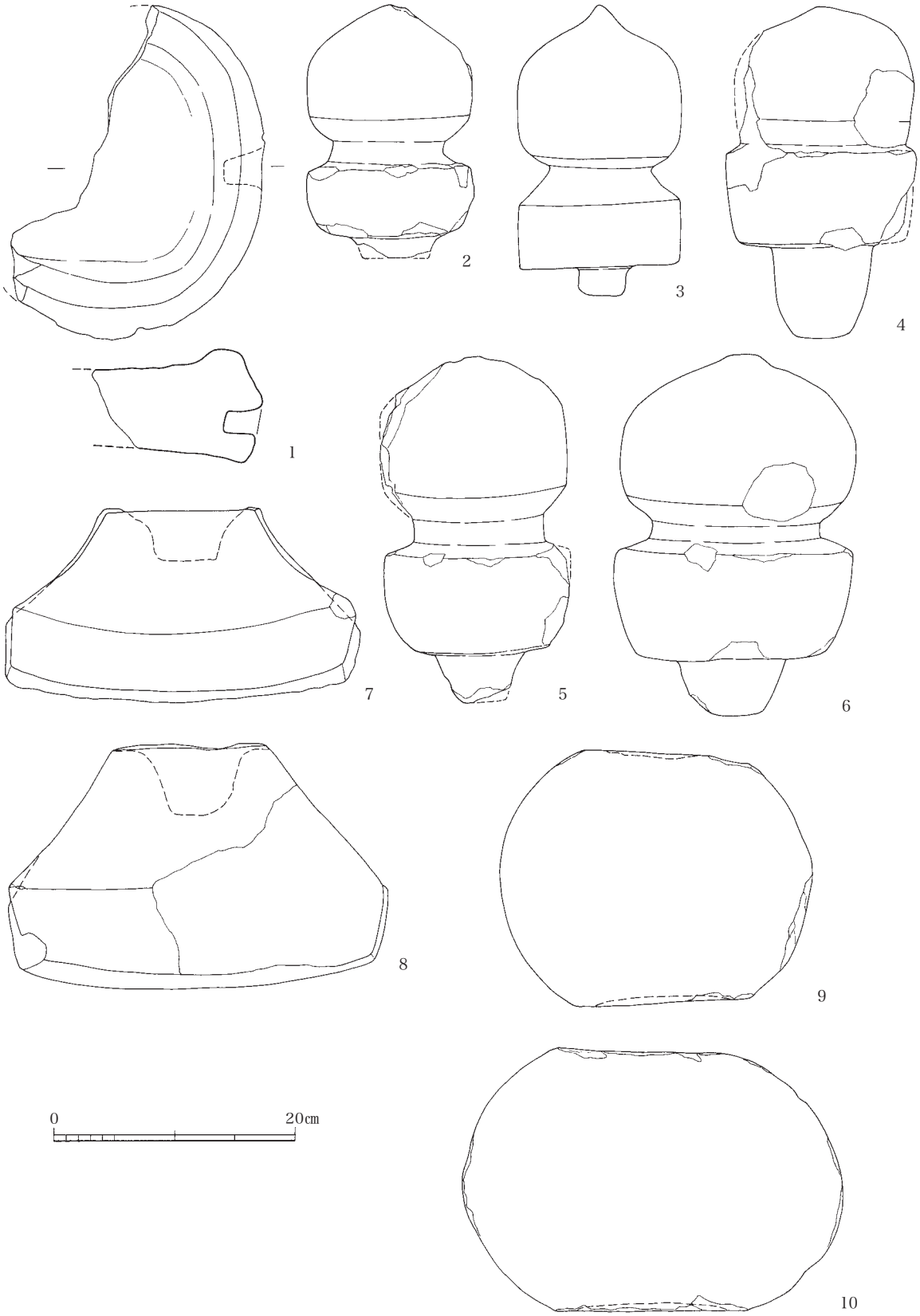
12 は土師器の小皿。口径 7.4cm、底径 6.0cm、器高 1.6cmを測る。底部内面はナデ調整。糸切り。

13 は瓦質土器の釜の耳部。14 は瓦質土器鍋。口縁部は肥厚している。調整は外面がナデで指頭圧痕が明瞭に残る。内面は横方向の細かいハケ。復元口径 21.0cmを測る。

15 は陶器の摺鉢。口縁部と体部の屈曲部はつまみ出して稜をなす。調整はヨコナデ。内面には筋目が残るが単位はわからない。



第62図　出土石器・鉄滓・土製品実測図（1/3）



第63図　石製品実測図（1/5）

縄文時代の包含層

Ⅰ～Ⅳ区において祓川に併行する段造成面の表土下の茶褐色土（遺物包含層）の下層で、かつ黒色砂礫土ないしは粗砂礫層面（地山）を覆う黄灰色シルト層で、段造成の落ち際近くに堆積する。この黄灰色シルト層は部分的に20cmほど遺存し、層位中から縄文土器が出土している。ここでは新期遺構に混入したものも含めて縄文土器をまとめて報告する。

土器（図版61・62、第61図）

１～６は押型文の深鉢。１は砲弾形もしくは尖底の器形と考えられる深鉢の口縁部である。口縁端部は丸く収める。外面にはヘラ状の工具により山形に文様を刻む。調整は摩滅が著しく不明。口径は13.6cmを測る。２は細かな楕円文。内面はナデ。３～５は横走の山型文。３は口縁部近くの破片で内面にも施紋される。４・５とも内面の調整はナデ。６は格子文。体部が丸みを持っている。

７・８は同一個体とみられる。ともに貝殻条痕によりミミズ状の突線を作り出している。砲弾形の器形になるものと思われる。

９は口縁部で内側の端部は欠失する。波状口縁になる。外面には突帯を作り出す。

10・11は鉢の口縁部。二枚貝の貝殻縁部により平行の沈線を巡らせる。

12は粗製の鉢の口縁部。調整は内外面ともナデ。13～15は内外面に条痕が残る。16～18は底部。調整は確認できる部分についてはいずれもナデ。17の外面には指頭圧痕が残る。

その他の出土遺物

石器（図版62、第62図）

１は砥石。長さ13.3cm、幅6.2cm、厚さ2.5cm。重量234ｇ。砂岩製。使用面は表裏２面。表面は使い込みにより凹んでいる。茶褐色土出土。２は磨石。使用により全面が磨れている。8.5cm×8.3cm。厚さ4.9cm。重量0.6kg。６号土坑出土。９はスクレイパー。横長剥片の縁部に加工を施して刃部をつくりだしている。長さ5.4cm、幅2.9cm、最大厚0.7cm。重量10.3ｇ。安山岩製。谷１から出土。

鉄滓（図版63、第62図）

３～５は碗形滓。Ⅰ区中央部の谷２の北側の肩付近の層位中から鉄滓とともに数点が出土したものの、これに伴う遺構は確認されていない。重量は３が0.4kg、４・５が0.5kg。

土製品（図版63、第62図）

６・７は土製の鈴。ともに胎土は精良で砂粒を含まない。６は表土、７は包含層から出土した。８は土製の玉。長さ2.8cm、径2.3cm、重量17.7g。長軸方向に径４㎜の孔を穿っている。胎土は精良で砂粒をほとんど含んでいない。谷１から出土。10～27は管状土錘。最小の18が長さ3.5cm、径1.0cm、重量3.4ｇ。最大の21が長さ5.7cm、径1.3cm、重量9.6ｇ。10・12/14/15・18・20～22・24～27は谷２から出土した。その他は新期遺構から出土。

石製品（図版64、第62図）

１は石臼の上臼。平面形は正円にはならない。上面の縁部は緩く立ち上がる。挽手の差し込みは深さ3.2cm、断面形状は楕円形である。残存最大幅28.2cm、最大厚さ9.4cm。包含層から出土。

２～10は五輪塔の部材でいずれも凝灰岩製。２～６は空風輪。３は他に比べて造りが精巧で、かつ形状も風輪部分が直線的で上端径と下端径が揃っているため近代以降のものとみられる。４は火輪に合わせる出枘の長さが7.5cmと長い。風輪部分は他にくらべると直線的である。最大高・最大幅は、２が21.1cm、13.4cm、３が24.2cm、13.7cm、４が27.7cm、15.9cm、５が28.8cm、15.5cm、６が30.2cm、19.8cmを測る。７・８は火輪。７は下棟・軒とも反りが著しい。８は軒に厚みがある。７・８ともに上面の枘は平面円形。最大高・最大幅は７が16.3cm、29.6cm、８が20.5cm、31.4cmを測る。９・10は水輪。最大高・最大幅は、９が21.4cm、25.9cm、10が21.9cm、31.8cmを測る。６がⅠ区谷２、７・８・10がⅤ区から出土した。うち７・８は台座として転用され、原位置は保っていなかった。

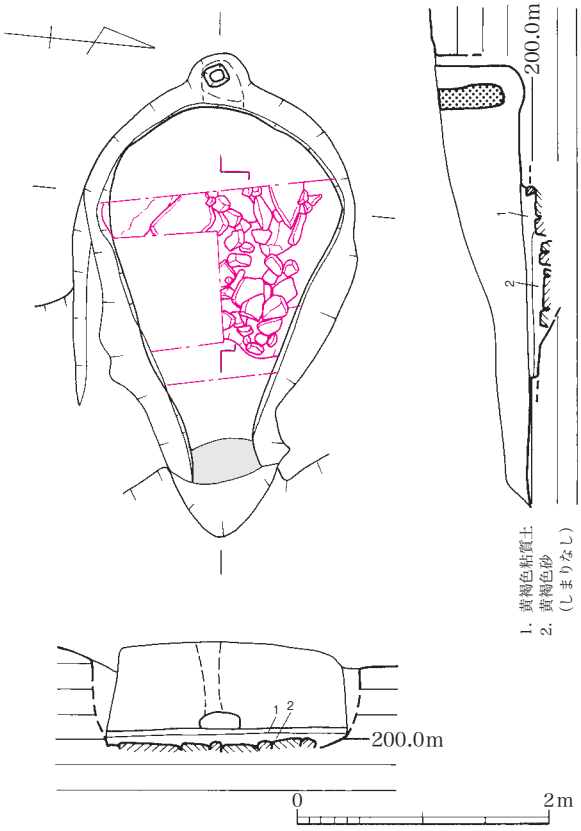
炭窯

１号炭窯（図版58・59、第64図）

Ⅳ区の中央部西壁際で検出した。東側の祓川に向かって開口している。平面形は杓文字形で、最大幅は中央よりも奥壁寄りにあり、そこから前面に向かってすぼまって窯口に至る。規模は長さ３ｍ、最大幅2.1ｍを測り、高さは上面が削平されている現状で67cmを測る。窯口は前面・壁体とも削平が及んでいるため構造は詳らかではないが、袖石などは伴わないようである。焚口の床面は熱を受け赤化しているもののさほど硬化していない。本体部分は床面・壁面ともコークス状になり硬化が著しい。

煙道は奥壁の中央にあり、煙道の口は幅33cm、高さ８cm、煙道は径12～18cmを測る。煙道の底は窯本体の床面から３～５cmほど下がり、そこから直上に立ち上がっている。煙道の内部も壁面と同じようにコークス状に黒化・硬化している。

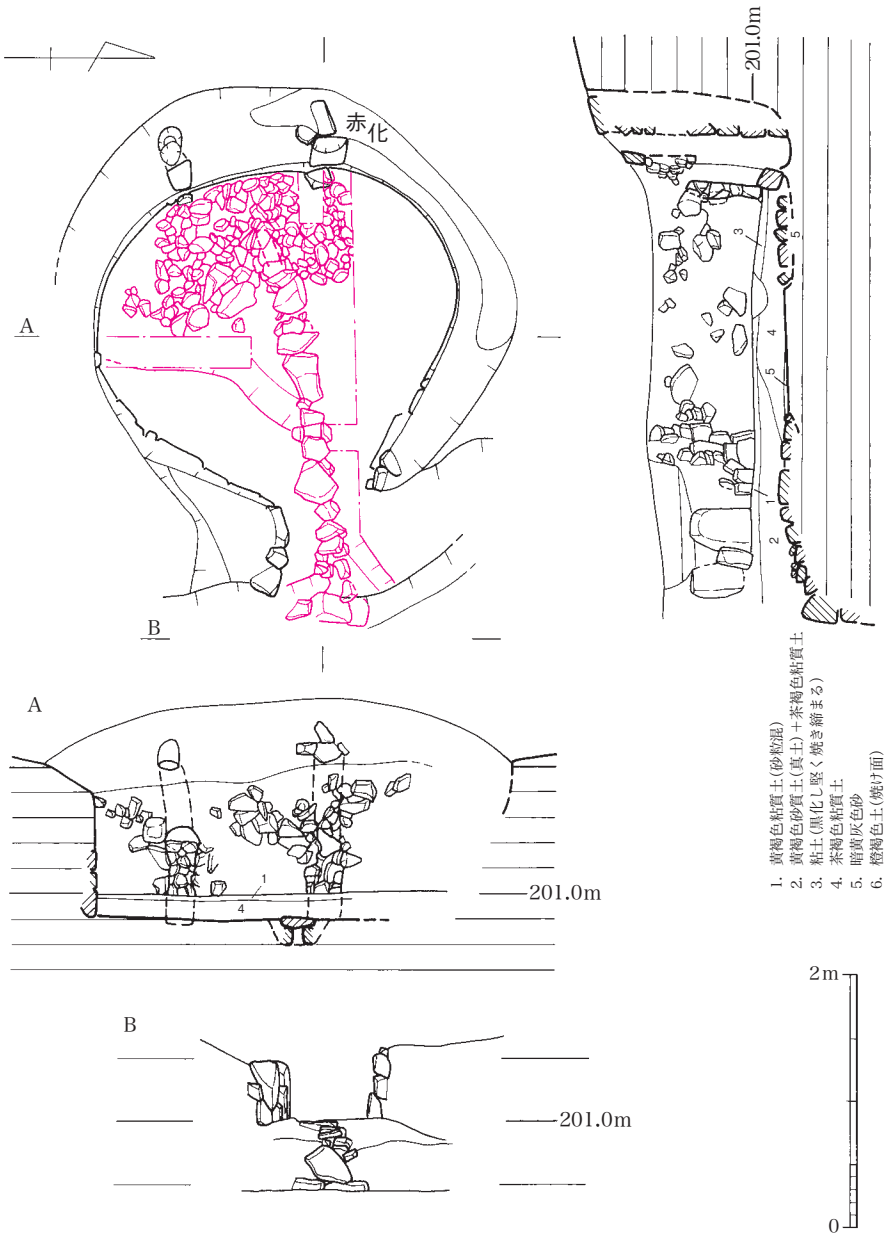
掘方は本体部が壁から20cmほど、また煙道部は約５cmほど大きめに地山を掘削し、その内側に粘土を貼って壁体としている。床面の粘土を貼る前に、概ねレベルをそろえて礫と砂を充填して湿気対策を行っている。



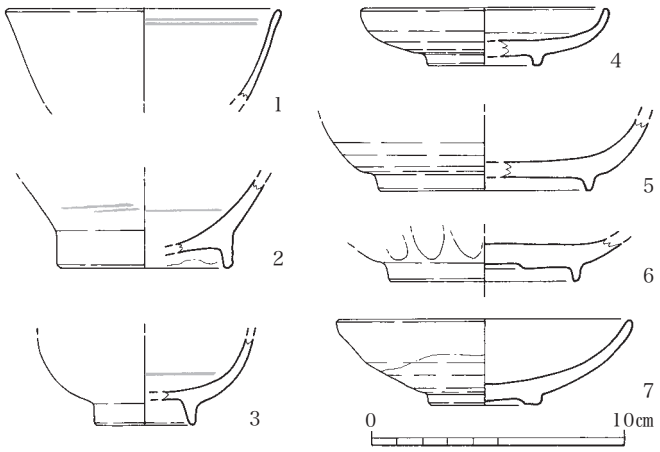
第64図　１号炭窯実測図（1/30）

２号炭窯（図版59・60、第65図）

Ⅳ区の北部西端で検出した。東側の祓川に向かって開口している。平面形は円形に近いが最大幅は中央部よりもやや奥壁側にあり、そこから窯口に向かってすぼまっている。本体の規模は長さ2.7ｍ、最大幅2.9ｍで、幅0.7ｍ、現存長0.7ｍの焚口が接続する。掘方は壁体よりも50cmほど控えた大きさである。そこに径10～25cmほどの角礫を積み、粘土を貼って壁体としている。床面・壁面とも焼けて黒化してはいるがそれほど硬化は進んでいない。



第65図　２号炭窯実測図（1/30）

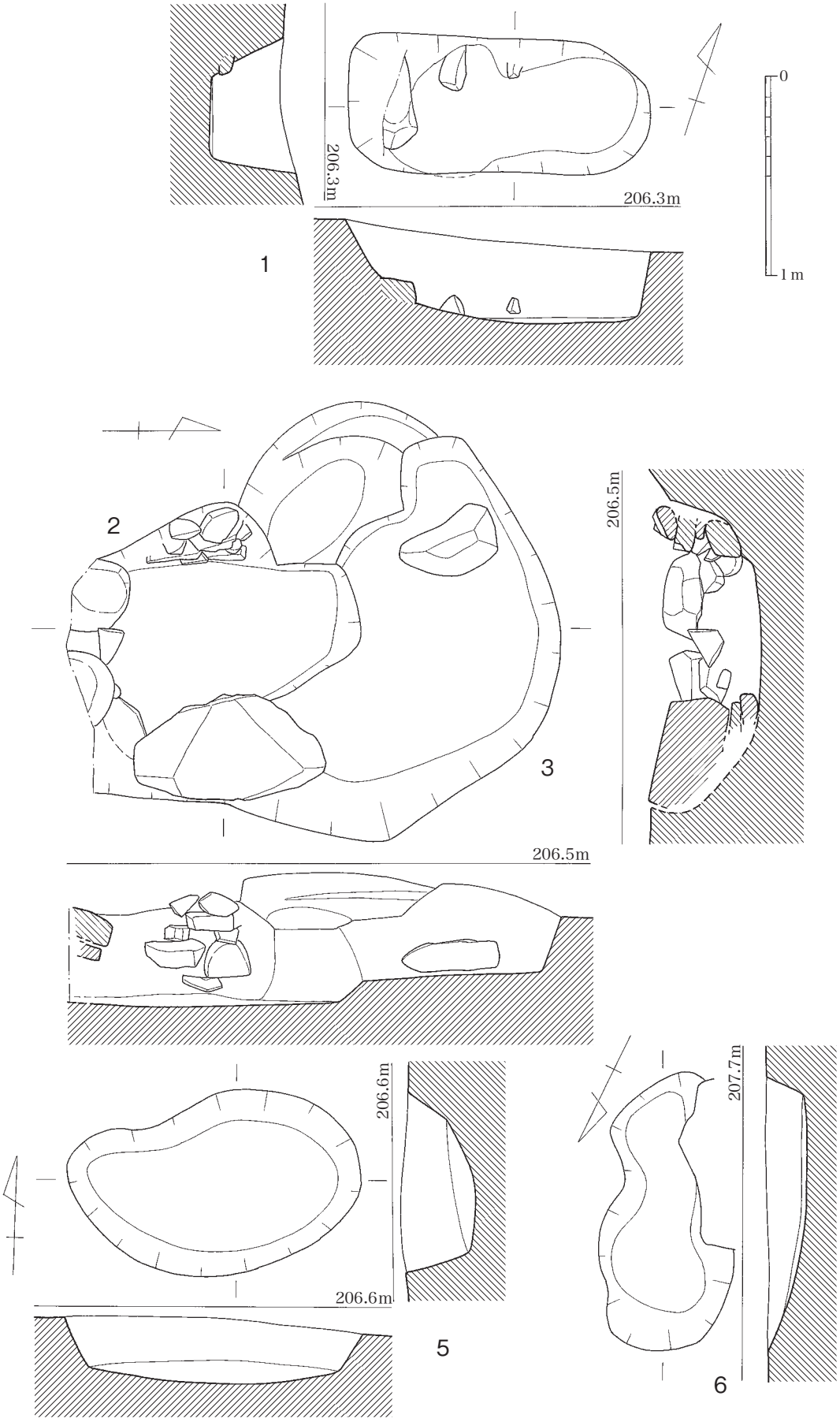


第66図　炭窯出土土器・陶磁器実測図（1/3）

煙道は奥壁側に二つあり、壁体と同様に角礫を積みながら粘土を貼って設えている。煙道の入口は上部が崩落していて定かではないが、幅は煙道の径と同じく20cmを測る。

窯口の左袖部には立石とその手前に小さめの角礫二石を積む。右袖は後世の改変で損なわれている。

床面は砂粒を含んだ黄褐色粘土を厚さ５cmほど貼っている。奥壁寄りの概ね三分の一の範囲は地山を一段掘りくぼめて



第67図　1～3・5・6号墓実測図（1/30）

径５～20cmの礫を水平に充填して敷き並べ、湿気対策としている。その上を黄灰色粘質土で覆い、さらに黄褐色粘土を貼って床面としている。また、この礫群の中央部から窯口に向かって排水溝が設えられている。排水溝は径10cmほどの小さめの石を並べて、その上に蓋石を置く。溝の幅は５～10cmで、焚口までは水平になり、そこから窯口までは傾斜している。

出土遺物（図版65、第66図）

１～５は肥前系の染付。１は染付の碗。灰色の胎に灰色釉を施す。外面に呉須で文様を描き、内面の口縁下に二重の界線を回している。復元口径11.0cm。２は広東碗の高台部分。灰色の胎に透明釉を施す。外面に草文とみられる文様、内面には界線を回す。３は碗。灰色の胎に透明釉を施す。外面に花文を描く。内面には界線を回し、中央部にも草文もしくは文字を描く。４は皿。灰色の胎に透明釉を施す。見込み部分を輪状に掻き取っている。高台畳付と底部外面は露胎となる。復元口径10.0cm、器高2.3cm。５は皿。胎は灰色で、透明釉を施す。内外面に草文を描く。底部外面にも界線を巡らせる。

６は白磁皿。白色の胎に青みがかった灰色の釉を施す。外面は鎬蓮弁で、見込みに菊花とみられる放射状の文様を押捺している。底部外面の釉を輪状に掻き取っているがそのほかは全面に施釉する。

７は唐津系の施釉陶器碗。茶灰色の胎に灰色の釉を施す。外面の口縁部下から底部にかけては露胎となる。復元口径11.8cm、高台径4.4cm、器高3.4cmを測る。

墓地

下伊良原下地ヶ原遺跡の最上段（Ⅴ区）に位置し、平成21年度に測量をおこなった「下地ヶ原石塔群」の下部にあたる。現状は段造成された平担地で、石列が北面・東面にまわっている。墓域を区画するこの石列には東面に階段を伴う。墓域内には遅くとも近世以降に墓が営まれるが、北東隅部にはある段階の表土である黒灰色土層の上に石列が載る一方、11～15号墓は黒灰色土の上面では検出することができず、この層を除去して検出に至った。したがって石列は近代ないしは現代に整備されたと考えられる。

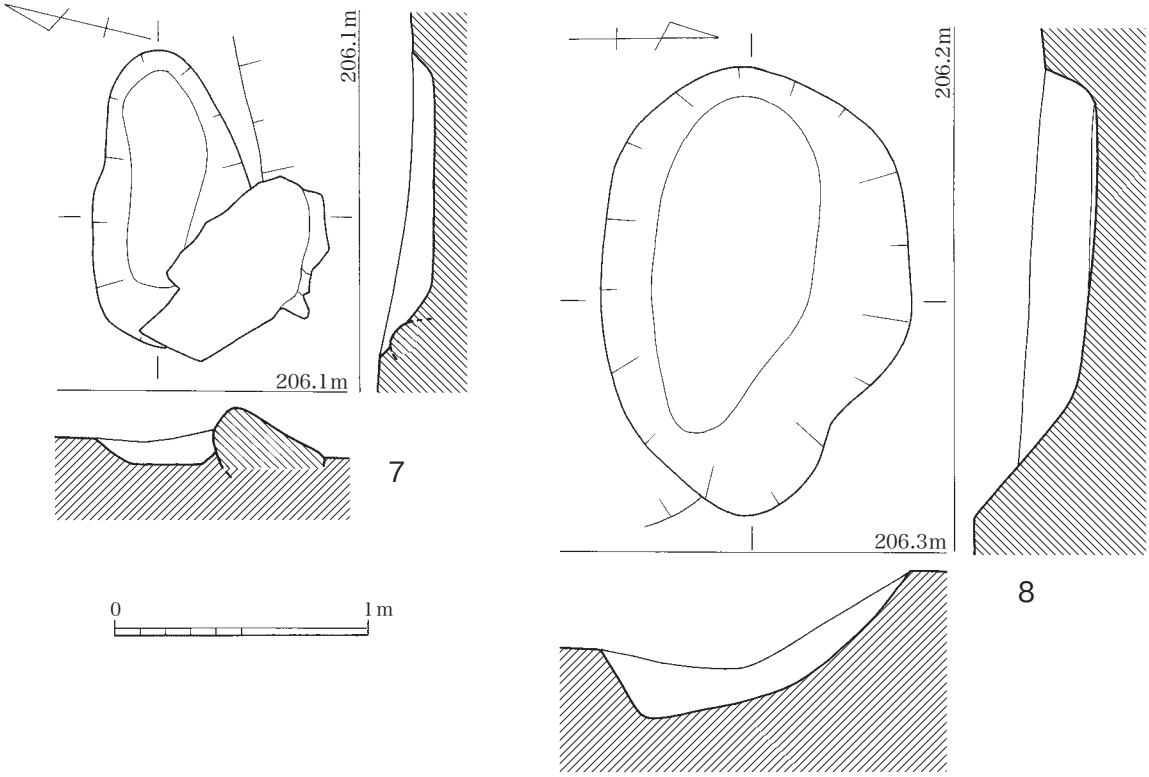
なお墓所は伊良原ダム建設に伴い「無縁墳墓等改葬公告」なされ、その期限は平成14年10月１日から１年であった。近世墓のほか近現代の墓も含まれているが、多くは改葬時の掘削や、その際に一括して墓石を埋め込んだ集石坑で破壊されている。

１号墓（図版54、第67図）

Ⅴ区の南西部、南壁際で検出した。平面プランは西側が角張った長円形で、規模は長さ1.25ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.45ｍを測る。下端は不整形である。底面は西側がやや高く、西壁際には地山の岩盤中にある上面が平坦な礫が存在する。

２号墓（図版54・55、第67図）

Ⅴ区の南西隅部で検出した。３号墓と重複する。平面プランは略長方形で、規模は長さ1.2ｍ、幅0.65ｍを測る。西辺の一部には礫を四段に積んでいる。底面はフラットである。



第68図　７・８号墓実測図（1/30）

３号墓（図版54、第67図）

Ⅴ区の南西部で検出した。２号墓と重複する。平面プランは不整形である。規模は現存長1.9ｍ、幅1.4ｍ、深さ0.45ｍを測る。墓坑の西寄りには長さ30㎝の礫が置かれていた。

中央付近から煙管が出土した。

出土土器（第73図）

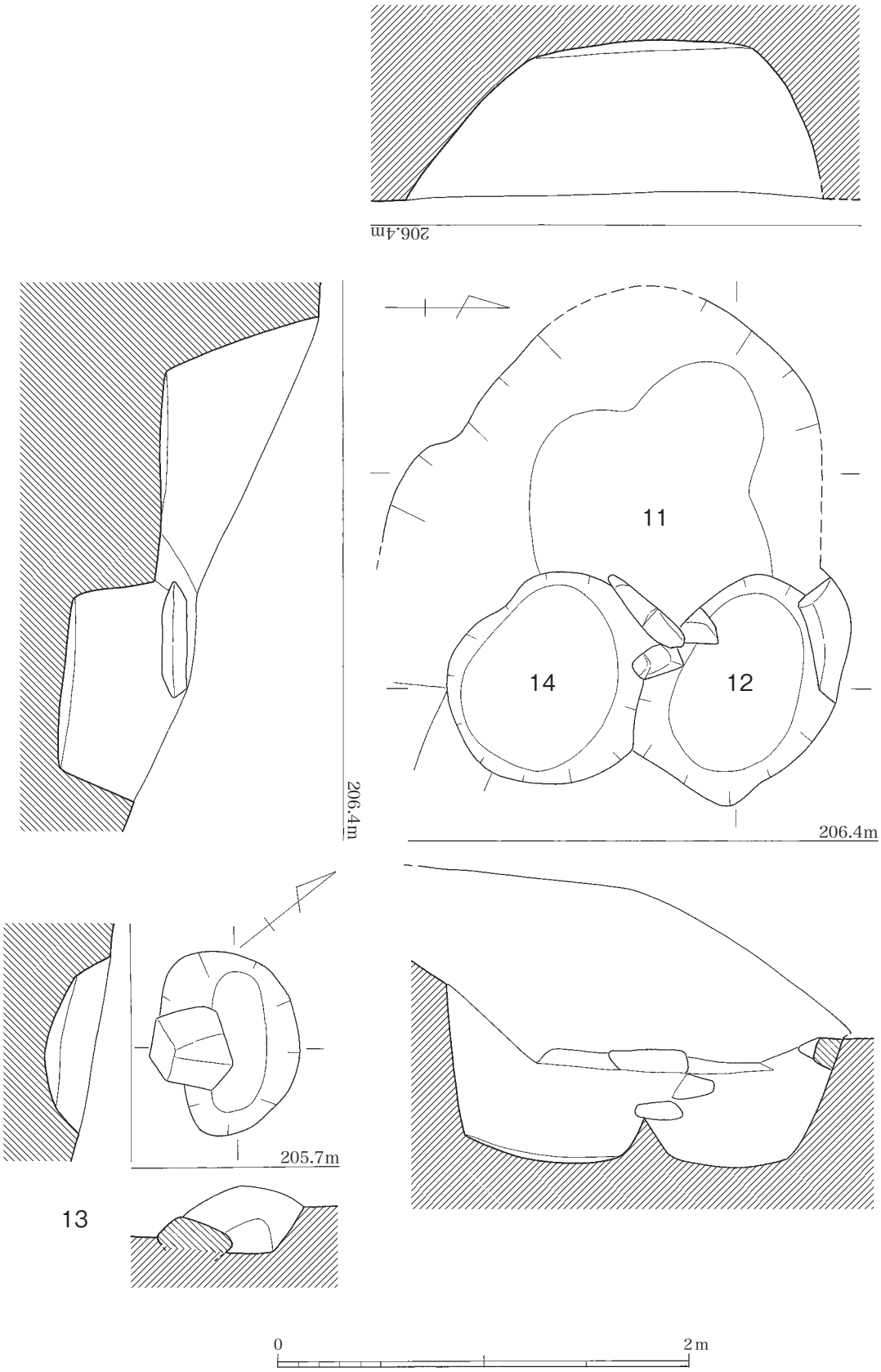
１は土師質の骨壺。最大径は体部の上位にある。口縁部は直立し、端部は断面三角形状に肥厚する。調整は内外面とも板状工具によるケズリ状のナデのあと、体部内面の中位はナデを行う。底部はわずかに遺存するのみであるが、体部と同様の板ナデをおこなっているようである。また、体部と口縁部との境の屈曲部には工具痕が残っている。埋土中から出土したが原位置は保っていない。

５号墓（図版55、第67図）

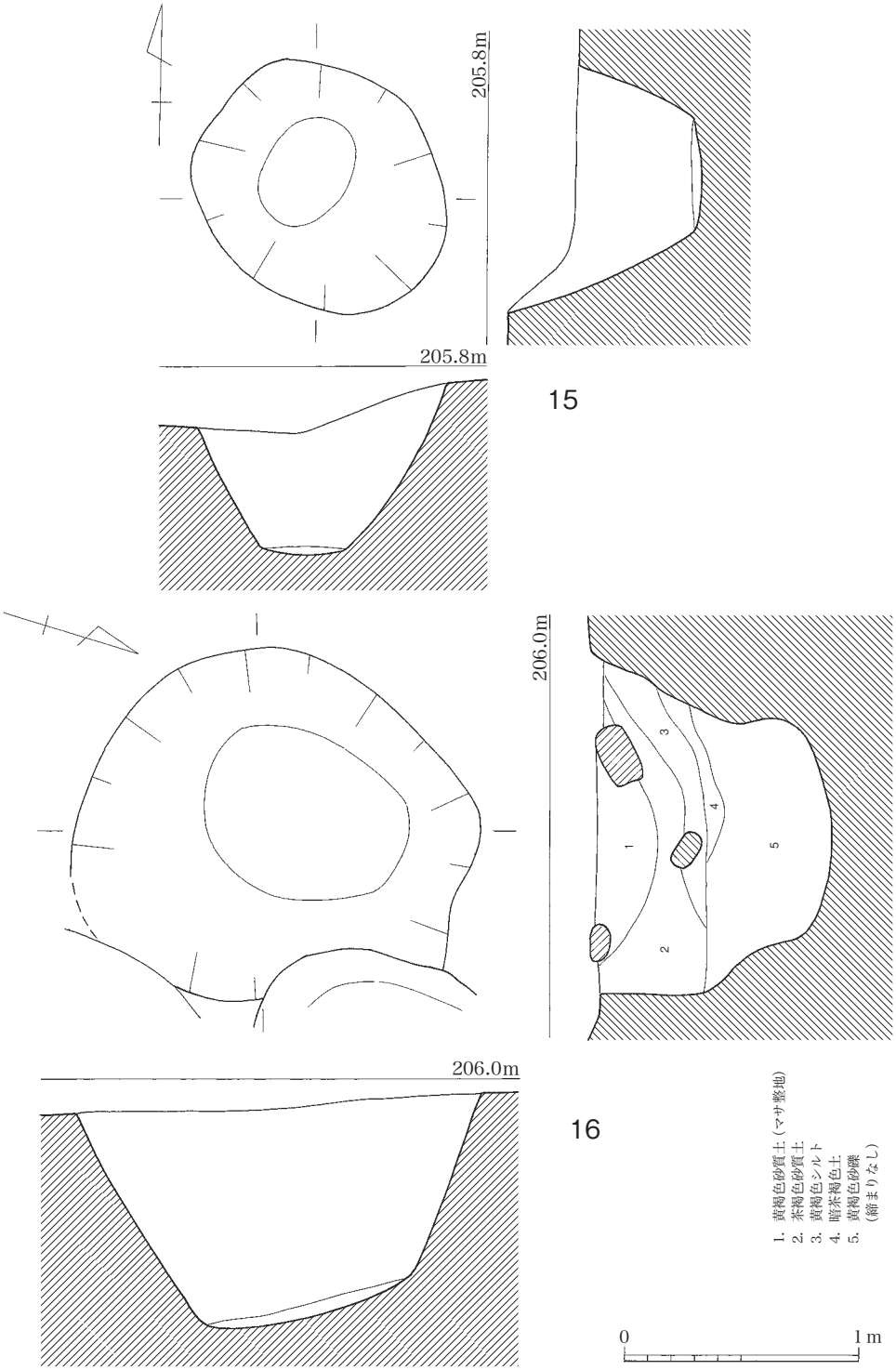
Ⅴ区の南西部で検出した。平面プランは不整円形で、規模は長さ1.5ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。底面は中央部がやや深い。煙管が出土した。

６号墓（図版55、第67図）

Ⅴ区の南西部、西壁際で検出した。平面プランはやや不整形な長円形で、規模は長さ1.4ｍ、幅0.7ｍを測る。西壁は地山中に含まれた花崗岩となる。



第69図　11～14号墓実測図（1/30）



第70図　15・16号墓実測図（1/30）

７号墓（第68図）

Ｖ区の南西部で検出し、２号集石坑によって切られている。平面プランは長円形で、規模は長さ1.1 m、幅0.6 m、高さ0.7cmを測る。南側は地山に含まれる岩が壁となる。底面はフラットである。煙管及び重なった銅銭４枚が出土した。

８号墓（第68図）

Ｖ区の北部で検出した。平面プランは不整円形で、下端は長円形に近い。規模は長さ 1.8 m、幅 1.2 m、深さ 0.25cmを測る。

出土土器（第73図）

２は土師器の小皿。底径に対し口径が大きく、体部が開くものである。底部内面はナデ調整。糸切り。口径 7.6cm、底径 4.8cm、器高 1.5cmを測る。３は磁器の猪口。白色の胎に透明釉を施す。内面の口縁部に帯状に草文の文様がある。また、内面の全面に富士と帆掛け舟二艘を描く。口縁端部は褐色釉で縁取る。口径 6.0cm、高台径 2.8cm、器高 3.0cm。近代以降の所産である。

11号墓（図版55、第69図）

Ｖ区の北部で黒灰色土除去後に検出した。12・14 号墓と重複し、これらを切っている。平面形は不整円形で、規模は長さ 2.2 m、幅 1.65 m以上を測る。

12号墓（図版55、第69図）

Ｖ区の北部で黒灰色土除去後に検出した。14 号墓と接している。平面プランは円形で、規模は 1.1 m× 0.85 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は締まりのない黒灰色土である。

13号墓（図版55、第69図）

Ｖ区の北端部で黒灰色土除去後に検出した。平面プランは長円形で、規模は長さ 0.9 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 mを測る。墓坑の南壁際に角礫が置かれていた。

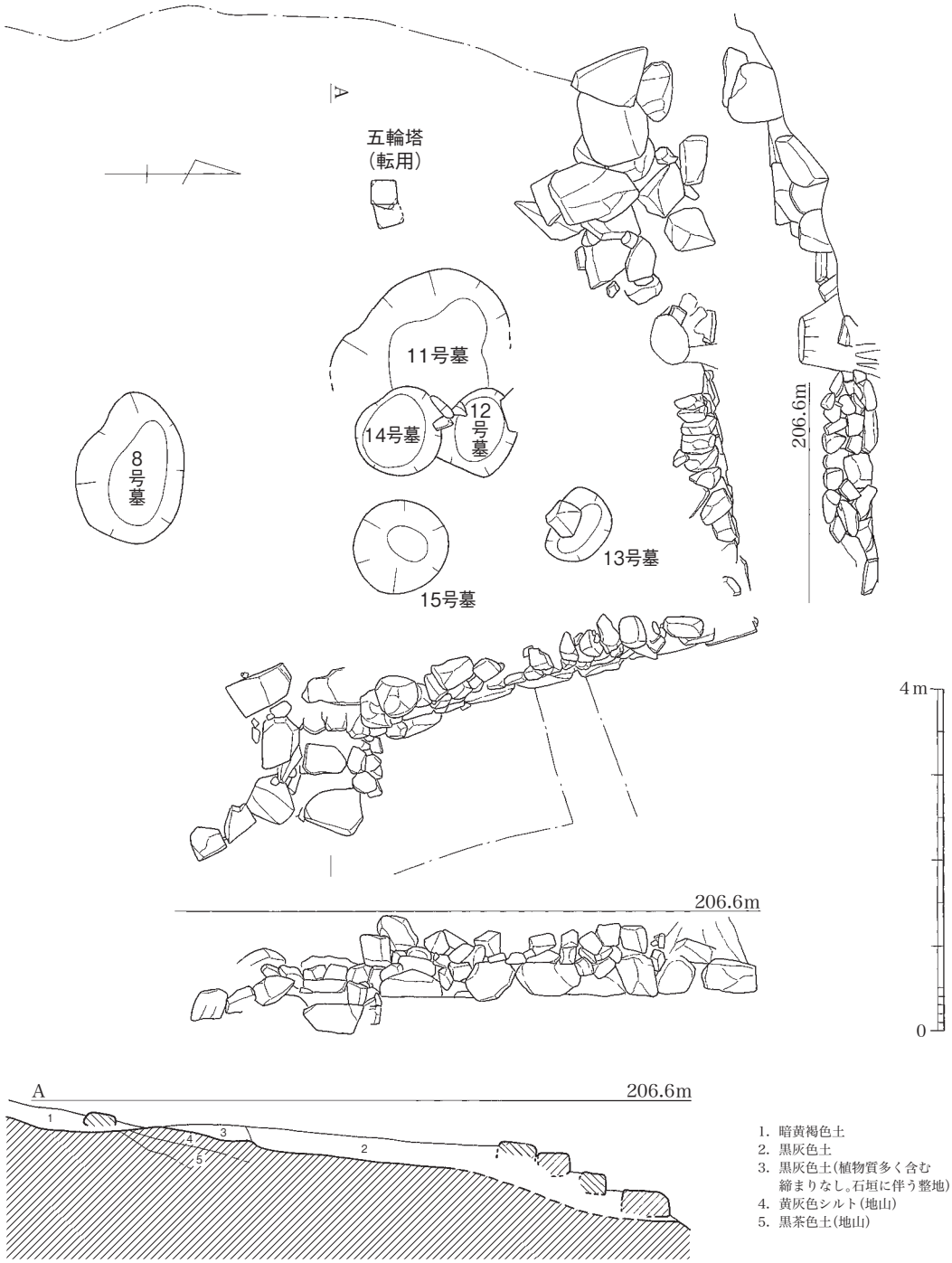
14号墓（図版56、第69図）

Ｖ区の北部、12 号墓の南に接して検出した。平面プランは円形で、規模は径 0.9 m、深さ 0.8mを測る。壁は底面から直立に近い角度で立ち上がる。屈葬の状態の人骨、煙管が出土した。埋土は締まりのない黒灰色土である。

出土遺物（図版66、第73図）

６・７は萬古焼の急須のセット。副葬品。胎は茶灰色で砂粒を含まず精良である。６は蓋で上面に指頭圧痕で花状の文様を作り出す。つまみは欠損している。７は最大径が体部中位よりも下位にあり、下膨れの形状となる。体部と口縁部の境の屈曲部は蓋と同様の指頭圧痕による文様帯を巡らせる。体部外面には赤・白の花文と緑の葉、青・白の露草とみられる花と緑の葉の二種の花文の絵付けがある。また、把手近くの体部中位に「萬古」「日本有節」のスタンプが押捺されている。把手部は上面に花文の透かしがあり、端部には花文のスタンプを巡らせる。また、把手の端部面には環状の揺れ飾りを設えている。調整は全面ナデ。法量は口径 5.5cm、最大径 7.7 cm、高さ 7.3cmを測る。

５は肥前系染付の猪口。灰色の釉に青みがかった透明釉を施す。外面の口縁下部と体部と高台の境に界線を巡らせる。また、体部の一箇所に草文を描く。口径 6.8cm、高台径 2.5cm、器高 4.3 cmを測る。



第71図　墓域石垣実測図（1/80）

15号墓（図版55、第70図）

Ⅴ区の北部、14号墓の東側で、黒灰色土除去後に検出した。平面プランは円形で、規模は径1.15m、深さ1.6mを測る。埋土は締まりのない黒灰色土である。

出土遺物（図版66、第73図）

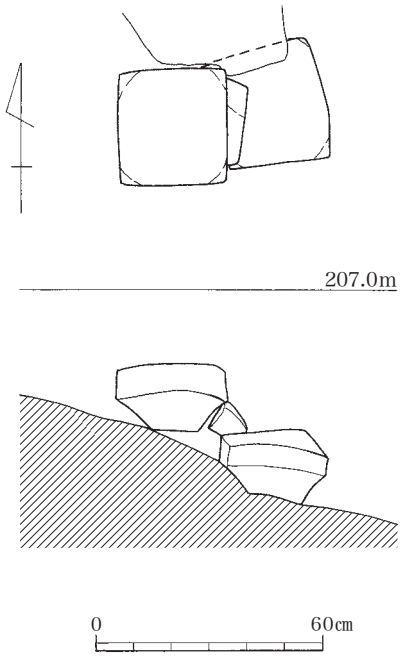
4は磁器の三足の香炉。口縁端部は丸く肥厚させる。灰色の胎の体部に濁灰色の釉、口縁部と底部に緑灰色の釉を施す。体部内面は露胎となる。復元口径8.0cm、器高4.5cmを測る。

16号墓（図版56、第70図）

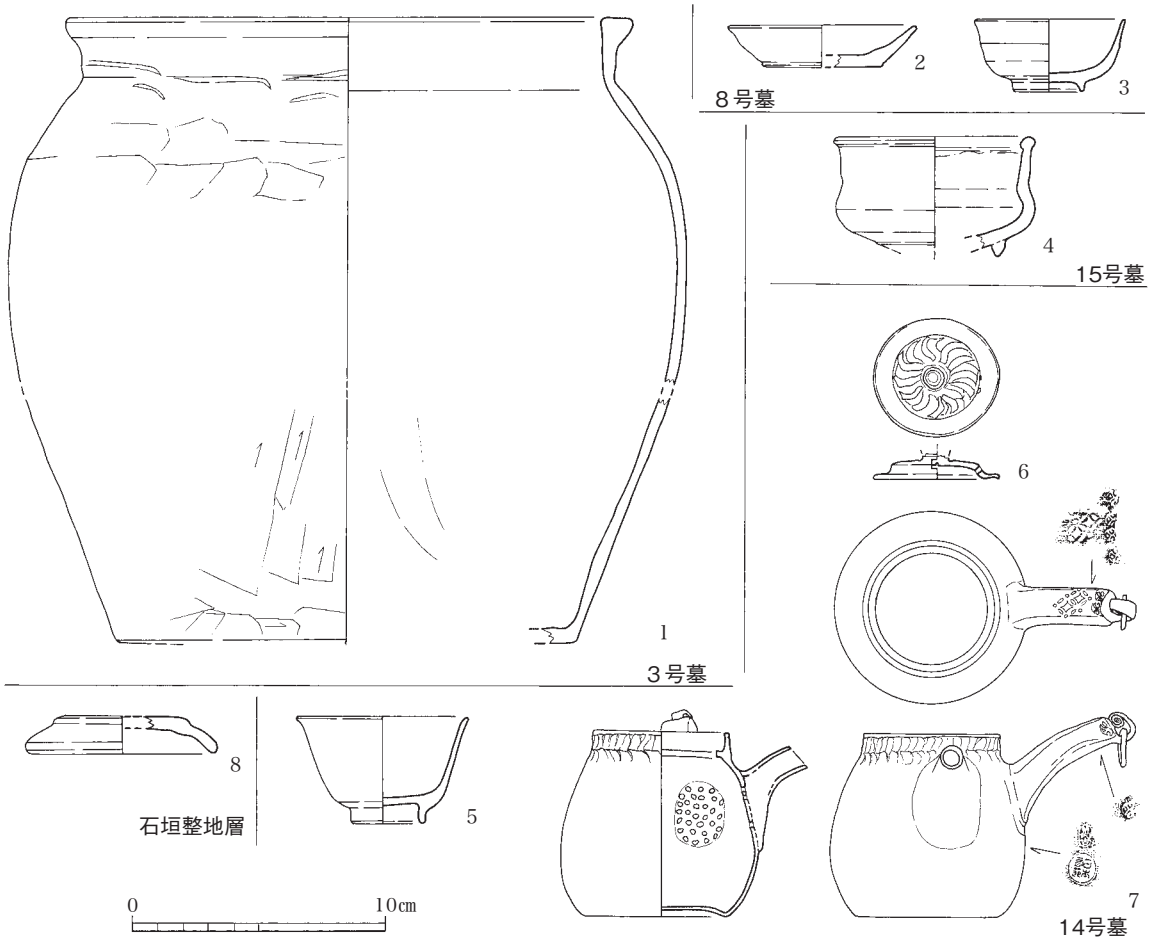
Ⅴ区の南西部、１号集積坑の西側で検出した。平面プランは円形で、径1.7ｍ、深さ0.9ｍを測る。埋土は締まりのない黄褐色砂礫土を主体とする。煙管が出土した。

石列・階段

墓域を区画するもので、段造成された平坦面の北面及び東面に石列がまわっている。西側は段造成の下端が区切りとなる。特に北東隅部がよく残っていて、南東部にも一部遺存している。北面の石列のうち斜面上位にあたる西半分は地山である大形の石を寄せ、斜面下位の東半分には長さ40cmの石を並べて基礎とし、その上に20cmほどの礫を二段、小口積みにする。目地は横方向に通っている。斜面の下位にあたる西側の石列は、長さ50cmほどの直方体の石を



第72図　五輪塔の転用状況（1/20）



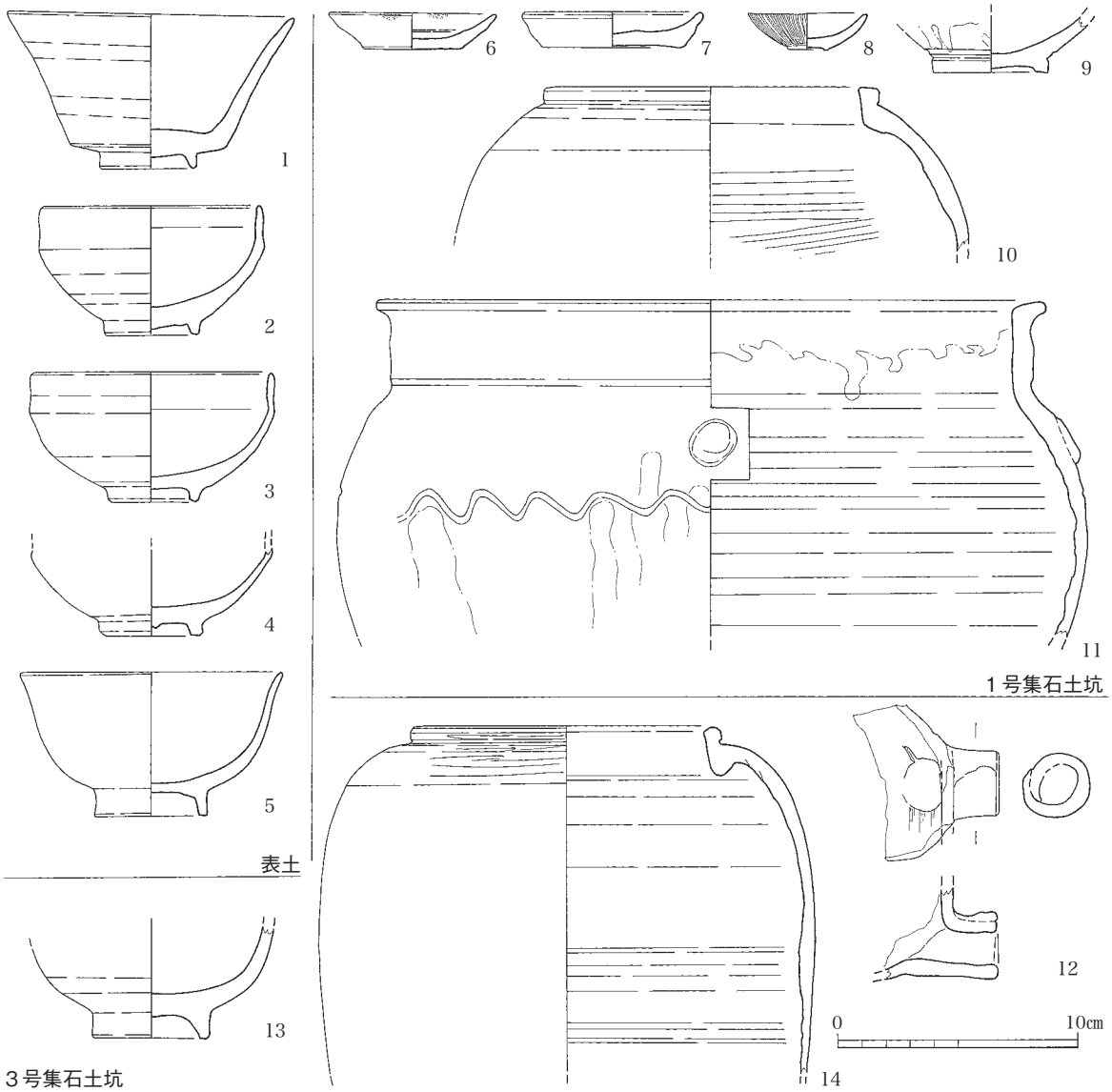
第73図　墓地出土土器実測図１（1/3）

最下段に据え、その上に10～20cmほどの小ぶりの石を積む。北東隅部から５ｍほど南に延びたところに階段に接続している。階段を介した南側には上の平坦面との段差のみで石列はないが、発掘区の南端部で長さ15～20cmほどの小ぶりの石を並べた石列の延長を４ｍ分確認している。

階段は四段からなり、比高差は90cmある。三段目が二つの石からなるほかは各段とも一石である。この階段は根が多く張ったきわめて締まりのない旧表土とみられる黒灰色土の上に積んであることから、近現代の墓に伴う造作であると考えられる。

出土遺物（第73図）

８は石列裏込から出土した土師器。小皿の可能性もあるが、口縁部がこれほど肥厚している例はあまりなく、また、底部にナデ調整を施していることから蓋とした。口径7.6cm、高さ2.0cmを測る。



第74図　墓地出土土器実測図２（1/3）

集石坑（図版 56・57、付図）

改葬後に墓石を一括埋置するために掘削された大規模な土坑である。墓域内において３基を検出した。

このうち１号集石坑と２号集石坑には、「享保八卯天　釋暁雲童子　七月六日」「明和五子天　釋淨意信士　十月十四日」「大正 14 年」などの銘文のある墓碑が埋め込まれていた。

集石坑ほか墓域出土遺物（図版66、第74図）

１は陶器碗。体部は大きく開いている。白灰色の胎に灰色の厚めの釉を施す。高台畳付は露胎となる。口径 12.0cm、高台径 4.1cm、器高 6.6cm。有田系か。

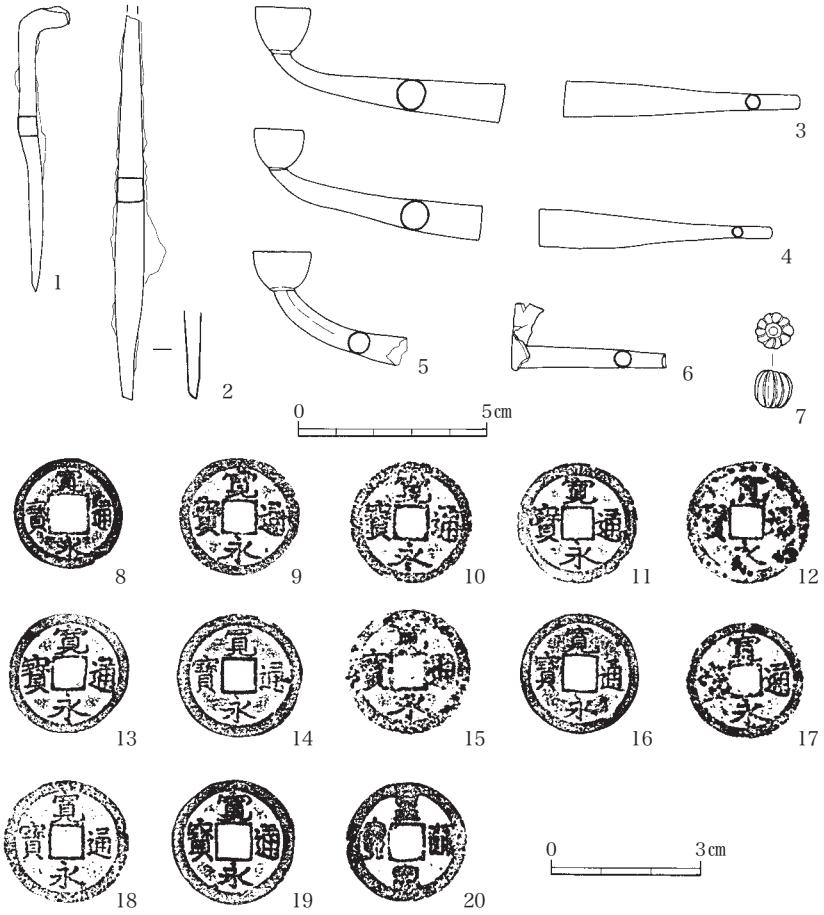
２～４は陶器の碗。天目。２は淡茶色の胎に黒茶色～茶褐色の釉を施す。３は灰色の胎に茶褐色の釉を施す。

５は陶器碗。細く直立する高台に丸みを帯びた体部である。口縁部はわずかに外反する。褐色の胎に薄い緑色釉を全面に施すが、高台畳付は露胎となる。見込みには目跡が四ヶ所に残る。体部の中位と下半にカキメ様の３本一対の沈線を巡らせる。

６・７は土師器小皿。１は底径が小さく体部が開くタイプ。底部内面はナデ調整。内面及び口縁部に油煙が付着する。７の底部内面もナデ調整。いずれも糸切り。法量は口径・底径・器高がそれぞれ、7.6cm･6.0cm･1.5cm、7.6cm･5.1cm･1.5cmを測る。

８は磁器の紅皿。小さな高台が付く。口縁部から内面にかけて淡灰色の胎に灰白色の釉を施す。外面は型押しにより施紋する。９は陶器の碗。灰褐色の胎に黄味がかった褐色の釉を施す。外面には釉垂れがみられる。外面は露胎となる。

10 は瓦質土器の鉢。球形の体部に直口する口縁が付く。口縁端部は面をなす。調整は外面がケズリのちミガキ、内面はヨコナデによる凹凸が著しい。復元口径 24.6cmを測る。11 は陶器の施釉甕。茶灰色の胎に茶褐色釉を施す。肩部から体部上半にかけては釉垂れのある黒褐色釉がかかる。内面は露胎。肩部には径２cmほ



第75図　墓地出土鉄製品・銅製品・玉・銅銭実測図（1/2・1/3）

どの円形の浮文を貼付する。復元口径 29.0cmを測る。

12 は土師質土器の鍋の把手部分。把手は粘土帯を丸めて成形している。下面に煤が付着する。

13 は京焼風陶器の碗。淡黄灰色の胎に黄味がかった緑色釉を施す。高台畳付は露胎となる。また釉は全面に貫入がみられる。

１～５は表土、６～ 12 は１号集石坑、13・14 は３号集石坑から出土。

金属製品など（図版66、第75図）

１は鉄釘。上部を直角に折り返して頭部を形成する。身の断面は四角形。長さ 7.6cm、太さ 0.5cm× 0.4cmを測る。５号土坑から出土。２は中央部やや下側に最大幅を持つ棒状の製品。上部をわずかに欠損しており、現存長 10.3cmを測る。厚さは 0.7cm× 0.6cm。先端部には両刃が作り出されている。２号掘立柱建物跡のピットから出土した。

３～５は煙管。羅宇はいずれも竹であるが腐朽が著しいため火皿と吸い口を図示している。火皿の径は３・５が 1.5cm、４が 1.3cmを測る。３は５号墓、４は３号墓、５は７号墓の副葬品である。

７は水晶製の玉。14 号墓から出土した。

13 ～ 20 は銅銭。いずれも寛永通宝である。７は３号墓、14 は１号集石坑、16 は３号集石坑、その他は表土から出土した。

３）小結

下伊良原下地ヶ原遺跡の集落部分の調査では、掘立柱建物跡３棟、土坑 11 基、谷３条などを検出した。その時期を示すものに２号掘立柱建物跡のピット内から出土した 14 世紀代の須恵質の摺鉢がある。２号掘立柱建物跡は、位置関係から３号掘立柱建物跡と併存し、また、建物規模など積極的な根拠に乏しいが１号掘立柱建物跡も併存していたと考えられる。また、６号土坑からは14世紀代の枢府磁とともに同時期とみてよい土師器小皿が出土している。集落部分でもっとも時期的に遡る遺物としては谷から出土した 13 世紀代の龍泉窯系青磁碗があり、その他ピットなどから出土した遺物は僅少ではあるものの概ね 14 ～ 15 世紀代に収まる。下伊良原下地ヶ原遺跡の上流側に近接する下伊良原平原遺跡などでも当該期の建物跡が確認されており、川沿いを段造成して集落を営んでいたものとみられる。

一方、集落部分の上方に展開する墓地群は江戸期～現代にかけてのものであったが、出土した石塔には 14 世紀代に遡らせても問題ない型式も含まれ、これは墓地の形成が集落の形成時期まで遡る可能性を示している。本来ならば墓域に存在していた「下地ヶ原石塔群」と合わせて報告すべきであろうが、時期の詳細や配置状況等については来年度の報告を俟たれたい。

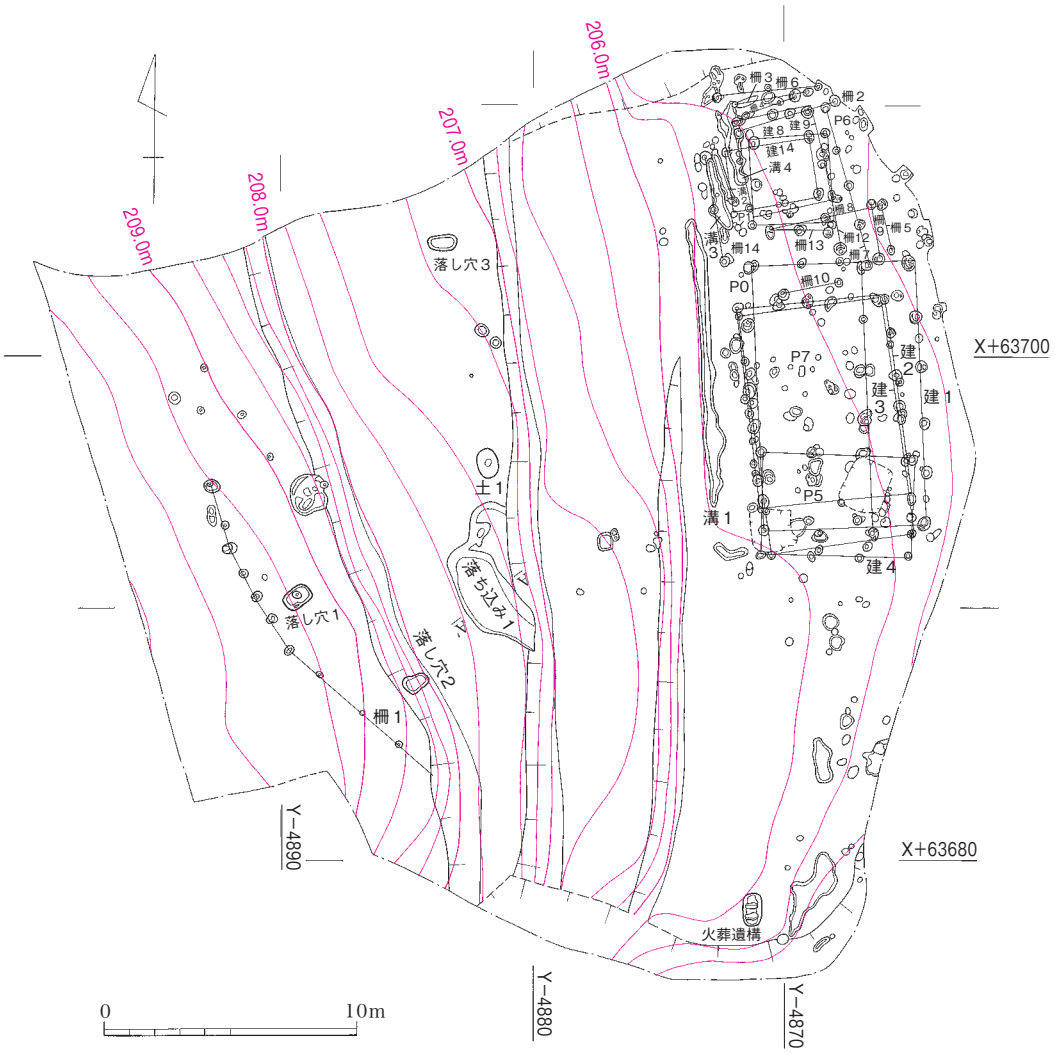
この他、縄文時代早期・前期・後期・晩期に属する土器片が主として黄灰色シルト層（縄文時代の包含層）から出土している。当遺跡の南東側の川に近い西の塚遺跡では後期のドングリピット群と竪穴住居跡の可能性がある遺構が検出されているが、この地域ではいまだ集落域の確定には至っていない。

3　下伊良原平原遺跡

1）調査の概要

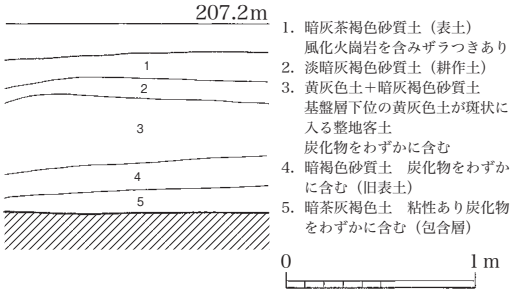
調査対象範囲は丘陵を階段状に削平した畑地で、標高 205 ～ 209.5 mの斜面地に位置する。平成 25 年 8 月 27 日にバックホーを入れ、表土剥ぎを開始した。最下段の北東端にはわずかに遺物包含層が残っていたが、その他は大きく削平されていた。畑地として利用されていたらしく、大きな岩を廃棄するための穴が掘られていたのみで、撹乱孔はほとんどなかった。

北端部は谷の斜面地を客土した平坦面が続いていた。東端は道路敷設のため大きく削平されているが、本来遺構は続いていただろう。9 月 12 日に作業員を入れ、遺構検出を開始した。調査範囲は花崗岩バイラン土壌で、南 1/3 には風化花崗岩粒子が残っていたことから、本来南側が高い地形であったが大きく削平されたことがわかる。また、火葬遺構があるものの掘立柱建物跡の柱穴がないことから、平坦地はなく居住地としては利用されなかったものと見られる。また、西側 2/3 も落し穴遺構と柵跡しかないことから、本来斜面地だったと見られる。遺構が北東部に偏っているのは、北東に緩斜面があったためであろう。10 月 30 日には空中写真を撮影し、11 月 1 日には図面作業のみを残して、下伊良原中ノ坪遺跡２次調査に移動し、13 日に作業を完了して撤収した。



第76図　下伊良原平原遺跡遺構配置図（1/300）

掘立柱建物跡は片側の柱列しか残っていないものも含めて、当初16棟を想定していたが、整理段階で確実性に欠けると判断されたものは柵跡とし、遺構名を付け替えた掘立柱建物跡は欠番とした。そのため、掘立柱建物跡は１～４・８・９・14の７棟、柵跡は１～10・12～14の13基となり、この他火葬遺構１基、落し穴３基、溝状遺構２条とピット等が検出された。



第77図　下伊良原平原遺跡
基本土層図（1/40）

基本土層（第77図）

地表面から50cmまでは畑地のための整地層と耕作土・表土で、その下に旧表土と遺物包含層が残る。遺物包含層は調査区東端の旧地形の斜面の残っている部分にしかなく、それ以外では地山が大きく削平されている。

２）遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版68・69、第78図）

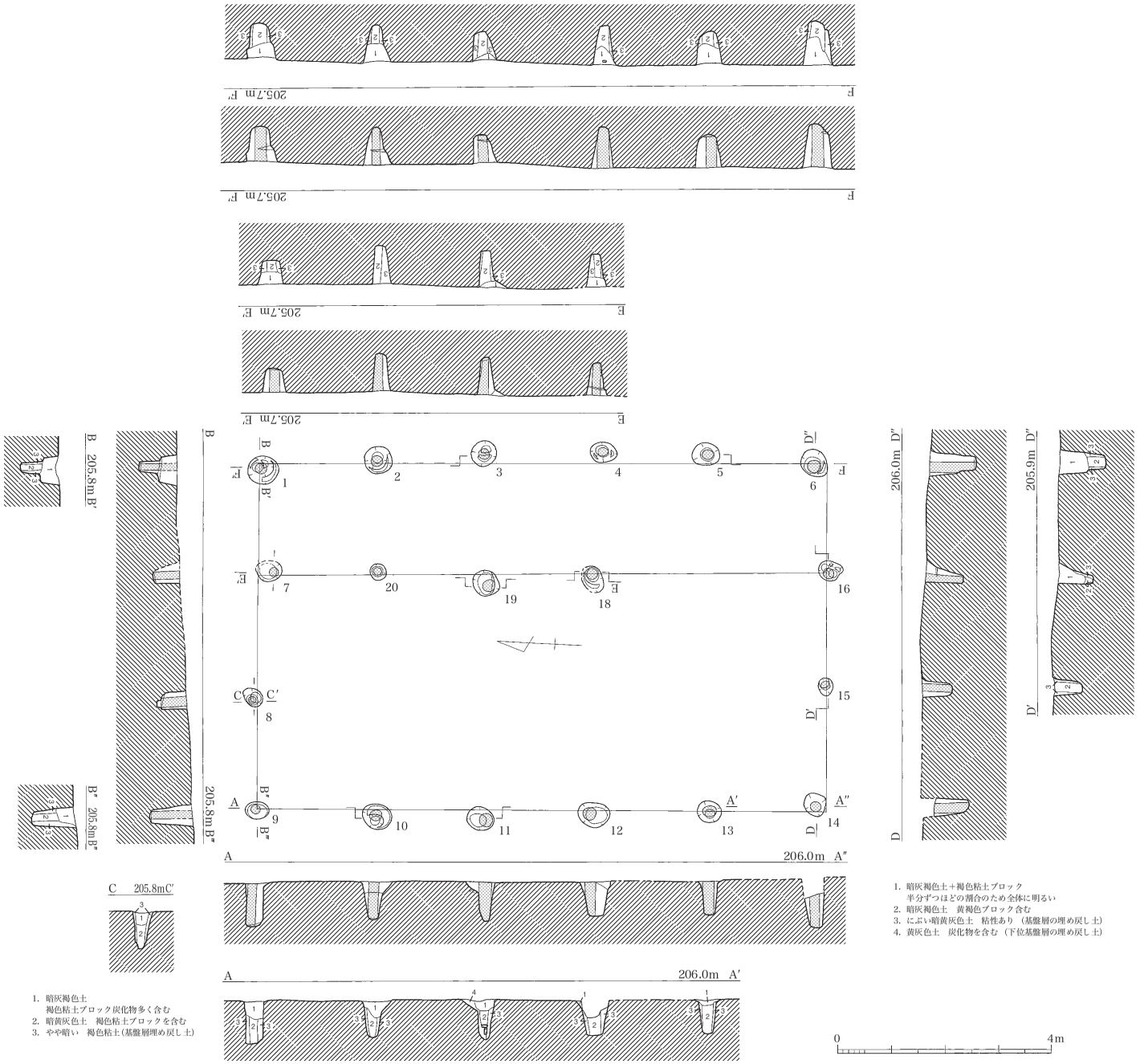
調査区東部中央に位置する。掘立柱建物跡･柵跡のうち柱穴が大きいもので構成されているので、比較的わかりやすかった。２×５間で、東側に庇がつく建物である。柱穴は径30～55cmだが、庇の柱穴が他の柱に比べて大きく見えるが、斜面下位にあたるので削平を受けていないので残りがよかったためである。本遺跡最大の建物で、梁行648cm、桁行1,060cmを測る。２～４号掘立柱建物跡と重複しており、柱13が３号掘立柱建物跡の柱穴を切り、柱15が７号柵跡の南端柱穴に切られる。柱16は３号掘立柱建物跡の柱穴を切る。柱痕はすべての柱穴から検出され、土層から上位を掘り込んで柱を切って抜き取ったことがわかる。Ｎ－３°－Ｗ方向に主軸方向をとり、８号掘立柱建物跡を伴い、１号溝状遺構を雨落ち溝とする可能性が高い。１号溝状遺構に伴うとすれば、南側に溝が巡らないので、切妻屋根であろう。遺物から14世紀前半か。

出土遺物（第89図）

１は柱５出土の土師質土器の土鍋の口縁部で、外面は煤が付着している。外面口縁下には凹線が入る。内面はヨコハケで、口縁部はヨコナデでナデ窪む。内面から口唇部までは黄白灰色で、外面は暗橙褐色を呈する。

２号掘立柱建物跡（図版68・69、第79図）

調査区東部中央に位置する。東側桁行は３号掘立柱建物跡と重複していたものの比較的明確に検出された。しかしながら、西側桁行は１・３・４号掘立柱建物跡と重複しており、柱穴の大きさが揃わずやや不確実さが残る。柱２・３・５・６・10が３号掘立柱建物跡の柱穴に切られ、柱13は４号掘立柱建物跡柱７を切る。主軸方向はＮ－７°－Ｗ方向で、規模を同じくし、主軸方向がややずれることから、３号掘立柱建物跡の前身であろう。２×５間で、梁行578cm、桁行804cmを測る。柱穴径は20～55cmで、ほとんどの柱穴から柱痕が検出された。柱穴上位は柱を切って抜き取った痕跡が残っている。北側に10号柵跡が位置しており、主軸方向が直交するので、10号柵跡は本掘立



第78図　下伊良原平原遺跡1号掘立柱建物跡実測図(1/80)

柱建物跡の付属施設になる可能性をもつ。遺物が出土していないので時期不明。

３号掘立柱建物跡（図版68・69、第80図）

調査区東部中央に位置する。1・2・4号掘立柱建物跡と重複しており、柱３が２号掘立柱建物跡の柱穴を切る。また、柱３が４号掘立柱建物跡に、柱16が１号掘立柱建物跡の柱穴に切られ、柱21が10号柵跡の西側柱穴を切る。この切り合い関係と２号掘立柱建物跡と規模を同じくすることから本建物跡は２号掘立柱建物跡の建替えであり、１号掘立柱建物跡は本建物跡の規模を拡張して建替えたと考えられる。3×6間で、梁行576cm、桁行956cmを測る。主軸方向はN－7°50′－W方向で、北側に主軸方向が直交する10号柵跡があるので、張り出し部がつく可能性がある。5・9号柵跡もほぼ主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。南側の柱穴が浅いのは旧地形が南に行くほど高くなっていたからだろう。柱痕の検出できた柱穴が多く、柱穴上位は柱を切って抜き取った痕跡が残っている。柱穴出土の陶器摺鉢から16世紀か。

出土遺物（第89図）

２は柱７出土の土師器底部片で、器面が摩滅しているが外底の糸切りは残る。胎に金雲母と白色粒子を多く含む。にぶい黄橙色を呈する。３は柱14出土の陶器摺鉢で、内面に６条以上の擦り目をもつ。外底部は底部切り離し時の粘土が付着し、凹凸が多い。暗い赤紫灰色の色調から堺産摺鉢だろう。４は柱１出土の銅銭で元豊通宝（初鋳1078年）の草書体。銅質はよくないが、裏面は窪んだ部分に黒色が残る。

４号掘立柱建物跡（図版68・70、第81図）

調査区東部中央に位置する。梁行402cm、桁行580cmを測る。1～3号掘立柱建物跡と重複しており、柱３が３号掘立柱建物跡を切る。主軸方向はN－90°－W方向で、1～3号掘立柱建物跡とは規模も主軸方向も異なるので、時期が異なるものかもしれない。2×3間規模に南側に偏った束柱がつくので、L字形の土間を持つ建物だろう。柱３にのみ、柱穴底に石敷きが見られる。出土遺物から15～16世紀代だろう。

出土遺物（第89図）

５は柱３出土の陶器椀口縁部片で、灰色の灰釉がかかり、胎に白色粒子を多く含む李朝陶器である。

８号掘立柱建物跡（図版68、第82図）

調査区北東部に位置する。ピット集中部のなかでも深い柱穴で復元した建物だが、梁行の柱間が広く、柱筋が通らないので、掘立柱建物跡としては確実性に欠ける。1×2間で、梁行296cm、桁行340cmを測る。9・14号掘立柱建物跡と重複しているが、先後関係はわからない。柱1は13号柵の東端柱穴に切られる。主軸方向はN－5°50′－W方向で、１号掘立柱建物跡・３号柵跡とは主軸方向を同じくするので伴う可能性が高い。遺物が出土していないので時期不明。

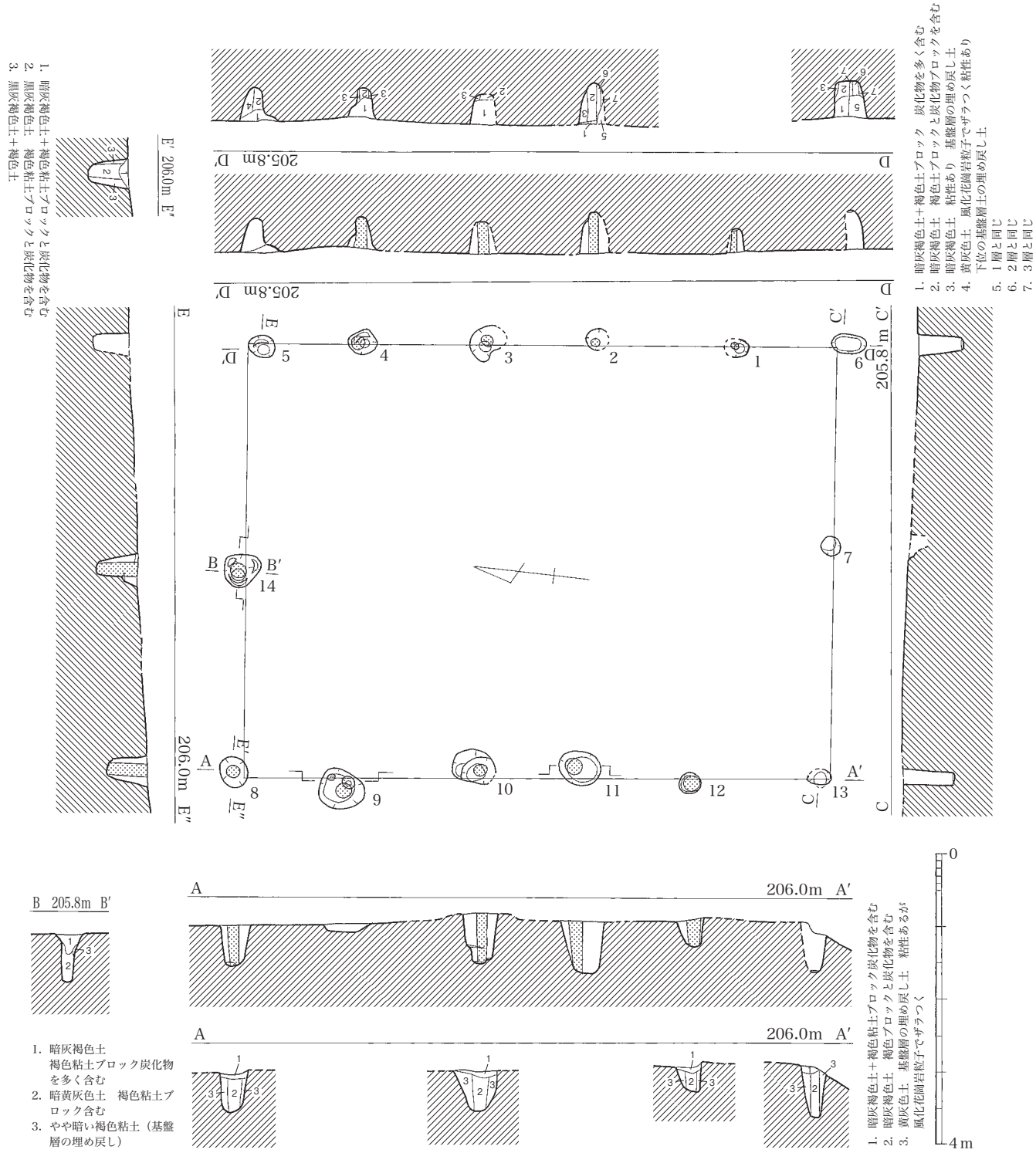
９号掘立柱建物跡（図版68、第82図）

調査区北東部に位置する。柱筋が通らないため、確実性にかける。2×2間で、梁行332cm、桁

行366cmを測る。9・14号掘立柱建物跡と重複しており、柱6が12号柵の柱穴を切る。4号溝状遺構と切り合うが、溝状遺構が浅かったため先後関係は不明確。主軸方向はN－9°40′－W方向で3号柵跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。遺物が出土していないので時期不明。

14号掘立柱建物跡（図版68、第83図）

調査区北東部に位置する。柱間が広いため確実性にかける。2×2間で、梁行234cm、桁行334cmを測る。9・14号掘立柱建物跡と重複しているが、先後関係はわからない。4号溝には切られる。

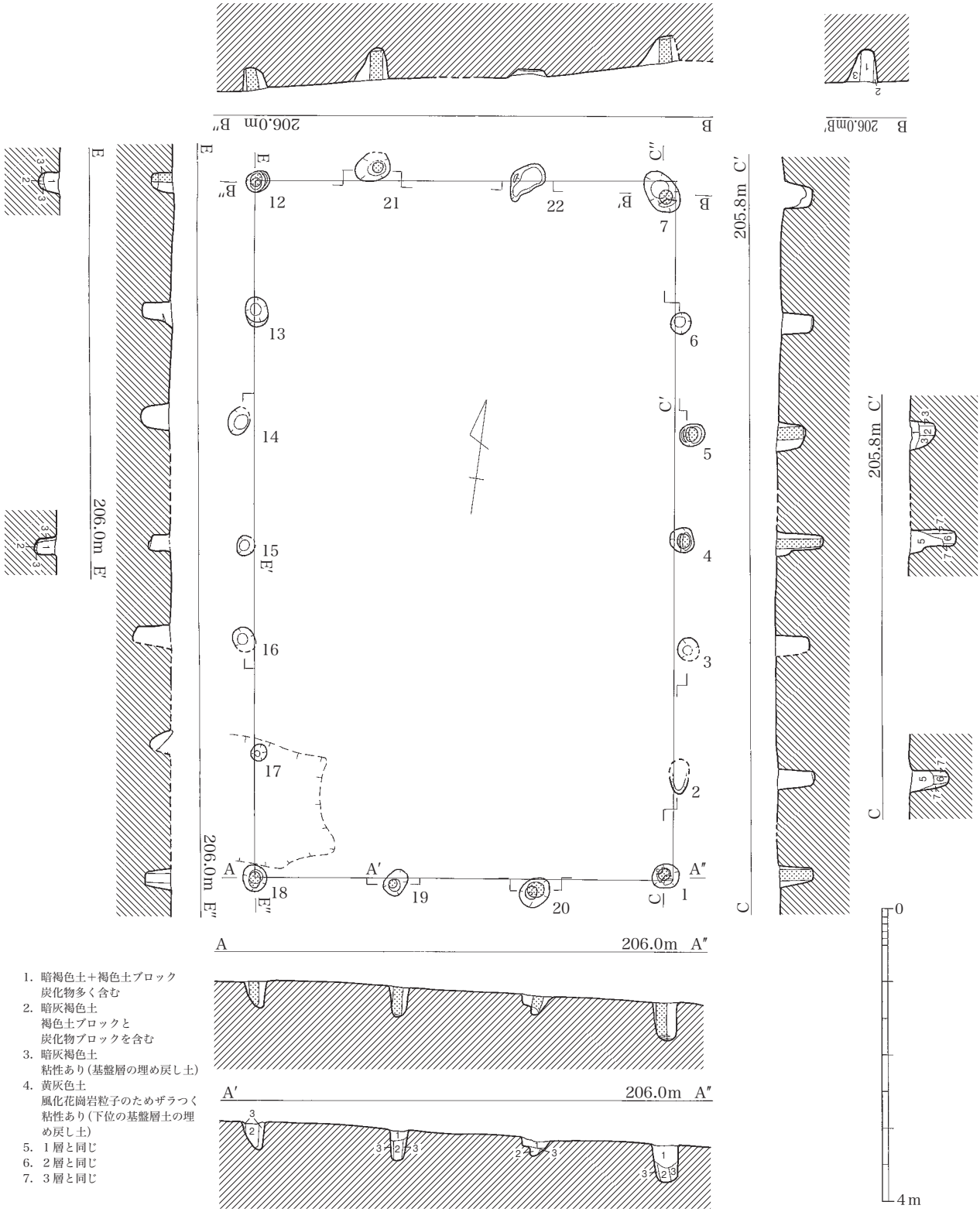


第79図　下伊良原平原遺跡2号掘立柱建物跡実測図（1/80）

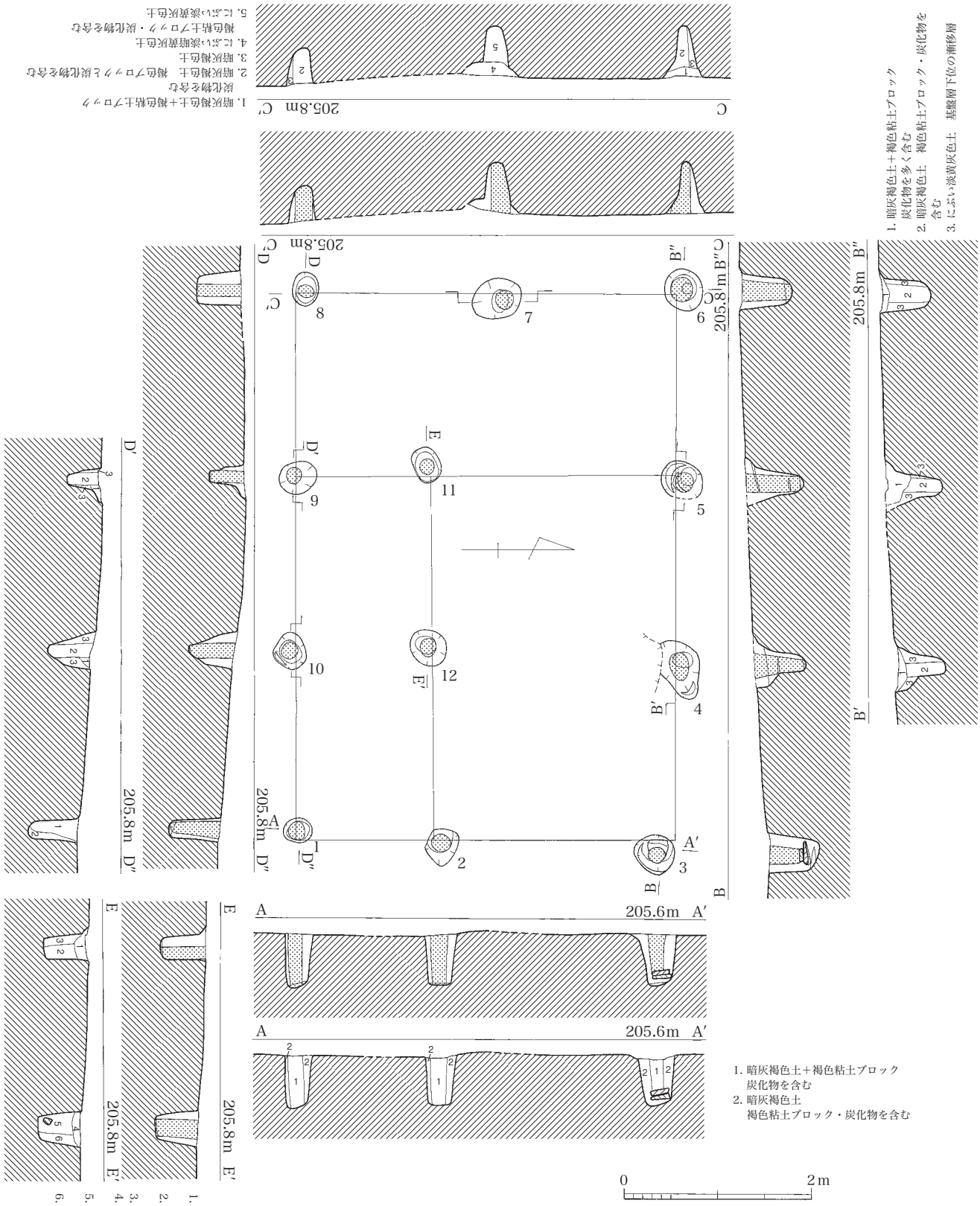
主軸方向はＮ－９°40′－Ｗ方向で、12・14号柵跡と主軸方向を同じくし、６号柵跡とは直交するので伴う可能性が高い。遺物が出土していないので時期は不明である。

柵跡

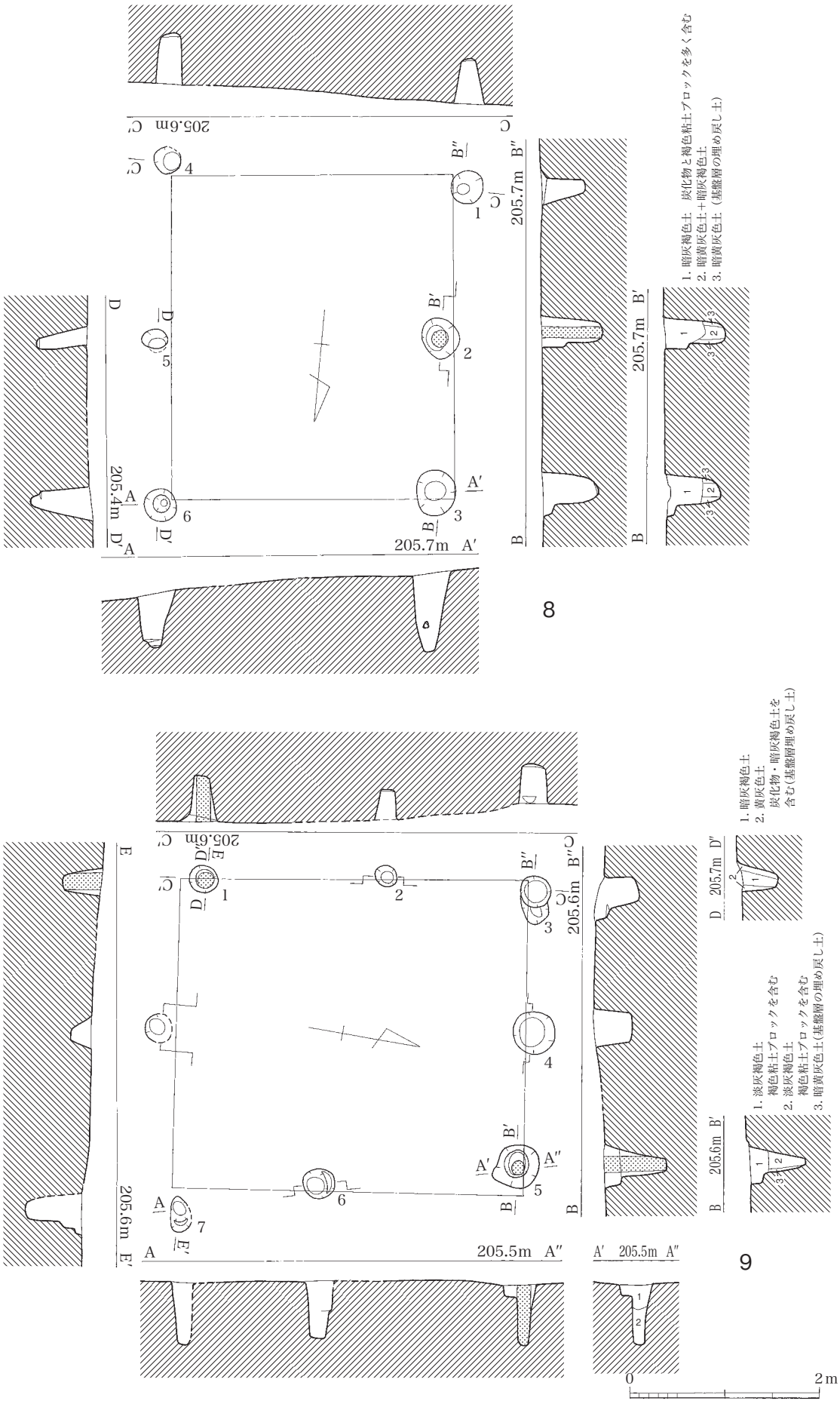
１号柵跡（巻頭図版２、第84図）



第80図　下伊良原平原遺跡３号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第81図　下伊良原平原遺跡４号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第82図　下伊良原平原遺跡８・９号掘立柱建物跡実測図（1/60）

調査区西端の削平テラスの１段目に位置する。10基のピットが湾曲しながら1列に662cm並んでおり、南端は2段目の削平テラスのため失われているが、本来続いていただろう。北側にも同一直線上にピットがあるが、間隔が長いため本遺構には含めていない。ピットの径は16～56cmとばらつきがあり、深さは10cmほどのものが、多いが中には60cmのものもある。この柵跡と1・2号落し穴が主軸を垂直方向にして並んでいることから、この落し穴に獲物を誘導するための柵だったと考えられ、間隔や柱穴径が不均一なのは通常の柵とは用途が異なるため、均一さが必要とされなかったためであろう。遺物が出土していないので時期不明。

２号柵跡（図版67、第85図）

調査区北東端部に位置する。２間のみなので確実性に欠け、柱間が長いので、柵ではないかもしれない。主軸方向はＮ－71°30′－Ｅ方向で 406cmを測り、柱穴径は 35 ～ 40cmで、７号柵跡とはほぼ直交しており、一連の柵跡として併存する可能性もある。12 号柵跡とは重複するが、柱穴の切り合いがないので先後関係はわからない。遺物が出土していないので時期不明。

３号柵跡（図版67、第85図）

調査区北東端部に位置する。１間のみだが､東の調査区外に延びる可能性を考えて柵跡としたが、柱間が 300cmと長いので柵ではないかもしれない。主軸方向はＮ－80°30′－Ｅ方向で４号掘立柱建物跡とは伴う可能性が高い。４号柵跡とは重複するが、柱穴の切り合いがないので先後関係はわからない。遺物が出土していないので時期不明。

４号柵跡（図版67・70、第85図）

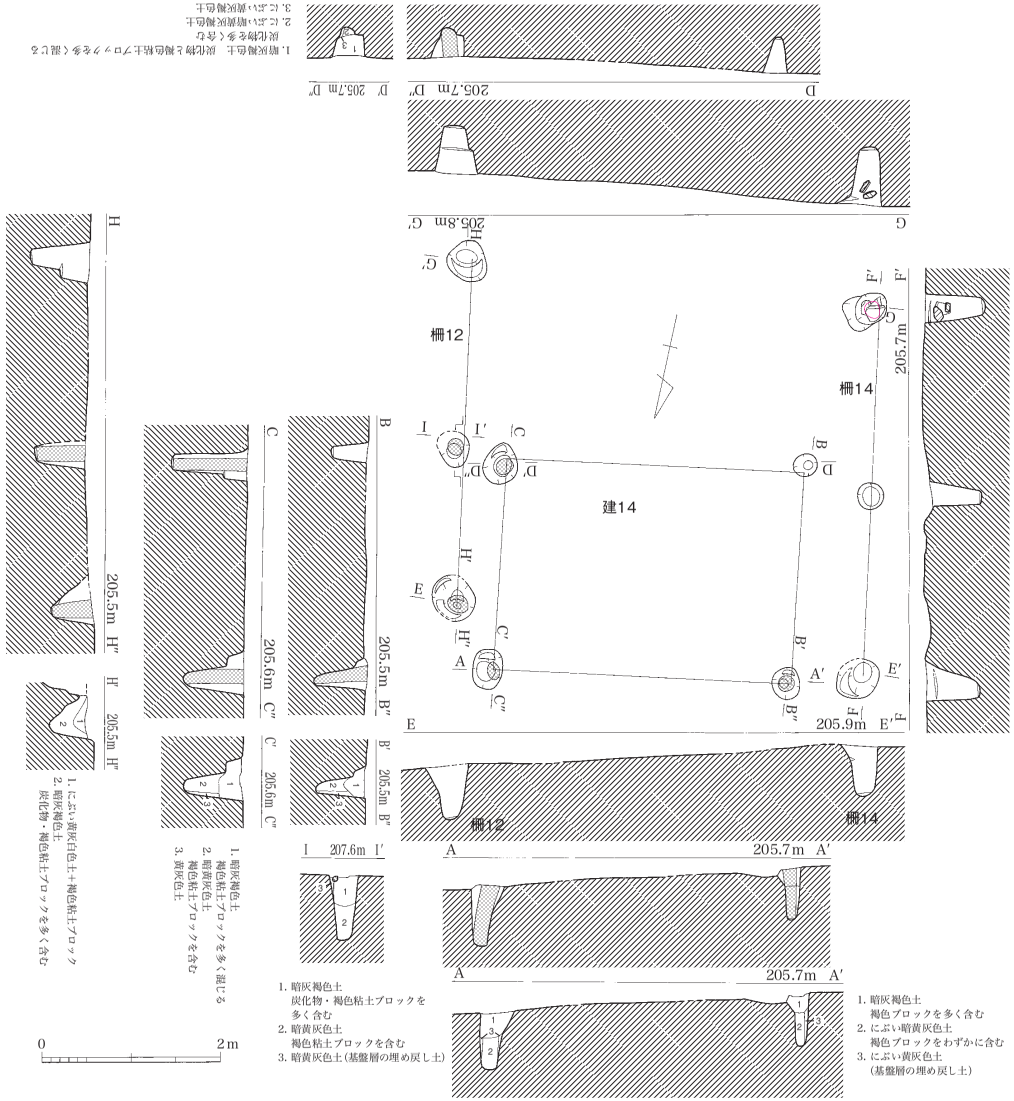
調査区北東端部に位置する。１間のみだが、東の調査区外に延びる可能性を考えて柵跡とした。210cmを測り、３号柵跡とは重複するが、柱穴の切り合いがないので先後関係はわからない。主軸方向はＮ－70°10′－Ｅ方向で、２号柵跡とは主軸方向が等しいので建替えであろう。遺物が出土していないので時期不明。

５号柵跡（図版67、第86図）

調査区北東部に位置する。１間のみだが、東の調査区外に延びる可能性を考えて柵跡とした。180cmを測り、主軸方向はＮ－８°－Ｗ方向で、３号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。９号柵跡とは重複しているが、主軸方向が等しいので建替えであろう。7･12・13 号柵とも重複するが、13 号柵の西端の柱穴に切り合いがある以外は先後関係はわからない。遺物が出土していないので時期不明。

６号柵跡（図版67、第85図）

調査区北東端部に位置する。２間のみなので確実性に欠け、柱間が長いので、柵ではないかもしれない。410cmを測り、主軸方向はＮ－83°30′－Ｅ方向で、８号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので伴う可能性が高い。３号柵跡とは主軸方向が等しいので建替えであろう。遺物が出土していないので時期不明。



第83図　下伊良原平原遺跡14号掘立柱建物跡、12･14号柵跡実測図(1/60)

７号柵跡（図版67、第86図）

調査区北東部に位置する。柱穴５基で構成されるが、北に延びる可能性を残す。340cmを測り、主軸方向はＮ－13°30′－Ｗ方向で９号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。８号柵・１号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切り合いがないので先後関係はわからない。２号柵とはほぼ直交しており、一連の柵跡として併存する可能性もある。遺物が出土していないので時期不明。

８号柵跡（図版67、第86図）

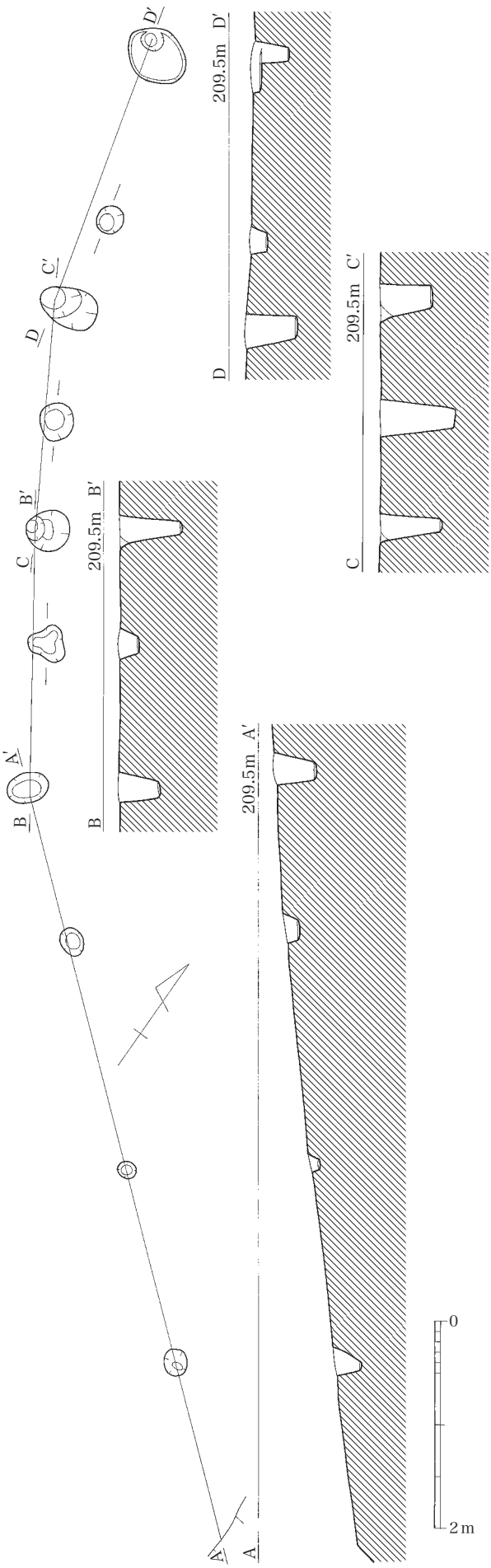
調査区北東部に位置する。２間のみなので確実性に欠け、柱間が長いので、柵ではないかもしれない。しかし、他のピットと比べて径が小さく深い特徴が共通することから柵跡とした。450cmを測り、主軸方向はＮ－77°30′－Ｅ方向で、５号柵跡から東西方向に西に折れ曲がる部位にあたるので、一連の柵跡だろう。7・9号柵跡とは重複しているが、先後関係はわからない。13号柵の西端の柱穴に切られる。遺物が出土していないので時期不明。

９号柵跡（図版67、第86図）

調査区北東部に位置する。１間のみだが、東の調査区外に延びる可能性を考え、他のピットと比べて径が小さく深い特徴が共通することから柵跡とした。225cmを測り、主軸方向はＮ－8°20′－Ｗ方向で、３号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので伴う可能性が高い。５号柵跡とは重複しているが、主軸方向が等しいので建替えであろう。１号掘立柱建物跡と重複するが、切り合いがないので先後関係はわからない。遺物が出土していないので時期不明。

10号柵跡（図版67、第87図）

調査区北東部に位置する。１間のみだが、掘立柱建物跡に伴う可能性を考え柵跡とした。



第84図 下伊良原平原遺跡1号柵実測図(1/60)

234cmを測り、主軸方向はＮ－79°10′－Ｅ方向で２号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。２号掘立柱建物跡張り出し部かもしれない。柱間は135cm。遺物が出土していないので時期不明。

12号柵跡（図版67、第83図）

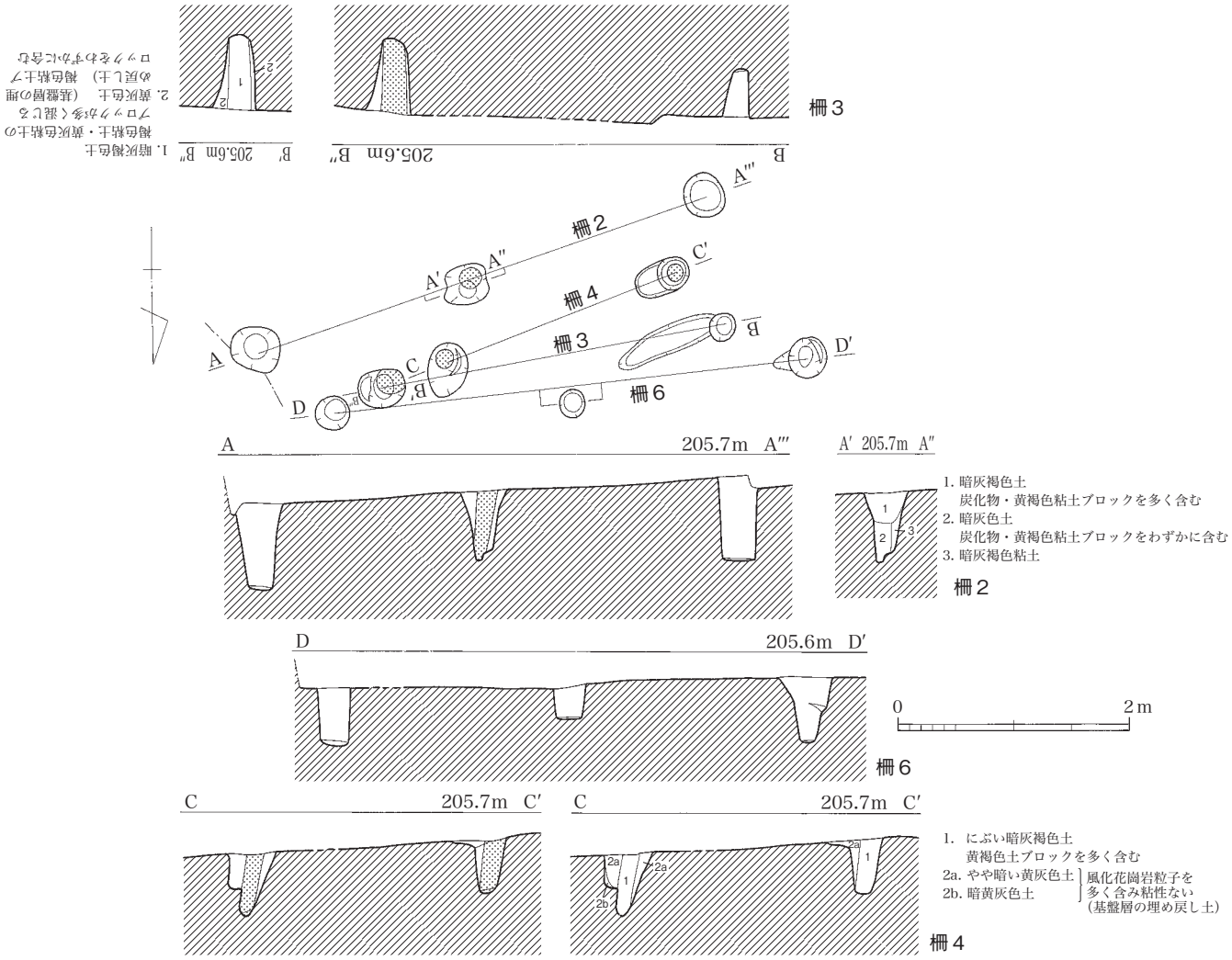
調査区北東部に位置する。当初は14号柵跡と掘立柱建物跡を構成すると想定していたが、整理段階で柵跡とした。２間のみなので確実性に欠ける。388cmを測り、主軸方向はＮ－9°40′－Ｗ方向で９・14号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。３号溝状遺構に切られる。柱１上位に礫が混入していたが、埋土とともに流入したものだろう。出土遺物からの時期の特定は難しい。

出土遺物（第89図）

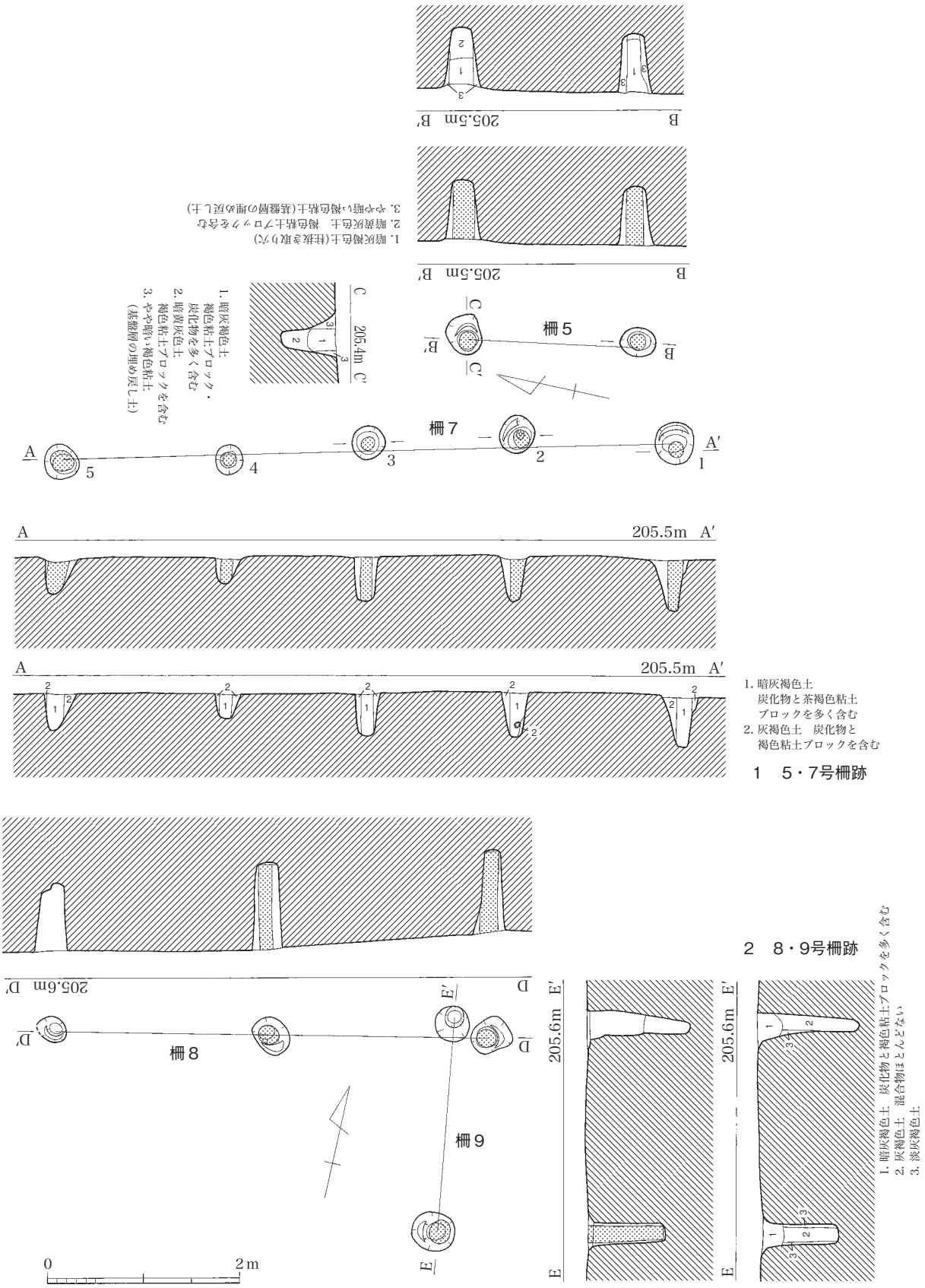
８は柱５から出土した須恵器の胴部片で、内面には目の細かいヨコハケ、外面はヨコナデに部分的にハケが入る。青灰色で変色なし。内面ハケ調整から、中世陶器であろう。

13号柵跡（図版67・71、第87図）

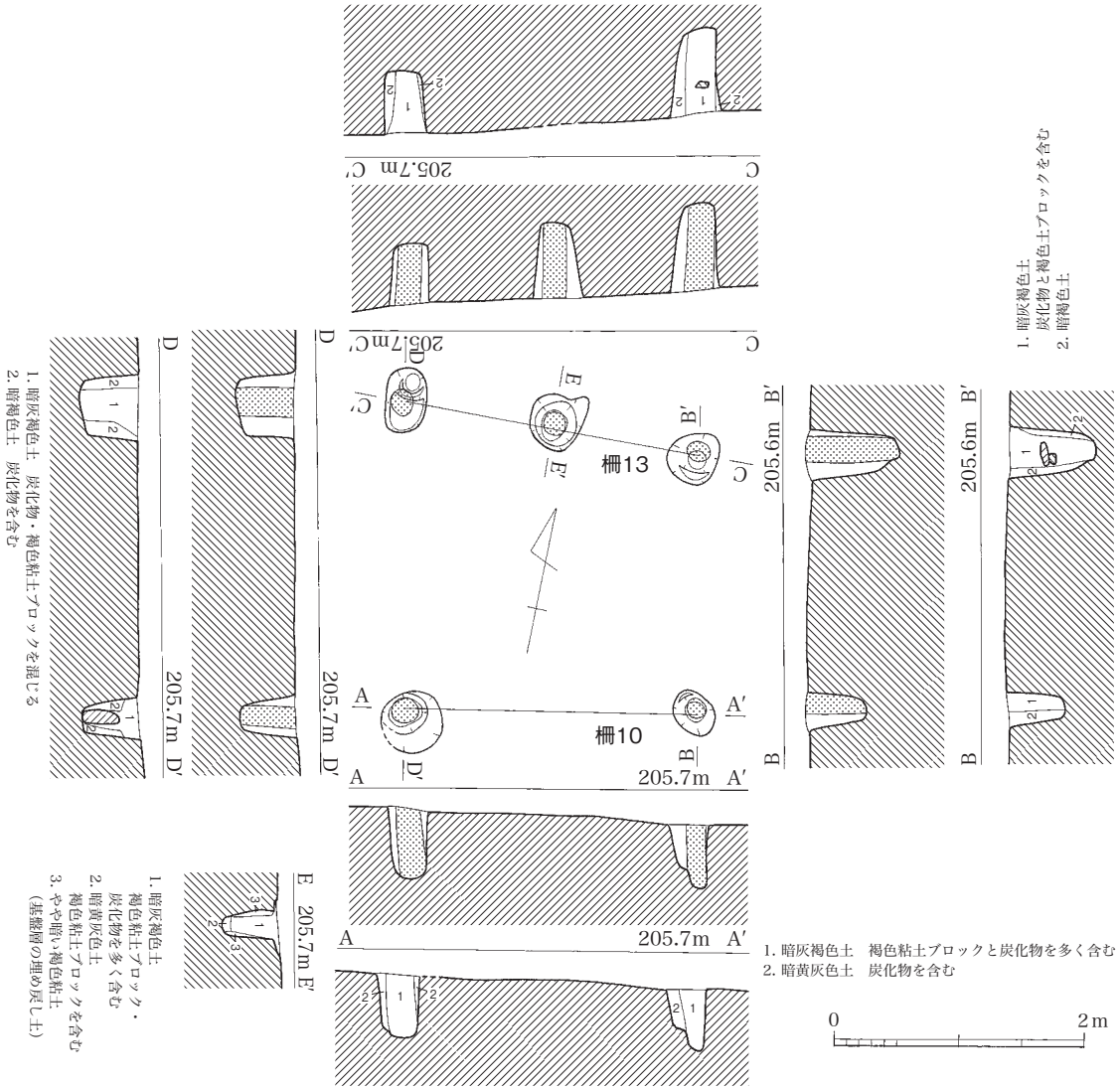
調査区北東部に位置する。当初は掘立柱建物跡の一部と考えていたが、整理段階で２間のみだが



第85図　下伊良原平原遺跡2～4・6号柵跡実測図（1/60）



第86図　下伊良原平原遺跡5・7～9号柵跡実測図（1/60）



第87図　下伊良原平原遺跡10・13号柵跡実測図（1/60）

柵跡とした。東端の柱穴が８号掘立柱建物跡の柱穴を切る。８号柵と重複し、236cmを測り、主軸方向はＮ－89°－Ｅ方向。出土遺物からの時期の特定は難しい。

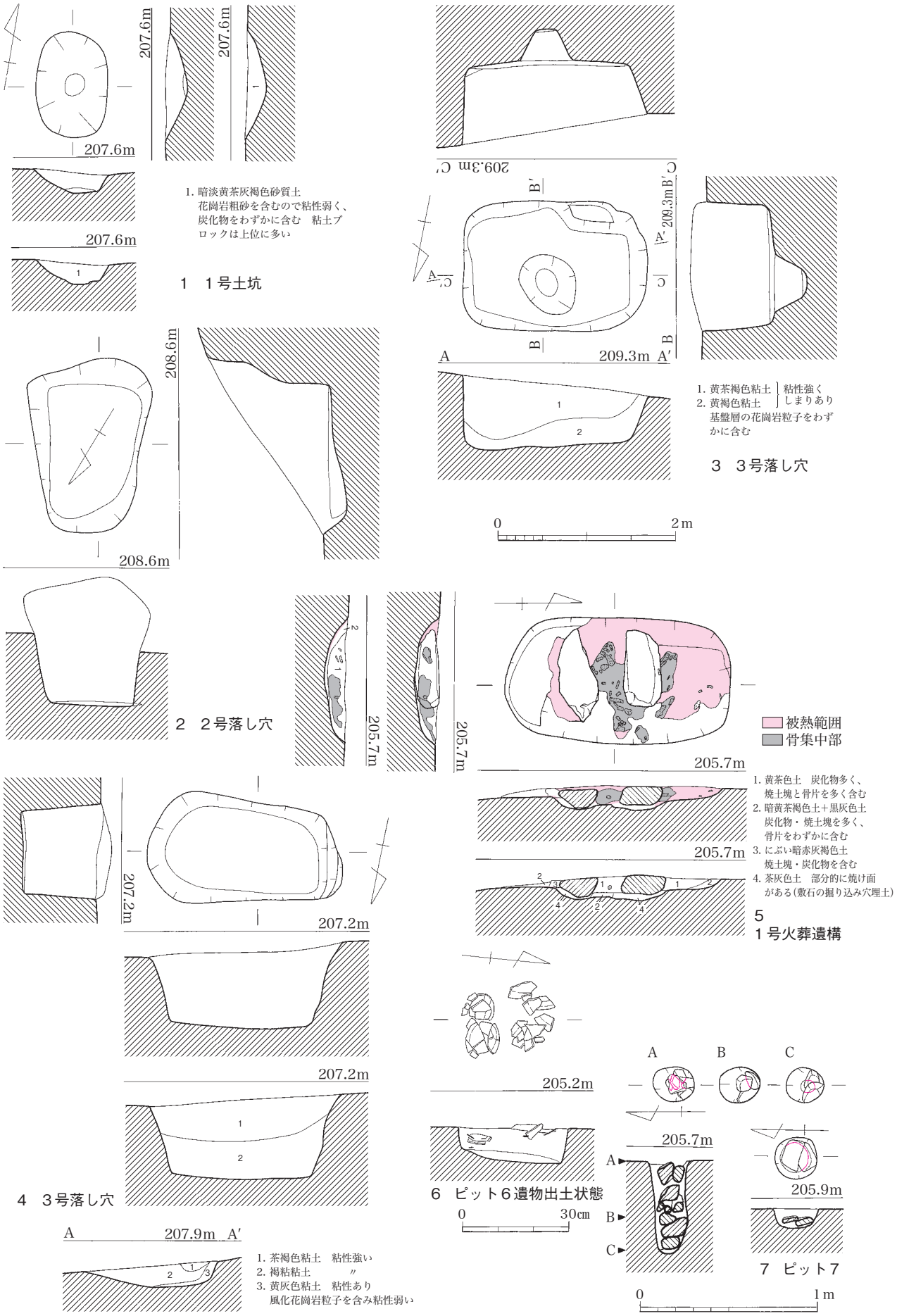
出土遺物（図版72、第89図）

６は柱２上位出土の石臼の下臼で、軟質凝灰岩製で、白色粒子を多く含む。摺り目単位も不均一で、粗いことから、粗悪品である。底面は特に剥落が激しく、黒く変色していることから、礎石として転用されていた可能性が高い。割れ面に変色がないことから、欠損は変色した後である。

14号柵跡（図版67、第83図）

当初は12号柵跡と掘立柱建物跡を構成すると想定していたが、整理段階で柵跡とした。調査区北東部に位置する。２間のみなので確実性に欠ける。390cmを測り、柱穴径は50cm前後と大きい。主軸方向はＮ－9°40′－Ｗ方向で、14号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくするので、伴う可能性が高い。8・9号掘立柱建物跡とも重複するが、先後関係は不明である。出土遺物からの時期の特定は難しい。

出土遺物（第89図）



第88図　下伊良原平原遺跡その他の遺構実測図（6は1/15、5・7・8は1/30、他は1/60）

７は柱４から出土した鉄製品で、幅1.2㎝程の板を断面蒲鉾形に折り返したもので、刃部をもたない。端部が湾曲しているが意図的なものであるとすれば、毛抜きの可能性が高い。

1号土坑（図版71、第88図）

調査区中央の削平テラスの２段目に位置する。平面楕円形プランで、規模から落し穴遺構かと思われたが、壁の立ち上がりは緩やかなので風倒木痕かもしれない。主軸方向はＮ－９°50′－Ｗ方向で、長軸116㎝、短軸78㎝。深さは25㎝で、埋土は単一層で意図的に埋め戻されている。遺物が出土していないので時期不明。

落ち込み状遺構

1号落ち込み状遺構（図版67、第76図）

調査区中央の削平テラスの２段目に位置する。当初は埋土の中央部のみを検出したため溝としたが、精査すると基盤漸移層がその周囲に存在することがわかり、平面不整形プランで、床面が東に向かって下がる落ち込み状遺構となった。長軸618㎝、短軸255㎝で、埋土の最上位の茶褐色粘土は有機物が腐食したもので、その周囲は基盤層漸移層であろう。この土層から倒木痕の可能性が高い。遺物が出土していないので時期不明。

溝状遺構

1号溝状遺構（図版67、第76図）

幅35～90㎝、深さ5～15㎝で、南北方向に走るが南端部は直角に東に折れる。両端部が途切れているのは削平のためであろう。掘り方が不整形であることから、本来浅かったものと見られる。本遺構が雨落ち溝とすれば、対応するのは1～3号掘立柱建物跡であり、1号掘立柱建物跡であれば、溝との間隔から建物の屋根は切妻形式だろう。北端がやや西に振れるのは北側に位置する建物を避けたためと見られ、南北両建物跡が共存していた証左となる。出土遺物はなく時期を特定できない。

２号溝状遺構（図版67、第76図）

幅25～65㎝、深さ７～10㎝で、Ｎ－17°30′－Ｗ方向に2.9ｍ検出された。北端部が途切れているのは、本来浅く包含層上から掘られていたため、北側の斜面地では基盤層に達していなかったのではないだろうか。３号溝状遺構と近接しているが、切り合う部分はない。本遺構が雨落ち溝とすれば、対応するのは９号掘立柱建物跡である。出土遺物はなく時期を特定できない。

３号溝状遺構（図版67、第76図）

最大幅100㎝、深さ30～60㎝で、Ｎ－20°－Ｗ方向に2.1ｍ検出された。北端部が途切れているのは、本来浅く包含層から掘られていたため、北側の斜面地では基盤層に達していなかったためではないだろうか。２号溝状遺構と近接しており、２号溝状遺構とは掘り直しの関係であろう。雨落ち溝とすれば、対応するのは14号掘立柱建物跡である。出土遺物はなく時期を特定できない。

４号溝状遺構（図版67、第76図）

幅 100cm、深さ 30 ～ 60cmで、N - 5° - W 方向に 3.2 m検出された。北端部が途切れているのは、本来浅く包含層上から掘られていたため、北側の斜面地では基盤層に達していなかったためではないだろうか。9・14 号掘立柱建物跡、2・8 号柵跡と切り合う、出土遺物はなく時期を特定できない。

火葬遺構

1号火葬遺構（図版72、第88図）

調査区南東端の削平テラスの４段目に位置する。平面方形プランで、平坦面を上にした２個の花崗岩が浅く掘り込んで設置されていた。花崗岩の上面は熱を受けて赤く変色している。炭化物や焼土塊が床面近くに広がり、中央部に焼けた骨が出土したので火葬遺構である。大きな骨は残っていなかったので、集骨された残りだろう。長軸 127cm、短軸 70cmで、深さは 14cmあるが、削平は受けている。骨は小片でのみで、部位を特定できるものはない。焼成温度が高かったらしく、生焼けのものはない。遺物が出土していないので時期不明。

落し穴遺構

1号落し穴遺構（図版71、第88図）

調査区西端の削平テラスの１段目に位置する。平面方形プランで、主軸方向はＮ - 117° - W、長軸 206cm、短軸 146cmで、深さは 65cmを測る。床面にピットがあり、杭が設置されたものと見られるが、柱穴径が大きく埋土に差異が見られないことから、杭は抜き取られたものと見られる。遺物が出土していないので時期不明。

２号落し穴遺構（図版71、第88図）

調査区西端の削平テラスの１段目と２段目の間の斜面に位置する。平面方形プランで、削平の大きい東側ほど幅が狭い。主軸方向はＮ - 30° 20′ - W で、長軸 98cm、短軸 71cm、深さは 73cmを測る。埋土はにぶい黄灰褐色土で、ほぼ単一層であった。床面にピットはなく。遺物が出土していないので時期不明。

３号落し穴遺構（図版71、第88図）

調査区北端中央の削平テラスの２段目に位置する。平面方形プランで、主軸方向はＮ - 79° 30′ - W で、長軸 110cm、短軸 55cm、深さは 45cmを測る。埋土はにぶい黄灰褐色土で、ほぼ単一層であった。床面にピットはなく。遺物が出土していないので時期不明。

ピット０（第88図）

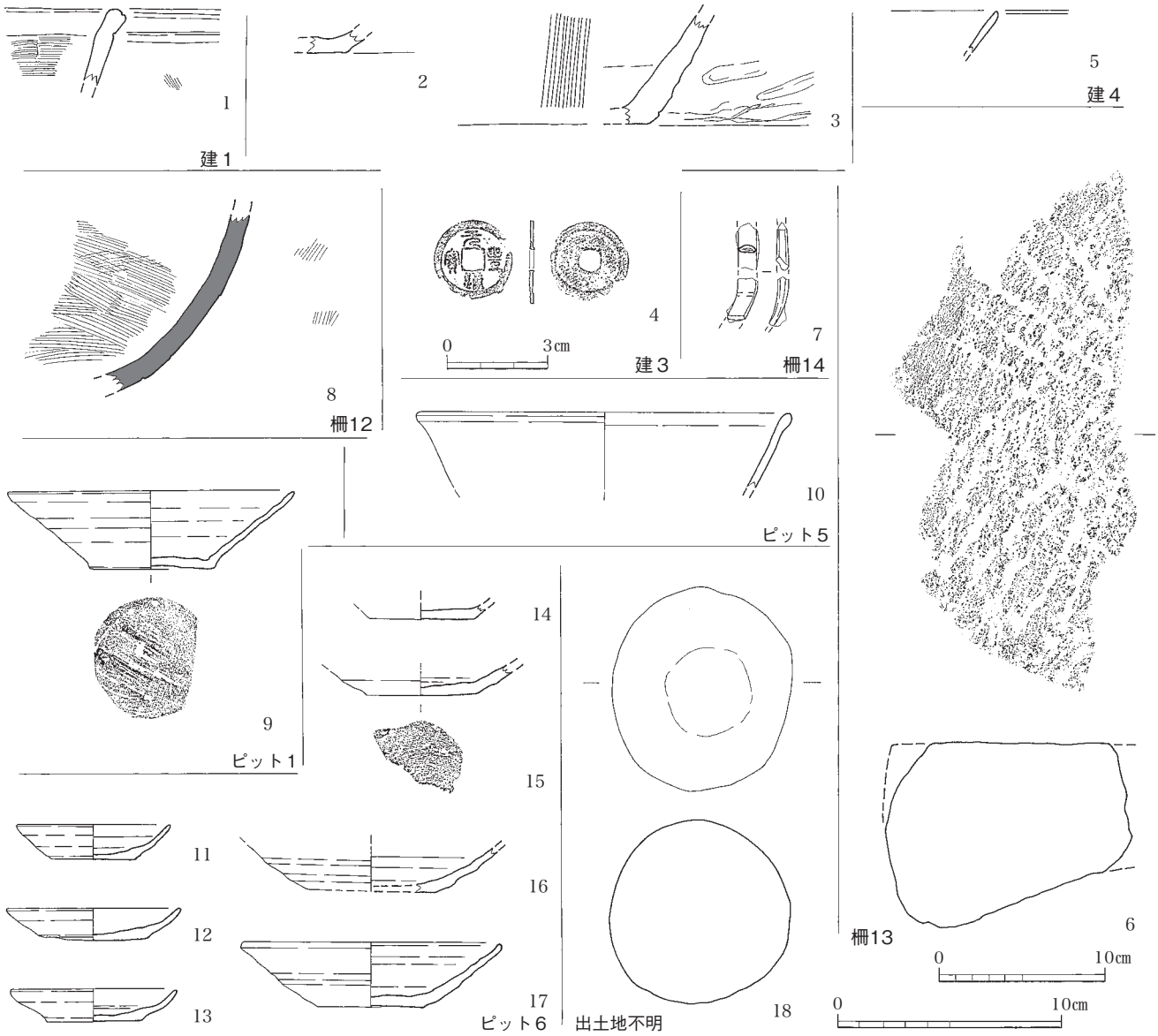
調査区北東部の１号掘立柱建物跡の北西隅の西横に位置する。径 23cm、深さ 52cmの柱穴で、検出面から底面まで礫を充填していた。礫の隙間はほとんどないので、混入したものではない。掘立柱建物跡や柵跡の柱穴にしては小さく、根固めした礫が崩落したにしては柱根のあった空間が存在しない。

ピット6（図版72、第88図）

調査区北東端に位置する。径15cm、深さ11cmの柱穴で、上位から土師器小皿が４枚重なって検出された。多くの小皿は正置状態で重なっており、遊離しているものも本来は重なっていただろう。

出土遺物（第89図）

10～14は土師器杯で、10は復元口径が7.0～7.4cm、器高1.5cmの極小の小皿で、外面は３段ナデ、内面は２段ナデ。外底は糸切り。にぶい黄灰色で変色なし。胎土は精良で金雲母を多く含む。11・12は口径7.6～8.0cm、器高1.5cmの極小の小皿で、口縁部は内外丸みをもち、ナデの単位がわからない。外底は摩滅しているが糸切りだろう。見込みは螺旋状ナデ。にぶい黄灰色で変色なし。胎土は精良で金雲母を多く含む。13は底部径4.5cmの極小の小皿で、外底は糸切りが摩滅している。見込みは螺旋状ナデ。色調はにぶい黄橙灰色で変色なし。胎土は精良で金雲母を多く含む。14は糸切り底の底部で、見込みは螺旋状ナデ。橙褐色で変色なし。胎土は精良で金雲母を多く含む。15・16は土師器小皿で、15は外面胴部に段と丸みのあるナデが特徴的な土師器小皿で、胎土は精良で金雲母を含む。16は外面胴部に丸みをもつナデが入り、口縁部はケズリ状のナデで段を有する。



第89図　下伊良原平原遺跡10・13号柵跡実測図（1/60）

内面は胴部が幅広く、口縁部が３段のナデ。見込みは螺旋状ナデ。外底は摩滅しているが、糸切りだろう。橙褐色で変色なし。胎土は精良で金雲母を多く含む。

ピット７（図版72、第88図）

調査区北東端に位置する。2･3号掘立柱建物跡の内部に位置する。径23㎝、深さ22㎝の柱穴で、床面に扁平な石を敷いている。柱穴の敷石と思われるが、他の掘立柱建物跡の柱穴に比べて浅く、掘立柱建物跡を構成する柱穴でもないので、機能がわからない。

その他の遺構出土遺物（図版72、第89図）

９はピット１出土の土師器小皿で、口縁部と胴部から底部は図上接合である。外底は糸切り後に板状圧痕があり、内外胴部はナデ窪む。見込みはナデ仕上げで、胴部と底部との接合部にナデ窪みをもつ。胎土は軟質で、金雲母の混入と褐色パミスを多く含む。10はピット５出土の龍泉窯系青磁碗で、口縁部と胴部は図上接合である。口縁部外面は肥厚して玉縁状を呈する。釉薬は暗緑灰色を呈し、口唇部は灰被りが見られる。無文で、貫入多い。

17は出土地不明の円礫で、表面の摩滅が著しく使用痕は観察できない。平坦な面がないので磨石ではなく、敲打痕もない。凝灰岩製であることから縄文時代の石器ではなく、球形に近いことから投弾ではないだろうか。742ｇを測る。

３）小結

本遺跡は、縄文時代早期に多く見られる長方形プランの落し穴列と、それに伴う柵跡がセットで検出されたほか、14世紀から16世紀代の掘立柱建物跡数棟で構成される家屋が検出された。

落し穴列に伴う柵は丘陵斜面の上側にのみ設置されているので、追い込み猟であった可能性が高い。おそらく、斜面の下側から追い上げられた獲物が、丘陵上方に逃げるのに使う獣道に仕掛けていたのだろう。

掘立柱建物跡は、柱穴の切り合いから、３号→１号、４号→２号→３号の順に新しいことがわかる。したがって、４号→２号→３号→１号の順に主屋が建替えられたものと考えられ、次第に大型化している。

主軸方向からみて、３号掘立柱建物跡と14号掘立柱建物跡、２号掘立柱建物跡と９号掘立柱建物跡、１号掘立柱建物跡と８号掘立柱建物跡の併存が想定され、主屋とその北側に粗雑な小屋が付随していたものと考えられる。掘立柱建物跡が同じ場所に何度も建替えられているのは、居住に適した平坦地が少なかったためであろう。出土遺物は少ないが、特に稀少なものはない。

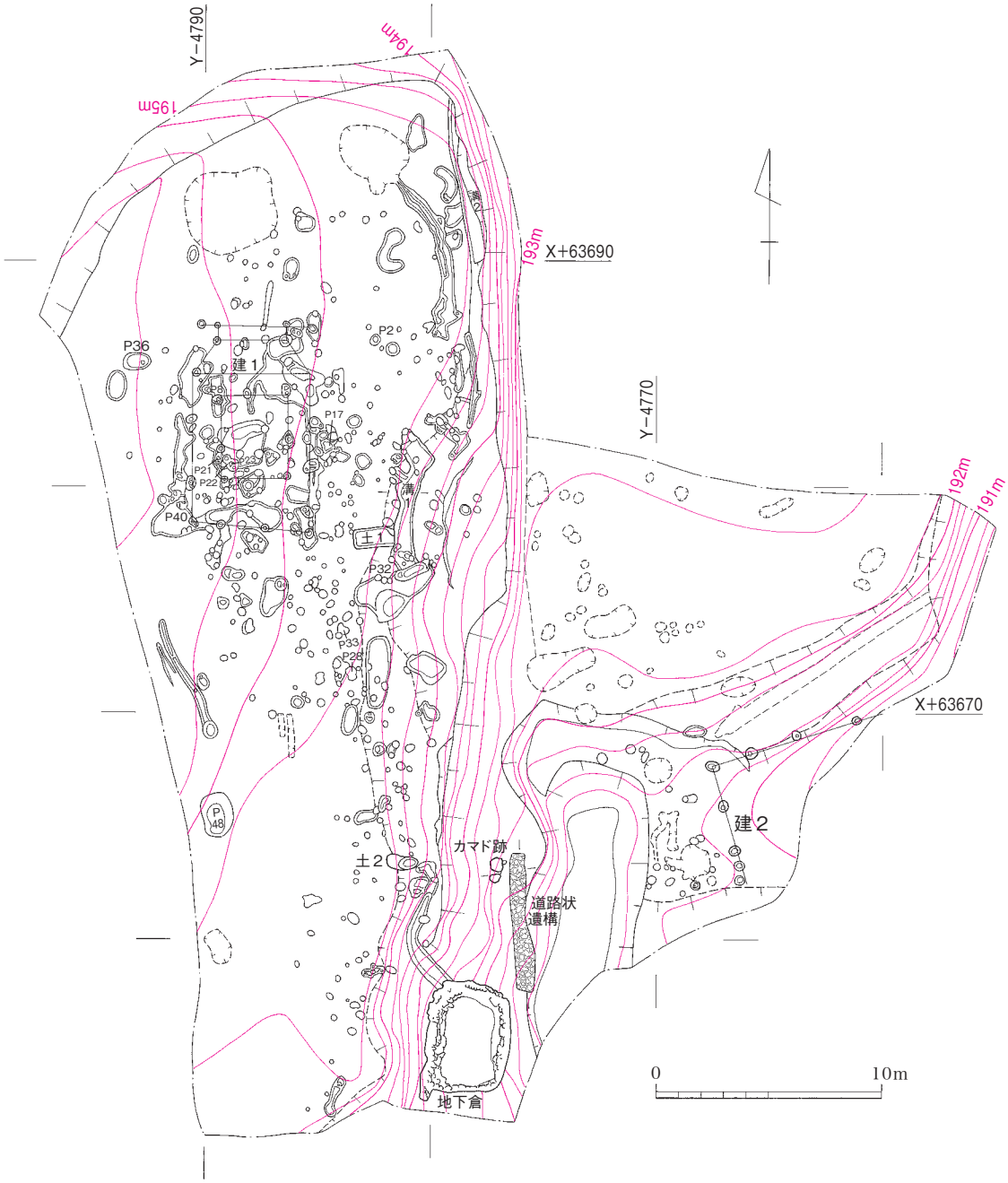
掘立柱建物跡群の南には、火葬場遺構があり、出土遺物はないものの平面方形の土坑に上面が平坦になるように石を敷くという形態から、掘立柱建物跡と同時期に属すると見られる。火葬土坑が多く発見された遺跡では、土壙墓のような分布を見せているが、本遺跡では火葬したまま埋葬したにしては骨が一部しか見つからないので、火葬したのち拾骨し、五輪塔など石塔の下のピットに入れたのではないだろうか。伊良原地区では五輪塔などの石塔が多く分布しており、広い階層に石塔を樹立する供養習俗が広がっていたようだ。

4　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査

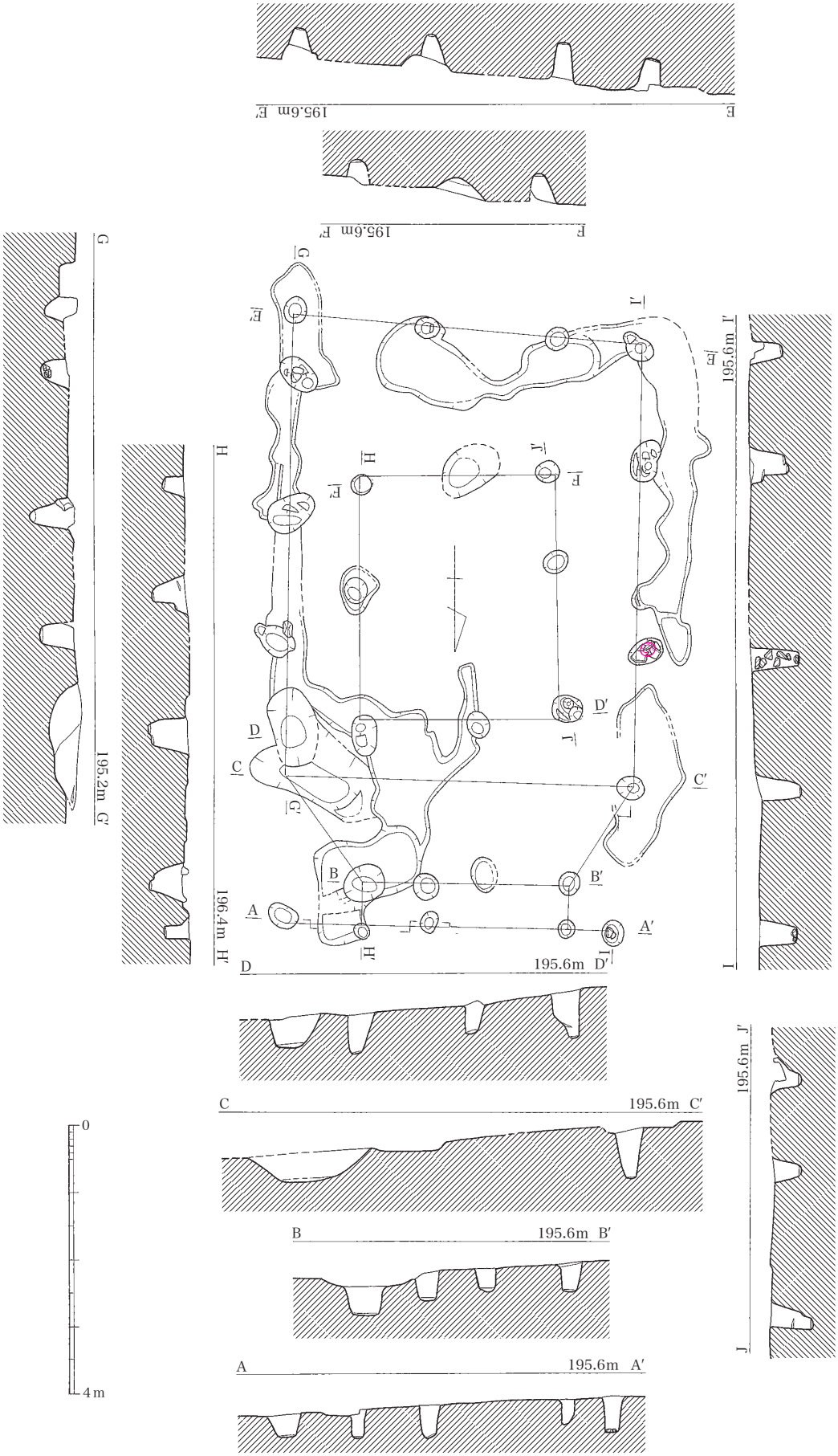
１）調査の概要

調査対象地は丘陵の緩斜面で、１次調査の 200 m西上方に位置する。調査対象地は石垣が貼られた斜面を挟んで上下２段に分かれており、上段は畑地、下段は家屋地として使用されていた。

平成 25 年 10 月 10 日にバックホーを入れ、表土剥ぎを進めたところ、石垣が貼られた斜面は丘陵を大きく削って壁状にしたもので、下段の平坦面は家屋に伴う撹乱ばかりで遺構はほとんどないことがわかった。そのため、下段は旧地形の緩斜面が残っていた南側のみを対象地とし、調査面積は約 1,500㎡となった。



第90図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査遺構配置図（1/300）



第91図　下伊良原中ノ坪遺跡2次調査1号掘立柱建物跡実測図(1/80)

上段はピットが残ってるものの、南西部はピットが少ないことから、丘陵の張り出した部分が削平されたようだ。下段と上段の間の斜面は、南側が緩やかな旧地形の斜面が残っていた。また、南端部の基部には水流による谷が形成され基盤層が削られていた。

上段のピットの中には特徴的な黄灰色砂質土の埋土があり、掘り下げてみたが出土遺物もなく風倒木と見られた。12 月 6 日に空中写真を撮影し、12 月 24 日に図面作業を完了させて撤収した。

２）遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版74、第91図）

調査区上段中央に位置する。柱穴が大きく深いもので構成されているが、柱筋が通らず構造が判然としなかった。ここでは２×２間の周囲に庇をもち､南面に庇が延びる建物を想定した。しかし、基盤層から露出していた礫を礎石の１つとしていた可能性もあり、復元した建物の確実性はかならずしも高くない。

２×２間部分は梁行 300㎝、桁行 368㎝を測る。庇部分には浅い溝状の落ち込みがあり、横木か板塀が存在していたものと考えられる。柱２と柱 18 の底面には敷石があり、柱 16 には礫が入り込んでおり、根締めしたものと見られる。柱穴が小さいこともあり、柱痕は確認できなかった。柱が抜き取られたらしい掘り方のものもある。南北方向に主軸方向をとり、北側が出入口になるものと思われる。上段にはほかに目立つ遺構がないことから、1・2 号溝状遺構はこの建物に伴うものだろう。この段の平坦面は南半が大きく削平されているため、ピットが集中する本遺構周辺が中心であろう。出土遺物から 16 世紀中葉である。

出土遺物（第94図）

1･2は柱３と柱 17 出土の土師器小皿で、1 は復元口径 6.2㎝､器高 1.4㎝､2 は復元径 6.8㎝､器高 1.3㎝の極小の小皿である。内外１段ナデで、外底は糸切り後板状圧痕。胎土は精良軟質で、にぶい暗黄灰色を呈し、使用変色なし。３は柱１出土の瓦質土器の火鉢だが、焼成不良のためか軟質。外面口縁下にスタンプが入るが、モチーフがわからない。内外黒灰色。胎は黄灰色で軟質。４は柱 15 出土の土師質土器の摺鉢で、外面はオサエとナデ、下位はケズリ。内面は摩滅しているため調整は不明だが６本単位の摺り目が入る。外底の切り離し方法は残っていないため不明。胎土は軟質で、カクセン石を多く含む。黄橙灰色を呈する。５は柱６出土の土師質土器の摺鉢で、外面はケズリのナデ。内面は７本単位の摺り目がヨコハケの上に入り、外底には板状圧痕が残る。胎土は軟質で、白色粒子を多く含む。黄灰色を呈し、黒斑が見られる。６は土師質土器の把手付土鍋で、把手部分は手捏ね成型で、口縁部は平坦にナデている。鍋部の口縁部は把手を接合したためか均一でなく、傾きは不明確。本来の色調はにぶい黄灰色だが、黒斑が大きい。把手の下面と鍋部外面は器面が摩滅している。煮沸使用による風化だろう。７は柱３から出土した備前焼の摺鉢口縁部で、摺り目部分は残っていない。外面口縁部と内面はナデ、外面胴部はケズリ状のナデ。８は柱５出土の染付碗底部片で、見込みに花文が染め付けられている。畳付には焼き台から外した時の欠損が見られる。外底には「大明年製」が入る。９は柱 16 出土の肥前青磁の香炉で、淡緑灰色の緑釉を全面に掛けた後外底は釉剥ぎ。脚は型押し成型による逆凸形脚を貼り付けており、３ヶ所あったと見られるが１ヶ所のみ残る。10 は白磁小皿で、畳付には砂目がつく。乳白色の白磁釉で、無文。景徳鎮窯。

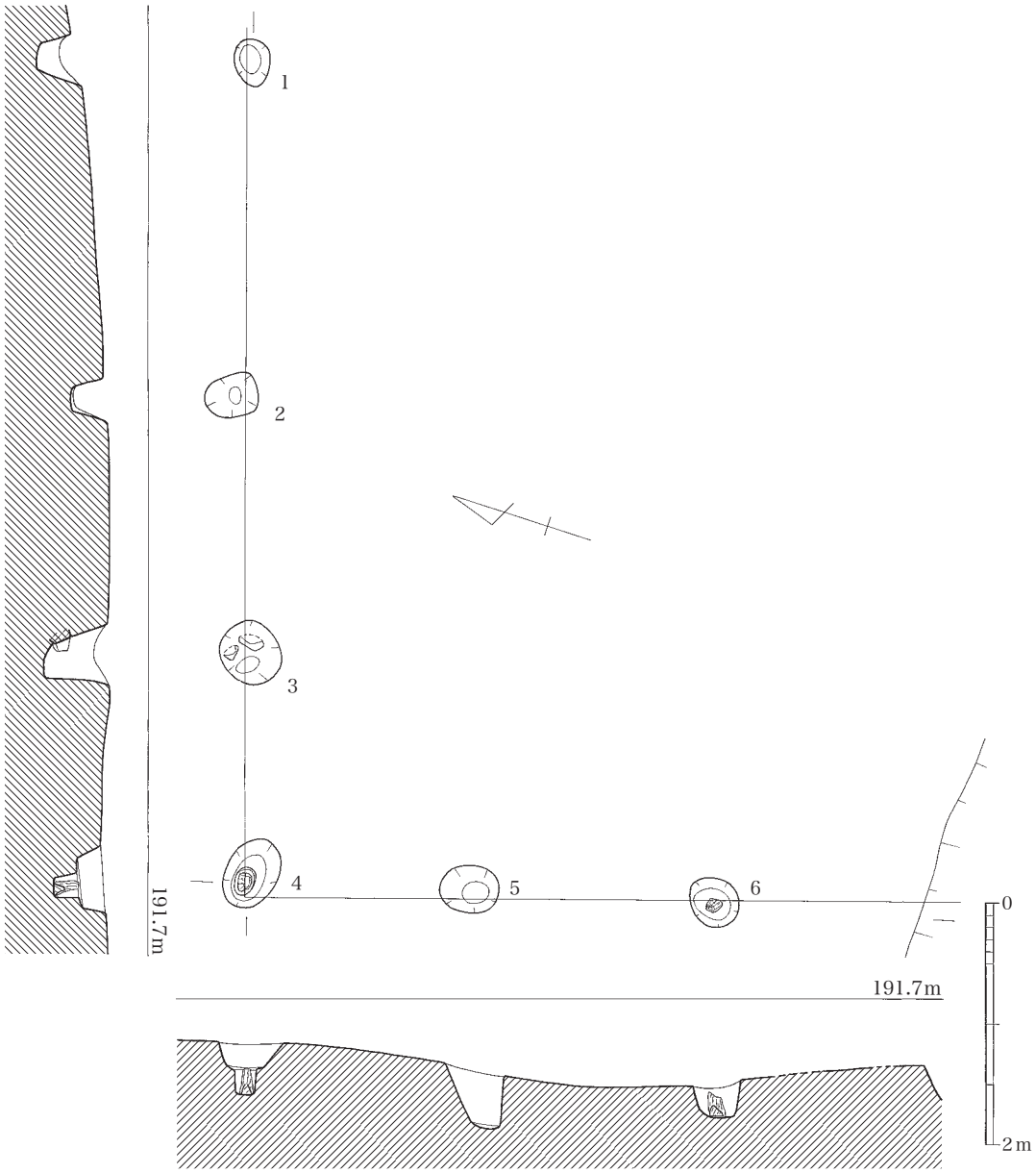
２号掘立柱建物跡（図版75、第92図）

調査区南東部下段に位置する。西辺２間以上、北辺３間以上の２辺のみが検出された。南辺が大きく削られているが３×４間以上、７×８ｍ以上の規模であることは間違いない。柱間 190 ～ 270 cmで、柱穴径は 50cmを測る大型掘立柱建物跡である。柱４と６には柱根が残っていた。柱４は柱根部分が深くなっているので沈み込んだ可能性が高い。遺構面は大きく削られており、南ほど残りが悪い。

主軸方向はＮ - 72° 30′ - Ｅ方向で、下段南側縁の湾曲に沿っている可能性が高い。遺物が出土していないので時期不明。

道路状遺構（図版76・77、第90・93図）

上下段の間の南側斜面南側に位置する。ほぼ南北方向に、斜面を幅 130cmほど削って平坦面を造成し、小礫を敷いて叩き締めている。小礫は平坦面の斜面側から約 15cm離しているので、小礫の



第92図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

敷いた部分との間が側溝状になる。この道路状遺構は仰角７°ほどで5.2m残っており、南北両端は失われていた。道路状遺構の北端部にカマド跡が位置することから、カマドまでの通路だったのだろう。南端は階段が敷設されていたかもしれない。表土上から出土した陶磁器は17世紀代なので、それ以前のものといえよう。

出土遺物（第94図）

14は瓦質土器の摺鉢で、外面胴下位はケズリ状ナデ、口縁部から内面はナデ。内外変色なく、灰色を呈する。胎はやや軟質で、カクセン石が入る。摺り目は残りが悪く単位不明。15は上野・高取系陶器摺鉢口縁部片で、外面胴部はカキ目が入り、内面はナデの上に摺り目を入れ、口縁下はナデ窪む。口縁部から外面口縁下には鉄漿が掛かるが、それ以外は露胎。堅緻で白色粒子を多く含む。にぶい灰茶褐色を呈する。摺り目は密なため単位不明で、溝が深い。17世紀後葉。

地下倉遺構（図版77、第93図）

上下段の間の南側斜面地に位置する。斜面を490×380㎝に箱形に掘り窪め、床面はほぼ平坦にし、壁は４面とも石垣を積んでいた。その結果、内法は420×235×115㎝を測る。西壁は直立しておらず、旧地形に沿っていることから本来の深さに近いと見られる。北西角に通路となる溝状の切り通しがあり、北辺の西端は石垣がなく、斜面が緩やかなのは梯子をかけるためと見られ、地下倉の出入口だっただろう。

西辺の石垣は積み直しの痕跡があるので一度崩落している。西辺は南辺より長く積まれており、西辺が先に積まれたとわかる。調査時には不明瞭だったが、石垣の積み始めのラインが床面より高いことと、床面中央部が窪むことから、貼り床があったと見られる。しかし、特に硬化面はなかった。

出土した染付は近世後期のもので、埋土上位からは明治後期の銅版摺り染付が出土したことから、近世後期に作られ、明治後期には廃絶している。

出土遺物（図版78、第94図）

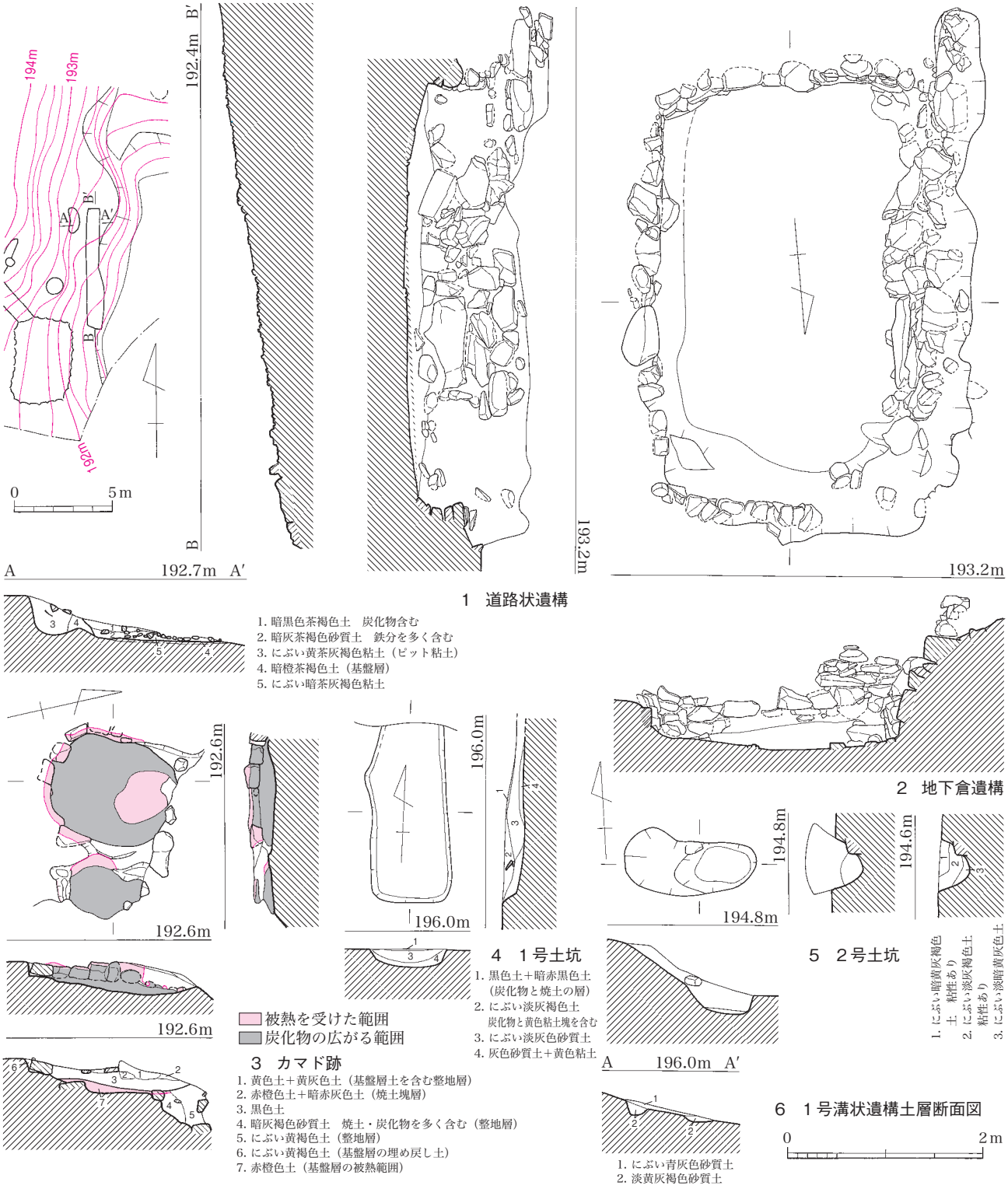
11は染付の小碗で、見込みに呉須で花文が入る。肥前磁器にしては珍しいモチーフで、胎土がやや軟質で貫入が多く入ることから、肥前磁器ではない。畳付は釉剥ぎ。12は型合わせ成型の軟質施釉陶器の鳩笛で、上面側は透明釉を掛けた上に緑釉で斑文様をつけている。胎土から福岡平野産だろう。13は石垣の積み石に転用されていた大型砥石で、側面と下面は整形面で平滑にされており、小口面は粗く平坦化されている。使用面は上面のみで、風化と材質のため使用痕が残っていない。深い刀傷がある以外は、集中的に使用した部分がなく、使用頻度は少なかっただろう。凝灰岩製なので加工はしやすいが、仕上げ砥にするにはやや材質が粗いことから中砥だろうか。7,620ｇを測る。

カマド遺構（図版78、第93図）

上下段の間の南側斜面地に位置する。大小のカマドが南北２つあるが、作り直したものではなく２連のカマドである。壁が焼け、床面には炭化物が広がっていた。大カマドは東端を、小カマドは南端を欠損しているが、両者とも平面馬蹄形プランで、火床が残ることから斜面下方の東側を焚口としていたとわかる。緩斜面を利用しているが、斜面上位側は開削し、斜面の下位側は客土して平坦面を作っている。そのため、大カマドは東辺の焚口部分が崩落して残っていない。大カマドは長

軸160cm、短軸120cmほど、小カマドは長軸120cm、短軸60cmと見られる。深さは35cmほどしか残っていないため、煙突は残っていない。壁の礫の間は粘土が詰められており、礫の上面が平坦であることから、礫を積み上げて壁体を構築していただろう。

覆屋らしい柱穴はなく、屋外炉だったのだろうか。



第93図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査その他の遺構実測図（１は1/300と1/60、他は1/60）

土坑

1号土坑（図版73、第93図）

調査区上段の中央に位置する。平面長方形プランで、東辺は斜面で失われている。主軸方向はN－87°30′－Eで、長軸190cm以上、短軸84cm。深さは20cmしか残っていない。埋土は自然堆積なので墓ではない。遺物が出土していないので時期不明。

２号土坑（図版73、第93図）

調査区上段の南側に位置する。平面略楕円形プランで、東半は斜面で失われている。主軸方向はN－88°20′－W方向で、長軸135cm、短軸75cm。深さは70cmと深い。埋土は自然堆積なので墓ではない。遺物が出土していないので時期不明。

1号溝状遺構（図版73、第90・93図）

調査区上段中央の東端に位置する。斜面の地形に沿って湾曲しており、幅は55～125cmと幅広で、深さ10～20cmである。1号掘立柱建物跡の北東に位置し、併存する可能性が高い。

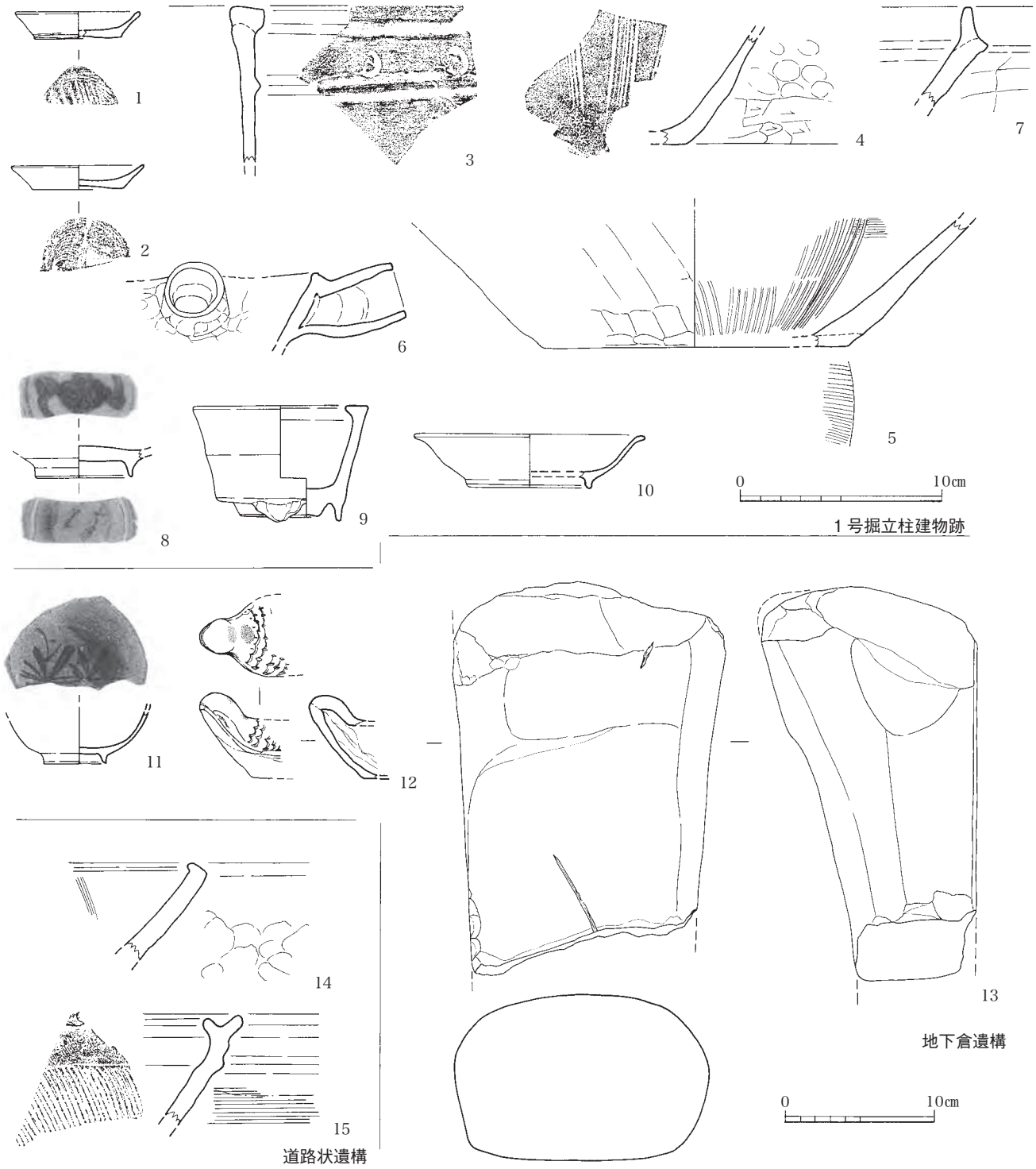
２号溝状遺構（図版73、第90図）

調査区上段中央の東端に位置する。1号掘立柱建物跡の東に位置し、併存する可能性が高い。斜面の地形に沿って湾曲しており、幅は30～65cmと幅広で、深さ5～15cmである。

そのほかの出土遺物（図版78、第95図）

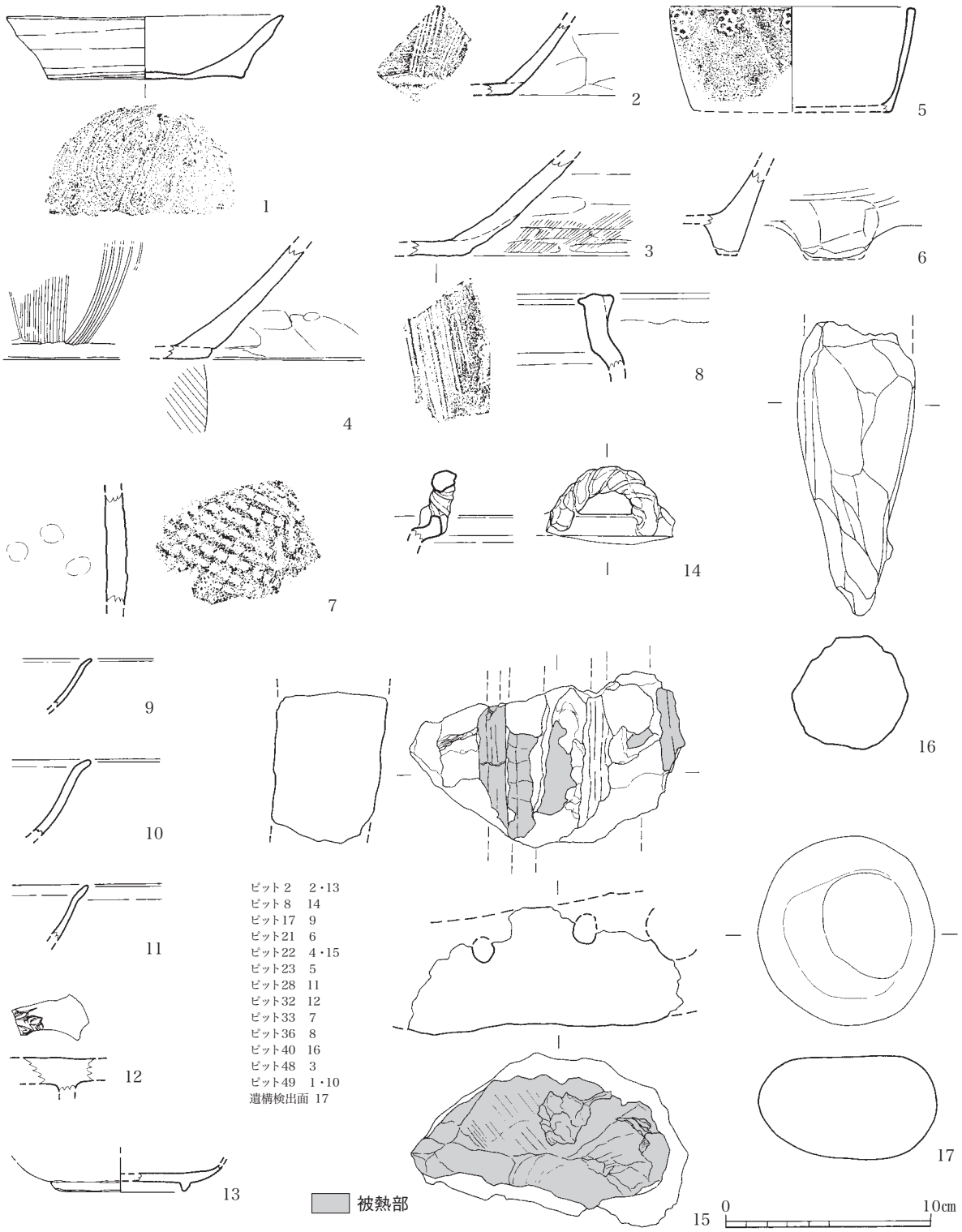
１はピット49出土の土師器皿で、外面底部は糸切り後、板状圧痕が見られる。内面は螺旋状ナデをしたのち、中央部に粘土を被せている。体部外面はハケ状工具による回転ナデ。２はピット２出土の瓦質土器の摺鉢の底部片で、外面はケズリ、内面は摩滅しており、６本単位の摺り目が入る。外底の切り離し方法は観察できなかったが、胎土は精良で、軟質。灰色を呈し、外底には炭化物が付着着している。３はピット48出土の瓦質土器の甕の底部で、傾きが緩やかで、摺り目がなく、内面が摩滅していることから、摺り鉢や捏ね鉢ではなく甕だろう。外面底部には板状圧痕が明瞭に入り、外面は底部近くが目の細かいハケ、その上はケズリ状のナデが入り、ナデ窪む部分もある。内外黒灰色を呈し、胎は明灰白色。胎土は比較的堅緻で精良。４はピット22出土の土師質土器の摺鉢で、外面は板状圧痕跡をもつ。胴下位に粘土の積み上げ痕を残す。内外器面の摩滅が著しく、胎のにぶい黄橙灰色を呈する。軟質で白色粒子を多く含む。５はピット23出土の土師質土器の香炉で、内外器面摩滅のため調整不明。器壁が薄く、小型なので火鉢ではない。外面口縁部下に菊花文スタンプが入る。軟質で白色粒子を多く含む。にぶい暗灰褐色を呈する。口縁部内外に煤が付着する。6はピット21出土の瓦質土器の火鉢底部で、型押し成型と見られる脚がつく。器面が残っており、外面ハケの後ナデ、内面ナデ。摩滅が著しい脚の接地部分は使用によるものだろう。内外漆黒色を呈する。やや軟質で、白色粒子を多く含む。７はピット33出土の土師質土器の甕で、外面に格子目タタキ痕が残り、内面はタタキ当て具をナデ消している。変色しているが、本来は黄灰白色を呈する。８はピット36出土の瓦質土器の火鉢の口縁部で、器面摩滅のため調整不明。内面はヨコナデ。内外灰黒色がわずかに残る。９はピット17出土の口禿白磁皿で、乳白色の白磁釉が

かかる。10はピット49出土の龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、貫入多いが発色はよく。緑灰色を呈する。11は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、口唇部には灰被りが残る。緑灰色の青磁釉が掛かる。12は龍泉窯系盤の底部片で、見込みに花文がスタンプされている。高台内部は釉剥ぎ。13はピット２出土で、白磁皿である。無文で、乳白色の白磁釉が掛かる。高台と底部の接合が弱く隙間がある。景徳鎮窯だろう。14はピット８出土の肥前青磁壺の口縁部で、型押し成型されたものと見られる捩り輪把手が貼り付けられている。15は炭窯タイプの火葬場の閉塞土壁と見られ、ブロック状の粘土に径1.9㎝の棒状の通風孔を開けたものである。棒状の孔は土壁の芯になる木質部分ではなく、



第94図　下伊良原中ノ坪遺跡２次調査出土遺物実測図１（13は1/4、他は1/3）

片側から押し開けられたもので、ややずれて重複して開けられている部分があるので、何度か穿ったのだろう。壁は均一に熱を受けており、火災のように煤や炭化物がつくなどの変色がないので、燃料に接する場所でも、高熱にさらされる所でもない場所にあったことが予測できる。ピット内に多量に入っていたので、片付け時に埋め込まれたものだろう。16はピット40出土の杭で、調査区西端部は湧水があることから、木質が残ったものと思われる。加工痕は不明瞭ながら観察できる。17は遺構検出面出土の磨石で側縁に敲打の痕跡らしいものがあるが不鮮明。使用部分は平坦である。凝灰岩製で539 gを測る。



第95図　下伊良原中ノ坪遺跡2次調査出土遺物実測図2（1/3）

小結

遺跡は丘陵の緩斜面に１号掘立柱建物跡を建て、斜面の傾斜を利用してカマドと地下倉遺構と道路状遺構を作っている。このうち、１号掘立柱建物跡は16世紀中葉の時期に比定され、地下倉遺構は近世後半代に見られるものなので、同時併存しないと考えられる。また、地下倉遺構の北壁上方には通路状の掘り込みがあるので、石畳が施された道路状遺構は地下倉に伴うものではなく、むしろ１号掘立柱建物跡とセットになるものだろう。カマド遺構は道路状遺構の上に堆積した層の上を整地して作られており、カマド遺構と道路状遺構が併存するとなると、傾斜した道路上でカマドを使用することになるので、カマド遺構は地下倉遺構に伴う可能性が高い。

下段の大型の掘立柱建物は、一見すると古代の掘立柱建物のようだが、古代に属する遺物がないことと、やはり緩斜面を利用しており単体で存在することから、１号掘立柱建物跡と道路状遺構に伴うと考えたい。１号掘立柱建物跡はその柱配置から通常の民家ではなく、神社か祠堂のような施設が考えられる。１号掘立柱建物跡に至る道路状遺構が石畳を施しているのも、何らかの宗教施設であれば首肯できる。であるならば、２号掘立柱建物跡は宗教施設に伴う建物だったという想定が成り立つ。しかしながら、それを証明するに足りる出土遺物はない。

土壁片の出土したピット22は１号掘立柱建物跡の内部の西辺に位置するが、他のピットや土坑からは土壁片が出土していないことから、１号掘立柱建物跡の土壁であった可能性は低い。また、土壁は焼成した痕跡があり、芯が棒状のもののみなので家屋の壁ではない。同様のものが上毛町今蔵遺跡（註１）の火葬場遺構にあるので、遺跡が立地する丘陵上位にある共同墓地付近に火葬場があったのかもしれない。

註

１　上毛町教育委員会2006『恵良古墳群　今蔵遺跡　縄手遺跡』上毛町文化財調査報告書第３集

Ⅳ　自然科学系の分析

下伊良原西の塚遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下良原西の塚遺跡は、福岡県京都郡みやこ町犀川下伊良原に所在し、祓川左岸の丘陵裾との間に形成された小規模な段丘上に立地する。発掘調査の結果、平安時代末から鎌倉時代頃と考えられる遺構面と、縄文時代と考えられる遺構面と、さらに下層で遺物包含層が確認されている。

本分析調査では、時期不明の貯蔵穴より出土した種実（ドングリ）を対象として、放射性炭素年代測定および種実同定を実施し、遺構の年代および当時の植生や植物利用に関する資料を得る。

1. 資料

資料は、1号貯蔵穴（資料番号6）、2号貯蔵穴床面（資料番号7）、4号貯蔵穴（資料番号8）、5号貯蔵穴（資料番号9）、7号貯蔵穴（資料番号10）、13号貯蔵穴（資料番号11）、S-111（資料番号12）、8号貯蔵穴（資料番号13）、11号貯蔵穴（資料番号14）、12号貯蔵穴（資料番号15）、15号貯蔵穴下層（資料番号16）、18号貯蔵穴（資料番号17）、19号貯蔵穴（資料番号18）の、計13遺構より出土した種実遺体（ドングリ）である。以後、文章や図表中では、便宜上（仮）を記さない。各資料には、種実3～42個が水浸の状態でポリ袋に収納されており、S-111（資料番号12）は130717と130724と記された2袋が存在する。資料の合計は、13遺構14袋387個である。各資料の詳細は、同定結果とともに表3に示す。

放射性炭素年代測定は、1号貯蔵穴（資料番号6）より同定されたアカガシ-ツクバネガシの果実1個（資料番号1；図版1-11）、11号貯蔵穴（資料番号14）より同定されたイチイガシの果実1個（資料番号2；図版1-7）、15号貯蔵穴（資料番号16）より同定されたアカガシ-ツクバネガシの果実1個（資料番号3；図版1-25）、S-362（資料番号17）より同定されたイチイガシの果実1個（資料番号4；図版1-10）の、計4点を対象に実施する。種実同定は、全資料を対象に実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

種実を顕微鏡で観察し、メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。塩酸（HCl）ならびに水酸化ナトリウム（NaOH）の最終的な濃度は1mol/Lである。

これらの資料を燃焼させて二酸化炭素を発生させ、真空ラインで精製する。その後鉄を触媒として還元し、グラファイトを得る。得られたグラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、^{14}Cの計数、^{13}Cの濃度（^{13}C/^{12}C）、14Cの濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定時に、標準資料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド資料の測定も行う。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年

代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.2（Bronk & Lee , 2013）を用いる。較正に用いる曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）である。

（2）種実同定

資料を双眼実体顕微鏡下で観察する。同定は、現生標本および岡本（1979）、伊藤（2001）、小畑ほか（2003;2011）、徳永（2004）、宮國（2014）等を参考に実施し、部位･状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。また、保存状態が良好な果実を対象として、デジタルノギスで果実長･果実径および基部の着点径、頂部の突出部（首～花柱）の長さ･径を計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、年代測定対象資料を除く種実を分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で保存する。

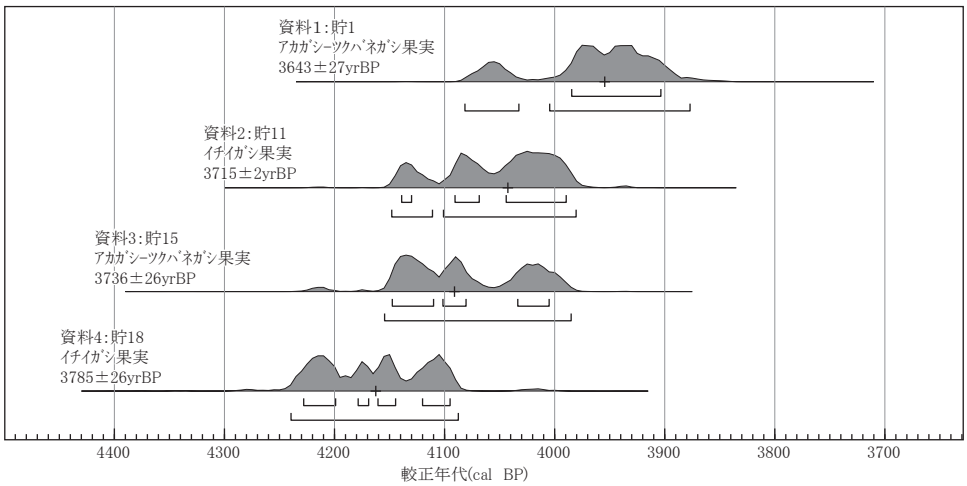
3．結果

（1）放射性炭素年代測定

表1．放射性炭素年代測定結果

資料No. 遺構名	測定試料 （種類）	分析 方法	補正無年代 yrBP	δ ^{13}C （‰）	補正年代yrBP （暦年較正用）	暦年較正年代					Code No.
							年代値		確率	中央値	
資料1 貯1	果実 （ｱｶｶﾞｼｰﾂｸﾊﾞﾈｶﾞｼ）	AAA	3680±30	−27.26±0.54	3640±30 （3643±27）	σ	cal BC 2036 − cal BC 1955	cal BP 3985 − 3904	0.682	cal BC 2006	IAAA− 160605
						2σ	cal BC 2133 − cal BC 2084	cal BP 4082 − 4033	0.165		
							cal BC 2056 − cal BC 1928	cal BP 4005 − 3877	0.789		
資料2 貯11	果実 （ｲﾁｲｶﾞｼ）	AAA	3770±30	−28.57±0.51	3720±30 （3715±26）	σ	cal BC 2190 − cal BC 2181	cal BP 4139 − 4130	0.056	cal BC 2094	IAAA− 160606
							cal BC 2142 − cal BC 2120	cal BP 4091 − 4069	0.167		
							cal BC 2095 − cal BC 2041	cal BP 4044 − 3990	0.459		
						2σ	cal BC 2199 − cal BC 2162	cal BP 4148 − 4111	0.157		
							cal BC 2152 − cal BC 2032	cal BP 4101 − 3981	0.797		
資料3 貯15	果実 （ｱｶｶﾞｼｰﾂｸﾊﾞﾈｶﾞｼ）	AAA	3780±30	−27.80±0.44	3740±30 （3736±26）	σ	cal BC 2199 − cal BC 2161	cal BP 4148 − 4110	0.316	cal BC 2142	IAAA− 160607
							cal BC 2153 − cal BC 2132	cal BP 4102 − 4081	0.165		
							cal BC 2085 − cal BC 2056	cal BP 4034 − 4005	0.201		
						2σ	cal BC 2206 − cal BC 2036	cal BP 4155 − 3985	0.954		
資料4 貯18	果実 （ｲﾁｲｶﾞｼ）	AAA	3860±30	−29.74±0.43	3790±30 （3785±26）	σ	cal BC 2279 − cal BC 2250	cal BP 4228 − 4199	0.255	cal BC 2214	IAAA− 160608
							cal BC 2230 − cal BC 2220	cal BP 4179 − 4169	0.072		
							cal BC 2212 − cal BC 2196	cal BP 4161 − 4145	0.142		
							cal BC 2171 − cal BC 2146	cal BP 4120 − 4095	0.213		
						2σ	cal BC 2291 − cal BC 2139	cal BP 4240 − 4088	0.954		

1)AAAは、酸、アルカリ、酸処理を示す。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
3)暦年較正計算には、Oxcal 4.2を使用。計算には表に示した丸める前の値(較正年代用)を使用している。較正値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいよう に、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。確率は、σ、2σの範囲内に真の値が存在する確率を示したもの である。中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの である。



OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
図の下段は2σ、上段がσの範囲。+はメジアン

図1 暦年較正結果

結果を表1、図1に示す。いずれの資料も保存状態がよく、AAA処理は酸、アルカリ共に1mol/Lの溶液を使用できた。資料番号1は3640±30BP、資料番号2は3720±30BP、資料番号3は3740±30BP、資料番号4は3790±30BPである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正の結果を表1、図1に示す。測定誤差2σの暦年代は、資料番号1が4080～3880calBP、資料番号2が4150～3980calBP、資料番号3が4160～3990calBP、資料番号4が4240～4090calBPである。

（2）種実同定

同定結果を表2に示す。また、カシ類果実の写真を図版1に、イチイガシ果実の計測値を表3、アカガシ-ツクバネガシ果実の計測値を表4、カシ類果実の大きさ･形状を表5、図2に示して同定根拠とする。

分析に供された13遺構14資料を通じて、イチイガシの果実が殻斗・果実が1個、果実が81個、花柱が1個、アカガシ-ツクバネガシの果実が249個、花柱が6個、アカガシ亜属の果実が7個、コナラ属の果実が42個の、計387個が同定された。アカガシ-ツクバネガシが最も多く（全体の65%）、イチイガシが次ぐ（全体の21%）。なお、頂部を欠損し、輪状紋が確認される果実をアカガシ亜属（*Q. subgen. Cyclobalanopsis*）、輪状紋を欠損する果実をコナラ属（*Quercus*）までの同定にとどめているが、イチイガシやアカガシ-ツクバネガシに由来する可能性が高い。

資料別同定個数は、1号貯蔵穴が41個、2号貯蔵穴が28個、4号貯蔵穴が42個、5号貯蔵穴が36個、7号貯蔵穴が36個、13号貯蔵穴が13個、S-111が14個、8号貯蔵穴が32個、11号貯蔵穴が33個、12号貯蔵穴が27個、15号貯蔵穴が35個、18号貯蔵穴が34個、19号貯蔵穴が16個である。多くの遺構がアカガシ-ツクバネガシを主体とするのに対して、8号貯蔵穴と11号貯蔵穴はイチイガシを主体とし、12号貯蔵穴と18号貯蔵穴はほぼ同等である。

以下、イチイガシとアカガシ-ツクバネガシの形態的特徴等を述べる。

・イチイガシ（*Quercus gilva Blume*）　ブナ科コナラ属アカガシ亜属　図版1-1～10

出土果実は全て成熟果で、殻斗がついた果実も1個確認された。完全な形状をとどめる果実が多く、脆弱な柱頭部分が残る果実（図版1-2～9）も確認されるため、良好な保存状態と判断される。

表2．種実同定結果

分類群	部位	状態	6	7	8	9	10	11	12	12	13	14	15	16	17	18	合計	備考
			1段目：資料No. 2段目：遺構名 3段目：採取日															
			貯1	貯2 床面	貯4	貯5	貯7	貯13	S-111	S-111	貯8	貯11	貯12	貯15 下層	貯18	貯19		
					130726	130717	130724	130726	130717	130724	130717	130717	130724		140115	140304		
イチイガシ	殻斗･果実	柱頭欠損	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	
	果実	柱頭残存(食痕)	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	2	
		柱頭残存	－	－	－	－	－	－	2	－	9	7	1	－	2	－	21	資料14:1個年代測定
		柱頭欠損	－	1	－	5	－	－	1	－	12	11	4	－	9	2	45	資料17:1個年代測定
		花柱欠損	－	－	－	1	－	－	－	－	5	6	1	－	－	－	13	
	花柱	柱頭欠損(破片)	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	
アカガシ-ツクバネガシ	果実	柱頭欠損	27	25	21	20	22	9	5	3	3	5	4	29	17	9	199	
		柱頭欠損(食痕)	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	5	
		花柱欠損(食痕)	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2	
		花柱欠損	6	2	5	4	7	1	1	－	2	1	－	5	2	2	38	資料6･16:1個年代測定
		花柱欠損(破片)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	5	
	花柱	柱頭欠損(破片)	－	－	1	1	－	1	－	－	－	－	1	1	－	1	6	
アカガシ亜属	果実	頂部欠損	－	－	3	1	1	－	－	－	－	－	－	－	2	－	7	
コナラ属	果実	着点残存	－	－	1	1	2	2	－	－	－	2	－	－	－	2	10	
		着点残存(食痕)	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	
		着点欠損	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	
		着点残存(破片)	2	－	2	－	－	－	－	－	－	－	2	－	1	－	7	
		着点欠損(破片)	6	－	8	－	4	－	－	－	－	－	5	－	－	－	23	
合計			41	28	42	36	36	13	11	3	32	33	27	35	34	16	387	

表3. イチイガシ果実の計測値

状態		資料No.	遺構	日付	枝番	図版番号	果実長(mm)	果実径(mm)	着点径(mm)	突出長(mm)	突出径(mm)	食痕径(mm)	着点状態	果実径最大位置	備考
柱頭残存	食痕	12	S-111	130717	-	2,3	19.3	12.0	5.5	3.1	3.3	1.1	やや突出	中央	
柱頭残存		12	S-111	130717	-	-	17.1	9.8	5.1	2.4	1.9	-	突出	上部	
柱頭残存		13	貯8		1	4	20.1	12.1	6.5	3.0	2.1	-	突出	中央～下部	
柱頭残存		13	貯8		2	-	20.2	12.0	5.9	3.0	2.4	-	突出	中央～下部	
柱頭残存		13	貯8		3	-	18.6	10.9	5.5	3.1	2.3	-	突出	上部	
柱頭残存		13	貯8		4	-	19.8	11.8	6.3	2.6	2.7	-	突出	中央～上部	
柱頭残存		13	貯8		5	-	18.8	11.2	5.4	3.1	3.2	-	突出	中央～上部	
柱頭残存		13	貯8		6	-	19.3	11.0	6.0	3.2	2.6	-	突出	中央	
柱頭残存		13	貯8		7	-	19.5	11.5	6.1	3.2	2.6	-	突出	中央～上部	
柱頭残存		14	貯11		1	5	16.4	11.6	5.4	3.1	2.1	-	やや突出	中央	
柱頭残存		14	貯11		2	-	19.4	10.9	4.9	2.5	2.5	-	突出	中央	
柱頭残存		14	貯11		3	-	16.8	10.3	5.5	2.8	2.5	-	突出	中央	
柱頭残存		14	貯11		4	-	16.3	11.2	4.7	3.0	2.6	-	突出	中央～上部	
柱頭残存		15	貯12		-	8	20.2	11.8	6.3	3.4	2.3	-	突出	中央	
柱頭残存	食痕	17	貯18		-	-	17.4	14.1	7.2	2.7	2.7	1.4	やや突出	中央～下部	
柱頭残存		17	貯18		-	9	19.3	12.6	7.1	2.4	2.3	-	突出	下部	
柱頭欠損		7	貯2		-	-	14.6	12.5	6.1	2.1	2.6	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		1	-	19.7	12.5	5.7	2.0	2.9	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		2	-	17.6	9.7	4.8	2.5	2.2	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		3	-	15.7	13.4	6.7	2.1	3.4	-	やや突出	中央～下部	
柱頭欠損		9	貯5		4	-	15.8	11.7	5.9	2.0	2.6	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		12	S-111	130717	-	-	16.4	9.9	3.9	1.3	1.8	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		1	-	19.0	12.3	6.3	2.4	2.5	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		2	-	19.1	11.5	6.1	2.3	2.1	-	突出	中央～下部	
柱頭欠損		13	貯8		3	-	19.5	11.8	6.6	2.7	2.4	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		4	-	18.6	11.0	5.1	2.5	2.4	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		13	貯8		5	-	17.3	10.8	5.2	2.6	2.7	-	突出	中央～下部	
柱頭欠損		13	貯8		6	-	19.3	11.5	6.4	2.2	2.4	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		13	貯8		7	-	18.5	11.5	6.3	2.1	2.7	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		13	貯8		8	-	18.9	11.5	6.4	1.5	2.4	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		9	-	17.7	11.0	6.1	2.4	2.6	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		10	-	17.6	12.6	5.7	2.4	3.0	-	突出	中央	
柱頭欠損		13	貯8		11	-	17.4	10.5	5.4	2.2	2.2	-	突出	上部	
柱頭欠損		13	貯8		12	-	15.0	12.0	6.3	1.2	2.1	-	突出	中央	
柱頭欠損		14	貯11		1	-	19.0	10.7	5.5	2.8	2.4	-	突出	中央	
柱頭欠損		14	貯11		2	-	18.7	11.7	6.7	2.4	2.4	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		14	貯11		3	-	18.2	11.3	5.6	2.3	2.6	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		14	貯11		4	-	18.9	11.1	4.6	2.2	2.0	-	突出	中央	基部食痕?1.2mm
柱頭欠損		14	貯11		5	-	16.4	11.7	5.3	2.3	2.7	-	突出	上部	
柱頭欠損		14	貯11		6	-	15.5	11.4	5.5	2.4	2.4	-	突出	中央	
柱頭欠損		14	貯11		7	-	15.0	11.7	6.3	1.3	2.2	-	突出	上部	
柱頭欠損		14	貯11		8	-	16.5	10.5	5.7	2.4	2.7	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		14	貯11		9	-	15.2	9.7	5.2	1.2	1.9	-	突出	中央	
柱頭欠損		17	貯18		1	-	20.7	13.0	5.6	2.9	2.2	-	突出	上部	
柱頭欠損		17	貯18		2	-	16.3	10.4	5.5	2.5	2.0	-	突出	中央	
柱頭欠損		17	貯18		3	-	19.1	12.1	6.2	1.8	2.3	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		17	貯18		4	-	16.8	13.2	6.7	1.9	2.4	-	やや突出	中央～下部	
柱頭欠損		17	貯18		5	-	19.8	10.3	4.6	2.1	1.7	-	突出	中央	
柱頭欠損		17	貯18		2	-	21.1	14.9	6.2	1.9	3.5	-	平坦	上部	
柱頭欠損		18	貯19		1	-	19.8	13.3	5.9	2.4	2.4	-	突出	中央～下部	
柱頭欠損		18	貯19		2	-	15.8	11.9	5.4	1.7	3.2	-	突出	中央～上部	

果実下部1/3を包む殻斗は灰褐色、木質で長さ0.5㎝、径1.5㎝の椀型を呈し、表面には6段の輪状紋がある（図版1-1）。果実は暗灰褐色、両端がやや尖る卵状楕円体で、長さの中央付近で最大径となる。果皮表面は平滑で、浅く微細な溝が縦列する。頂部には細長い花柱が突出し、花柱頂部にある柱頭の先端部は3つに分かれ、傘状で外側を向く（図版1-3a,4～9）。花柱基部～首には殻斗の圧痕である輪状紋があり、肩にかけて星状毛が残る果実もみられる。基部は突出し、灰褐色、木質で円形の着点があり、維管束の孔が輪状に並ぶ。一部の果実には、虫類による食痕と考えられる径1.1～1.4㎜の円～楕円形の孔が確認される（図版1-2,3ｃ）。

状態が良好な完形果実51個の計測値は、果実長が最小14.6～最大21.1（平均18.01±標準偏差1.70）㎜、果実径が9.7～14.9（平均11.59±1.07）㎜、基部の着点径が3.9～7.2（平均5.77±0.67）㎜、頂部の花柱等突出部の長さ（突出長）が1.2～3.4（平均2.39±0.53）㎜、突出径が1.7～3.5（平均2.47±0.39）㎜であった（図1、表3）。また、計測値をもとに、果実長と果実径を乗じた値（果実長×果実径）は148～314（平均209.2±31.2）、果実長と果実径の比率（果実長/果実径）は1.2～1.9（平均1.56±0.17）、着点径が果実

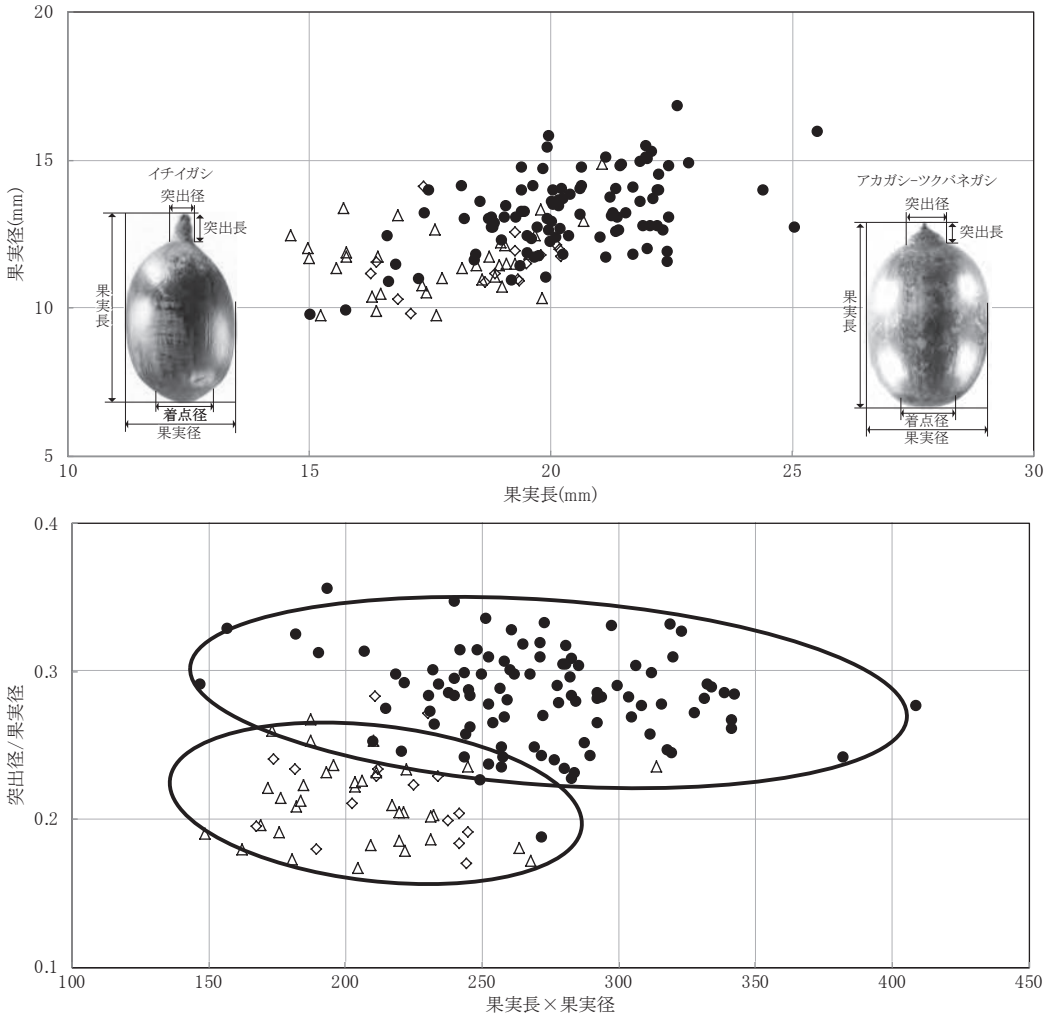
表4. アカガシ-ツクバネガシ果実の計測値(1)

状態		資料No.	遺構	日付	枝番	図版番号	果実長(mm)	果実径(mm)	着点径(mm)	突出長(mm)	突出径(mm)	食痕径(mm)	着点状態	果実径最大位置	備考
柱頭欠損		6	貯1		1	12,13	20.0	13.5	6.6	3.1	4.3	-	平坦	上部	
柱頭欠損		6	貯1		2	-	22.2	12.8	5.8	2.6	3.6	-	平坦	上部	
柱頭欠損		6	貯1		3	-	20.6	14.8	7.1	2.5	4.0	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		6	貯1		4	-	21.3	13.3	6.5	2.2	3.9	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		6	貯1		5	-	20.0	14.0	6.8	2.0	4.5	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		6	貯1		6	-	20.4	13.9	6.8	2.6	3.9	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		6	貯1		7	-	18.8	12.7	7.1	2.0	4.4	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		6	貯1		8	-	18.8	13.1	5.5	2.6	3.7	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		6	貯1		9	-	19.5	12.5	5.5	2.3	3.7	-	突出	上部	
柱頭欠損		6	貯1		10	-	17.3	11.0	5.3	2.3	3.4	-	突出	中央	
柱頭欠損		7	貯2		1	14	17.5	14.0	6.8	2.4	4.0	-	平坦	上部	
柱頭欠損		7	貯2		2	-	22.4	14.9	6.0	2.9	4.3	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		7	貯2		3	-	24.4	14.0	6.4	3.0	4.0	-	突出	上部	
柱頭欠損		7	貯2		4	-	20.6	14.2	7.0	2.2	4.1	-	平坦	中央～下部	
柱頭欠損		7	貯2		5	-	22.4	13.1	5.3	2.5	3.7	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		7	貯2		6	-	20.6	13.2	5.8	1.8	3.6	-	平坦	上部	
柱頭欠損		7	貯2		7	-	19.7	12.8	5.8	2.4	4.3	-	やや突出	中央～下部	
柱頭欠損		7	貯2		8	-	20.2	12.7	5.6	2.1	3.7	-	平坦	中央	
柱頭欠損		7	貯2		9	-	19.4	13.3	6.6	2.6	3.6	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		7	貯2		10	-	20.0	13.0	6.1	2.9	3.7	-	平坦	上部	
柱頭欠損	食痕	8	貯4		-	15	21.8	15.0	7.6	2.8	4.1	1.5	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		8	貯4		1	-	22.1	15.3	7.8	2.1	4.4	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		8	貯4		2	-	22.0	15.1	7.3	2.4	4.3	-	突出	上部	
柱頭欠損		8	貯4		3	-	21.7	14.1	6.6	2.9	4.3	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		8	貯4		4	-	19.6	14.2	6.9	1.9	4.1	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		8	貯4		5	-	19.0	12.3	5.3	2.0	3.6	-	平坦	中央	
柱頭欠損		8	貯4		6	-	19.4	13.3	6.0	2.2	4.1	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		8	貯4		7	-	20.2	13.7	5.8	2.2	3.3	-	突出	上部	
柱頭欠損		8	貯4		8	-	19.2	13.1	5.4	2.3	3.1	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		8	貯4		9	-	18.2	13.1	7.1	2.0	3.7	-	やや突出	中央～上部	
柱頭欠損		9	貯5		1	16	25.5	16.0	7.5	2.9	4.5	-	平坦	上部	最大
柱頭欠損		9	貯5		2	-	22.8	14.9	6.2	2.4	4.0	-	平坦	上部	
柱頭欠損		9	貯5		3	-	22.2	14.0	5.2	2.8	3.6	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		9	貯5		4	-	25.0	12.7	5.5	3.6	4.2	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		5	-	21.2	13.1	5.8	3.0	4.0	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		6	-	20.1	12.4	4.9	2.7	3.7	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		7	-	19.9	12.7	6.3	2.2	3.5	-	平坦	中央～下部	
柱頭欠損		9	貯5		8	-	19.5	11.9	5.1	2.2	3.6	-	やや突出	中央～上部	
柱頭欠損		9	貯5		9	-	19.1	13.5	6.5	2.5	3.3	-	突出	上部	
柱頭欠損		9	貯5		10	-	19.9	13.1	5.4	3.2	4.3	-	突出	中央	
柱頭欠損		10	貯7		1	17	22.4	11.6	4.7	3.2	3.5	-	平坦	中央	
柱頭欠損		10	貯7		2	-	21.8	13.6	5.6	3.4	4.5	-	突出	上部	
柱頭欠損		10	貯7		3	-	20.3	12.5	5.7	3.1	3.3	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		10	貯7		4	-	22.0	12.0	5.9	3.4	3.8	-	突出	上部	
柱頭欠損		10	貯7		5	-	19.7	11.8	5.5	2.8	3.1	-	突出	上部	
柱頭欠損		10	貯7		6	-	22.4	11.9	5.7	1.9	3.6	-	突出	中央	
柱頭欠損		10	貯7		7	-	21.9	15.1	6.4	2.9	4.4	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		10	貯7		8	-	21.4	14.8	7.3	1.6	3.7	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		10	貯7		9	-	21.4	12.7	5.5	2.7	3.9	-	やや突出	中央～下部	
柱頭欠損		10	貯7		10	-	19.9	15.5	6.5	2.5	4.3	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		11	貯13		1	18	22.2	14.5	6.6	2.2	4.8	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		11	貯13		2	-	22.1	13.7	6.4	2.9	3.9	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		11	貯13		3	-	19.6	12.4	5.6	3.1	3.9	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		11	貯13		4	-	18.1	14.2	7.2	1.6	3.3	-	平坦	中央	
柱頭欠損		11	貯13		5	-	20.0	12.3	5.7	1.8	3.2	-	突出	中央	
柱頭欠損		11	貯13		6	-	18.8	12.9	5.8	1.3	3.1	-	平坦	上部	
柱頭欠損		11	貯13		7	-	21.4	13.1	5.8	2.4	4.0	-	突出	中央	
柱頭欠損		12	S-111	130717	1	19	22.6	16.9	8.5	1.4	4.1	-	平坦	中央	
柱頭欠損		12	S-111	130717	2	-	16.6	12.5	6.5	1.6	3.9	-	平坦	中央～下部	
柱頭欠損		12	S-111	130717	3	-	15.0	9.8	4.6	1.2	2.9	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		12	S-111	130724	1	20	16.8	11.5	6.1	2.1	4.1	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		12	S-111	130724	2	-	15.7	9.9	5.5	0.9	3.3	-	突出	中央～下部	
柱頭欠損		13	貯8		-	21	18.4	11.7	5.9	2.2	3.2	-	やや突出	中央	
柱頭欠損		14	貯11		1	22	17.4	13.3	6.4	2.3	3.8	-	平坦	中央	
柱頭欠損		14	貯11		2	-	20.2	13.7	6.1	2.5	3.8	-	やや突出	上部	
柱頭欠損		14	貯11		3	-	19.9	11.1	4.9	2.3	2.7	-	突出	中央	
柱頭欠損		14	貯11		4	-	18.8	12.8	5.5	2.6	3.8	-	やや突出	上部	
柱頭欠損	食痕	15	貯12		1	23	21.9	15.5	6.7	2.6	4.1	2.4	平坦	上部	
柱頭欠損	食痕	15	貯12		2	-	18.7	13.0	5.5	3.0	3.4	-	突出	中央～上部	
柱頭欠損		15	貯12		1	-	19.9	15.8	6.6	1.6	4.4	-	平坦	上部	
柱頭欠損		15	貯12		2	-	22.0	12.8	5.3	2.6	4.0	-	平坦	中央～上部	側面食痕?1.7mm
柱頭欠損		15	貯12		3	-	19.2	11.0	4.4	2.1	2.8	-	突出	中央～上部	基部食痕?1.2mm
柱頭欠損		16	貯15		1	24	21.9	12.8	5.1	3.0	3.0	-	やや突出	中央～下部	
柱頭欠損		16	貯15		2	-	19.8	14.7	6.5	2.0	3.9	-	平坦	中央～上部	
柱頭欠損		16	貯15		3	-	20.2	14.0	6.9	2.1	3.3	-	やや突出	中央～上部	

表4. アカガシ-ツクバネガシ果実の計測値(2)

状態	試料番号	遺構	日付	枝番	図版番号	果実長(mm)	果実径(mm)	着点径(mm)	突出長(mm)	突出径(mm)	食痕径(mm)	着点状態	果実径最大位置	備考
柱頭欠損	16	貯15		4	−	19.0	13.1	5.6	2.6	3.0	−	やや突出	中央	
柱頭欠損	16	貯15		5	−	21.7	11.8	4.7	2.4	3.0	−	平坦	中央～下部	
柱頭欠損	16	貯15		6	−	20.0	13.6	6.2	2.7	4.5	−	平坦	中央	
柱頭欠損	16	貯15		7	−	21.1	11.7	5.4	3.4	3.7	−	突出	上部	
柱頭欠損	16	貯15		8	−	19.6	11.8	5.7	2.3	3.2	−	やや突出	上部	
柱頭欠損	16	貯15		9	−	19.4	14.8	6.7	2.2	3.7	−	平坦	上部	
柱頭欠損	16	貯15		10	−	21.3	14.0	5.4	3.1	4.1	−	平坦	中央	
柱頭欠損	17	貯18		1	25	21.5	13.2	5.0	2.6	4.0	−	平坦	上部	
柱頭欠損	17	貯18		2	−	21.1	15.1	6.4	2.3	3.7	−	平坦	中央	
柱頭欠損	17	貯18		3	−	21.4	14.9	6.5	2.8	4.6	−	やや突出	上部	
柱頭欠損	17	貯18		4	−	20.6	14.1	6.1	1.8	3.4	−	突出	上部	
柱頭欠損	17	貯18		5	−	21.0	12.4	5.9	2.7	3.7	−	突出	中央	
柱頭欠損	17	貯18		6	−	19.3	11.5	5.9	2.7	3.4	−	突出	中央	
柱頭欠損	17	貯18		7	−	21.2	13.8	5.9	1.6	3.9	−	突出	中央	
柱頭欠損	17	貯18		8	−	18.4	11.8	5.6	2.4	3.5	−	平坦	中央	
柱頭欠損	17	貯18		9	−	22.3	12.7	5.3	2.5	2.9	−	やや突出	中央～上部	
柱頭欠損	17	貯18		10	−	16.6	10.9	5.0	2.4	3.6	−	平坦	上部	
柱頭欠損	18	貯19		1	27	20.2	11.8	5.1	2.2	3.4	−	平坦	中央～下部	
柱頭欠損	18	貯19		2	−	21.3	12.6	4.8	2.3	3.2	−	やや突出	中央～上部	
柱頭欠損	18	貯19		3	−	20.2	13.5	5.8	2.5	3.3	−	突出	中央～上部	
柱頭欠損	18	貯19		4	−	22.2	14.0	6.9	2.4	4.2	−	突出	中央～上部	
柱頭欠損	18	貯19		5	−	19.4	14.0	6.2	2.1	2.6	−	突出	中央	
柱頭欠損	18	貯19		6	−	18.5	13.6	7.2	1.2	4.2	−	やや突出	上部	

注)計測はデジタルノギスを使用した。



◇:イチイガシ(柱頭残存;n=16) △:イチイガシ(柱頭欠損;n=35) ●:アカガシ-ツクバネガシ(n=98)

図2 カシ類果実の大きさ・形状

表5. カシ類果実の大きさ・形状

分類群	標本数(n)	果実長(mm)				果実径(mm)				着点径(mm)				突出長(mm)				突出径(mm)			
		最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
イチイガシ	51	14.6	21.1	18.01	1.70	9.7	14.9	11.59	1.07	3.9	7.2	5.77	0.67	1.2	3.4	2.39	0.53	1.7	3.5	2.47	0.39
イチイガシ(柱頭残存)	16	16.3	20.2	18.64	1.39	9.8	14.1	11.53	0.98	4.7	7.2	5.82	0.73	2.4	3.4	2.91	0.31	1.9	3.3	2.50	0.36
イチイガシ(柱頭欠損)	35	14.6	21.1	17.72	1.76	9.7	14.9	11.62	1.12	3.9	6.7	5.75	0.66	1.2	2.9	2.15	0.43	1.7	3.5	2.46	0.41
アカガシ-ツクバネガシ	98	15.0	25.5	20.33	1.82	9.8	16.9	13.25	1.31	4.4	8.5	6.02	0.78	0.9	3.6	2.39	0.52	2.6	4.8	3.75	0.47
分類群	標本数(n)	果実長×果実径				果実長/果実径				着点径/果実径				突出径/果実径				突出長/果実長			
		最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
イチイガシ(全体)	51	148	314	209.2	31.2	1.2	1.9	1.56	0.17	0.4	0.6	0.50	0.04	0.2	0.3	0.21	0.03	0.1	0.2	0.13	0.03
イチイガシ(柱頭残存)	16	167	245	215.3	26.3	1.2	1.8	1.62	0.15	0.4	0.6	0.50	0.04	0.2	0.3	0.22	0.03	0.1	0.2	0.16	0.02
イチイガシ(柱頭欠損)	35	148	314	206.4	33.1	1.2	1.9	1.54	0.18	0.4	0.6	0.50	0.05	0.2	0.3	0.21	0.03	0.1	0.2	0.12	0.02
アカガシ-ツクバネガシ(柱頭欠損)	98	147	408	270.4	43.3	1.2	2.0	1.54	0.15	0.4	0.6	0.45	0.04	0.2	0.4	0.28	0.03	0.1	0.2	0.12	0.02

径に占める比率（着点径/果実径）は0.4～0.6（平均0.50±0.04）、突出径が果実径に占める比率（突出径/果実径）は0.2～0.3（平均0.21±0.03）、突出長が果実長に占める比率（突出長/果実長）は0.1～0.2（平均0.13±0.03）であった（図2、表5）。

・アカガシ（*Q. acuta Thunb. ex Murray*）-ツクバネガシ（*Q. sessilifolia Blume*）　ブナ科コナラ属アカガシ亜属　図版1-11～27

出土果実は、イチイガシと同様に全て成熟果で、完全な形状をとどめる果実が多く、良好な保存状態と判断される。果実は暗灰黒褐色、イチイガシよりも大型の倒卵状楕円体で、果実長の中央～上半部付近で最大径となる個体が多い。果皮はイチイガシよりも厚く、表面にはイチイガシよりも縦溝が太く深く目立つ果実もみられる。頂部は、太い首および輪状紋の突出が顕著である。3花柱はイチイガシよりも長細く、全て柱頭を欠損し、残存長は0.5～1㎜である（図版1-13a,24など）。果実基部は概ね切形で、突出する個体もみられる。一部の果実には、虫類による食痕と考えられる径1.2～2.4㎜の円～楕円形の孔が確認される（図版1-15,23）。

状態が良好な完形果実98個の計測値は、果実長が15.0～25.5（平均20.33±1.82）㎜、果実径が9.8～16.9（平均13.25±1.31）㎜、着点径が4.4～8.5（平均6.02±0.78）、突出長が0.9～3.6（平均2.39±0.52）㎜、突出径が2.6～4.8（平均3.75±0.47）㎜で、果実長×果実径は147～408（平均270.4±43.3）、果実長/果実径は1.2～2.0（平均1.54±0.15）、着点径/果実径は0.4～0.6（平均0.45±0.04）、突出径/果実径は0.2～0.4（平均0.28±0.03）、突出長/果実長は0.1～0.2（平均0.12±0.02）であった（図2、表4、5）。

イチイガシとは、果実長/果実径、着点径/果実径、突出長/果実長に大差はないが、果実長×果実径と突出径/果実径がより大きく、着点径/果実径がやや小さい点で差異が認められる（図2、表4）。

出土果実は、長崎県伊木力遺跡の曽畑式土器（縄文時代前期）出土層（Ⅶ層）や轟式土器（縄文時代前期）出土層（Ⅷ層）より出土したアカガシ近似種（南木・粉川,1990）や、鳥取県文殊領遺跡（弥生時代）のアカガシ亜属（イチイガシやアラカシ以外）（パリノ・サーヴェイ株式会社,2010）、苅田町上片島遺跡（弥生時代終末期）のアカガシ-ツクバネガシ（パリノ・サーヴェイ,2014）に極めて似る。ただし、アカガシの果実とツクバネガシの果実との判別は困難であるため、本報告では両種をハイフォンで結んでいる。

4. 考察

各貯蔵穴より出土したドングリは、アカガシ-ツクバネガシの果実が全体の7割弱を占め、イチイガシの果実が2割程度混じる組成を示した。また、多くの遺構がアカガシ-ツクバネガシを主体とするのに対して、8号貯蔵穴と11号貯蔵穴はイチイガシを主体とする組成の違いも確認された。

さらに、出土果実を対象とした年代測定の結果では、時代的には縄文時代中期頃にあたる。18号貯蔵

穴（資料番号4）～1 号貯蔵穴（資料番号1）に向かって新しくなる傾向があり、最も古い18号貯蔵穴が約4150年前、最も新しい1 号貯蔵穴が約3950年前で、約200年の差がある。貯蔵穴は30基近くみつかっていることから、各遺構内の植物遺体の年代測定を詳細に行えば、貯蔵穴のグループ化や存在期間の推定など、より統計的な検討が可能である。

イチイガシやアカガシ、ツクバネガシは、高木になる常緑広葉樹で、現在の本地域にも分布する。イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する。ツクバネガシは、山地の沢沿いの急斜面を好んで生育する傾向があり、アカガシは、しばしば温帯域に生えるブナと接して生えるように、山の斜面のかなり高いところにも生育する。アカガシとツクバネガシの種間雑種と考えられる個体もあり、特に混生地に多い。当時の本遺跡周辺域にも、イチイガシやアカガシ - ツクバネガシが生育する常緑広葉樹林（照葉樹林）が存在したと考えられる。

また、これらの堅果（ドングリ）は、内部の子葉が食用可能で収量も多く、長期保存が可能である。各貯蔵穴より出土した果実は、殆どが成熟果から成り、食用にならない部位は殻斗が1個確認されるのみであることから、当時の本遺跡周辺の照葉樹林より成熟果が選択的に採取され、貯蔵穴内に持ち込まれた植物質食料と示唆される。さらに、完全な形状をとどめた果実が多いことから、良好な保存状態であったと判断され、遺構内の嫌気的環境下で食用されることなく埋積したと考えられる。

今回最も多く確認されたアカガシ-ツクバネガシは、水にさらすなどのあく抜きを施すことで子葉が食用可能となる。次いで多く確認されたイチイガシは、あく抜きせずに子葉が生食可能であるため、西日本の遺跡を中心に果実や炭化子葉の出土例が多い（渡辺,1975;岡本,1979など）。なお、苅田町上片島遺跡の弥生時代終末期のドングリピットでは、イチイガシが8割、アカガシ - ツクバネガシ約2割から成る組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ,2014）。

九州地方の遺跡出土ドングリ事例の集成（小畑,2006;2011）によれば、イチイガシが圧倒的に多く、アカガシの出土例はごく少数で、ツクバネガシは皆無とされ、今回の結果とやや異なる。今回、あく抜きが必要なアカガシ - ツクバネガシを主体とし、あく抜き不要のイチイガシが少量混じる出土組成に関して、小畑（2006;2011）は、調理方法が異なる複数種のドングリを混合貯蔵した可能性に否定的な見解を示し、紛れ込みの可能性を指摘している。今回の分析資料が貯蔵穴出土果実全体であるのか、一部を対象としているのかは不明であるため、貯蔵穴毎にドングリの種類選択が実施されたか、貯蔵穴内に複数種のドングリを混合貯蔵したか、紛れ込んだかについては、分析結果のみで判断することはできない。今後、発掘調査所見や上述の指摘事項と併せて評価することが望まれる。

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.

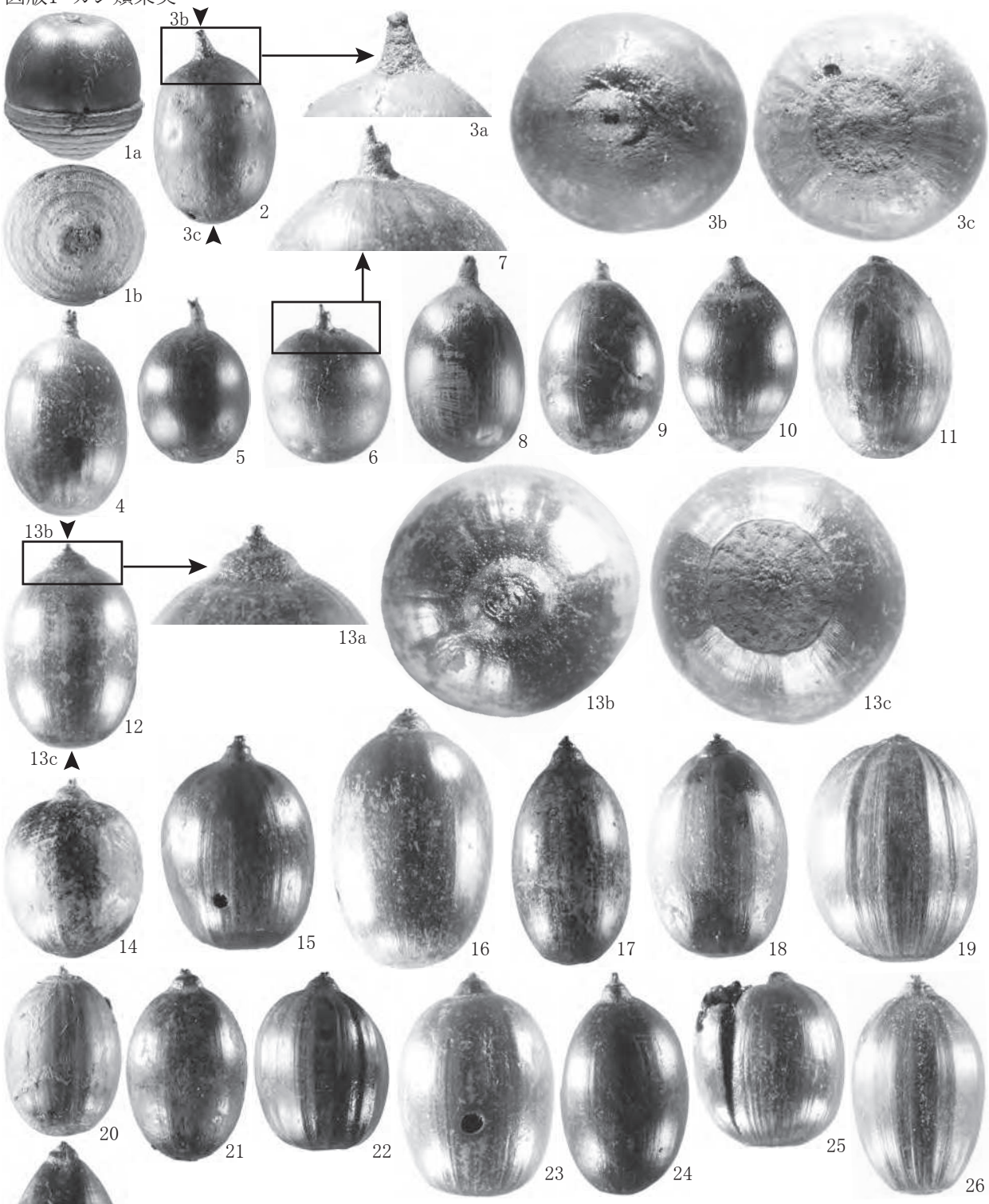
南木睦彦・粉川昭平,1990,伊木力遺跡の大型植物化石群集.伊木力遺跡　長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査,同志社大学考古学研究室編,多良見町教育委員会,642-659.

宮國晋一,2014,どんぐりの呼び名事典.株式会社世界文化社,111p.

小畑弘己・坂本紀乃・大坪志子,2003,考古学者のためのドングリ識別法.先史学・考古学論究Ⅳ,龍田考古

会,225-288.
小畑弘己,2006,九州縄文時代の堅果類とその利用－東北アジアの古民族植物学的視点より－.九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物,第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集成,31-40.
小畑弘己,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕.同成社,309p.
岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.
パリノ・サーヴェイ株式会社,2010,古環境調査.文殊領遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 町道山村文殊領線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 - ,大山町文化財調査報告書第7集,大山町教育委員会,52-82.
パリノ・サーヴェイ株式会社,2014, Ⅳ　科学分析.「一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告　第2集上片島遺跡群6地区　福岡県京都郡苅田町上片島所在遺跡の調査」,九州歴史資料館,47-55.
Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. ,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,1869–1887.
Stuiver　Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.
徳永桂子,2004,日本どんぐり大図鑑.偕成社,156p.
渡辺　誠,1975,縄文時代の植物食.雄山閣出版,187p.

図版1　カシ類果実



1．イチイガシ 殻斗・果実(資料9;S-106)
2．イチイガシ(食痕)(資料12;S-111)
3．イチイガシ(食痕)(資料12;S-111)
4．イチイガシ(資料13;S-115)
5．イチイガシ(資料14;S-116)
6．イチイガシ(年代測定資料1)(資料14;S-116)
7．イチイガシ(年代測定資料2)(資料14;S-116)
8．イチイガシ(資料15;S-117)
9．イチイガシ(資料17;S-362)
10．イチイガシ(年代測定資料4)(17;S-362)
11．アカガシ-ツクバネガシ(年代測定)(資料6;S-102)
12．アカガシ-ツクバネガシ(資料6;S-102)
13．アカガシ-ツクバネガシ(資料6;S-102)
14．アカガシ-ツクバネガシ(資料7;S-103)
15．アカガシ-ツクバネガシ(食痕)(資料8;S-105)
16．アカガシ-ツクバネガシ(最大)(資料9;S-106)
17．アカガシ-ツクバネガシ(資料10;S-107)
18．アカガシ-ツクバネガシ(資料11;S-110)
19．アカガシ-ツクバネガシ(資料12;S-111)
20．アカガシ-ツクバネガシ(資料12;S-111)
21．アカガシ-ツクバネガシ(資料13;S-115)
22．アカガシ-ツクバネガシ(資料14;S-116)
23．アカガシ-ツクバネガシ(食痕)(資料15;S-117)
24．アカガシ-ツクバネガシ(資料16;S-119)
25．アカガシ-ツクバネガシ(年代測定資料3)(資料16;S-119)
26．アカガシ-ツクバネガシ(資料17;S-362)
27．アカガシ-ツクバネガシ(資料18;S-363)

1cm
(1,2,4-6,8-12,14-27)
5mm
(3,7,13)

Ⅴ　おわりに

本報告は、平成24年度から25年度に調査を実施した、下伊良原西の塚遺跡、下伊良原下地ヶ原遺跡、下伊良原平原遺跡、下伊良原中ノ坪遺跡の記録である。これらの遺跡が所在する一帯は、本来西側の丘陵裾から東側の祓川に向かってなだらかに傾斜する地形であり、山間部で平坦地の少ない伊良原地区においては比較的開けた一画で、通称「西の塚」と呼ばれていたらしい。今回のダム建設に伴う調査でも多くの埋蔵文化財が発見されており、伊良原地区で最も遺跡が密集する箇所である。下伊良原中ノ坪遺跡（１次調査）、下伊良原原田ノ谷遺跡、下伊良原寺ノ谷遺跡は既に平成20年度に報告済みであり、下伊良原高木神社跡、祓川対岸の下伊良原庄屋屋敷跡、下伊良原中ノ切遺跡、下伊良原宮園遺跡については今年度別冊にて報告している。

下伊良原西の塚遺跡は、試掘調査の結果などから対象地を４箇所に分けて調査を実施した。結果、縄文時代後期の遺構としては、竪穴住居跡１軒、ドングリを貯蔵したと考えられる土坑19基以上、その他の土坑多数などで、他に早期の遺物も出土している。また中世の遺構としては、土壙墓１基、掘立柱建物跡２棟、柵跡２条、土坑多数を検出した。

下伊良原下地ヶ原遺跡では、包含層から縄文時代早期から晩期までの土器が出土しており、中世の掘立柱建物跡３棟、土坑11基、近世から現代にまでが中心だが中世に起源をもつ可能性のある墓地群、近現代の炭窯２基などを検出した。

下伊良原平原遺跡では、縄文時代かと思われる落し穴３基とそれに伴う柵跡がセットで検出され、また中世の掘立柱建物数棟が順次建て替えられた状況が確認できた。

下伊良原中ノ坪遺跡２次調査では、中世の掘立柱建物跡２棟と、カマド、地下倉、道路状遺構などを検出し、掘立柱建物跡のうち１棟は神社か祠堂のような施設が想定できた。

伊良原ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成18年度から始まり、今年度（平成28年度）でようやく終了した。それらの報告についても、来年度には出揃う予定である。伊良原地区のこれまでの調査で検出した埋蔵文化財は、縄文時代と中世あるいはそれ以降の時代のものが大半であった。それぞれの遺跡で断片的に調査されたそれらの資料を繋ぎ合わせてこの地区の歴史を復元するのは、これからの作業であろう。